

五月

松本末吉

二帰ル、翌日城山ニ進撃ス、時ニ余打タレテ踊病院ニ送
ラレ、終ニ我宅ニ歸テ軍門ニ降ル、

鹿兒島県第一大区四小区
二百七十一番地

吉田清武

十一年寅四月

八八 吉田清武上申書

時ニ明治十年西郷隆盛等政府へ尋問之筋有之、上京之際
第八大隊二番小隊へ編入セラレ押伍トナリ、三月三日発
程シ、同十一日熊本県下川尻駅ニ着ス、出町ニ至リ休兵
ス、同十三日田原ニ繰出シ台場ヲ守リ、時ニ翌日午後二
時頃ニ官軍寄セ来リ、我隊之ニ奮撃ス、直チニ切入追撃
セントスル処応援続カス、隊長打タレ故ニ引揚ケ、余分
隊長トナリ、又翌日半隊長打タレ余半隊長ニ揚ラレ、爰
ニ連戦スル事八日、同廿日我軍敗レテ植木引ク、所々ヨ
リ応援続テ又之ニ奮撃ス、官軍大ニ敗レテ数町ヲ追撃ス、
銃器・弾薬ヲ分捕リ切捨タル者数知レス、爰ニ連戦スル
コト二十余日、四月十四日川尻敗レテ我隊永峯ニ引揚ケ
白幡山ニ転ス、爰ニ固守ス、同廿日官軍寄セ来リ、我軍
利有ラスシテ永峯ニ歸リ、又応援来ツテ兵ヲ合テ進撃ス、
官軍大ニ敗レテ数町走ル、其夜我隊木山ニ引揚ケ、夫ヨ
リ川原ニ至ツテ休足スル処ニ官軍来リ、大ニ戦テ又之ヲ
敗ル、其夜ニ至テ矢部ニ引揚ケ、時ニ編制アリ、振武六
番中隊トナリ人吉ニ転ス、五月四日鹿兒島県下上伊敷村

八九 永井金太郎上申書

時ニ明治十年西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、上京ノ際
余第一番大隊五番小隊兵士ニ編入セラレ、二月十五日鹿
兒島発程シ、西目街道ヲ経テ同廿一日熊本県下川尻駅ニ
着ス、翌日未明発足シ城^{二本力}下ニ至リ、花岡山ヲ越シテ進撃
ス、其夜ニ至リテ^{二本力}ニ本樹ニ引揚ケ休兵ス、同廿五日ノ夜
応援トシテ高瀬ニ繰出シ、翌日戦フテ官軍大ニ敗走ス、
其后我隊吉次峠ニ引揚ケ爰ニ固守スル処、又木留ニ転ス、
三月三日官軍寄セ来リ、之ニ戦フテ余銃創ヲ負フテ木山
ニ送ラレ入院ス、其ヨリ所々敗レテ転院ス、終ニ鹿兒島
県ニ歸リテ帰順ス、

鹿兒島県第一大区七小区
三百十一番地

永井金太郎

明治十一年寅五月

九〇 阿萬利右衛門他二名連署上申書

戦状略記

明治十年四月出兵、振武三十九番小隊二編入セラレ伊敷村ヲ守ル、六月十五日官軍大挙来リ攻ム、防戦二時間計、我兵遂ニ破レ川上ニ走ル、居ルコト二日、吉田ニ引揚ケ又蒲生ニ退キ、溝辺・加治木・敷根等ヲ經テ財部ニ至リ壘ヲ築テ守備ス、七月五日比黎明官軍進テ攻撃ス、我兵防戦力ムト雖モ遂ニ利アラス、壘ヲ捨テ、走ル、此ヨリ各所ヲ經テ宮崎ニ至ル、同所敗ル、ノ日我隊大ニ散乱ス、ス処ヲ知ラス、依テ潜行自宅ニ還リ自首帰順ス、

明治十一年四月

鹿兒島県額娃郷

阿萬利右衛門

榊 孝 兵衛

西牟田六郎

(表紙)

十綴之内 印

九一 藤田稻介上申書

十年二月十五日第四大隊七番小隊へ編入セラレ、鹿兒島出発、大口街道ヲ經テ本月廿二日熊本県下ニ到着、直ニ戦争相成、翌日未明植木へ出張、同所ヨリ木之葉へ出張応援ヲナシ、午后六時迄激戦、味方大勝利、銃器・弾薬等分捕許多ナリ、廿四日同所出発山鹿へ出張、廿七日未明官軍ヨリ進撃、午后二時迄戦争、終ニ官軍ヲ撃破シ追撃一里余、官軍ノ死骸百数十名アリ、分捕許多ナリ、又(山鹿カ)山家迄引取二日滞在、夫ヨリ岩村へ進撃、戦争一昼夜、終ニ味方敗軍トナリ又山鹿へ退陣、即日田原へ応援ノ為出張セリ、夫ヨリ十八日余防戦、互ニ勝敗有リ、其内銃創ヲ負川尻病院へ入院、全快之上又出軍、旧六月三日庄内ノ内高野ニテ帰隊、雷撃六番中隊右小隊加入セラレ、庄内ノ内アラソト云所ニテ味方進撃、勝敗ナシト雖兵ヲ

高野ニ引取、夫ヨリ岩川へ進撃戦争、味方敗軍ニ依テ飢肥へ引揚、同所之内清武ニテ官軍ヨリ進軍、又敗シテ宮崎迄引退ク、夫ヨリ亦官軍進撃、敗シテ佐土原へ退陣、同所ニテ戦争、味方敗軍ニ依テ高鍋迄引揚、又官軍進撃之処、味方敗軍、其折官軍ニ取巻レ問道ヲ經テ帰宅、直ニ降伏仕候也、

(年月日脱)

雷撃六番中隊右小隊分隊長
藤田稻介

九二 荒武勇記上申書

明治十年二月西郷隆盛上京云々ニ付、我飢肥モ随行ヲ乞ヒ、兵数百名ヲ募集シ出軍ノ用意之レアルニ依リ、余ハ三番小隊米良一穂隊ノ監軍トナリ、即チ二月十八日飢肥ヲ発程シ、佐土原・延岡等ヲ經テ高千穂ノ險ヲ越シ肥後ニ入り、廿五日保田窪村ニ着シ、兵ヲ茲ニ止メ熊本西郷本營ノ指揮ヲ乞フ、廿六日川尻守衛ヲ命セラレ該地ニ至リ、二丁川口・(学科カ)学領新地等ヲ守ルルコト六昼夜、三月二日山鹿へ進軍ノ命アリ、因リテ早天川尻ヲ出發シ山鹿ニ至リ、其夜ハ吉田山ノ問道ヲ守ル、翌三日第一・第四番小隊ハ問道ヨリ高瀬ヲ進撃セント之カ先鋒ニ進ム、然ルニ

本道ヨリ進ミタル味方ハ已ニ永田ノ原ニテ開戦ニ及ヒ炮声尤烈シ、我カ第二・第三小隊ハ山鹿ニ至リ町ノ両口ヲ守ル、六日第二・第三小隊ハ鍋田ノ原ニ進軍ス、時ニ官兵ノ斥候車返シ坂ニ出テ銃戦、暫時ニシテ退ク、直ニ薩兵ト同ク各持場ヲ分チ、我カ三番小隊ハ本道ヲ守リ要地ヲトシテ壘ヲ築キテ敵ヲ待ツ、同ク十二日未明ヨリ官兵來襲シ激戦終日、夜ニ入りテ敵退ク、本日ノ戦ヒ死傷十余名アリ、翌十三日我カ壘前ニ敵ノ伏屍二十余、戎器・彈藥等ヲ分捕ス、十五日未明ヨリ官兵又来襲ス、防戦力ヲ尽シテ相守ル、戦況・分捕等略十二日ノ如シ、廿二日黎明ヨリ官兵來襲シ、味方防戦甚タカム、時ニ田原口ノ味方戦ヒ利アラス、植木迄退軍シタルノ報ヲ得テ、遽ニ我兵モ退軍ノ令ヲ伝フ、之ニ依テ田嶋村迄引揚ケ、翌朝鳥ノ巢ニ至リ石川村ヲ守ル、是ニ於テ植木ト彈道相連ル、然ルニ余彈藥製造掛リヲ命セラレ鳥ノ巢ニテ製造シ、同所引揚ケ熊本二本木ノ彈藥製造所ニ入り勉強スルコト凡ソ十日余、四月十四日川尻ノ味方又不利ニ付同所モ亦引揚ケ木山ニ至リ、十五日十文字ノ險ヲ越シ矢部ニ退キ、彈藥製造所ニ入りテ勉強ス、廿四日頃馬見原ニ転ス、止ル四五日、是ヨリ胡麻山ノ絶險ヲ越シ廿九日人吉ニ達シ、

専ラ銃葉包ヲ事スル凡ソ二十日、五月十九日頃同所引揚ケ、飯野・小林・野尻・高岡等ヲ經テ廿四日延岡ニ着シ、同所製造所ニアルコト凡ソ八十日、八月十四日又々引揚ケ長井村ニ至リ、十八日官軍逼リタルニ依リ帰順ス、

(年月日脱)

鹿児島県第百二大区
一小区既肥平民
荒武勇記

九三 新納織之丞上申書

戦地景況之概略

明治十年二月十六日鹿児島発程、二十一日八代ニ至ル、同二十二日曉天熊本県下川尻駅ニ到着、既ニ熊本開戦、砲轟々トシテ火焰天ニ漲リ、鬪戦將ニ酣ナルヲ聞ヤ、我隊長邊見十郎太則チ兵ヲ進メテ城下筒口ニ抵テ攻戦ス、一日邊見植木ニ於テ村田三介隊ノ得タル十四連隊ノ旗章ヲ携来リ、我壘上ニ長サ丈余ノ棹ヲ建テ其上ニ引揚ケ、城兵ノ意ヲ挫カント大音ヲ発シ之ヲ詈曰、見ヨ々々、此旗章ノ何タルヲ知ルヤ、天既ニ我輩ノ誠忠ヲ感シ此旗ヲ下賜スル也、汝等何故ニ内ニ糧餼ナク外ニ援ヒノ兵ナキ一孤城ヲ守ルヤ、汝力徒ラ既ニ釜中ノ魚、若活シコトヲ欲セハ何ソ速カニ甲ヲ脱シ銃器ヲ捨テ、我軍門ニ降ラサ

ルヤト、又我兵ニ令シテ百銃一斉之ヲ発テ大ニ攻戦ス、城兵乃チ望遠鏡ヲ出シテ頻ニ之ヲ熟視シ、須臾ニシテ大砲ヲ連撃スル甚急ナリ、爾後転々攻戦、茲ニ対壘スル二十余日、之ヨリ先我隊長邊見鹿児島ニ赴ク、山本彦十郎ニ二更ル、三月二十日頃官軍八代ニ上陸スルヲ聞キ、我隊応援トシテ同二十二日曉天該地ヲ発シ、翌日午時八代ノ砂川ニ抵ル、外五六小隊ト共ニ小川ヨリ砂川ニ哨兵線ヲ繋ヒテ之ヲ守防ス、同二十四日官軍我壘ヲ襲ハントス、我兵之ヲ知テ直チニ壘ヲ越ヘ進ンテ迎戦、官軍遂ニ兵仗・尸屍ヲ捨テ大敗、勢ヒニ乘シ尾撃スル里許、薄暮戦ヒテ止テ全軍新田邑ニ宿陣、同二十六日午前十時頃ヨリ官軍大挙シテ来リ戦フ、我軍ノ両翼ヲ失シテ、全軍支ユル能ハスシテ松橋ニ退ク、此時永山彌弥一郎カ憤起大ニ恚リ衆ヲ励マシテ曰、汝力徒ラ何故ニ如此怯ナル、若敵ヲシテ此地ヲ破ラシメハ大事之ニ依テ去ラン、生テ善士ト称シ死シテ忠臣ト称セラル、ハ則チ是時ニアラスヤ、共ニ決戦刀折矢竭斃レテ然ル後止マント、衆大ニ憤勵シ堅ク之ヲ守ル、同二十八日官軍又来リ戦フ、我軍大ニ進ンテ之ヲ走ラセ我隊追躡一里許、官軍伏尸・兵仗若干ヲ委棄ス、猶驅テ小川ヲ衝カンコトヲ乞フ、本管不許、故ニ

退テ松橋ヲ守ル、同三十日官軍再撃シテ松橋ニ迫ル、我軍不利、我隊長山本彦十郎衆ニ先チ憤戦シテ之ニ死ス、其他死傷五六名、遂ニ隈(隈庄力)ノ所ニ退ク、翌日官軍勝ニ乗シ破竹ノ勢ヲ以テ又茲ニ来ル、我兵支ユル能ハス、川尻ニ退ク、四月一日三十町橋ニ趣キ該地ニ守防スル、瞬時地形防戦ニ不利ナルヲ計リ、再ヒ川尻ニ抵テ渡頭ノ上流ヲ守ル、茲ニ於テ我軍木原山ノ官軍ヲ追撃ス、官軍險ニ擧テ能ク拒ク、故ニ破ルコト能ハス、再退テ川尻ヲ守ル、同十日頃城兵安政橋ニ迫ルノ報ヲ得、急ニ二本樹(二本木力)ニ赴キ、本營ニ乞フテ安政橋ニ応援スルニ、既ニ城兵百余我安政橋ノ守ヲ破リ、砂取ヲ指シテ突出シタル跡ナルカ故、再ヒ二本樹ニ帰營シ勞ヲ休スル二三日、同十三日頃此地ヲ発シテ中牟田ニ赴キ拒守ス、或日官軍来リ襲フ、我軍遂ニ敗走シテ木山ニ赴ク、同十五日該地ヲ発シ、飯田山ヲ越ヘ御船ニ転陣、都合其勢千五百余、各地形ヲ調築壘守防ス、即日官兵三船(御船力)ノ後山ヲ襲フ、我隊等撃テ之ヲ走ラス、斬獲二十余、薄暮兵ヲ収メテ旧壘ヲ守ル、同二十日又官軍大挙シテ三面ヨリ来リ襲フ、我軍彈藥欠望(欠乏力)、遂ニ大敗、官軍追躡、我兵死傷甚多シ、我隊鐘打邑ニ退ク、復南田代ニ趣キ築壘守兵ス、我木山ノ軍モ敗レテ全軍矢

部ニ合スルニ会シ、我隊モ矢部ニ抵ル、爰ニ於テ隊号ヲ変制シテ干城ニ番隊トナル、八木彦八郎隊長タリ、是ヨリ人々各糧ヲ齎ラシ椎葉山ヲ越ヘ尾前ニ抵ル、或日官軍馬見原ニ進入、故ニ我隊勢援ノ為健足ノモノ三十余名ヲ撰ヒテ囲ヒノ險山ヲ越ヘ敵ノ壘上ニ出テ、虚兵ヲ張り鯨声ヲ作ツテ放銃スル數発、出沒シテ敵ニ我ノ動靜ヲ知ラサラシム、爰ニ守兵スル二日、再ヒ椎葉山ニ退ク、即日迎ヘ村ノ我軍敗レテ尾八重邑ニ退ク、或日不堂野(不土野力)ノ敗ヲ聞キ、湯山邑ニ退テ守防ス、過日ノ連敗ニ敵勢益々振ヒ、潮ノ湧カ如ク来テ江代ニ突入、我軍衆寡不敵ヲ計リ又退ヒテ岩野邑ニ守兵ス、敵又抵ル、我兵憤怒勇往進戦、一旦(一旦力)之ヲ撃破スト雖トモ彈藥乏シク勝利不全ヲ察シ、旧米良領ノ内西八重邑ニ守防ス、爰ニ於テ余分隊長代理ニ命セラル、爾後横谷ノ官軍ヲ三度迄襲撃スト雖トモ敵要害ノ地ニ拠テ侵ス可カラス、或日官軍襲来、我軍不利ニシテ横野邑ニ転戦、一日又小川口ノ敗ヲ聞ク、固ヨリ小川街道ハ横野ノ背後ニ出ル処ナルカ故、我隊速ニ馳テ尾泊口ノ応援ニ趣キ憤闘接戦、官軍敗走、則チ該地ニ拒守スル二日間、或日黎明該地引揚祇園ノ渡リヲ守ル、此夜官軍兵ヲ潜メテ穂北川ノ上流ヲ流リ、吶喊来テ我背後ヲ襲

フ、我隊支ユル能ハス、大ニ苦戦シ僅ニ身ヲ以テ逃ル、者多シ、退テ高鍋ヲ經耳川ノ上流ヲ守ルコト数日、敵又山陰ヲ襲フ、同所敗ル、ニ依リ延岡ニ趣カントスルニ、敵已ニ富高新町ニ衝入タルヲ聞ヤ、途ヲ転シテ山谿ノ間道ヲ求メ、川内村ニ出黒木邑ニ進軍ス、八月十四日官軍又來リ襲フ、我軍敗走シテ永井村^(長井カ)ニ集リ要害ニ拠テ敵ノ砲撃ヲ拒クコト五日余、糧米欠耗、此地永ク保守ス可カラサルヲ知り、同十七日午後十二時頃ヨリ兵ヲ潜メ人々枚ヲ含ミ山ヲ越へ、險ヲ攀チ顛倒匍匐シテ、黎明漸ク可愛ノ嶽ノ敵壘ニ達シ、邊見・河野ノ兩士諸隊ヲ指揮シ先登シテ突然之ニ迫ル、官軍狼狽、兵仗・死骸ヲ棄テ山中ニ潰乱ス、我兵進軍昼夜兼行シテ同十九日祝子川ノ敵ヲ破リ駆テ祝子川ニ抵リ、同二十一日邊見十郎太雷撃隊ヲ指揮シ、先登シテ三田井へ突出、敵二名ヲ斬テ金穀・輜重ヲ取メ各隊ニ分配ス、爰ニ於テ全軍ヲ分テ三手トナシ前・中・後ノ三軍ヲ定ム、余中軍ノ分隊長ニ命セラル、同二十四日前軍神門ニ出テントスルニ、途鬼神野ニ抵テ官軍遮リ戦フ、前軍撃テ之ヲ走ス、我軍統テ鬼神野ニ突入、病院其他銃器・輜重ヲ取メテ進軍、同二十五日大風雨ヲ不厭銀鏡ヲ越へ^(村所カ)村庄ニ至ル、^(上柳木カ)上付木ヲ經テ二十七日

諸縣郡須木ニ至リ、鹿兒島ノ景況ヲ搜索ス、同二十八日
前軍小林郷ニ進ム、巡查五六名ヲ生捕、直チニ進ンテ同
三十日後軍ヲ以テ前軍トナシ官兵ト横川ニ戦フ、勝敗不
決、途ヲ転シテ踊郷ニ至ルニ、官軍又茲ニ拒戦ス、其夜
暗黒ヲ待テ間道ヨリ山田ニ進軍、同三十一日蒲生ニ抵ル、
前軍又少戦シテ巡查四名・旅団兵一名ヲ生獲ス、伏尸亦
多シ、我中軍蒲生ニ抵リ後軍ヲ待チ兵ヲ息フコト須臾、
九月一日邊見等前軍ヲ帥ヒ吉田ヲ過キ吉野ニ至ルヤ、官
兵川上村ヨリ吉田・吉野ノ中間ヲ絶ツテ我軍ヲ遮ル、于
時貴島清等兵ヲ励マシ憤闘シテ之ヲ抑ヘテ防戦ス、前軍
既ニ城山ヲ乗取、我中軍実方ヲ守ル、二日終ニ敗レテ全
軍拳テ鹿兒島城山ニ楯籠ル、同七日頃貴嶋清画策シテ米
藏ノ官兵ヲ夜襲センコトヲ謀ル、該夜十二時頃ヨリ兵ヲ
二手ニ分チ、人々枚ヲ含ミ一手ハ肝付邸ノ小径ヲ忍テ、
一手ハ梟ノ小溝ヲ潜ミ不意ニ之ヲ襲撃シ、直チニ二柵
ヲ拔テ一時官軍動揺スト雖トモ官兵壘ニ拠テ頻ニ小銃ヲ
雨射シ、我兵多ク斃ル、故ニ取ルコト能ハスシテ退ク、
此戦貴島清衆ニ先チ敵五名ヲ斃シ憤闘シテ之ニ死ス、同
二十四日官軍大挙シテ城山ニ迫ル、我兵少クシテ支ユル
能ハス、遂ニ落城ス、

明治十一年三月

鹿兒島県
新納織之丞

九四 大山武兵上申書

戦記

先般政府へ尋問フ廉有之、西郷隆盛外二名上京ス、依テ旧兵隊随行ス、我レ一番大隊一番小隊ニ加リ隊長西郷幸兵衛ナリ、明治十年二月十五日鹿兒島県ヲ出発シ、出水口諸駅ヲ経テ川尻ニ着陣ス、廿三日熊本城ヲ囲ンテ攻撃スルコト二三日ニシテ囲ヲ引揚ケ高瀬ニ進軍ス、吾隊等敵ノ正面ヨリ衝テ之ヲ撃破ス、追躡敷町、此時西郷幸兵衛戦死ス、此ノ夜退テ吉次峠守ル、三月二日敵大挙シテ来攻ム、吾軍之ヲ防禦ス、翌日進ンテ之ヲ破ル、官兵多ク死ス、三月十三日頃各隊ヨリ二名宛ヲ絞出セシム、我レ此ノ中ニ加リ熊本ニ抵テ一隊トナル、隊長八木信行ナリ、同十六日比小川ニ進撃シテ之ヲ破ル、其後数度戦争ニ及ヒ互ニ勝敗アリ、十九日頃退テ松橋ヲ防禦ス、又敵来攻ルコト数度、屢撃テ之ヲ退ク、遂ニ三月三十日同所ニ於テ銃創ヲ蒙リ、川尻病院ニ到ル、速ニ全快ス可ラサルニ依リ療養ノ為帰県ス、四月上旬官軍鹿兒島ニ抵ル、味方来テ之ヲ囲ム、六月上旬創傷平愈シテ奇兵一番中隊

ニ帰隊ス、隊長山野田一輔ナリ、六月廿六日官軍二本松ヨリ武岡ニ懸リ烈シク進来ル、吾軍利有ラスシテ退テ下田村ニ到ル、是ヨリ重富・蒲生・山田・加治木ヲ経テ岩川ニ抵リ恒吉ニ在陣ス、七月九日未明百引ニ進撃シテ直ニ之ヲ破ル、官兵死骸甚多シ、機械多ク分捕ス、二三日ニシテ都ノ城ニ引揚ケ財部ノ本道ヲ守ル、敵来懸ス、此時既ニ各地ノ敗来リ、我隊且戦ヒ且退テ山ノ口ニ引揚ケ、清武・宮崎ヲ守禦ストイヘトモ又破レテ佐土原ニ退ク、爰ニ於テ我レ分隊長トナル、是ヨリ諸所ノ戦利アラスシテ延丘ニ退ク、遂ニ永井村ノ囲ヲ受ケ八月十八日江ノ嶺ノ柵ヲ破リ、堀川・岩戸・三田井ノ敵ヲ追払ヒ、米良山路ヲ越ヘ小林ニ出ツ、横川ノ敵ヲ破ツテ吉田ニ来ル、遂ニ病ニ罹リ、城ノ山ニ達スルコト能ハスシテ伊集院ニ潜居ス、十月十五日警視出張所ニ出テ帰順ス、

明治十一年三月

大山武兵

九五 荒田藤五郎上申書

十年四月八日東襲山出發、同九日飯野へ着、直ニ二十番遊軍隊ニ編入セラレ、翌日人吉迄進軍江代二着、其翌日尾前二着、夫ヨリ矢部ニ至リ、又木山ニ出張、二日滞在、

武之宮へ出張、同所廣木村ニおひて防戦四昼夜二当ル、其夜十二時木山迄引揚、翌日矢部亦人吉之内宮前へ退陣、是ニテ常山二番中隊右小隊へ変製セラレ、旧三月廿七日官軍進撃相成戦争、又味方敗軍ニ依テ竹之川迄退陣、夫ヨリ三方尾へ引揚十余日滞留、其内官軍進撃、味方敗ス、依テ人吉迄引取、旧四月十九日人吉之内油野へ出張、官軍進撃、味方敗軍ニ依大木場へ引取、旧五月一日官軍進撃、戦争二日、終ニ敗軍ト成リ、其后紙屋戦争之折官軍之為ニ取巻レ、八月四日帰宅、同十四日降伏仕候也、

(年月日脱)

旧十番遊軍隊本隊長
荒田藤五郎

九六 加治木彦七上申書

戦記

先般朝廷へ尋問ノ廉有之、西郷隆盛外二名上京ス、依テ旧兵隊ノ者随行ス、我レ四番大隊五番小隊ニ加入、隊長永山休二ナリ、客年二月十六日鹿兒島ヲ出発シ、大口街道ヨリ水俣ニ出テ諸駅ヲ経テ同廿二日川尻ニ着陣、廿三日未明熊本ノ砲声烈キヲ聞キ走テ熊本ニ至ル、然レトモ兵多クシテ吾隊城ノ攻撃ニ関セス、此夜直チニ植木ニ進

軍ス、居ルコト一日ニシテ山鹿ニ進撃ノ処、官兵昨日退去ルト云、故ニ吾隊菊池^(菊池カ)街道ヲ守衛ス、翌朝官軍来襲ス、我カ軍撃テ之ヲ走ス、敵兵多ク斃ル、翌日木ノ葉応援ノ為木留ニ至ルニ、味方退テ田原坂及ヒ吉次峠ヲ保守ス、吾隊野出ヲ守ルコト三日許、三月二日官軍大挙シテ田原坂・吉次峠ノ諸壘^(壘カ)ニ疾ク来攻ス、三日吾隊吉次ニ応援ス、峠ノ左翼ヨリ腹背ニ出テ撃テ之ヲ破ル、官軍散乱伏尸地ヲ敵^(敵カ)フ、夜吾隊木留ニ休兵ス、翌日田原坂ニ応援トシテ吾隊及ヒ相良吉之助隊ニ俣ニ進軍ス、交戦利ナク夜圓臺寺山ニ退守ス、七八日許ヲ経テ官兵吾カ右翼橋口成一隊ニ襲撃シ、之カ為一時敗スルト雖吾隊等赴援シ打テ之ヲ走ラス、隊長永山休二彈丸ニ中ツテ死ス、河野喜八郎代テ隊長タリ、同十四日頃木ノ葉ニ進撃ス、利有ラスシテ隊ヲ揚ク、同十七日比各隊ヨリ撰拔セシ四十名ヲ以テ那智山ヲ襲テ之ヲ落ス、官軍兵ヲ反シテ来襲ス、吾隊長河野喜八郎・兵士十余名之二死ス、猶力戦スルト雖彈藥全ク尽果、止ヲ得スシテ旧壘ヲ退守ス、二十日官兵全軍ヲ挙ケ吾壘ヲ攻ム、我潰エテ木留ニ退守ス、此ノ日適我カ田原坂ノ軍毛潰ユ、僅ニ植木ニ退守ス、則チ隊ヲ変制シテ中隊トナス、中隊長日置吉左衛門ナリ、我レ分隊長ト

ナル、後二日許ニシテ我右翼破ル、我隊等憤戦シテ撃テ之ヲ走ラス、翌朝官軍来攻スルコト甚烈ナリ、我軍抜刀シテ直ニ之ヲ破リ北ルヲ追フコト數町、遂ニ昨日失フ処ノ疊ヲ復ス、此ノ日負傷シテ川尻病室ニ至ル、療養ノ為婦県ス、四月上旬官軍鹿兒島ニ至ル、味方来テ之ヲ囲ム、六月下旬頃吾軍破レテ下田村ニ至ル、吾創傷全ク愈サルニ依リ行進隊ニ付属シテ吉田・山田・加治木ヲ經テ都城ニ達ス、従是各地ノ戦利有ラスシテ日州ニ到ル、美々津川ノ敗ヨリ山ニ潜居シ、復石川内村ニ於テ帰順ス、

明治十一年三月

鹿兒島県

加治木彦七

九七 長野祐賢上申書

出兵景況記

明治十年丑二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、上京ノ途熊本県下ニ於テ戦争ニ及フニ依リ、応援トシテ出兵ス可シト県官ノ達ニ依リ四月五日進発、同十日比熊本県人吉へ着ス、直ニ遊軍十七番兵卒ニ編入セラレ、同十二日比奈須越ノ嶮道ヲ經テ同十四日比矢部へ着ス、爰ニ於テ半隊長ニ揚ラル、同廿日比木山へ繰出シ、翌日長峯へ出

張シ墨ヲ築キ守備ヲ嚴ニシ相守リ居タル処ニ、同日午後八時比本営ヨリ引揚ノ指令ニ依リ即夜木山へ引揚ク、夫ヨリ予疾病ニ罹リ給養ニ療養、翌日惣勢引揚ニ依リ馬見原へ赴キ病院へ入室シ、程ナク転シテ人吉病院へ赴キ、重病ナルニ依リ医師ノ診察証書ヲ得テ五月十日比退院シ、同十六日帰郷、八月中旬帰順ス、

明治十一年寅三月

鹿兒島県第八拾大区二小区
小根占郷

長野祐賢

九八 細山田十兵衛上申書

戦地景況書

明治十年四月七日同県ノ中山甚五兵衛吉田郷ニ募兵トシテ出張ノヨシ、我襲山郷戸長ヨリ通知アリ、余其募リニ応シ直ニ翌八日吉田郷ニ出張ス、中山モ其地ニ居リ、翌九日隊ノ編制アリ、凡百名ヲ以テ一小隊ト為ス、余遊軍十一番ノ小隊長トナル、翌十日吉田ヲ発シ人吉ニ到リ、同月廿日迄宿陣ス、翌日江代工転陣、廿一日尾前村エ至リ、廿二日矢部ニ着シ其地ヲ守衛ス、同廿八日遊軍隊ヲ麾シ其兵ヲ振武隊ニ編入アリ、余振武ノ四番給養トナル、同廿九日ヨリ矢部ヲ出立鹿兒島ニ引揚、五月四日覺ノ伊

敷村ニ至ル、六月廿四日マテ宿陣ス、其頃ヨリ其方面ノ
戰皆利アラス、我隊モ廿五日ヨリ所々ニ引揚陣所極リナ
シ、六月三十日ノ頃山口郷ニ於テ遂ニ官軍ニ取包マレ、
其日ニ降伏セリ、

明治十一年二月

鹿兒島県雲山郷
細山田十兵衛

九九 久留景起上申書

戦記

于時明治十年二月十六日西郷隆盛政府へ尋問ノ筋有之、
出京ニ隨從シ、第四大隊七番小隊へ加入シ、鹿兒島県発
程、同月廿二日熊本県庁下近ク差越シ候処、最早先驅ノ
輩同県川尻駅ニテ官軍ヨリ発砲イタシ候故、応砲戰爭ニ
相決シ候段、隊長石原市郎右衛門ヨリ其旨ヲ承知ス、直
ニ進軍熊本城へ攻撃ニカ、ル、依テ同夜植木口へ出張ノ
令アリ、依テ一隊引揚ケ同所へ行軍宿營ス、然ルニ翌廿
三日未明ヨリ木葉口味方ノ先隊戰爭中ノ報ニ依リ我隊モ
繰出シニナリ、左山手ヨリ突入候処、間モナク官兵敗走、
稻サ^(種佐カ)辺迄追撃ス、討取・分捕余多ニ及ヘリ、味方死傷三
四名、終ニ夜ニ及ニコトニ付植木へ凱陣セリ、同廿四日

山鹿へ進軍ノ処、官兵引揚ケ跡ニ依リ其儘屯陣ス、同廿
五日未明官軍襲来リ、暫時互ニ戰爭、我隊奮発抜刀激戰
候処、官兵敗北、一里余追撃ス、其儘熊本へ差越シ候故、
示来^(爾来カ)ノ儀ハ不相分候、

一同三月日不相覺田原口へ差越シ第二大隊七番小隊へ編
入セラレ、戰爭中味方敗軍ニ立至リ植木迄引揚ケ守備
接戰、官軍敗セリ、其後數度ノ戰ヒニテ互ニ勝敗有之、
詳審不致候故大略ス、同日不覺、官軍鹿兒島へ進入ノ
報アリ、依テ防禦トシテ帰県ス、前ニ隊々編制ノ令ア
ツテ我隊振武隊トナル、帰県直ニ武村台場守備、追々
些少ノ戰爭互ノ勝負アリ、然ル処是又日不覺、官軍大
ニ襲来リ、防禦手ヲ尽シテ戰フト雖トモ衆寡不得止遂
ニ大敗ヲ取り、蒲生郷へ引揚ケ守ヲ置ク折柄、我隊ハ
國分郷へ移陣スヘクノ令ニ依リ同所へ転陣ス、
一同六月中旬比百引郷屯集ノ官兵ヲ進撃ノ命ヲ受ク、未
明ヨリ進軍、七時頃ヨリ戰爭ニ及ヒ一層激発突入ノ処、
官兵敗走シ大砲ハ勿論其他ノ余品分捕枚拳シカタシ、
斬首亦多シ、味方傷ク者纔ニ二十四五名ニ及ヘリ、
一同月日不覺大崎郷屯兵ノ官軍へ進撃ノ令ニ依リ進軍、
暫時接戰ス、是又勝利ヲ得タリ、時ニ都城口味方難戰

二付我隊其他諸所へ引揚クヘキ報アリ、即日転陣セリ、

然ルニ諸口甚味方苦戦ニ及ヒ毎戦ニ利アラス、無是非

山ノ口へ各隊ヲ纏メケレトモ守場悪數ノ令ヲ以テ宮崎

迄繰引ス、其後各口始終彈藥ニ乏數相成リ、防禦堪兼

戦敗ヲ取レリ、故ニ一編延岡永江村へ（聲井カ）散兵ヲ相纏メ、

時ニ官兵襲来ノ処、彈藥乏數亦都城敗軍後各隊寡兵ト

ナルノ而已ナラス、熊本隊亦持場ヲ捨テ官軍ニ降ルニ

依リ、無ニ念決戦ニ相極リ居候折柄、鹿兒島迄一方ヲ

打破リ突出ノ令アリ、実ニ快然タリ、日不覺午前一時

比ヨリ地名・村名不相分官兵守場へ未明ヨリエヒく、

声ニテ突入り、直ニ打破リ彈藥四十余箱分捕、同品乏

數如何トモシカタキ場合ニ魚ノ水ヲ得タト云モ愚ナリ、

一統愉快ノ眉ヲ開キ山谷ヲ越シ三田井へ出、同所屯集

ノ官兵ヲ破リ、又渡川ニテ同斷、須木・小林・横川・

蒲生諸所ノ守兵ヲ打靡ケ、同九月一日鹿兒島へ着、旧

私学校へ屯集ノ官兵ヲ追散シ、翌ニ日鶴丸山ヲ乗落シ

諸口防戦ノ処、同月廿五日終ニ戦利アラス、西郷其他

皆屠腹セリ、依テ即日前非ヲ悔悟シ帰順仕候事、

右、戦地景状見聞ノ次第可申上旨奉畏、取覺ノ概略如

斯上申仕候也、

明治十一年二月

久留景起

一〇〇 藤崎休右衛門上申書

戦地景況之概略

今度西郷隆盛等政府へ尋問ノ廉アツテ上京ヲ催ス、爰ニ於テ県下騒然随行ヲ乞フ者夥シ、余ハ三番大隊五番小隊ノ兵士ニテ小隊長酒匂軍介ナリ、十年二月十六日発程、同ク廿一日夜熊本県下川尻ニ着、翌未明川尻発足、熊本城ヲ距ル里許ニシテ砲声ヲ聞ク、我隊長隊ヲ進メテ城下ニ至ル、夜ニ及ンテ引揚ク、余病氣ニ罹リ、川尻病院ニ至ツテ養生ス、二三日ヲ経テ帰県ヲ乞ヒ、三月三四日比我郷今和泉ニ着ス、後八月三十日官軍ニ帰順、自宅謹慎ヲ命セラレ、時ニ九月一日隆盛等再ヒ鹿兒島ニ至ルニ及ンテ県下動揺、復之ニ応セント同盟ヲ催シ城山ニ至ラントスルニ、道梗ツテ通スル能ハス、速ニ帰家潜伏セシ所、城山落城ノ後前件発露、警視所ニ拘引セラル、

明治十一年二月

鹿兒島県

藤崎休右衛門

一〇一 牧瀨音右衛門上申書

戦地景況

明治十年四月同県ノ中山甚五兵衛募兵トシテ蒲生郷ニ来ルトノコト、我郷在勤ノ警部河野市郎左衛門・副戸長代理児玉善輔・河野甚之丞ヨリ通知アリ、余直チニ其募リ応シ同郷ノ者二十三名ト同シク四月廿六日出発シ、横川・栗野・踊ヲ過キ五月六日敷根ニ至ル、其地ニ於テ隊ノ編制アリ、余福山出張本営ノ伊藤祐兼ヨリ六番小隊長命セラレ、翌七日ヨリ国分濱ノ市ヲ守衛スル凡六十日間、六月初旬ノ頃市成郷エ転ス、而シテ半隊ハ竹ノ元エ出ツ、余残り半隊ヲ率ヒ百引境目ニ至リ其地ヲ警衛ス、同月十六日晝官軍不意ニ進撃、我軍忽敗走、福山ノ牧内ニ引揚タレトモ尚追撃、兵士散乱纏ラス、故ニ我郷ヲ差テ帰邑セリ、

明治十一年二月

鹿児島県樋脇郷

牧瀨音右衛門

一〇二 瀬之口覺之助上申書

戦地景況之概略

明治十年二月中原尚雄等政府ノ令ヲ奉シ西郷隆盛ヲ刺殺

スルノ説発露スルニ及テ、隆盛政府へ尋問ノ事アリ、上京、旧兵隊随行スルニ付、同十三日鹿児島ニ赴キ私学校へ届出テ、第二番大隊六番小隊兵卒へ編入ス、隊長川村甫介・半隊長竹下九郎・分隊長有馬源五郎ナリ、十五日発足、加治木・横川・大口・津奈木・田ノ浦・小川ノ各所ヲ經過シ廿一日川尻へ着ス、翌廿二日熊本城後口ヨリ攻撃、直ニ営下ニ進入、城内ヲ取囲ミ台兵ト砲戦ス、戦フコト一昼夜ニシテ勝敗決セス、我隊大工町へ引揚ケ、其ヨリ第二番大隊五・六・七・八番小隊大津ニ繰出シ宿陣ス、四小隊ヲ以テ交代、二重峠ヲ番兵ス、此地敵在ラザルニ依リテ亦大工町へ引揚ケ一泊ス、其レヨリ田原方面七本村へ繰出シ、翌日富應村ニ転ス、当所ヲ数日番兵シ、三月十七日午後六時比加治木六番小隊ト交代シ田原口本道ヲ守ル、同二十日午前八時比官軍進撃、我五番大隊四番小隊ノ守リ口ヲ敗ラレ敗走シ、向江坂ニ至リ、踏ミ止マリ防キ戦フニ我力応援許多相ツミキ、所々へ兵ヲ引廻シ官軍ヲ取囲ンテ激戦シ、遂ニ切込ミ植木町迄追返シ大勝利ヲ得タリ、敵兵戦死二百七八十名ト云フ、分捕者銃器・彈薬山ノ如シ、是ノ日我隊長川村甫介・半隊長竹下九郎戦死、外五六名ナリ、戦終リテ我隊植木櫻原

へ引揚ケ、速ニ台場ヲ築キ數日打合ヒシガ、余四月十日ノ戦午後八時比負傷、直ニ木山病院へ差送ラレ療養ス、其後川尻方面敗レ病院ハ矢部濱町ニ移リ、又馬見原ニ移ル、於是帰県ヲ請ヒ廿一日家ニ帰着ス、六月中旬医師來リ、驗査シ帰隊ヲ命ス、六月十八日発足、本城方面邊見十郎太本營ニ至ル、同廿一日雷擊六番中隊左小隊分隊長申付ラル、中隊長左近允喜八・左小隊長田實吉之丞・半隊長上野司ト同ク隊ヲ率イ湯之尾ヲ守ル、卅日官軍ニ進撃セラレ一時ノ防戦ニテ味方敗レテ走り小田村ニ退ク、官軍又來攻、我兵支ルコト能ハス、横川へ引揚ケシガ、又敗レテ踊郷ニ退キ守ル一兩日、大久保ニ至ル、官兵來リテ攻撃、戦コト一晝夜、霧島へ引揚防戦スルニ我兵大ニ敗レ隊伍散亂、余ハ道ニマヨヒ硫黄ヶ谷温泉場ニ出テ暫ク勞ヲ休ム、然ルニ官軍一中隊ノ通行ニ会ヒ、遂ニ縛ニ就ク、其後鹿兒島警視出張所へ差廻サレタリ、

明治十一年二月

鹿兒島県

瀬之口覺之助

一〇三 中江員治上申書

明治十年二月三番大隊五番小隊ノ半隊長トナリ、酒匂軍

助小隊長タリ、同十六日鹿兒島県下ヲ発シ、同廿二日午後熊本ニ到着、同廿四日夜ル月没ヲ期トシ三ノ四・五ノ四等ノ隊ト相議シ短兵突入、直チニ熊城ヲ蹂躪セント黄昏ヨリ段山口ニ抵ル、同所ノ守兵等止メテ日、城甚險ニ守モ亦嚴ナリ、急ニカヲ以テ之ヲ拔ントセハ徒ニ兵士ヲ損スル而已ナラント、此ニ於テ夜襲ノ議遂ニ止ム、是ヨリ段山口ニ在ルコトニ週間許リ、三月九日ニ至リ段山ヲ発シ植木駅ニ到テ泊ス、同十一日進テ木留ニ達ス、同十二日午前一時窺カニ官軍ヲ襲撃セントス、各隊集ラサルヲ以テ天既ニ曙ク、進ンテ西安寺村ニ抵ル、官軍我進撃ヲ見ルヤ、大ニ防禦ノ方ヲナシタルニ依、遂ニ近ク能ハス、谷ヲ隔テ、砲戦ス、午後二時比銃丸來テ両足ヲ洞シ寸歩モ能ハス、退テ川尻病院ニ在テ之ヲ療ス、疵猶愈サルニ依リ帰県セリ、故ヲ以戦地ノ景状ヲ詳ニセス、

明治十一年二月

鹿兒島県

中江員治

一〇四 宗像景雄上申書

時ニ明治十年西郷隆盛熊本ニ開戦、其縁故豈ニ弁ヲ待ンヤ、此時ニ當ツテ親友輩凡ソ三十名許某氏ノ別第二会シ、

論議夜白ニ亘リ、紛乱糸ノ如ク、終ニ繼フ可カラサルヲ知り、故ニ某ト僅ニ三名出兵ヲ決ス、二月廿八日頃熊本九番小隊邊田野邑ニ在ルヲ聞イテ之ニ投ス、余該隊斥候トナリ木葉ノ戰聞アルヲ以テ之ニ趣ク、戰酣ニシテ官軍火ヲ山谷ニ放チ、薩軍利アラス、退イテ田原嶮ニ拠ル、官軍勝ニ乗シテ駭々突入ス、薩軍能ク之ヲ拒ク、我九番小隊ハ七本ニ對壘ス、連戰幾日、余本管斥候ニ転ス、本營(二本木カ)ニ在ルヲ以テ之レニ至ル、三月十八日官軍八代ニ上陸ノ報アリ、薩將児玉八之進等ヲ遣ハシ冰川(氷川カ)ヲ挟ンテ之ヲ拒ク、薩軍ノ兵線白谷ヨリ鹿野ノ海浜ニ連ル、官軍川ヲ渡ツテ進撃ス、薩軍支ル能ハス、退クコト十余町、尋テ復々突入ス、大敗シテ松橋ニ退ク、此時死傷甚タ多ク兵寡キヲ以テ大ニ艱ム、因ツテ或策ヲ建テ、日、衆寡敵セス、海ヲ引テ田面ニ灌漑セハ幾ハク衆ヲ得ント、故ニ井樋ヲ毀ツテ潮ヲ待ツ、時ニ高潮ノ候ナレハ逆怒奔波、數百町ノ田地忽チ變シテ海トナリ、立ロニ數百ノ衆ヲ得テ各壘ニ充ツ、官軍大斥候ヲ以テ來リ犯ス、一戰撃テ之ヲ退ク、官軍再拳シテ來撃ス、守固シテ抜ク能ハス、方サニ退ントス、薩兵呼譟シテ進ム、官兵骸ヲ踏ンテ遁シ走ル、翌日官軍衆ヲ尽シテ攻撃ス、彈丸注クカ如ク勢頗

ル猖獗、終ニ薩軍守ヲ撤テ、三十町橋ニ退テ、即夜撰兵シテ襲撃スト雖トモ号令齟齬シ、利ヲ失フテ軍ヲ川尻ニ還ス、四月十二日比官軍大拳シテ御船ヲ來撃ス、此時余統軍永山彌一郎ノ側ラニ在リ、薩軍死力ヲ尽シテ之ヲ拒クト雖トモ衆寡敵セス、兵士屢來テ苦戦ノ情ヲ陳ス、彌一街頭ニ出テ酒樽ニ踞ケシテ三尺余ノ刀ヲ按シ、怒髮帽ヲ衝キ眼光閃々叱シテ曰、吶怯夫何ソ來リテ告クコトヲ須インヤ、汝等今日死アランノミ、兵士恐惶シテ去ル、既ニシテ銃丸座側ヲ過ク、余起テ阜上ヲ望メハ官軍ノ群ヲ為シ、馳セ帰ツテ彌一ニ告ク、彌一蹶起シテ我兵何クニ有リト、同隊輜重長稅所某ト共ニ御船川ヲ渡ル、四面皆官軍、近キモノハ二十間、遠キハ三丁ニ過キス、數百煙穴特リ我輩ニ注ク、彌一慨歎シテ余ニ謂ツテ曰、僕此ノ大敗ヲ取り何ノ面目アツテ同僚ニ對センヤ、一死以テ罪ヲ謝セント欲ス、公等速ニ遁レテ此ノ状ヲ我本營ニ報セヨト、懇ロニ別ヲ告テ從容民舎ニ歩ス、稅所傍ラニ有リ、余告クルニ彌一ノ事ヲ以テス、稅所曰、吾且之レヲ止メン、走テ彌一二近キ未タ數語ヲ交エス、顧ミ呼フテ曰、我モ亦彌一ト同ク死ナンノミ、公等自愛セヨト、相共ニ民舎ニ投ス、暫アツテ顧スレハ投スル所ノ民舎火起

リ、果シテ両士自刃ノ期ナルヲ知ル、余八万死ヲ遁レテ我營ニ歸リ且薩營ニ至リ告ルニ彌一ノ状ヲ以テス、桐野

日、吾一ノ勇將ヲ失フト、慨歎良久シ、同十四日昧爽天明密

柑ノ備忽ニシテ容易ク突破セラレ、遂ニ川尻ニ及ヒ、此

ニ於テ薩肥ノ本營ヲ木山ニ移ス、北方ニ有ル所ノ熊本隊

尽ク木山ニ退ク、此時土山・御船ノ官軍戦ハスシテ退ク、

蓋シ我銃鋒ヲ避ルナラン、薩肥ノ兩軍直チニ御船ニ向フ、

官軍来リ犯ス、利アラスシテ退ク、追テ数頭ヲ斬ル、退

イテ壘ヲ固シテ之ヲ待ツ、官軍呼諜シテ突衝ス、勢頗ル

精銳、我兵死力ヲ尽シテ血戰奮闘、危キハ生兵ヲ以テ相

極ヘトモ官軍左右翼ヲ繞ツテ側面ニ当ル、甚タ急ナリ、

此ニ至リテ援イ絶エ兵勞レ、終ニ全軍ノ潰崩トナル、池

邊銃丸ヲ冒シテ百方返戦ヲ勉ムレトモ一兵止ルモノナク、

傷者呼ヘトモ扶クルニ暇アラス、此時友人某股ヲ射ラレ、

余之ヲ扶ケ看護シテ人吉ニ至ル、五月五日熊本隊遠ノ原

ニ向フ山野ノ官軍ヲ挾撃セント薩軍ニ約ス、蓋該地ヨリ

山野ニ至ル路程四里許ニシテ甚タ峻シト云、期ニ及ヒ進

発ス、人跡絶エテナシ、落葉脛ヲ没シ頭ヲ踏ンテ攀チ雲

ヲ脱ユル幾千仞、古木龍蟠苔蒸々タリ、枝ヲ折り鞋ヲ掛

ケテ標ヲナシ、稍達スル比ヒニ山野ニ當ツテ銃声アリ、

趨ラント欲スレトモ特リ懸壑ヲ如何セン、遂ニ好機ヲ失

ヒ官軍消亡ノ跡ニ出テ追躡シテ小河内小川内カニ至ル、官軍御神

嶮ニ抛リテ我ヲ拒ク、昏ニ及ンテ退ケリ、我軍進ンテ深

川ニ戦フコト連昼夜、余人吉本營ニ歸ル、時ニ我軍毎戦

死傷多キカ故ニ某ト余トヲ撰シテ豊後ニ就テ兵ヲ募ラシ

ム、同廿七日比人吉ヲ発ス、六月中旬延岡ニ達ス、時ニ

薩軍竹田ヲ要ス、日ナラス進ンテ鶴崎ヲ取ルノ議アリ、

募兵彼ノ地ニ有リト心窃ニ之レヲ慶ヒ該地ヲ発シテ竹田

ニ趣ク、途官軍ニ壅塞セラレ變ヘテ行クニ及テ薩將吉村

某ニ会フ、吉村曰、竹田ノ官軍敗岨、白杵ヲ退守スト、

此ニ至ツテ余輩大ニ望ヲ失フ、今特リ佐伯有ルノミ、直

チニ佐伯ニ至レハ門戸皆鎖サシ寂寥如何トモスル能ハス、

市街ヲ巡視スルニ當ツテ一男兒ニ遇フ、之ヲ家屋ニ引ヒ

テ有名・属望ノ士ヲ問フ、曰某々、当日旧君ノ祭事アリ、

幸ニ皆会同セリト、因テ使ヲ遣シ之ヲ招ク、三四相伴フ

テ来会ス、之ニ告クルニ隆盛ノ事ヲ以テシ、責ルニ傍觀

ノ拙ナキヲ呵シ、説テ国民ノ義務ヲ明ス、此ニ於テ切齒

慨歎ヲ起シ一死以テ隆盛ヲ助ケ、生計敢テ望ム所ニ非ラ

ス、忽チ數十ノ章ヲ連ネ四方ニ発ス、是ヨリ先キ夜白ヲ

弁セス、驅会スルモノ市ノ如ク、記者筆ヲ措ス三日ヲ出

テスシテ載薄八百余名、尤青壯ノ齡ヲ撰ンテ上下ハ慰諭シテ之ヲ遣ル、然リト雖トモ精兵三百ニ下ラス、皆家ニ就キ軍粧ヲ為サシム、此ノ時ニ當ツテ薩軍臼杵ノ地形拠ルヘカラスシテ軍ヲ還スコト数里、官軍追躡シ至ル、佐伯殆ト囊括ノ地トナルヲ以テ僅々タル五十余名ヲ率ヒ、夜潜カニ間道ヲ取ツテ横川ニ達ス、止ルコト十日可リ、官軍赤木ヨリ進入ス、薩軍応援ヲ乞フ、則チ至リ援フ、暫アツテ戦止ム、我兵素ヨリ新募ナレハ軍器未タ整ハス、隊伍編制セサルヲ以テ陵岡ニ還ス、此ニ於テ器械ヲ調べ輻重ヲ置キ隊伍ヲ編制シテ新奇隊ト称ス、六月下旬陵岡ヲ発シテ大楠ニ向フ、達スルニ及ンテ薩軍中村ノ壘陥ル、官軍我後路ヲ絶ツヲ慮リ戦ハスシテ薩軍ト共ニ城村ニ退ク、壘ヲ固シテ之ヲ待ツ、官軍ノ斥候數十来リ犯ス、薩兵ト共ニ邀撃シテ之ヲ退ク、是ヨリ官軍敢テ迫ラス、休兵幾旬、時ニ薩營椎畑ニ有リ、高城某統軍タリ、高城日、官軍ノ左翼絶縁ノ間道アリ、之ヲ潜ツテ丹左衛門嶽ニ攀躋ラハ官軍ノ各壘皆脚下ナリ、先キニ数百ノ衆ヲ撰ンテ之ニ向シム、其ノ達スルニ及ンテ烽燧ヲ揚ケント、之ニ応スルニ炮声ヲ期トシ各隊突進スヘシ、期明朝ニ有ラント、故ニ各隊向フ所ヲ定メ我隊星山ノ壘ニ當ル、乃チ先

鋒タリ、即夜五更ヨリ進発シ深林ヲ潜行シテ官軍ノ壘側ニ伏ス、時移レトモ期炮ヲ得ス、官軍知テ銃ヲ発ス、何ソ期炮ヲ待ニ暇アラン、一斉薩兵ト共ニ突入ス、我隊未タ戦習サルヲ以テ従フコトヲ得ス、僅カニ七八名、然レトモ好機失フ可カラス、間道ヲ繞ツテ背面ニ出テ一戦壘ヲ拔キ、猶ニ壘ヲ退ケ官兵遁レ走ル、右翼未タ潰スコト能ス、遼カヲ瞻望スレハ官軍ノ援兵陸続連綿、暫アツテ突撃シ至ル、我隊奮戦良久シ、或趨リ報シテ日、我左右翼ノ軍向キニ退ク、四面皆敵ナリト云、回顧スレハ銃声遠ク後ヘニアリ、今ヤ孤軍ニシテ力及ハス、退クコト十余丁、官軍雲集、通路更ニ絶エタリ、故ニ深谷ヲ攀チ下リ、夜ニ入り暗ニ乗シテ漸ク我壘ニ達ス、是ヨリ六七日ヲ経黎明官軍呼謀シテ進入ス、其鋒当リ難ク壘ヲ棄テ潰走ス、尾撃甚タ急ナリ、三田井川ヲ渡ルニ及ヒ舟顛覆シテ溺死数名、残兵曾木ニ遁ル、此時銃器・輻重尽ク沈没シ兵氣大ニ沮靡シ、尋テ諸方ノ軍敗衄ヲ取り空シク延岡ヲ棄テ永井村ニ退ク、官軍ノ罟ミ甚タ固クシテ我隊槍ノ谷ヲ守ル、猶和田峠ノ敗有リテ我隊ヲ永井村ニ還シテ応援隊ニ備フ、八月十六日ノ夜薩軍ト我隊ヲ併セテ槍ノ谷ヲ突破セント、薩將池上四郎之ヲ統フ、余止リテ永井村

二有り、時ニ陸盛向キノ軍ヲ率ヒテ既ニ囲ミヲ脱セリト云モノアリ、趨リテ薩營ニ至レハ寂々寥々、(嗚呼カ)呼々陸盛ヲ失シテ何ヲカセン、某士ト共陸盛ヲ追踪シ至ル、途官軍ニ遮断セラレ、必ス達ス可カラサルヲ知テ潜伏、好機ニ投セント日州ヲ跋涉シ、奈須ノ嶮ヲ經テ熊本ニ歸ル、然ルニ陸盛ノ死ヲ聞イテ又何ソ他アラン、素懷ヲ法廷ニ陳述シ甘テ刑典ニ就クニ如カスト、九月廿八日熊本県裁判所ニ訴フ、

叙事疎略而且不能無謬語、特塞下問之責耳、伏請寬恕焉、

明治十一年三月

熊本県平民

宗像景雄

一〇五 深見有常上申書

明治十年二月西郷陸盛等上京、旧兵隊隨行ノ議決ス、十四日別府晋介加治木・国分ノ先鋒ニ大隊ヲ引率シ加治木ヨリ大口支道進行、十五日一番大隊西目筋本道ヨリ、二番大隊大口筋ヨリ、十六日三番大隊西目筋ヨリ、四番大隊大口筋ヨリ、十七日五番大隊西目筋ヨリ、大砲隊大口筋ヨリ進発ス、尋テ本營ヲ二手二分チ、大口筋ニハ西郷

陸盛・桐野利秋・村田新八発行、淵辺群平毎小隊押伍各二人ヲ率ヒ之ニ從ヒ、仁礼新左衛門・市來宗助之カ付屬タリ、西目筋ニハ篠原國幹・永山彌一郎・池上四郎発行シ、奥良之丞・今藤勇助・深見有常之カ付屬タリ、二十日未明篠原本營及五番大隊出水米之津ヨリ船行佐數ニ着ス、有常ハ陸行佐數太郎ニ至リ、三番大隊ヨリ熊本籠城防戦ノ備アルノ報ニ会ス、乃チ伴ヒ佐數本營ニ着ス、二十一日又船行熊本城方位ニ火ノ手ヲ見ル、午後五時松橋ニ達ス、奥斥候トシテ川尻ニ至リ返リ報シテ云、台兵我カ先鋒隊ニ発砲、我兵驅ケ散シテ数人ヲ捕獲シ、遂ニ明日未明ヨリノ攻撃ニ決シ、且熊本士族來応スル者巨多ナリト、篠原・永山・池上驟然走テ川尻ニ至ル、已ニ午後十時ナリ、有常等五番大隊ト同ク尋テ発ス、二十二日午前二時頃川尻ニ達ス、池上云、余ハ五番大隊ヲ率イ直チ二城ノ正面ヨリ攻撃スルニ議決スト、毎小隊嚮導各一名ヲ配付スヘキヲ命シ、事終リテ乃チ発ス、行凡一里許、天方ニ明ク、本庄ニ至ル頃台兵大砲ヲ激発シ戦始テ開ク、池上令ヲ伝ヘ各隊ヲ分テ攻撃シ、長六橋・安政橋・明午橋辺ヨリ龍田口及ヒ出町ヲ廻リ諸隊ヲ督励ス、時ニ西郷代繼宮ニ着スト聞キ、趨テ攻撃ノ状ヲ陳ヘ復安政橋ニ至

ル、二十三日早朝村田三介来リ、昨日植木役ノ得ル所ナリトテ、連隊旗ヲ懷中ヨリ出シテ之ヲ視ス、且日、余再ヒ植木口ニ向ヒ勇往奮前(奮然カ)小倉ニ電進スヘキヲ命セラル、子等同行如何ン、池上乃与ニ共ニ発ス、有常モ随行ス、発スルニ臨ンテ使ヲ本營ニ遣リ大小荷駄一部ヲ發遣アラシコトヲ報ス、植木ニ至ル頃田原口戦方ニ酣ナリシカ、官軍遂ニ敗走シ、我兵追撃木ノ葉ニ至ル、此日馬二疋、銃器、彈藥若干ヲ分捕ル、村田ハ山鹿ニ發行、池上、有常ハ木ノ葉ニ至ル、夜ニ入り池上・有常本營ノ令ニヨリ帰營セリ、此トキ本營ハ、本庄ニ転ス、二十六日本營ヲ春日神社境内ニ転ス、二三日ヲ経テ桐野ハ山鹿ニ向ヒ、篠原・村田新ハ木留ニ出張シ始テ出張本營ヲ立ツ、有常戦地景況見聞トシテ三ヒ田原・木留ニ至ル、此時ニ当リ各方面ヨリ毎戦勝利ヲ報ス、三月四日頃吉次峠及田原頗ル苦戦、別府晋介馳来リ、応援ヲ乞フ、有常命ヲ受ケ五番大隊一番小隊即チ河野主一郎隊ニ発向、応援スヘキノ旨ヲ伝ヘ共ニ田原ニ至ル、時ニ両軍頻ニ戦ヲ交ヘ砲声地ヲ動シ、迸丸霰ノ如シ、河野モ亦兵ヲ励マシ攻撃ス、戦フコト一時間ナル可シ、官軍東北方位ナル味取山ノ頂キニ上リ瞰射ス、有常之ヲ望ミ、彼レハ頂キヲ越ヘテ我軍ノ背後ニ逼ルノ形状アリ、直ニ追散サンニハ味方苦戦

ナラント、之ヲ河野ニ告ク、河野乃一隊ヲ引上ケ之ニ馳ス、有常亦同シク行ク旋ルコト凡ニ里許、味取山ノ麓ニ至リ、半隊長児玉軍治ニ半隊ヲ率ヒテ敵ノ右ヨリ横撃セシコトヲ命シ、河野ハ其半隊ヲ以テ正面ヨリ攻撃スベシト道ヲ分ツテ上ル、半腹ニ至ル頃敵我隊ニ向テ旗ヲ麾ク、我隊旗ノ徽号ヲ絞リテ之レニ応シ詐リテ官軍ナルヲ示ス、如此スルモノ数次、敵ヲ距ル僅ニ五十歩、直チニ発砲ス、児玉ノ半隊モ亦来会シ激シク戦フ、戦半ナラントス、河野兵士十名ヲ分チテ敵ノ背面ヨリ進撃ス、官兵之レニ驚キ走リテ山ヲ下リ木葉ニ退ク、日方ニ暮ル、雨又甚シ、乃篝火ヲニケ所ニ点シ陽ハリ守兵ヲ為シ、陰ニ全隊ヲ山本村ニ引上ケ勞ヲ憩フ、此日我隊死傷僅ニ三人、其翌未明又味取山ニ軍ス、夜ニ至リ虚勢ヲ張りテ退ク前夜ノ如シ、爾后每霄此策ヲ用ユ、官兵ハ日ニ来リテ戦ヲ挑ムトイヘトモ之ヲ覚ラズシテ夜襲ヲ為サ、リシヤ、該山ハ常ニ我手ニアリト云、七日頃有常・河野木留之本營ニ至リ進軍ノ事ヲ謀ル、有常ハ村田ノ命ニヨリ二三ノ隊長ヲ乞ハン為メ熊本々營ニ帰ル、(中旬カ)仲旬本營ヲ二本木ニ移ス、十九日日慥ナラス午後六時頃官軍鹿兒島ヲ引上ケ八代ニ上陸ノ報至ル、即三番大隊一番中隊辺見十郎大隊、此トキ辺見鹿兒島ニ在リ、右小隊長山本盛

政之ヲ、二番中隊汾陽五郎右衛門隊ナリ・五番大隊十番中隊兒玉八之進隊ナリ・狙撃二番隊岩見半兵衛隊ナリ・大砲一隊田代五郎隊ヲ繰出ス、尋テ一番

大隊九番中隊堀與八郎隊進発ス、時二夜已ニ半ナリ、二十日都城隊二小隊小隊長龍岡實時・東種正ナリ、二十一日三番大隊八番中隊橋口

吉左衛門隊亦八代口ニ進発ス、時二田原ノ敗聞至ル、午後十時頃ニ至リ之ヲ向江坂ニ喰ヒ留タルノ報アリ、二十三日植木ヨリノ報二日、一昨廿一日味方大敗之ヲ向江坂ニ拒キ大ニ激戦、官軍亦敗走、追テ植木ニ至ル、官軍撤ツル処ノ死骸ヲ数ルニ二百八、彈藥・銃器及土工具等分捕

山ノ如シ、我軍中隊長町田権左衛門戦死、同森岡長左衛門重創、其他死傷若干ナリト、二十五日夜日詳ナラズ桐野、有常ニ命シテ云、今ヤ官軍覺ヲ退去ストイヘトモ不日ニ復至ルコト必セリ、早ク之方備ヲ為スニ若カス、速ニ鹿

兒島ニ返リ此由ヲ辺見・別府・淵辺ニ伝ヘヨ辺見等ハ八代進撃セントテ在リ、辺見等已ニ八代口ニ発向ストモ一人ハ必ス再ヒ覺ニ還リ、子モ亦補助尽カスヘシト、即時発程小川ニ至リシニ、八代口浜手ノ軍敗レ山手ノ軍退キ来リ、再ヒ進撃ノ用意ヲナスアルニ会ヒ、道路梗塞、乃土人ニ命シテ嚮導タラシメ、路ヲ間道ニ取り山ヲ攀チ谷ヲ越ヘ人吉ニ達ス、時二八代進撃ノ先鋒一小隊覺ヨリ来着シタルニヨリ、

辺見等モ発覺ナラント馳セテ鹿兒島ニ達ス、別府已ニ途ニ上リ、辺見ハ其翌未明ヲ以テ発セントス、乃淵辺ニ投

シ桐野ノ令ヲ伝フ、数日ヲ経熊本々營ヨリ兵隊送致スヘキノ報アリ、有常淵辺ノ依托ニヨリ大口ニ至リテ各地招募ノ兵ヲ繰出シ、及ヒ器械・彈藥等送致ノ事ニ従事ス、

滞七日許、人吉本營別府晋介ノ使来リ、余八代口本營ニアリシガ、負傷ヲ以テ淵辺ト交代ス、余カ創猶瘳ヘズ、速ニ来リテ補助スヘキノ旨ヲ報ス、乃人吉ニ到リ、別府ニ属シ本營ノ事務ヲ弁理ス、四月二十二日頃熊本ノ我軍敗レ西郷・村田・池上人吉ニ退軍ス、其翌有常・別府

鹿兒島守衛トシテ出張ニ付随行スヘキノ命ヲ受ケ、別府ニ先チ即刻発ス、二十五日日不詳着覺、一日ヲ経テ官兵来着ス、有常潜伏スルコト三日、該地ノ景情ヲ探偵シ横川ニ至ル、時二別府及ヒ人吉ヨリ進軍ノ先鋒隊ニ会シ覺地ノ形状ヲ告ク、五月七日頃人吉ニ帰營ス、止ル一日、復覺ニ至リ、硝石・銅・鉛等人吉ニ運送ノ事ヲ担当ス、

十四五日ヲ経人吉敗ル、ヲ聞キ馳セテ大畑ニ至リ、本營引上来ルニ会ス西郷ハ已ニ宮崎ニ移營ス、村田・池上日、彈藥已ニ乏シ、速ニ長崎ニ至リ、之ヲ外国人ニ謀リ且便宜ヲ得ハ軍艦ヲ

モ購求スベシト、乃発程川内向田ニ至リ、人ヲ長崎ニ遣

シ該地ノ情ヲ探ラシム、其報ヲ待ツ数日、出水口ノ守リ敗レ官軍水引ニ進入、之ニヨリ転シテ南方ニ至ル、暫アリテ官兵覺ヨリ亦至ル、乃船ヲ雇ヒ甌島ニ逃ル、時ニ該島ノ兵敗レテ逃帰ルモノ多シ、戸長ニ命シテ二百余人ヲ募ル、又阿久根戸長松下某ヲ長島ニ遣ル、亦三百余人ヲ得タリ、於是使ヲ宮崎本營ニ遣シ今募ル所ノ兵數百人ニ及ベリ、顧フニ長崎・鹿兒島各地ノ間ヲ衝突スルノ外他ノ策ナカルヘシ、何レニ進撃スヘキヤ、事決セハ隊長數名ヲ送ラルヘキノ趣ヲ報ス、時ニ六月仲旬頃ナリ、八月下旬ニ至リ使帰リ、都城已ニ守ヲ失シ宮崎亦尋テ敗ル、今ヤ策ノ行フヘキナシ、潜匿シテ再報ヲ待ツヘシト桐野ヨリノ報告アリ、九月四日頃西郷鹿兒島ヨリノ書翰達ス、展テ之ヲ見ルニ余等当地ニ衝キ出タリ、子速ニ募兵ヲ以テ一面ヲ突キ来ルヘシ、且各郷戸長ニ命シ巡查不殘捕縛スヘキノ旨ヲ述ヘタリ、即該島戸長ニ書面ヲ示シ出兵ノ用意ヲナス、時ニ該地流言アリテ、兼テ結束シタル兵士等猶予ス、奮激スル者僅二十人、故ヲ以テ解隊果サス、乃十人ヲ從ヘ川内川口高江郷ニ達シ鹿兒島ニ趣カントス、諸道梗塞、已ムヲ得ス阿久根ニ潜伏、遂ニ縛ニ就ク、実ニ九月二十二日也、

明治十一年二月廿五日記
鹿兒島県 深見有常

一〇六 有富信吾上申書

戦地景況之概略

今度陸軍大将西郷隆盛等政府へ尋問之廉アリ、上京ノ途中熊本県下ニ至リ、台兵ニ抑制サレシヨリ爾後戦數々ニ及ヒ、遂ニ不利ノ際鹿兒島へ官軍進入、隆盛中島健彦・貴島清等ヲ遣シ鹿兒島ノ官兵ヲ払ハシテ振武・干城・奇兵等ヲ率ヒ来レリ、于時六月五日鹿兒島県下上伊敷村振武本營ヨリノ募リニ応シ、六日我郷村原村ニ於テ同盟七十余名ト相会シ一小隊ヲ編制シ、余ヲ以テ之カ隊長ニ命セラル、翌七日川辺郡加世田ヲ発シ鹿兒島上伊敷村ニ着ス、翌日該地巡邏兵ニ備ヘラレ加世田新兵ト名ツク、同十日谷山脇田浜へ官ノ軍艦碇船シ兵ヲ運スルノ報知アリ、即刻彼ノ地応援ニ趣キ谷山町ニ至リ、翌日同所塩屋へ転陣シテ海岸ヲ防禦ス、同二十四日未明振武二十五番隊ノ守場へ官軍襲来、番兵懈テ不意ヲ衝カレ我兵敗ル、故ニ応援ニ趣キ斥候シテ之ヲ窺フニ、官軍既ニ船橋ヲ掛テ本船ヨリ數多ノ兵ヲ卸ス、直ニ馳テ我右半隊ヲ以テ本道ニ

当ラシメ、左半隊ハ振武廿六番一分隊ト合シテ上手ヨリ
進ム、然ル処ニ官軍小蒸氣船ヲ放チ我軍ヲ横射ス、故ニ
苦戦、遂ニ彈藥尽キ同所玉利村ニ退守ス、爰ニ於テ官軍
又谷山ニ上陸麓町等ノ地ニ放火ス、翌日我隊上伊敷村ニ
行カントスルニ、各地ノ味方敗走シ通路塞テ達スル能ハ
ス、遂ニ兵糧ニ竭キ軍ヲ散シテ帰郷ス、爾後七月上旬官
兵我郷ニ進入ノ際、戸長役所ニ於テ帰順ス、

明治十一年三月

鹿兒島県

有富信吾

一〇七 佐多正藏上申書

明治十年三月廿日鹿兒島県下永利郷ヲ発シ、一週日ニシ
テ熊本県下人吉ニ到着ス、即チ十番大隊四番小隊ニ編入
シテ頭治口ニ守兵ス、一週間余ニシテ深見川ニ移リ、同
四月十一日未明ニ同所ヲ進発シ劇戦半日、余終ニ敵兵ヲ
破リ追散ス、即日午後九時同所ヲ発シ妙見ニ到リ守兵ス、
翌十二日午前八時比敵兵襲来リ、之レニ応シ戦フコト午
時ニ至リ、敵軍ヲ破リ追撃スルコト十余町ニシテ兵ヲ揚
ケ妙見ニ帰ル、此夜八代迄進ミ向フト雖トモ一兵ヲ見ス、
再ヒ妙見ニ引キ守ル、翌十三日八代口本道ノ味方大イニ

敗走シ神ノ瀬ニ引退ク、此所ニシテ病ニ罹リ、人吉ノ病
院ニ入ル、数十日ヲ経テ順快シ帰郷ス、其後チ味方鹿兒
島ニ入ルニ依リ再ヒ出兵ヲ促スノ時、鹿兒島城兵敗軍ト
ナリ帰順ヲ乞フ、

明治十一年第二月

鹿兒島県下永利郷

佐多正藏

一〇八 豎山利智上申書

記

明治十年二月十六日鹿兒島県発程、西目街道ヲ経テ同月
二十二日夜熊本県下ニ至レリ、翌二十三日ヨリ城外ヲ囲
ミ安政橋辺ヲ守ル、三月上旬同県ノ内下牟田へ出兵、川
ヲ隔テ壘ヲ築キ防守ス、四月上旬木原山近所ニ於テ始戦
ス、利非スシテ又旧壘ヲ守ル、時ニ川尻口敗走ノ報アリ
テ木山ニ転ス、夫レヨリ御船へ進軍ノ処敵兵相見え、
依テ当所へ台場等ヲ築カントスル半、敵襲来ニ付各隊左
右へ散兵シ進撃ス、戦一瞬間ニシテ大勝利ヲ得タリ、又
日ナラスシテ敵四方ヨリ大挙シ来リ攻ム、激戦四時間余
ニシテ遂ニ防ク能ハス、我軍死傷其他揚ニ暇アラスシテ
金内迄曳揚リ、夫レヨリ矢部ヲ経テ日州江代へ転陣ス、

五月上旬頃鹿兒島へ敵兵進入ノ報アリ、依テ進軍帰県ス、前二隊々編製ノ令アリテ我隊行進八番トナル、帰県直チニ吉野方面雀ヶ宮ヲ守ル、此ニ於テ戦ヒ三四度、互ニ勝敗アリ、然ル処或日敵又襲来、防禦手ヲ尽シテ戦フト雖トモ衆寡止ヲエス遂ニ大敗ヲ取り、帖佐へ敗走ス、夫レヨリ各所ノ戦ヒ連敗、遂ニ延岡ノ内永井村迄退軍ス、時ニ当所ニ於テ散兵ヲ相纏メ鹿兒島迄一方ヲ打破リ突出スノ令アリ、月日并ニ地名等詳カナラス、敵兵守場へ未明ヨリ進軍、直チニ打破リ彈藥其他分捕若干、夫レヨリ山谷ヲ越シ三田井へ出、小林ノ屯所ヲ突キ頗ル勝利ニテ九月一日夜再ヒ鹿兒島へ進入、城山大手口ヲ守リ防戦ス、同月二十五日未明敵四方ヨリ攻撃、防ク能ハスシテ遂ニ大敗、依テ同日帰順仕候事、

右、戦地景況取覚ノ概略如斯上申仕候也、

明治十一年三月

鹿兒島県

豊山利智

一〇九 宮原良助上申書

戦地之景情

明治十年二月陸軍大将西郷隆盛等中原以下ノ儀ニ付政府

へ尋問ノ筋有之、近日上京、旧兵隊随行動ニヨリ余ハ先鋒第二ノ一番小隊エ編入サレタリ此時押伍、申付ラル、同十四日出発、廿日熊本県川尻駅ニ到着セシ処、熊本城ニ於テハ市街ヲ焼払ヒ防戦ノ用意ヲ為タルニヨリ、我隊ヨリモ各所ニ番兵ヲ配布セシニ、豈図ンヤ斥候隊奇来リテ九番小隊ニ発砲シタルニ付直チニ駈込、台兵伍長ヲ生捕、此由ヲ川尻駅ニ報知シタルニヨリ、速ニ本営ヨリ戦争ヲ為サシメタリ、其翌廿一日滞陣、廿二日午前第三時川尻ヲ出発ス、城下ノ高麗門跡ヨリ進軍、攻撃ニ及候得共城壘堅固ニシテ城不陥、故引退、高麗門跡へ番兵ス、其翌廿三日午前八時庁下へ進入、攻撃スレトモ勝敗不分、仍テ高麗門跡迄引揚、戍兵スル句余ニシテ三月九日段山へ進入堅守ス、同十一日午後二時官軍進撃、交戦スル二日ニシテ互ヒ二勝敗アリ、翌十二日午後三時比味方無利、終ニ敗走ス、島崎村ニ於テ兵ヲ集メテ茲ニ番兵ス、同十五日日奈久沖へ候艦出沒スルノ報知アリ、同日熊本出發、翌日日奈久へ着陣、則ヨリ海岸防禦ノ為メ守兵両三日ヲ経候処、豈図ン軍艦七艘夜中着港、未明ニ山手ノ嶮ニ伏居候処、八代江毛官兵上陸ノ報知アリ、夫故間道ヨリ下川内村ヲ経小川へ出テ宮ノ原官軍ニ当ル、未夕勝敗不分内、足痛ニ

テ川尻へ入院ス、旬余ヲ経テ松橋ノ戦最中帰隊シ、暫ク
交戦ニテ未タ勝敗不分ト雖トモ彈藥尽キテ退軍ス、四月

一日宇土ノ官兵ニ進撃スレトモ利アラスシテ川尻川迄引
退、川上高田へ台場ヲ築キ戍兵ス、同六日又々宇土ノ官

軍ニ進撃、勝敗不分、故本ノ高田台場へ引揚、同九日犬塚力
家ニアル味方敗軍ニ付中之瀬迄引揚、台ヲ構へ堅ク相守

リ、同十二日川尻惣敗軍ニテ木山へ退ク、翌日大津ノ味
方ニ声援トシテ出張、諸所ノ戦利アラスシテ廿一日矢部

へ引揚、奇兵廿一番小隊トナル、夫レヨリ馬見原ヲ過キ
人吉ノ湯山へ廿七日出ル、五月九日日向表富高新町へ出

発ス、同十四日延岡へ着陣、方財村へ出張、交番スル旬
余ニシテ同廿七日三田井口大楠村へ繰出ス、此時監軍ノ達ニ付分隊長代理トナリ、

六月廿一日延岡へ引取、廿四日未明豊後口赤松嶺切伐
込谷ヨリ陣ケ塚迄進撃、大勝利ニテ数ヶ所ノ台場ヲ乗取、

夕方ニ兵ヲ集メ鑑迄退陣、壘ヲ構へ柵ヲ引、戍兵迭ヒニ
相持ス、故ニ味方ヨリ進軍イタセトモ勝敗不分、七月三

日官兵台場ヲ引去ルヲ以テ追躡シテ戍兵ス、同廿四日
又々伐込谷ヨリ陣ケ塚迄進軍、終日劇戦、勝敗ナキ故旧

台へ退キ番兵台スル事三十有余日ニシテ八月十四日ノ夜
長井カ延岡口へ進軍、無利シテ永江村へ退、同十八日帰順ス、

明治十一年三月
鹿兒島縣第六大区
大隅国噌歌郡国分郷
宮原良助

一一〇 岩城十郎上申書

戦記

一明治十年第一大隊五番小隊江編入セラレ、二月十五日

鹿兒島県ヲ発程シ、同廿一日熊本県川尻江着キ、翌廿

二日未明ヨリ同所營所江攻撃ノ処、即日銃創ヲ受、川

尻病院江被相送、数日療治致シ平癒ノ後又々第五番大

隊六番小隊ニ編入シ、同所松葉・小川・川尻ニテ相戦、

味方敗走、後同所木山江引揚ル、

一四月十七日比木山ヨリ御船へ繰込ミ、同日午後四時過

キ同所後へ敵兵不意ヲ襲来候故、暫時相戦ヒ、程ナク

敵敗走シ、殊ニ日暮ニテ我隊ハ御船ニ引揚ケ一泊ス、

但、此戦分捕品モ許多有之、

一同廿日比同所江滞陣ノ処、翌未明ヨリ敵進軍ノ処、我

軍敗走シ同所矢部ニ繰引ス、

一右戦ノ砌リ再ヒ手傷ヲ受、日向ノ国延岡病院江被差廻、

夫ヨリ鹿兒島江同断療治、平癒ノ後子振武八番中隊江

加入シ、鹿兒島上伊敷邑江出張シ、其後武村敗軍、後

大隅ノ国帖佐郷江転陣、同所ニテモ一戦シ、其外処々ニ於テ抗戦シ、福山街道ヨリ恒吉郷ニ屯シ居、是ヨリ百引郷ノ敵軍ヲ襲敗リ大勝利ニテ恒吉郷江凱陣ス、

但、此戦ニ大砲二門并彈藥相添、小銃六七拾挺余并彈藥十萬発位、其外雜品多有之、

一其後末吉郷江繰込、同所通り山ニ於テ戦争ノ最中諸方ノ味方敗レ候故、我軍モ都ノ城江繰引シ、夫ヨリ宮崎辺迄防禦致シ、其後美々津ニ於テ敵軍ニ被取囲、降伏仕候、

右、戦地ノ場所ハ取り覚候得共日限等ハ全ク失念仕候ニ付此段申上候、以上、

明治十一年二月

鹿兒島県下第三大区三小区
百三番地ノ内平民
岩城十郎

一一一 隈元一上申書

明治十年六月二日振武十八番隊ニ編入シ、鹿兒島県下武村ニ守兵シ防禦ス、同廿四日奮戦スト雖トモ終ニ敗走シ、午後六時比水上坂ノ上ニ引キ退ク、翌廿五日川上村ニ引揚ケ、同廿六日帖佐ニ向ヒ、同廿八日蒲生ニ返シ、翌廿九日吉田郷ノ内涼松ノ辺リニ繰出シ守兵ス、同三十日朝

天敵兵襲ヒ来リ、防戦スト雖トモ敗軍トナリ、蒲生ニ走リ始羅^(始良郡)山田ニ引退ク、翌七月一日加治木郷ノ内葛蒲谷^(葛蒲谷)村ニ守兵スルコト両日、同三日朝小山田村ニ移リ滞陣ス、七月七日該地ヲ発シ、福山ヲ過キ末吉郷ニ到着ス、此地

ニ守戦スルコト十余日ニシテ七月二十日上庄内ニ向ヒ、翌廿一日庄内ノ山田村ヲ守ル、同廿二日払暁ニ同所ヲ発シテ高崎ノ味方ニ応援ス、本日ノ戦ヒ敗兵トナリ、再ヒ

山田ニ退ク、翌廿三日財部ノ通り山ニ向ヒ、廿四日敵軍惣進撃トナリ、味方敗軍シ隊伍乱タレ散走スルノ時、左股ニ銃丸ヲ負ヒ、山之口郷ニ至リ敵兵ニ取囲マレ、間道ヲ忍ヒ鹿兒島ニ帰り、創口漸ク癒ヘ再ヒ武村ノ戦ヒニ出ルト雖トモ終ニ大敗トナリ軍門ニ降ル、

明治十一年二月

鹿兒島県
隈元一

一一二 相良研一上申書

戦記

客年二月十五日西郷隆盛外両名等政府江尋問ノ為メ上京スルニ随ヒ、第四番大隊三番小队ニ押伍ニテ加入シ、同日鹿兒島県下ヲ発程シ、加治木ヨリ牛山郷ニ通行シ熊本

梟二出張リ、植木街道ヨリ山鹿辺ニ屢官軍ヲ擊敗リ、二十余日滯陣ス、然ルニ田原坂ノ味方敗報アリ、即チ我隊(味取カ)応援ニミドリ邑ニ繰リ出シ、翌日鳥ノ栖邑ヨリ大鳥邑辺(大鳥屋カ)ニテ度々激戦シ、二十余日相持シ、爰ニテ小隊長代理被申付、三日ヲ過キルニ病氣相煩ヒ、鹿兒島ニ被相送保養スル処、已ニ我軍總テ敗レ候故、八月廿五日帰順仕候、右、戦地景況取覚之概略如斯上申仕候、

明治十一年三月

鹿兒島県

相良研一

一一三 白尾國芳上申書

戦地景況之概略

維時明治十年二月十五日陸軍大将西郷隆盛等政府へ諮問ノ事件アリテ上京、出発ニ付随行ヲ乞ヒ、第一大隊四番小隊ニ編入セラレ、坂本清緝隊長タリ、街道西目ヨリス、同二十一日熊本川尻駅ニ到着、同二十二日早天熊本城下ニ到リ段山口ヨリ攻撃ス、該夜春日村ニ引揚一泊ス、同二十五日薄暮高瀬へ進軍ノ報ヲ聞キ、我隊其他四小隊ヲ繰出ス、村田新八是ニ惣帥タリ、同二十六日西郷小平及淺江誠成隊ハ浜手ニ向テ進軍シ、我隊及ヒ二隊ハ中間ニ

向テ進軍ス、我隊ハ八時頃安樂寺村ニ抵リ川ヲ隔テ砲戦ス、戦頗ル激烈ナリ、官兵川ヲ渡リ岸ニ達セントス、此時我隊ヲ二ツトナシ、半隊ハ堤下ニ伏シ、半隊ハ横撃ヲ拒ク、隊長坂本清緝銃丸額ヲ洞シテ斃ル、彈藥モ既ニ竭ントスルトキ、桐野利秋一番大隊六番小隊相良吉之助隊ヲ惣帥シテ来リ援フ、瞬間官兵ヲ走ラセ川堤ヲ恢復セリ、此日終日戦争、夜半ニ至リ我隊半ハ伊倉ニ向ヒ、半ハ植木ニ退ク、同二十七日木ノ葉ニ向テ発シ、稻佐村本道ノ右翼ヲ防守スル凡三日間許、猶転シテ木留ニ抵リ、伊倉ノ半隊ト合シ該地ニ止ル、此時土橋七之丞隊長トナル、三月三日官軍大挙シテ吉次ヲ攻撃ス、淺江誠成隊之ヲ防ク、官兵精銳ナルヲ以テ屢急ヲ告ク、此ニ於テ我隊立岩小屋ヲ応援シ、直チニ左翼ヨリ進ミ勇闘奮戦、故ヲ以テ官軍辟易敗レ走ル、我隊尾撃スル四五町坂下ニ至ル、此時官兵急ニ我背後ヲ絶ツ、之ニ依リ退テ峠ヲ守ル、官軍追躡来リ、戦夜ニ及テ止マス、此時土橋挺身奮戦、遂ニ丸ニ中テ斃ル、翌四日四小隊熊本ヨリ来援フ、我軍勢ヲ得テ戦フ、各隊ヲ二ツニ分チ、本道左翼ヨリ進入シ、我隊本道ノ右翼ヨリ進入シ、官兵ノ鬯ニ乘シ抜刀挺前一斉ニ突入セシガ、官軍披靡シテ敗走ス、我軍追撃スルコト

七八丁計リ、此ノ戦ヒ官軍ノ死尸夥シク道頭満ツ、後我隊ハ吉次峠ノ本道ヨリ右翼ヲ防守セリ、同十日頃諸軍進撃シ、我隊ハ西安寺村ニ向テ進撃シ壘三四ヲ得タリ、砲声日咎ヲ移スト雖トモ那知山ノ我軍来リ会セザルヲ以テ嘯時遂ニ軍ヲ班ス、同廿三日比官軍吉次ヲ攻撃ス、我軍撃テ之ヲ走ラセ追躡三丁計リ、四月一日黎明官兵来リ吉次峠ニ迫ル、此時右翼守ヲ失シ惣軍兵線ヲ退クルコト十町計リ、我隊山ノ口村ヲ守レリ、四月十日頃官軍山ノ口ヲ来リ撃、我軍拒テ之ヲ退ク、同十五日川尻口敗レ官兵城中ニ連環スル報ヲ聞キ、西山ノ諸軍退テ木山ニ到ル、同十七日官兵飯田山ニアリト聞キ、味爽五中隊木山ヲ発シテ向ヒ撃ツ、到レハ則官兵既ニ該所ヲ退テ御船ニ走ルト聞ヤ、直チニ之ニ向フ、御船ノ官兵モ亦在ラス、此ニ於テ各隊長地形ヲ巡見シ我隊ヲ以テ熊本街道ヲ守ラシム、既ニシテ官軍来リ撃ツ、我軍掩テ之ヲ撃チ、遂ニ大ニ之ヲ走ラス、此日三等巡查有田某ヲ獲タリ、同十八日御船ヲ発シテ木山ニ抵ル、同二十日永嶺ニ向テ発シ五嶺ニ陣ス、正午ノ頃我軍利アラスシテ援ヲ乞フ、我隊直チニ進シテ戦ヲ交エ、此時官軍既ニ潰走シ、一番大隊一番小隊呼譟シテ之ヲ尾撃セリ、我隊ハ官兵ノ左翼ヲ衝カントス

ルニ、官兵先ニ伏ヲ設ケ百銃斉シク発ス、此時距離僅ニ二十間計リ、我隊短兵急ニ接シ呐喊奮戦、官軍大ニ乱レ走ル、追撃シテ旧壘悉ク恢復シ許多ノ針銃・彈藥ヲ得、死尸道路ニ狼藉タリ、此日左ノ肩ヲ傷キ、退テ都ノ城病院ニ入テ之ヲ療セリ、五月下旬ニ至リ日当山ノ温泉ニ浴シ、二週間ニシテ宅ニ帰ル、既ニシテ鹿兒島敗レ、我軍去ルニ及ンテ官軍負傷ヲ搜索スル甚タ刻ナルト聞キ、土人ノ装ヲナシ窃ニ郷里ヲ出テ、吉田ノ間道ヲ徑テ帖佐ニ出テ踊本營ニ帰隊ヲ告ク、既ニシテ国分ノ敗聞ニ依リ退テ大久保ヲ保守ス、六月上旬頃官軍大久保ニ来リ撃ツ、此時邊見及各隊長出テ、地形ヲ巡見セシガ、忽チ官軍来リ撃、本道ノ危ヲ聞キ急遽馳帰リ、斥候隊ヲ率ヒテ本道ニ向ヒ、自ラ衆ニ先テ奮戦シ、之ヲ走ラシムルコト三丁許リニシテ勝敗未タ決セス、其夜壘ヲ築テ防守ノ計ヲナス、居ルコト三日許リ、我軍進シテ之ヲ撃ツ、官兵退キ敗ル、右翼急追シテ彈藥二万余発ヲ得タリ、將ニ踊ニ達セントスルトキ、誤報ニ依テ退クコト二三丁、官軍追躡急ナリ、我軍止リ戦ントス、此時偶々本道敗走スルヲ以テ荒襲ノ茶屋ヲ退守ス、翌日退テ高野ヲ保守ス、此時干城七番中隊ニ編入セラル、六月十四日頃我軍進テ官軍ヲ

撃ち、一時之ヲ破ルト雖トモ彈藥空竭、遂ニ敗衄ヲトレリ、我隊ハ援隊トシテ右翼ノ山手ヨリ向ヒシガ、遂ニ達セス、退テ壘ヲ守ル、同中甸壘線斗出スルヲ以テ退テ庄内ニ抛ル、居ルコト二三日、官兵岩川地方ニ進入スルト聞テ、凡三中隊余末吉ニ向フ、我隊ハ左翼ヨリ進ミ終日戰爭、勝敗決セス、廿四日昧爽官軍大挙シテ攻撃ス、我軍彈藥已ニ空乏、換ルニ銅・錫ヲ以テス、軍氣振ハス、遂ニ大ニ敗走シ部伍散乱退テ板屋越ヲ保ツ、翌日官兵來リ撃ツ、我軍彈藥全ク竭キタルヲ以テ破レ退テ舟引ノ本道ヲ守ル、翌日官軍來リ攻ム、我隊死ヲ以テ之ヲ拒キ、彈丸乏シキヲ以テ敢テ銃ヲ發セス、各刀ヲ拔キ壘ニ伏テ待ツ、時ニ右翼守ヲ捨テ敗走スルヲ以テ遂ニ總軍引テ宮崎川ヲ隔テ、守ル、此ニ於テ正義・干城等ノ諸隊ヲ悉ク雷撃ト改稱ス、我隊ヲ雷撃六番中隊ト改ム、此時軍艦岸ニ向テ來ルコトヲ本營ニ報ス、邊見等我隊及ヒ雷撃一番各半隊宛大砲二門ヲ率テ海岸ニ出テ砲撃ス、我隊及ヒ一番等ハ伏セテ近ヲ待ツ、既ニシテ旧壘ニ歸リ、七月三十一日頃上流ノ軍破ル、退テ廣瀬ニ止マリ浜辺ヲ防守ス、八月一日頃官軍來撃、我軍激戰、既ニシテ隣壘敗レ走ル、我隊奮激、猶止リ戰フト雖トモ諸隊既ニ走り、全ク孤軍

トナルヲ以テ佐土原ニ退キ、川ヲ隔テ、防守ス、居ルコト幾モナク上流ノ守兵潰走シ、本道既ニ梗塞シテ退クコトヲ得ス、道ヲ海岸ニトリ美々津川ヲ越ヘ本道ノ左翼ヲ守ル、八月九日頃山陰敗レ官軍既ニ富高新町ニ出テ全ク我後ヘヲ絶ト聞キ、辺見各隊ノ士官四十余人ヲ率ヒ早天ヨリ向ヒ進ミ、直チニ蹴破リテ過ントス、時ニ本道既ニ橋ヲ斷チ行クコトヲ得ス、土人ヲシテ嚮導トナシ、小川ヲ渡ル時、官軍大砲二門及彈丸ヲ運輸シ來リ、我軍ノ到ルヲ見テ忽チ之ヲ委棄シ四方ニ奔竄ス、我軍大砲・彈藥ヲ得、直ニ延岡尾張野ニ達シ、遂ニ門川ニ抵リ軍ヲ合シ尾末ヲ守ル、八月十二日官軍大挙シ來リ撃ツ、我軍拒キ戰フ、午時ニ至リ我軍將ニ敗レントス、予奔走シテ隊ヲ指揮ス、此時砲丸前ニ破烈シ、遂ニ右足ヲ傷キ、退テ延岡病院ニ抵ル、予ハ大患ナルヲ以テ永井村ニ送致セラレ、(長井村)爾後病院ニ在ルヲ以テ西郷等重圍ヲ脱スルノ事件全ク知ラサルニ、黎明喇叭枕頭ニ響キ、郷夢頓ニ覺メ驚テ之ヲ見レバ、官兵銃劍ヲ擬シテ日、降ルヤ否ヤト、予奮激刀ヲ把テ起ントスレトモ重傷ヲ如何セン、嗚呼遂ニ凶器ヲ出シテ降ヲ乞フ、實ニ明治十年八月十九日也、

明治十一年三月

白尾國芳

一一四 赤塚真志上申書

戰地景況之概略

明治十年二月上旬西郷隆盛等上京ノ事アリ、旧兵隊七大隊之二隨行ス、真志ハ一番大隊ニ番川上要市隊兵士トナル、同十五日鹿兒島出發、西日本街道ヲ經テ同二十一日熊本県下川尻駅へ到着ス、翌二十二日黎明川上隊同所繰出シ、熊本城外段山ノ正面ニ攻撃シ戰鬪甚烈シ、隊長川上要一深手ヲ負ヒ其他負傷若干アリ、翌二十三日出町口ヲ守ル、時ニ半隊長加世田彌八郎令ヲナシ兵三十余名ヲ分テ城ノ後面へ出、敵ノ不意ヲ襲ヒ數十発ヲ放ツト雖トモ利非スシテ出町口へ退キ、台場ヲ築キ防禦之備ヲナス、廿六日午後六時頃ヨリ高瀬進撃、我隊モ出張ス、此時新納静一郎我隊ノ小隊長トナル、翌二十七日午前六時ヨリ本道ニ進行スルニ、敵兵川面大橋ニ番兵ヲナシタレハ斥候先ヨリ砲発シテ各隊モ続テ進軍ス、我ニ番ハ橋本へ攻撃ル、此時篠原國幹・村田新八進テ指揮ヲナス、午後一時頃半隊長加世田彌八郎右半隊ヲ引テ川下ヲ渡舟シ、敵

軍ノ側面ニ出テ横ヲ突ト雖トモ左迄ノ功ナク篠原退軍ノ令ヲ伝フ、午後五時頃橋本へ引揚ク、時ニ我隊戦死二名ナリ、夜ニ入又伊倉迄引揚、翌二十八日未明同所ヲ発シ、川下へ飯ニ守兵ヲナス令アリ、田原坂ニ退キ守ル、三月三日官軍來テ吉次峠ヲ攻ム、我隊外ニ一小隊応援トシテ出張ス、翌四日未明ヨリ本道ノ左翼山手へ掛リ戰鬪甚烈シ、味方抜刀接戰、官軍敗走ス、敵ノ死骸六十餘、味方篠原國幹并ニ我隊戦死・手負三十餘名ニ及ヒ、各隊死傷若干、暮ニ及ンテ木留へ引揚ク、爾后原倉へ滯陣凡三十餘日、其間田原へ応援トシテ小隊或ハ半隊出張、屢攻戰ス、一日ハ接戰官軍ヲ破リ勝利ヲ得、敵兵三十餘名ヲ打取、我隊ノ分捕銃器・彈藥若干、又數日ヲ經押分山へ出テ応援ヲナス、我軍利アラス、半隊長加世田彌八郎負傷ス、其外戦死・手負許多ナリ、乃退テ原倉ヲ守ル、三月十三日頃大隊編制アリ、我隊ハ新納静一郎中隊長タリ、長谷場清藏左小隊長タリ、官軍又我カ台場ニ迫ル事數回、我隊防戦每ネニ之ヲ退ク、四月五六日頃官軍原倉ヨリ吉次峠諸所へ大挙來リ攻、此トキ我隊戦ヒ遂ニ敗走、三ノ嶽マテ引揚ケ守禦ヲナス、四月十五六日頃各隊惣引揚ノ令アリ、午後一時頃守ヲ撤テ間道ヲ經テ退ク、官軍追撃、

我隊且戦ヒ且退キ木山ニ達ス、翌貳拾七日長峯ニ出張、台場ヲ築キ防禦ヲナス、同三十一日官軍各所へ進撃ヲナス、我隊ハ長峯本道右翼ニ出テ防戦數刻ニ及ヒ味方敗レテ走ル、左小隊長長谷場清藏・半隊長染川喜納深手ヲ負フ、時ニ応援ノ味方統テ返撃憤闘、抜刀接戦、官軍敗走ス、味方追撃スルコト凡數町、敵ノ死体三十余、銃器十二三挺ヲ得タリ、同夜引揚ノ報知ニ依リ我隊右翼ヨリ順番ヲ以テ繰打ニテ木山ノ如クニ引キ退ク、翌月同所上ノ原へ我隊外二三中隊見張ヲ出シ守衛ス、午後十時頃官軍来リ襲フ、暫ク防戦ツテ味方又敗走ス、官軍尾撃スル一里余、我隊ハ川原坂ノ上ニ集合シ兵士ヲ數フルニ戦死許多ナリ、翌日矢部ニ退軍、即刻一里位山手ニ応援トシテ出張ス、此時各中隊變製アリテ我隊ハ行進ニ番中隊左小隊トナル、新納静一郎中隊長タリ、三日ヲ経テ矢部ヲ引揚、同二十五日尾前へ一泊ス、翌日江代へ到着、時ニ鹿兒島へ官軍侵入ノ報アリ、我隊鹿兒島ニ発向セントテ五月一日同所ヲ発シ、人吉・真幸吉田・溝辺・竹山ヲ経同五日鹿兒島川上村へ到着、番兵ヲナス、時ニ大口方面味方敗色ノ報知有、斥候トシテ真志ノ外一名大口へ赴キ、雷撃本營邊見氏ニ面会、邊見云ク、明日ハ山野へ進撃ヲ

ナスニヨリ、各中隊ハ釐人家へ集陣セリト、翌八日未明砲隊及小銃ニ中隊本道ヨリ進ミ、和銃隊各中隊ハ左右間道ヨリ進軍、辺見十郎太馬上ニテ進テ指揮ヲナシ勵シク戦ヒケルカ、午前十時頃敵兵敗レテ走ル、我軍其勢ヒニ乘シ大口小川内迄追撃、味方大勝利ナリ、夫ヨリ邊見へ暇ヲ乞テ鹿兒島へ引返ス、同九日午後六時頃吉野へ着、右ノ景況本營へ報ス、我隊ハ雀ヶ宮へ防禦ス、時ニ四五日ヲ経雷撃本營ノ命ニヨリ隊ヲ辭シテ五月十五日頃大口小川内へ到着ス、即日釘野（久本野也）ノ本營へ至リシカ、敵軍来リ戦、邊見又自ラ出テ指揮ヲナス、日暮レ兩軍交モ退營ス、時ニ邊見大ニ激シテ云ク、今日人吉口本營邊氏ノ來書アリ、蒲生郷ヨリ後出ノ隊赤塚源太郎ヲ始メ九十余名脱走シテ敵軍ニ降リタル由ヲ報ス、子直チニ帰り源太郎始潜ニ逃レ帰りナバ捕ヘテ差出スベシト、翌十六日未明同所ヲ発シ、同十七日蒲生へ着ス、右ノ趣ヲ諸所出張ノ本營へ報シ、滞在三十余日、六月二十九日頃蒲生・帖佐へ官軍進入、味方ノ防キ戦フト雖トモ支ル能ハス、兵ヲ山田へ引揚ク、夫ヨリ真志ハ踊郷へ趣ク、雷撃本營へ敗走ノ由ヲ報ス、同四日雷撃十三番中隊右小隊長ニ挙ラル、中隊長ハ山口武二ナリ、同六日ノ夜潜ニ同所ヲ発シ大久

保二至ル、翌七日未明官軍倉卒ニ襲来ル、我隊直チニ之ニ馳セ敵ノ正面ヨリ進ミ激戦ス、日暮ルニ及ンテ敵軍敗走、味方追撃ス、翌朝亦官軍大挙襲来リ、防戦數刻ニ及ヒタルニ、左ノ山手ヨリ撃破セラレ味方ノ軍利アラス、高野ニ退キ本道ノ右面ニ台場ヲ築キ守禦ヲナス、本月十五日同所ヨリ財部赤坂ニ進撃、我隊ハ左翼ノ先鋒トナリ、其他四五中隊ハ間道ヲ忍ンテ敵ノ側面ニ向ヒ、時ヲ待チ全軍齊シク進ンテ大ニ之ヲ破ル、間モナク亦敵ヨリ逐返サレ勝敗決セザルニ日暮ル、ニ会フ、乃高野ニ帰陣ス、此日我半隊長中島源八戦死、同十七日荒襲山進撃ノ議決ス、我隊又左翼ノ先鋒トナリ、其他四五中隊ハ間道ヨリ進ンテ敵ノ側面ニ出ツ、攻撃激戦ス、然ルニ彈藥ノ乏シキヲ以テ攻落ス能ハス、日ノ暮ル、ニ及ンテ高野ニ帰陣、中隊長山口武二・監軍大河平源介手負セリ、同十九日ノ夜間空シク此地ヲ引揚テ上庄内ニ至ル、未明全軍本營ノ門外ニ整列シ守場ヲ定ム、我隊モ亦築壘シテ之ヲ守ル、七月廿四日官軍未明ニ襲来リ、喇叭ノ声響クヤ否ヤ、敵兵直チニ砲発ス、我隊ハ正義一番中隊守リ敗レテ麓町門迄退去スルノ報ヲ得テ、直ニ馳セ向ヒ応援防禦セシカ、我軍遂ニ敗レ退クコト一里余ニシテ返戦シ、抜刀接戦、

敵兵追ヒ退クルコト四五町余、時ニ財部街道撃敗セラレ味方ノ後ヲ断ントスルニ依リ真志等モ其勢ヒニ乗シ進ム所ニ、遂ニ銃創ヲ蒙リ、都ノ城ヲ経テ山之口ニ至ル、是ヨリ戦地ノ情実不詳、諸病院へ転移、高鍋ヲ経延岡ノ内祝子村ニ於テ降伏ス、

明治十一年三月

鹿児島県管下蒲生郷
赤塚真志

一一五 春成亀太郎上申書

肥後・豊後・日向出先戦地ノ景況

明治十年二月西郷隆盛ニ隨行、式番大隊四番小隊ニ編入セラレ、小隊長佐藤三三ニ屬シ、同月十五日外兵隊ト一同ニ鹿兒島ヲ出發ス、同廿一日肥後川尻ノ駅ニ至リ官軍斥候隊ト戦フ、官兵退テ城ニ入、翌廿二日黎明ヨリ遂ニ熊本ノ城ヲ囲ミ攻戦、勝敗不決、數日ヲ過キ同所引揚ケ同県ニ重峠ヲ守ル、然ルニ三月十六日朝八時比官軍凡五百名余襲撃、味方僅百八十名ヲ以奮戦追撃、大勝利ヲ得復本ノ台場ヲ守ル、其後大津ノ戦勝敗未タ決セサルニ、御船ノ戦味方利アラサルヲ以遂ニ矢部ニ引揚ケ、又統テ人吉ニ退ク、此ニ於テ我四番小隊改メテ奇兵三番中隊ト

為シ、他隊ト共ニ豊後口ニ派遣セラレ、直チニ武田ニ突

私儀

入、同所ニ台場ヲ築キ堅守ス、五月中旬官軍千五百名余
ニテ進撃、相戦フコトニ週間ニシテ勝敗不決、互ニ死傷
多シ、時ニ味方玉薬ノ乏キヲ以テ武田ヲ引揚ケ、奇兵五
中隊ヲ以急ニ臼杵旧治城ヲ襲、官軍凡七百名余ヲ以防戦、
纔二三時間計ニシテ遂ニ支ユル能ハスシテ大ニ敗走、生
捕凡四十名余、且海ニ溺レ弾ニ中リ死スルモノ寡カラス、
且ツ多ク銃器・彈藥等ヲ得タリ、是ヨリ臼杵ヲ守衛スル
一週間、官軍又反テ我營ヲ襲フ、兩軍奮戦ス、此時遂ニ
銃彈ニ中リ負傷シ、其勝敗顛末ヲ詳ニセス、因テ日向佐
土原病院ニ退キ療治ヲ加フ數旬、創稍愈ルニ及ヒ同國諸
縣郡都城守衛雷撃拾番隊工編入、則分隊長ト為ル、諸隊
ト準繩陳列都城方域守禦ノ処、七月廿四日官軍進襲、我
隊大ニ敗績ス、

右、戦地ノ概略上申仕候也、

鹿兒島県下第三拾八大区
巻小区出水郷除族平民

明治十一年寅三月

春成龜太郎

一一六 有馬孫兵衛上申書

始末並戦地形状可申上旨奉承知、左ニ上申仕候

明治十年五月中旬ニ至リ勇義本營山崎ヨリ我カ区内向田

江転陣トナリ、壯健人員取調ヘ名簿差出候様戸長江被達、

依之七拾余名取調ヘ差出候処、勇義七番小隊ノ給養ニ編

入セラレ、区内向田ニ宿營ス、阿久根郷ニ五月下旬番兵

之為無銃ニテ繰出シ、往復六日間ニ引揚之令有リ、又区

内向田ニ番兵トナリ、大小荷駄方奇カ被申付相断候処、押

而被達一時相動メ、六月廿一日水引郷江官軍繰込相成候

ニ付区内麓村ニ引揚ケ、同廿三日千代川ヲ官兵涉リ進撃

之報知アリ、人馬手配致シ、直ニ串木野並市來郷之内嶋

内村江引揚ケ、直ニ解隊トナリ、旧五月廿三日帰家仕候

処、無程官員粟谷氏外四名御順廻リ之節降伏、帰順書ニ

給養並大小荷駄付属ニテ申上候処、自宅謹慎被仰付置、

水引警視署ニ於テ旧八月廿八日御放免被仰付、県庁水引

出張所官員服部殿ヨリ平山愛藏江モ銃器其他探偵致シ差

出候様御達ニ付、右平山同伴致シ区内青木仲兵衛方ヘ差

越尋問致候処、梵鐘二口有之成行御届ケ之上水引警視署

ヘ差出候、尤大小荷駄方等品物有之候ハ、探偵可致旨御

沙汰ニ付、区内江銅錢七俵並白砲四挺ハ糞キ二戸長所江

取纏メ御届申上候、然共市來郷之内嶋内村ヘ銅錢並米數

拾儀其他鉛・唐金預ケ品等有之段申上候処、服部氏ヨリ直ニ市來迄探偵方ニ可差越旨御達シニ付、市來戸長方へハ勿論諸所聞合候処、官軍四旅団江御曳揚ケ之段承リ、右成行御届ケ申上、尤其前ヨリ軍務御繁劇之時分人馬手当及千代川渡シ差引等致シ、所ニ於テ帰順後副戸長代理等相動候様戸長ヨリ承リ、区内事務ハ勿論再鹿兒島御進入之砌ハ日夜之御通行ニ付戸長所江昼夜詰切、人馬手当及大川渡場不都合無之様尽力仕候、然処臈庁水引出張所ニ於テ副戸長心得被仰付、数日戸長所毎勤、高調へ丑ノ秋田畑干損・水損、無仕付地毛上見分被仰渡、内見ヨリ官員御検査迄相濟候央、旧十月五日水引警視署御用ニテ鹿兒島警視署江護送、大小荷駄付属御尋問ニ付成行申上候処、翌日同所裁判所ニテ拇印之上長崎へ護送、同所裁判所於テ二ケ年懲役奉蒙候、尤戦地二者不関、景況全ク不相分申、此段謹テ上申仕候也、

明治十一年三月

鹿兒島第二十八大区
二小区隈之城
有馬孫兵衛

一一七 小城宗一郎上申書

時二明治十年二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、上京

ノ際余第七ノ十番小隊へ編入セラレ、小隊長トナリ、同十五日発程、同廿日熊本県下川尻駅ニ着スルニ城下不穩、其夜第七ノ九番小隊ヲ以テ守兵ス、時二熊本台兵一中隊位リ襲リ来テ砲発ス、我兵馳セテ之ヲ捕ヘントス、銃器ヲ捨テ逃去リ、忝人ヲ縛シ銃器ヲ分捕ス、同廿二日未明発程、途ニ砲声ヲ聞キ馳テ之ニ応ス、同廿三日春日村ニ引揚ケ百貫石ニ転ス、爰ニ固守スル事十余日、又植木ニ至リ田原坂ヲ守リ、然ルニ或日官兵寄セ来リ、我隊一分隊ヲ以テ打テ之ヲ却ク、銃器・彈藥等ヲ分捕ス、爰ニ連戦スル事十五日、又木留ニ転ス、余熱病ニテ三間町ニ送ラル、而シテ我隊数々利有スシテ川久保ニ引揚ク、余爰ニ於テ帰隊ス、又矢部ニ引揚ケ此時編制アリ、奇兵一番小隊トナル、又人吉ニ転ス、已ニシテ鹿兒島県原良村ニ至リ守兵ス、或日官兵寄セ来リ、我隊激戦、官兵散々、数町ヲ追フ、余爰ニ足ヲ打タル、又翌日官兵我軍ノ武村ノ保堡ニ襲来ス、我応援ニ馳シ官兵頗ル烈戦、我隊一発毛放タス、從横ヨリ鬨声ヲ拳ケ切入ル、官兵狼狽四方ニ散走ス、此時余又胸下打タレ、伊敷病院ニ送致セラ
(長井カ)
ル、而シテ我軍敗レテ延岡長江村ニ退軍ス、余当地病院ニ於テ帰順ス、

明治十一年寅四月

鹿兒島県

小城宗一郎

一一八 中山右吉上申書

口上覚

私儀

明治十年旧正月二日戸長中原勇次郎ヨリ達ニ付出程、鹿兒島旧練兵場ニ至リ第四番大隊二番小隊兵卒ニ編入セラレ、同四日庁下発軻大口街道通行、熊本県下山鹿江着到、同町宿營ナリ、町口守兵ス、同十九日官軍ヨリ進撃トナリ激戦シテ勝敗無シ、其夜ニ至リ各隊引揚ケ町口番兵ス、当所敗軍木山ニ引揚大津ニ進撃トナリ、其時銃創ヲ負ヒ、馬見原病院ニ入院ス、無程鹿兒島県下ニ帰区仕候処、旧五月十一日横川本營ヨリ病院掛并医師順廻リ検査ノ上、戸長ヨリ市來郷出張ヲ達ス、無銃ニテ五月十二日番兵之為差越候処、隊名ハ勿論押伍兵士全ク不定内、同十四日中山甚五兵衛ヨリ分隊長被申付、兵士等モ不分内、翌十五日鹿兒島敗軍ノ報知ニ付直子ニ同所ヨリ帰区仕、官軍区内江御繰込ニ付旧五月中旬比兵士ノ処ヲ以降伏帰順仕候処、自宅謹慎被仰付置、九月三日御放免被仰付、然処

一時分隊長被申付、隊名モ不定事件二者候得共更ニ安堵難仕処ヨリ自訴仕候処、伊集院警視署ヨリ鹿兒島警視署へ護送、同所裁判所ニ於テ御調へ受ケ拇印之上長崎へ護送、同所裁判所ニ於テ一ケ年懲役御処刑奉蒙、此段始末並戦地景況謹テ上申仕候事、

明治十一年三月

鹿兒島県第二十二大区一小区

中山右吉

一一九 壹岐義保上申書

戦地景況之概略

明治十年四月西郷隆盛等ノ募リニ応シ同郷ノ土出軍ノ際、永野祐喜・穎川徳幸・余等三名肥後国球麻郡神瀬村迄差引命セラレ、同八日日向国諸縣郡飯野郷ヲ発足シ神瀬村ニ出張、破竹一番中隊長池田吉之助ノ隊ニ加入セラレ、右小隊長曾木仲之助・同半隊長福留尚五郎・同分隊長郡山誠治・左小隊長千田源次郎・同半隊長萩原兼雄、自分儀ハ左小隊分隊長ニ編入セラレ、五月八日初戦味方勝利、同九日官軍来リ撃、味方破ル、又返撃シテ直子ニ官兵ヲ追撃ス、同廿二日陣ヲ倉谷エ移ス、同廿三日第十二時頃官兵来リ襲フ、味方勝利ナリトイヘトモ余ハ爰ニテ手負

シ、直チ二人吉病院エ抵ル、五月廿九日養生方トシテ帰郷申付ラレ私宅へ潜伏シ、六月十七日官ノ軍門ニ降ル、

明治十一年三月
鹿兒島県飯野郷
壹岐義保

一一〇 杵尾萬藏上申書

戦記

明治十年四月三日大口本営ノ募リニ応シ同盟ノモノト我郷ヲ発シ大口本営ニ抵リ、夫ヨリ木山へ趣キ該所ニ兩日守兵、江代へ引揚、正義九番小隊ノ押伍ニ編入セラレ、七月三十日同所ニ於テ監軍里村萬二郎ヨリ分隊長ヲ命セラル、此地ノ戦ヒ味方不利ニシテ鹿兒島県下諸縣郡小林郷ニ引揚ク、我隊付木村^(櫻木方)ニ守ル、無程官軍進撃、我軍不利佐土原へ退軍、同所敗レテ美々津へ退キ、官軍進入ノ際福瀬村ニ於テ自首帰順ス、

明治十一年三月
鹿兒島県下八十五大区二小区
垂水郷
杵尾萬藏

一一一 有馬純尚上申書

戦記

客年西郷隆盛等政府江尋問之趣有之、上京致ニ付隨行シ、第四番大隊九番小隊ニ加入シ、同年二月十六日鹿兒島県出發、同廿二日熊本県下ニ於テ始戦、同日植木江攻撃大ニ勝利ヲ得、銃器・彈藥等ヲ奪フ、即夜大久保村江引揚、其ヨリ同廿五日比山鹿江向ツテ進軍ス、官兵更ニ不見、爰ニ於テ四方へ炮台ヲ築キ、三月十三日官兵數隊ヲ以テ進撃ス、我各隊又兵ヲ進メテ激戦ス、遂ニ銃創負ヒ、暫ク川尻へ止リ療養ヲ加フト雖トモ未創愈エザルヲ以テ帰県ス、同六月比帰順致シ、右戦地形状書相違無御座、此段上申仕候也、

明治十一年三月
有馬純尚

一一二 佐々木八郎次上申書

明治十年五月十三日出発、隈之城向田町へ到着、則勇義二番小隊兵卒ニ加入セラレ、此所ニ番兵スル事九日程、同分隊長トナリ、同廿三日給養二下等セラレ、夫ヨリ東郷横坐越へ曳揚ラレ番兵イタシ、六月十五日比阿久根田代邑之内切手越ト申ス所へ曳揚ニ相成リ、此二五日程番兵、同二十日又々東郷之内田海邑下ノ段へ曳揚ラレ一泊ス、翌二十一日未明官軍阿久根街道ヨリ襲来スル報知ア

リ、依而我隊モ隈之城ニ曳揚、官軍水引ヘ襲来リ、我隊ハ平佐皿山ノ下ヘ番兵スルニ依リ永利石神村ヘ至リ、爰ニ二泊ス、同廿三日向田戦争、味方敗軍ノ報知ニヨリ即同郷赤坂越迄引退キ、是ニ二泊ス、我隊モ分散イタシ空シク同月二十五日帰郷、宮ノ城警視署ニ於テ降伏仕候也、

十一年三月

鹿兒島県

佐々木八郎次

一三三 長崎武兵衛上申書

明治十年五月二日出発、山崎郷ヘ到着、則チ勇義隊二番小隊半隊長ヘ編入セラレ、爰ニ一七日宿陣ス、同八日隈之城向田町ニ赴キ是ニ又番兵ス、同十三日給養トナリ夫ヨリ東郷横坐越ヘ曳揚ラレ番兵イタシ、六月十五日比阿久根田代邑之内切手越ト申ス所ヘ曳揚ニ相成リ、此ニ五日程番兵、同二十日又々東郷ノ内田海村下ノ段ヘ曳揚ラレ一泊ス、翌二十一日未明官軍阿久根街道ヨリ襲来スル報知アリ、依テ我隊モ隈之城ニ曳揚、官軍水引ヘ襲来リ、我隊ハ平佐皿山ノ下ヘ番兵スルニ依リ永利石神村ヘ至リ、是ニ二泊ス、同廿三日向田戦争、味方敗軍ノ報知ニヨリ即同郷赤坂越迄引退キ、是ニ二泊ス、我隊モ分散イタシ

空シク同月二十五日帰郷、宮ノ城警視署ニ於テ降伏仕候也

十一年三月

鹿兒島県

長崎武兵衛

一三四 宇田善左衛門上申書

記

明治十年五月五日戸長ヨリ七十余名取調、無銃ノ者山崎出張本營ヘ列越届出候処、右人数ノ内ヨリ三官可申出旨相達、戸長ヨリ半隊長被申付、阿久根郷ヨリ久木野村辺ヘ番兵ス、然ルニ諸所ノ戦ヒ無銃隊故繰引ニ引揚ケ、太良郷ニ於テ雷撃七番中隊給養方被申付、当所ヘ守兵ノ処、敗軍ニテ横川ヨリ踊郷ニ曳揚ケ、爰ニ四五日間守兵ス、此地無故大久保ヘ引揚ケノ令有テ、直チニ大久保ニ至ル、戦無利ニシテ庄内ヘ敗走、此地戦スシテ末吉郷ニ転ス、夫レヨリ諸所難守シテ美々津ヘ退軍、時ニ当所ニ於テ敗軍ニ付帰家帰順仕候間、此段取覚ノ概略上申仕候也、

明治十一年三月

鹿兒島県

宇田善左衛門

一二五 大神祐太郎上申書

明治十年五月廿八日我郷里ヲ出発シ日州宮崎ニ赴ク、同所ニ於テ蟠龍四番小隊半隊長トナル、該地ノ守兵トナル四日間ニシテ富高新町エ向ケ出兵スヘキノ令アリ、六月上旬彼ノ地ヲ出発シテ細島方面ヲ固守スルコト三十余日、七月上旬延岡口ニ出兵スヘキノ令アリ、因テ彼ノ地ニ赴ク、同月中旬耳津村^(美々津カ)ニ到ル、此地ヲ守兵ノ日、敵ノ台場ヨリ炮発シ、互ニ炮戦ニ日間ニシテ更ニ勝敗決セス、夜ニ入りテ敵兵退クト雖地理悪クシテ追撃スルコト能ハス、持口ヲ守兵ス、八月十一日同所椎畑村エ繰出ヘキノ令アリ、直ニ該地エ赴キ守兵ス、翌十二日午前六時比敵俄ニ襲来、互ニ炮戦、稍勝敗決セサルノ間、午前十時比銃丸ヲ右耳ノ下タヨリ口中ニ貫キ進退自由ナラス、故ニ延岡仮病院江送ラレ療治ス、此時官軍同所エ進入ニ付止ルコト能ハス、永井村^(長井カ)エ転ス、是ニ於テ味方敗走シ我輩自由ヲ得サレハ如何トモスルコト能ハス、八月十七日軍門ニ降伏ス、

明治十一年三月

鹿兒島県第百五大区三小区

大神祐太郎

一二六 若松長治上申書

戦記

明治十年二月十五日第二大隊四番小隊ニテ鹿兒島県ヲ発程シ熊本県ニ入り、田之浦ニ着スルヤ、始テ營兵籠城シテ軍備ノ敵ナルヲ聞ク、我隊激烈各結束シテ暗号ヲ約シ戦鬪ノ用意ヲナシ行路甚タ急ナリ、同二十一日川尻駅ニ着シ、即時ニ市外へ番兵警邏ヲナス、夜十二時比隊長佐藤三三来リ、令ヲ伝テ日、官軍ノ斥候川尻へ進ミ、彼ヨリ既ニ戦端ヲ開クニ依リ明曉熊本城へ攻撃ノ議決セリ、我隊ハ城ノ背後ニ出テ攻撃スヘシトノ演舌ス、

同二十二日払曉ヨリ各大隊齊シク川尻ヲ発シ熊本ヲ差シテ進軍ス、城ニ近ツケハ則チ煙焰天ヲ漲リ、砲声地ヲ動カス、此ニ於テ隊長ノ令ヲ受ケ、花岡山ヨリ下テ八幡山ヲ襲フ、城兵頻リニ防戦シ齊シク大小銃ヲ発シ彈丸恰モ霰ノ如シ、此時我隊死傷スル者十五六名ニ及フ、又隊長ノ令ヲ受ケ、薄暮ニ到リ少シク退ヒテ守兵ス、后五六日ヲ経テ植木ノ敗報到リ、本営出軍ニ付我隊并外ニ小隊護衛シ、行クコト里余ニシテ又勝利ノ報アルニ会フ、途ニシテ俄カニ二本樹^(二本カ)ニ帰陣ス、即日護衛隊トナル、后三日ヲ経テ本営川尻へ出軍ニ付随行シ川尻ニ着シ、翌日二本

樹二掃陣ス、(三月カ)二月五日比豊後鶴崎街道ヨリ警視隊侵入ス

ル報アルヤ、我隊并鎌田雄一郎隊トヲ出シテ防拒セシム、
鎌田隊ハ黒川口へ進ミ、我隊ハ大津ヲ經過シ二重峠へ進
ム、新道・古道・小国道ノ罫ヲ築キ守衛ス、

(三月カ)二月十六日黎明ヨリ坂梨ノ官軍ヲ襲ハント佐藤鎌田ト約

シ発セントスレトモ、二重峠ハ要所ナレハ守兵迦スヘカ

ラス、因テ大津出張ノ山口十藏へ使ヲ遣シ、我隊明曉^坂板

梨^カへ進撃スルニ付貴隊ヲ以テ二重峠ヲ守衛スヘシト言送

ル、而シテ我右半隊ヲ小国街道ヨリ進マシメン為メ同夜

ハ旧罫ヲ守ラム、左半隊ハ本街道ヨリ進マシメン為メ峠

ヲ越シ車返ヘシヲ守リ各佐藤ノ令ヲ待ツ、既ニ山口隊ハ

山鹿口へ出軍シ其策成ラサルノ報来リ、衆各意ヲ失ヒ奮

激ス、時ニ官軍払曉ヨリ朝霧ニ乗シ潜力ニ我罫へ来リ攻

ム、我軍勇奮シテ頻ニ発射ス、此時半隊長川上周藏左右

小隊ノ休兵ヲ率ヒ横撃シテ敵ノ背後ニ出テ奮然交戦ス、

此勢ニ官軍辟易スルヤ、少シク遑巡スルノ色アリ、時ニ

車返ヘモ官軍進撃シ、味方少シク不利ニシテ旧罫ニ退テ

防戦セシニ、敵引退キタルニ依リ分隊ヲ分チ来援フニ会

フ、衆益ス勢ヲ得、共ニ進ンテ激戦ス、勝ニ乗シテ追撃

スルコト凡一里余、官軍伏屍七八ヲ見ル、小銃并指揮旗・

弾薬若干ヲ分捕ス、此戦ニ我軍死傷スル者纔ニ六名ナリ、

即夜黒川ノ戦ヒ味方敵ノ背後ニ出テ前後ヨリ攻撃ツニ、

敵死体ヲ捨テ散々ニ敗走ス、生虜六名・斬首二十名余ニ

テ大勝利ノ報知来ル、翌日小隊編製シ中隊トナシ、右小

隊・左小隊ト名称ス、

(四月カ)

三月上旬比小国街道ノ我哨兵先ニ豊前中津ノ土増田宗太

郎・後藤純平等兵六十三名ヲ率ヒ来リ、告ルニ、今般西

郷ノ義拳ヲ聞キ、傍觀スルニ忍ヒス、其兵ニ加入セシメ

ンコトヲ欲シテ来ルト、具ニ演舌ス、哨兵ノ押伍兩名ヲ

伴ヒ中之木屋本部ニ来リ、其状ヲ佐藤ニ告ク、佐藤其状

ヲ感シ速ニ其兵ヲ率ヒ来ラシメ、右小隊長川上周藏ヲシ

テ兩名ヲ熊本々宮へ誘ヒ至ル、其状ヲ告ケシム、西郷厚

ク兩名ニ饗応シ且ツ其兵ヲ勞ブ、而シテ中津隊我隊ノ付

属トナツテ暫ク大津へ滞陣ス、爰ニ黒川并ニ我罫へ対セ

シ官軍ニ豊ノ間ニ中津等ノ兵蜂起スルニ依リ、豊後武田^(竹田カ)

へ退シト謀者帰テ其状ヲ鎌田ニ告クルニ、則チ一中隊ヲ

板梨へ進マシメ諸道ニ罫ヲ築キ固ク守ルノ報書来ルニ、

我左小隊ヲシテ内ノ牧辺へ斥候且応援ノ為メ進マシムル

ニ、敵兵更ニ見ヘサレハ一日ヲ経テ帰陣ス、鎌田隊板梨

ニ滞陣セシニ、官軍四方ヨリ取巻キ攻来ルニ、鎌田ハ纔

二十五名ノ兵ヲ率ヒ山手ニ進ミ、小隊長児玉八二本道ヨリ進ミ、兵ヲ勵シ殊死シテ戦フ、鎌田ハ疾ク笹倉迄進ミ敵ノ本営ヲ攻敗リ、輜重ヲ奪ヒ火ヲ放チ退カントスルニ、官軍四方ニ充滿シ坂梨ノ諸塁悉ク奪ハレ、日野峠ヲ越ヘ漸ク黒川ノ旧塁ニ退ク、児玉ハ本道ノ官兵我軍ノ背後ニ出、前後ヨリ攻撃セラレ、狼狽シテ輜重ヲ捨テ、坊中ヲ經テ黒川ノ旧塁ニ退キシ報來ル、

(四月カ)

三月中旬比山鹿口ノ官軍既ニ大津ヘ侵入シ、我右小隊ヲ大津ヘ斥候スルニ、官軍ノ大挙シテ來攻ルニ出会ヒ、中津隊ト共ニ進テ攻戦フ、官軍不利ニシテ退ク、我軍尾撃シテ本営ノ輜重ヲ奪ヒ且彈藥ヲ奪フ、數十ニ及フ、此時小隊長川上周藏外ニ八名戦死セリ、翌日我右小隊ヲ二重峠ニ引ク、后両日ヲ經テ大津ヘ官軍大挙シテ來攻ム、二重峠ヨリ眼下ニ当リ戦鬪甚タ盛ナリ、爰ニ於テ各協議シ策ヲ設ケ左右小隊ヨリ二十名ヲ撰ヒ一小隊トナシ、大津駅右ノ山手ヨリ撤隊ヲ作り鯨波ヲナシテ一斉ニ突入ル、其勢ヒニ官兵三四丁退キ(應敵力)吠隴ヲ楯ニ取り防戦ス、我軍頻リニ攻撃スト雖トモ勝敗遂ニ決セス、日既ニ暮ルニ及ンテ兵ヲ二重峠ヘ引揚ク、此戦ニ半隊長池水壽藏外ニ四五名戦死セリ、即夜十二時比大津ノ本営ヨリ矢部ヘ引揚ク

ヘキ報知來リ、衆大ニ愕然タリ、各哨兵ヲ引纏メ黒川ヲ經テ矢部ヘ引揚ク、爰ニ於テ大津方面ノ隊ヲ改テ奇兵隊ト名称ス、我隊ヲ以テ四番中隊トス、后一日ヲ經テ椎葉山ヲ越ヘ人吉ニ着ス、味方ノ全軍悉ク此地ニ出会ス、爰ニ於テ奇兵隊ハ日州路ヲ差シ富高新町ヘ進入シ、四中隊ヲ以テ先鋒トナシ延岡ヲ經テ重岡ニ突入ル、警視隊我軍ノ不意ニ出ルヲ知ラサルヤ、只狼狽、器械・糧米ヲ捨テ逃走ス、斬首二三名アリ、又先鋒隊四中隊ノ内健康ナル者ヲ撰拔シ一中隊トナシ、豊後武田ヲ襲フ、官軍未我軍ノ來ルヲ諜知セサルヤ、軍備全カラス、只警視・巡查ノ而已ニシテ數フヘキノ勢ナク忽チ逃走ス、軍資金并糧米・雜品等ヲ奪フ、本隊ハ宇田枝ヲ經過シ翌日武田ニ着陣ス、此時五月中旬比ナリ、又一日ヲ經テ大分県庁ヲ襲ハント四中隊ノ内ヨリ壯士二十名ヲ撰拔シ一中隊トナシ、鎌田雄一郎之ヲ引率シ県庁ヲ襲ハントスルニ、官兵已ニ之ヲ覺リ險ニ抛リ防拒ノ敵ナルヲ諜知シ、俄ニ道ヲ転シテ鶴崎分署ノ巡查八名ヲ捕縛セント、更ニ兵士十六名ヲ撰ヒ鎌田之ヲ率ヒ鶴崎ニ進ムニ、警視隊五百名余上陸セシニ出逢ヒ、鎌田之ヲ指揮シ抜刀ニテ切込ミ、一瞬間ニシテ官兵數十名ヲ切伏スト雖トモ衆寡敵セスシテ兵ヲ引

揚ク、此時刀創ヲ負フ者鎌田一名ナリ、翌日武田へ帰陣ス、后五六日ヲ経テ熊本街道ヨリ官軍大挙シテ来攻スル報アリ、則チ非番ノ四中隊ヲ以テ疾ク進撃スルニ、官兵少ク退ソキ惠良原ノ險ニ抛リ防戦ス、我軍頻リニ攻撃スト雖トモ抜ク能ハス、遂ニ兵ヲ引揚ク、后屢々大挙シテ来侵ス、我軍之二応シテ戦フト雖トモ彈丸竭耗シ市外迄退ク、此時兵士一名ニ纒五六発ヲ貯エ本營頗ル困却ス、然リト雖トモ兵士勢ヒ未タ減セサルナリ、后一日ヲ経テ大分街道ヨリ亦来襲フ、味方頻リニ防戦スト雖トモ彈丸ノ乏キニ困シミ少ク退ク、因テ本營ノ命ヲ受ケ、我一分隊ヲ率ヒ赴援ス、日既ニ暮レ兩陣互ニ兵ヲ引揚ケ堅ク壘柵ヲ守ル、翌日払曉ヨリ又兵ヲ分チ来攻ム、官兵勢ヒ猖獗、我兵殊死シテ戦フ、遂ニ官兵四五名抜刀ニテ我壘ニ突来リ、味方粉骨碎身シテ悉ク切伏ス、大ニ勝ヲ得タリ、此時半隊長佐々木新藏外ニ兵士三名創傷ヲ負フ、同二十九日官兵又大挙シテ武田ヲ来攻ム、我左小隊ハ西休寺ヲ防守ス、官兵村落ニ放火シテ来攻シ、遂ニ左手ニ当リ古城ヲ防守セシ永井半之丞隊ヲ破リ侵入セシ故、我兵防ク能ハス、退テ会々橋ノ右山手ニ抛リ防戦スト雖トモ遂ニ諸方ノ味方破レ小野市へ引揚ク、翌日我兵道ヲ転シテ三

重之市ニ進入ス、爰ニ於テ四方へ壘ヲ築キ守兵ス、同三十一日黎明ヨリ官軍襲来シ、頗ル激戦スト雖トモ遂ニ利アラス、死体十余名ヲ捨テ逃走ス、同日武田街道ヨリモ官兵襲来ル、我隊又七番中隊ノ応援トシテ兵ヲ二手ニ分チ横撃スルニ、官兵支ル能ハス、散々ニ敗走ス、岩戸迄追撃シ敵營ニ放火シテ凱陣セリ、此時銃器・雜品ヲ奪フ、六月一日白杵ヲ進撃セント我隊ハ本道ノ先鋒トナリ、四番中隊ハ右ノ山手ヨリ、七番中隊ハ左ノ山手ヨリ一斉ニ攻撃ス、官兵支ル能ハス、白杵城下へ引退ク、我兵勝ニ乘シテ追撃スルコト凡半里許、官兵川ニ溺レ縛ニ付ク者百余名ニ及フ、此時銃器・彈藥數十ヲ分捕ス、

同八日官兵武田・大分ノ両道ヨリ大挙シテ襲来ヲ、味方壘ヲ築キ防戦スト雖トモ遂ニ利アラス、市橋へ退キ壘ヲ以テ台場ヲ築キ或ハ井垣ヲ楯ニ取り激戦ス、勝敗未決セス、即夜ハ互ニ堅ク防守ス、翌日官兵又左山手ヨリ攻撃ス、味方防ク能ハス、佐伯街道ヲ経テ切畑ニ引退ク、此時創傷ヲ負フ者六七名ニ及ヘリ、同十一日三重之市へ進撃ノ令ヲ聞クヤ、夜十二時比進発シ村名不覺村ニ着陣ス、翌十二日鷲谷ヨリ侵入ス、官兵險ニ抛リ能ク防ク、勝敗決セス、夜二入り小野之市へ引揚ケ旗返并三国峠ヲ守ル、

我三番中隊右小隊八田原ヲ守リ、左小隊ハ木浦ヲ守ル、同十八日比三国峠ノ敗報来ル、我左小隊ハ上赤ニ引テ守兵ス、右小隊ハ水ケ谷ヲ守ル、同廿日比我左小隊モ水ケ谷ハ繰込ミ守兵ス、同廿一日右小隊ハ重岡ヲ防守ス、后三日ヲ経テ赤木村ノ我軍連雨ニ逢テ運輸不弁ニシテ重岡ノ兵モ引テ鑑ヲ守ル、我隊モ熊田迄引揚ル、同二十四日比梓峠ニ官兵ノ守兵アリト聞キ、我隊八戸へ進入ス、后二日アツテ梓峠ヲ進撃セント欲スト雖トモ雨ニ逢フテ進ムヲ得ス、翌日ニ至リ本營ヨリ熊田へ引揚ヘクノ報来リ、則チ哨兵ヲ纏メ熊田へ引揚ク、翌日又湯ケ内迄引キ大原越ヲ守兵ス、后数日アツテ官兵屢々来攻ム、利アラステ^{シ脱}退ク、后又大挙シテ襲来ル、我守兵セシ大原越ヲ朝霧ニ乗シテ不意ヲ襲ハレ、右翼ノ二塁既ニ敗タリト来告ルニ会フ、即時ニ諸塁ノ兵二十余名ヲ纏メ一隊トナシ、奮戦シテ之ヲ走ラス、暫時アツテ我軍陸地・不動ノ敗報来リ、山ヲ伝フテ矢ケ内へ引退ク、則チ台場ヲ築キ之ヲ守ル、爰ニ於テ豊後口方面ノ惣軍編製アツテ五大隊トナル、一大隊ヲ五中隊トナシ、我三番中隊ヲ第一大隊一番中隊ト名称ス、是ヨリ先キ三河内口へ援兵トシテ二分隊ヲ分チ行テ之ヲ守ラシム、后三日ヲ経テ曉霧ニ乗シ敵塁ニ進撃

ス、敵死体或ハ銃器・彈藥ヲ捨テ敗走ス、三日アツテ重岡へ進撃ノ令ヲ聞クヤ、我一番中隊ハ即夜矢ケ内ヲ発シ全軍鑑ニ会シテ軍議ヲナシ、此時我隊赤松峠ヲ攻ム、敵嶮ニ拠リ相防ク、味方激戦數刻ニ及フ、勝敗未決セス、時大雨ニ会シ戦フ能ハス、遂ニ二引退ク、又三日ヲ経テ三河内へ襲来ノ報来ルヤ、我半隊ヲ山神山ノ右へ備へ、大炮ノ相図ニテ小銃ヲ放チ掛ケ撤隊ニ開キ閤ノ声ニテ駆込ミ、官兵狼狽シテ諸方へ散乱セリ、爰ニ於テ小隊長松崎善兵衛創傷ヲ負フ、此時本道ノ守兵相破レ熊ノ江^{熊野江}ニ引揚ケ守兵ス、同五日矢ケ内へ帰陣ス、翌六日黎明ヨリ官兵我奇兵十二番中隊ノ塁ヲ来攻ム、勢ヒ猖獗、我兵援兵トシテ進ミ戦フ、官兵抜刀ニテ進来ル、味方粉骨碎身シテ悉ク切伏ス、此勢ヒニ辟易スルヤ、死体二十余名ヲ捨テ散々ニ敗走ス、銃器・彈藥數十ヲ奪フ、此時右手ニ刀創ヲ負ヒ外ニ銃創ヲ蒙ル者七八名ニ及フ、因テ延岡病院へ到リ療養ス、同八月八日比延岡敗レシ故、永井村病院^{長井力}へ到ル、后五六日ヲ経テ官軍永井村へ進入ス、此時降伏ス、当日島ノ浦^{高野浦}へ行キ二十余日ヲ経テ鹿兒島へ帰宅ス、

明治十一年三月

若松長治

一二七 園田敬助上申書

戦記

明治十年二月西郷隆盛以下政府へ尋問之筋有之、鹿兒島県ヲ発程スルヤ、我輩随從シ、第四大隊十番小隊ノ半隊長ト成リ、同月十六日諸縣発足、同廿二日熊本県へ到着、直ニ植木へ進軍、薄暮ニ及テ同所ニ於テ始戦シ、翌朝木葉へ進撃、後又軍ヲ転シテ山鹿諸所ニ戦ヒ、同三月十三日田原那智山へ向テ進撃、終ニ銃創ヲ負ヒ、夫ヨリ入院シテ療養スト雖トモ未愈サルヲ以テ帰県後帰順ス、余悉ク詳覚セサルヲ以テ大略如斯御座候也、

明治十一年二月

園田敬助

一二八 橋口龜助他二名連署上申書

先般政府工尋問ノ云々有之、西郷隆盛外二名上京ノ際、七大隊・二砲座随行シテ熊本県下ニ到ルヤ、彼ヨリ戦争ニ及ヒ連戦数日ニ至ル、故ニ別府晋助・邊見十郎太帰県シ大口ニ至テ兵ヲ召募スト聞キ、直ニ走テ之ニ応ス、狂撃隊ニ編入シテ大口ヲ発シ、人吉ヲ経テ日奈久ニ至ル時軍艦ヨリ上陸セントス、之ヲ防ク三昼夜ニ至ル、八代本営ヨリ俄カニ隊ヲ揚タルノ令アリ、神ノ瀬ニ退ク、翌日

藤本ノ敵ヲ破テ又日奈久ニ進軍ス、二日計ニシテ再兵ヲ揚クルノ令アツテ八代櫻馬場ニ進軍スルノ処、既ニ戦酣ナリ、我隊転テ高田ニ至ル、川ヲ挟ンテ防戦シ、又鶴柳（鶴柳ノ）ニ進軍スト雖妙見山ノ兵敗レテ止ヲ得ス退テ藤田ニ戦フ、遂ニ利アラスシテ藤本ニ退守ス、要害便ナラサルヲ以テ神ノ瀬ニ退守スルコト廿日計、爰ニ於テ隊ヲ変制シ中隊トナリ破竹隊ト号ス、此ノ日人吉本管邊見十郎太ヨリ我左小隊ヲ揚クヘキノ令アツテ人吉ニ至ルニ、邊見既ニ吉田ニ到レリト云、故ニ跡ヲ追テ吉田ニ到、官軍山野ニ来攻スルト聞キ、我隊走テ山野ニ至ル、邊見自ラ我半小隊ヲ曳キ、直ニ山ニ登リ官軍ノ横ヲ衝テ之ヲ走ラス、官軍四散、追撃四里余、肥後境ニ至テ守衛ス、翌日本道ヲ進テ石坂ノ官軍ヲ破リ深川ニ至リ、対陣八日計ニシテ官軍来襲ス、我軍利アラスシテ退クコト半里計、又退テ石坂ヲ守ル、翌日久木野ニ応援シテ猪ノ嶽ヲ進撃ス、此戦少ク利アリ、依テ之ヲ守ル八日計ニシテ官軍来攻ム、我軍利アラスシテ出水大河内（大川内也）ニ退キ六ヶ所ニ出テ、又兵ヲ返シテ猪ノ嶽ノ下ニ至ル、我隊先鋒ヲ請フテ進撃スルニ、官軍退テ猪ノ嶽ニ籠ル、故ニ我軍進ヲ得ス、翌ヲ築キテ之ヲ守ル二日計、我兵敗レテ竹ノ屋敷ニ退守ス、又日経

川端甚兵衛

テ官軍来テ我本隊ノ壘ヲ敗ル、我隊止ヲ得スシテ山野ニ退守スルニ、六ヶ所ノ味方利ヲ失テ大口ニ退ク、官軍追撃甚烈數、我軍兵ヲ反シテ山野ニ突出ス、彈藥若干ヲ分捕シ生捕數名アリ、我隊大口ノ山手ニ守ルコト二日計ニシテ官軍我壘ニ襲来シ、戦ト雖彈藥全乏數故、竟二十町計退、爰ニ於テ我隊拔刀シテ兵ヲ反ス、官軍直ニ敗走シテ則チ壘ヲ築キテ之ヲ守ル、我隊栗野ノ恒次ヲ守リ、本城ノ諸軍破ルニ依リ横川ニ退キ、奮戦スト雖利アラスシテ踊ニ退キ大久保ヲ守ルニ、官軍来攻シ、我軍撃テ之ヲ走ラス、彈藥三百箱余ヲ分捕、又敵軍来攻ス、利アラスシテ敗軍ス、莊内高野ニ退キ守兵ス、數日経テ財部大河内ニ進撃スト雖利アラスシテ曳揚、又五六兩日ヲ経テ荒磯ニ進撃ス、我右翼利ヲ得ト雖左翼利ナクシテ全軍高野曳揚、三日計ニシテ敵軍我背ニ出ルヲ以テ退テ莊内ニ至ル、我隊財部ノ谷川ヲ守リ、二日余シテ官軍大挙シテ都城ヲ襲、我全軍利ヲ失フテ山ノ口ニ退ク、是ヨリ各所ノ戦利アラスシテ日州ニ至ル、遂ニ美々津ノ敗ヨリ帰順ス、

(年月日脱)

鹿兒島県

橋口 龜助

田邊善左衛門

一一九 島子弥右衛門上申書

明治十年丑旧三月六日頃戸長ヨリ命ヲ受ケ、同九日宮之城ヲ発足、吉田郷ヲ経テ同十二日熊本県下人吉ニ到リ、第十三番大隊三番小隊兵卒ニ編入セラレ、須臾ニシテ鹿兒島県下加治木郷へ出兵可致達ニ依リ当所発足、加治木ニ到リ海岸へ防禦ス、此時振武十一番中隊ト編制、同五月二十日頃令ヲ受ケ末吉ニ引揚、此二哨兵スルコト三日間、又恒吉ニ移リ、此二哨兵スルコト四日間、同六月初頃達ニ依リ日州延岡ニ引揚、同十三日同隊ノ右小隊長トナリ、同十四日古家ニ到リ海岸ニ防禦ス、同七月初頃延岡敗軍ノ報知ニ依リ永井邑へ引揚防守スルトキ、官軍ニ四面數重取囲マレ、同十日可愛嶽ノ官軍ヲ打破リ三田井へ突出、器械・彈藥等ヲ獲ル多シ、此地ニ於テ弥右衛門前軍一番隊兵卒トナリ、夫ヨリ七ツ山其他諸所ヲ経テ同二十二日頃踊郷ニ突出、官軍ト戦フ、此時官軍ニ取囲マレ、終ニ帰郷降伏ス、

明治十一年三月

鹿兒島県下宮之城

島子弥右衛門

一三〇 鶴田貞直上申書

明治十年二月西郷隆盛上京云云以来五月上旬二到テ県内宮崎江軍務所ヲ設ケ、国難ニ付テハ傍觀座視シテ令ニ違フ者悉ク軍律ニ処ス可キノ趣布達ニ及ヒ候折柄、六月中旬比県内福山郷へ設ル処ノ本營ヨリ伊東昌吉ナル者派出シ、我区都城二分營ヲ建ツ、然シテ火難或ハ盜賊其他区内非常ヲ戒メンカ為メ隊ヲ組ム、此際ニ於ルヤ、既ニ壯士輩悉ク出軍跡ニシテ、老トナク若トナク十五以上六拾歳迄ノ人員ヲ募ル、之レヲ編制シテ六小隊ト為シ孰レモ無銃タリ、此時監軍ニ編入サレ、区内往還數ヶ所へ拾名或ハ五六名ヲ分配シ、交ル々番兵スルコト殆ント三十余日ニ及ヘリ、是皆分營詰財部實秋・城ヶ崎儀平・大草重直等ノ指揮スル所ナリ、然ルニ七月廿四日暁天西南ニ方リテ烈シク炮声ス、無程庄内・末吉・財部三ヶ郷方面ノ味方全軍敗シテ悉ク山ノ口・^(三股カ)三俣郷ヲ指シテ引退ク、官軍之レヲ追フテ陸統都城ニ到ル、於是区长川西幸三令シテ六小隊ヲ解キ、各川村參軍へ相付自首帰順ス、后チ八月二日篠原軍吏ヨリ御雇拜命、軍団會計部及ヒ征討惣督宮様御用向ヲモ相弁シ、宮崎表迄モ罷越シ、三週間程昼夜連勤、日当ヲモ下賜、日向表鎮定迄奉仕ス、其后都城

警視署へ呼出サレ尚帰順書差出可キノ命アリ、再進達ニ及候処、鹿兒島裁判所へ護送セラレ、於長崎ニ懲役三年ニ処セラル、

明治十一年三月

鹿兒島県下日向国諸縣郡都城
鶴田貞直

一三一 黒木直左衛門上申書

先般中原尚雄等云々之事件ニ付西郷隆盛等政府江尋問之趣有之、上京するに至り四番大隊三番小隊之給養となり、明治十年二月十六日を以鹿兒島を発程し、大口筋より肥後街道諸所を経二月廿五日山鹿駅江進入、二拾余日滞陣、三月廿一日同所引揚、鳥之巢村江転陣し、暫く在陣ニ而同所引払、矢部より馬見原通行、胡麻山踏越く、日州富高新町より細嶋江至り、両日滞陣ニ而延岡筋進軍と相成、豊後之国竹田江進撃、同所江十余日滞陣、於同所我軍利あらず、小野市江引揚、夫より白杵江突入り大勝を得、於是大小荷駄掛となり暫く滞陣候処、官軍之勢ひ烈敷、手広之場所ニ而味方小勢故拒守難及退陣、日州延岡之内熊田江引揚、余は松葉村江出張、糧米運送等之事ニ注意す、七月十六日同所永井村江各隊相縮り、

同夜十二時比先軍・中軍・後軍と相定、可愛嶽官軍番兵を突崩し、夫より米良路間道を行軍ニ而再鹿兒島江帰来之節、吉野村江居残り五日程止宿、終ニ降伏之道相建候、初より終迄糧米之取扱のミニ而戦地之景況を詳ニせず、

明治十一年三月
鹿兒島県下第二大区一小区
黒木直左衛門

一三二 加治木鷹之介上申書

戦記

十年二月十六日五番大隊一番小隊江与シ、給養ニ而鹿兒島県発程、熊本県川尻へ着、廿二日未明同所城江攻撃、三軒町江宿陣、夫より内村と云処ニ進軍、同所守りの官兵ヲ悉ク谷^(谷底力)祇江追躰シ、此処ニ守り付暫時宿陣、夫より植木江引揚、荒木村へ転陣、又竹宮江引揚ケ、爰ニ而大合戦アリ、官軍の台場ヲ乘り取居候処、又候官軍より攻来候処、終ニ敗軍ニ及ヒ木山江引揚、夫より矢部且人吉辺迄引揚候処、爰ニ於テ我隊変革有之、私ニハ更ニ正義ノ一番ト相成り、夫より鹿兒島牛山郷迄進軍、此処ニ而官軍ヲ撃取り熊本県之内深川迄追払、同所ニ守等ヲ相付置候得共是又味方終ニ敗軍ニ相成り猪之嶽江引取、此場

も敗レ山野郷江引取、其外諸処敗軍ニ而終ニ延岡迄引揚、^(長井力)永井村ニ於テ降伏致シ、宮崎ニ而自宅謹慎被申付蟄居候処、戸長取次ヲ以テ放免相成候処ニ、九月一日我軍鹿兒島江襲来之節、下伊敷之内江番兵ヲ張り、右之場所ニ焚出等いたし候様被申付相勤候処ニ、官兵進入ニ而直ニ私宅江帰居申候得共、終ニ再出之事件露頭ニ及ヒ、鹿兒島出張警視所江拘留被申付候、

右之通御座候、何分私給養ニ而戦地之次第等ハ詳ニ存不申候間、此段取覽之儘大略申上候、以上、

明治十一年三月
鹿兒島県下第三大区一小区平民
加治木鷹之介

一三三 隈崎喜次郎上申書

戦記

明治十年丑二月十五日西郷隆盛其他兩名等政府江尋問ノ為メ上京スルニ随ヒ、第四番大隊三番小隊ニ兵士ニテ加入シ、同日鹿兒島県下ヲ発程シ、牛山街道ヨリ通行シ熊本県ニ出張リ、植木・山鹿辺ニテ屢官軍ヲ撃取り、廿余日滞留ス、然ルニ田原坂ノ味方敗報アリ、即チ我隊応援^(味取力)ニミドリ邑ニ繰り出シ、翌日鳥ノ栖邑ニ^(大鹿居力)転シ大鳥邑ノ辺

ニテ度々激戦シ、廿余日相持シ、其後チ各隊ノ味方ノ敗レ大津ニテ防禦シ、五日ヲ過キ矢部ニ引揚ケ又江代ニ引揚ケ、是ヨリ日向ノ国ヲ経テ豊後ノ国竹田ニ繰り出シ、十余日滞陣シ、度々烈戦シ、後チ同所ヲ引揚ケ三重ノ市ノ官軍ヲ擊敗リ、此夜兵ヲ潜メ、直ニ臼杵ヲ襲ヒ又官軍ヲ四方ニ追散シ、銃器・彈藥等其外許多分捕ル、爰ニ於テ小隊長被申付、十余日ヲ経テ同所ヲ引揚ケ、佐伯・小野市・重岡等ノ処々ニテ防戦スル砌リ病氣相煩ヒ保養スル処、我軍後チ鹿兒島ニ切抜ケ出ル時、亦其勢ニ加リ処々ノ官軍ヲ斫リ抜ケ敗リ、終ニ鹿兒島ニテ自宅ニ蟄居スル処、一月廿六日鹿兒島出張警視所ヨリ被召呼、其時帰順シ拘留被申付候、

明治十一年三月

鹿兒島県下

隈崎喜次郎

一三四 岡留誠藏上申書

戦地形状概略

客年西郷隆盛政府工尋問ノ為メ上京ニ付、第四番大隊十番小队兵卒ニテ随伴シ、二月十六日発程、同廿二日熊本県下植木ニ戦ヒ之レニ勝ツ、同廿三日木ノ葉ノ戦ヒ耐ナ

ルトキ銃創ヲ負ヒ、退ヒテ川尻病院ニ入り、療養ノ央ハ川尻毛戦地トナリ帰県ス、然ルニ六月中旬比我方区内鎮撫隊ノ監軍ヲ戸長ヨリ命ゼラレ、兵卒拾二名ヲ引率シ鹿屋ニ番兵ス、同月官軍進入トナリ兵卒離散シ依テ即チ帰区、戸長等ト散兵ヲ集メ帰順ス、

明治十一年三月

鹿兒島県下肝付郡
第七拾四大区小卷区

岡留誠藏

一三五 有馬知純・篠原藤右衛門連署上申書

一明治十年二月十三日第一大隊五番小队ニ編入シ、同十五日鹿兒島県下ヲ発シ、行軍一週間ニシテ熊本県下ニ着陣ス、此時我隊ノ營所ニ入ルヲ見テ台兵ノ発砲烈シク、隊長久留休左衛門直チニ進軍ノ令ヲ下シ奮戦指揮スルノ時、十二時比銃丸ヲ右股ニ二ヶ所負ヒ、猶互戦勝敗ヲ分タス、午後四時比兵ヲ揚テ、其夜春日街ニ引キ休兵ス、

一隊長久留休左衛門負傷ニ依ツテ相良長良隊長トナル、同廿五日該地ヲ発シテ高瀬口ニ向フ、味方ノ諸隊ハ高瀬川ノ堤ニ伏シ、川ヲ隔テ相戦フト雖トモ雌雄ヲ決シ難ク、相良長良奮然指揮シテ午前十一時比同所ノ下流

ヲ渡リ進入シ、相戦フト雖トモ勝敗ヲ決セス、日暮ニ及ンテ終ニ伊倉村ニ引揚ケ宿陣ス、翌廿六日木留ニ転陣シ吉次峠ノ山手ノ方ヲ守兵ス、

一三月三日堅岩ニ出兵ス、味方四番小隊ノ戦地ニ続キ、戦フコト一時間計リニシテ敵兵ヲ追撃スルコト一町余ノ処ニ至ル時、敵兵四方ヲ囲ミ、味方死力ヲ尽シ切入リ、大ニ苦戦シテ漸ク吉次ノ本道ニ引揚ケ台場ニ抛ル、猶敵兵襲来リ、日夜ヲ分タス激戦シ、翌四日味方ノ応援来リ、各隊合力シ敵兵ヲ破リ追撃シテ高瀬口ニ到ル、日暮ニ及ンテ再ヒ吉次峠ニ引揚ク、

一同月廿日大田尾村ニ転シ同所ニ守兵ス、翌廿一日田原ノ内木留村ニ繰出シ、此所ニ守兵スルコト三日、同廿三日敵兵寄セ来リ、防戦中有馬知純右肩ニ銃丸ヲ負ヒ、川尻病院ニ送ラル、篠原藤右衛門モ同時ニ左足ヲ打タレ、同シク病院ニ送ラレタリ、

明治十一年二月

鹿兒島県下頼娃郷

有馬知純

同県下同所同隊

篠原藤右衛門

一三六 宇宿栄之丞上申書
記

私儀

第五番大隊小荷駄付属ニ而明治十年二月十六日鹿兒島発程、熊本并植木・山鹿江出張、四月十一日求麻江立越シ同所敗軍ノ折鹿兒島県下吉田江同断、直二日向ノ国延岡江同断、同所敗軍ノ折帰県、同十月八日降伏仕候、尤戦地ノ儀ハ戦ヒ江不立障候故全ク不相分候、

右之通御座候、以上、

明治十一年二月

鹿兒島県下第一大区二小区平民

宇宿栄之丞

一三七 松岡直左衛門上申書

西郷隆盛等ヨリ

政府江尋問之趣有之、鹿兒島県下大挙ニ付、十年二月十四日二番大隊八番小隊給養方ニ而鹿兒島発足、同十日肥後川尻江着、当日百貫(百貫石カ)閔ヨリ城内江繰出之官兵ヲ押留んと千金甲江繰出、一週間位茂宿泊、夫ヨリ砂取・大津・隈府諸所・山鹿江至リ弾薬・粮米等之手当注意、三月廿一日当所引払ヒ、但馬・福之元其他諸村江滞陣、追日大

津・矢部・胡麻山街道・日州富高新町江退陣、大小荷駄掛心得ト成リ、細嶋・延岡・熊田・柚ケ内等江転陣、事務混雑中央ニシテ延岡之内永井村(長井力)ニ而降伏仕候付戦地不詳候也、

明治十一年三月

鹿児島県第三大区一小区

奇兵大小荷駄掛心得

松岡直左衛門

一三八 二階堂高上申書

客年二月中原尚雄等ノ奸計発覚セシヨリ西郷等政府へ尋問ノ筋有之、上京ニ付兵隊随行ス、高ハ第五大隊六小隊兵卒ニ編入、同十七日鹿兒島ヲ発程シ、出水街道ヲ経テ熊本県下ニ至ルヤ、台兵我前駆ヲ遮リ鬪戦ニ及ヒ、台兵利アラスシテ熊本城ニ拠リ防戦ノ備ヘアリト聞キ、速ニ攻撃スヘシト達ニ依リ同廿二日我隊等安政橋ヨリ進入、城兵ト砲戦シ、終ニ安政橋ヲ守ル、居ルコト二十余日、三月十二日頃官兵段山ノ守兵ト大ニ戦フニヨリ我隊持場ヲ飢肥隊ニ譲リ、即チ段山ニ赴キ応援ス、翌日昼過ニ至リ城兵出テ段山ノ小流ニ沿テ我背後ニ逼ル、我隊激戦禦クト雖トモ彈藥悉ク竭キ、応スル能ハスシテ春日邑ニ敗走ス、我隊死傷甚多シ、我隊等復段山ヲ取返シ我有トナ

スベシト嚴令アルニヨリ、夜ヲ待チ官兵ノ翌ヲ復セントスレトモ墨堅固ニシテ侵ス能ハス、四方池ニ移ル、此地ニ墨ヲ築キ防守スルコト十日計、同二十六日頃官軍松橋ニ逼ルヲ以テ応援スヘキノ命アリ、同夜四方池ヲ引揚本營ニ到リ、直ニ營ヲ発シ松橋ニ至ル、同二十八日早天官軍来リ戦フ、我隊山手ノ隊ニ応援シ烈ク官軍ヲ砲撃ス、時ニ官軍遂巡敗色アリ、故ニ尚進シテ偵戦、遂ニ官軍ヲ走ラス、我兵勢ニ乘シ尾撃スルコト里許、爰ニ官軍ノ死体二十余、后チ松橋町ニ引揚滞陣ス、同三十日官軍又来リ大ニ戦フ、此時我隊ヲ本道ト山手ニ分チ応援ス、山手ノ我隊ハ破ルト雖トモ本道ノ守兵能ク防戦シ、夜ニ入り砲声猶止マス、午後十一時頃ニ至リ本道ノ守兵ヲ引揚山手ニ合シ仮ニ守ヲ設ケ、翌三十一日諸隊ト共ニ守ヲ定ム、此日官軍大挙シテ来リ戦フ、我兵大ニ防戦ス、高二ハ戦酣ノ時創ヲ負ヒ、退キテ川尻病院ニ至リ、其后木山ニ転院シ療養スト雖トモ創口愈難フシテ、四月十日頃帰県ス、六月十五日創稍々平愈シテ大口郷邊見ノ本營ニ至リ、雷撃八番中隊左小隊兵卒ヘ編入、翌日昧爽ヨリ官軍ヲ進撃スレトモ勝敗決セス、夜ニ入テ引揚上青木村ヲ守ル、同廿日本道ヨリ左翼ノ胸壁敗走ニ及ヒ、我兵不戦シテ本城

二引揚ケ川ヲ挟テ拒守ス、同卅日官軍曾木井ニ針持ヲ破
 リ来逼ヲ以テ退キ横川街道ヲ守ル、此時官軍衝来リ、我
 兵邀戦ス、翌日暁天官軍大ニ進撃シ本道ヲ侵スヲ以テ我
 兵不戦スシテ横川ニ退キ砲戦ス、終ニ踊ニ退キ壘ヲ築キ
 テ守ル、七月六日頃大久保ニ転戦、此地ヲ守ル、翌日我
 兵斉シク官軍ヲ進撃スレトモ官軍能ク守ル、同八日我兵
 又進撃ス、官兵王子街道ヲ破ルニヨリ退キテ高野ヲ守ル、
 此ニ於テ進撃スルコト両度アリト雖トモ^{不覺}又転シテ上
 荘内ヲ守ル、同廿日官軍大ニ来リ戦フ、我右翼応スル能
 ハスシテ山ノ口ニ退軍ス、翌日官兵又来リ戦フ、終ニ利
 アラスシテ額ノ木ニ転戦拒守ス、官軍板屋ヲ破リ来ルヲ
 以テ少シク逆戦スト雖トモ地理便ナラスシテ退キ清武ヲ
 守ル、同二十八日官軍又此地ニ来リ戦ヲ挑ム、我兵邀戦、
 能ク拒クト雖トモ右翼ノ兵応スル能ハス、退テ宮崎川ヲ
 守ル、同三十日官軍宮崎川ノ上流ヲ渡リ我右翼ニ迫ルヲ
 以テ退キ一ツ瀬川ヲ守リ、カヲ尽シ防戦ストイヘトモ終
 ニ上流ノ守ヲ破ラレ退キ耳川ニ転戦ス、八月八日頃官軍
 山陰ヲ破リ富高新町へ衝入ヲ聞キ、邊見之ヲ追散セント
 兵ヲ選ミ進ミタルニ、官軍既ニ橋板ヲ撤シ柵ヲ結ヒ堅ク
 守ヲ以テ間道ヲ取り、山川ノ險隘ヲ経テ門川ニ至リ防戦

ス、数日ニシテ官軍大挙本道ニ逼ル、我兵利アラスシテ
 退キ草香ノ本道ヲ守ル、同十三日高分隊長トナル、同日
 昼過官軍延岡へ突入ラントスル報知ヲ聞キ、桐野利秋我
 一中隊ヲ率テ該夜ノ防守トシテ彼ノ地ニ赴キ市街ヲ守ル、
 翌日暁天官軍来戦、我兵防戦スレトモ衆寡不敵シテ永井^(長井カ)
 邑ニ至リ、互ニ砲戦スルコト一昼夜、同十五日終ニ疵ヲ
 負ヒ、病院ニ入り、同十八日頃官軍ノ進撃ニ依リ軍門ニ
 降ル、

明治十一年戊寅三月

鹿兒島県下宮之城
 二階堂高

一三九 五代友廣上申書

第二大隊九番小隊へ与シ、明治十年二月十五日鹿兒島県
 発程、同廿一日熊本県川尻へ着、同廿二日未明ヨリ同県
 營所へ攻撃、其夜同県戸坂ト云所へ我隊ハ引揚ケ休兵ス、
 同廿三日未明ヨリ植木街道応援トシテ出兵之処、木ノ葉
 ニ於テ味方ノ先軍最早戦ヒ相始タル報知ニ付、我隊ハ左
 ノ山手ヨリ進軍ニ及ヒ暫時相戦候処、間モナク敵軍敗走
 シ同所并^(稻佐カ)稻サ辺迄追撃ノ処、何方へ歟引取モ不相分、尤
 其時味方分捕品モ数多有之候得共難尽筆紙ゆへ除ク、

其夜ハ各隊植木迄引揚一泊ス、然ルニ我隊ハ翌廿四日熊本旧城下迄引揚、兩日休兵ニテ同廿六日未明ヨリ同所ヲ繰出シ、高瀬川堤ニ行掛り候処、川向土手ニ敵兵相伏シ味方行軍ノ中央ヲ遮り撃、故ニ味方も土手ヲ楯ニシテ終日打合、其夜ハ植木迄引揚一泊、夫ヨリ又々木ノ葉へ繰出シ、同所へ台場ヲ築キ守居ルニ、三月三日午前八時比敵兵襲来ニ付防戦ニ及下雖トモ熊本旧城下ヨリ彈藥運輸ニ閑取り、終ニ不能守、無致方味方田原坂迄繰引、同所へ三月八日迄防戦、外隊へ交代シ熊本庁下迄引取り、春日村へ一泊シ同所段山へ守兵ノ処、同月十三日比味方ノ不意ヲ打レ敗軍ニ及ヒ其場引揚、人員檢調ノ処、戦死・手負都合二十九名ニ及ヒ、又々日向崎へ守ヲ替へ、半隊ハ細工町へ同断、其後日ハ不覚安政橋戦ノ節同町ノ半隊応援ノ処、敵二小隊位ハ砂取ノ方へ突入ノ跡ニテ、残兵ハ銃戦且研込タル故、籠城ト相成候事、

但、此戦ニ我隊死傷四名、分捕品等ハ除ク、

(健軍カ)

其後竹宮ヲ經テ御船工出張、日ハ不覚同所ニテ午後四時過キ敵兵襲来ノ処、暫時相戦、敵兵程ナク散乱シ、此時分捕品モ少々有之、打捨且生捕等モ有之、其夜ハ同所へ一泊、翌日我隊ハ木山へ引揚、兩日滞陣ノ処、御船相潰

タル報知ニ付巡邏トシテ木崎・戸川村辺へ繰出、途中ニテ敵ニ出逢ヒ一戦ニ及ヒ、其夜ハ木崎村ノ内へ休兵、未明ヨリ矢部ノ様引揚、尤此戦ニ手負一人有之候事、

但、矢部ニテ干城一番中隊ト編整ス、

鹿兒島県牛山郷へ敵兵相見得、応援トシテ球磨ノ内田野村へ一泊、夫ヨリジツソ(千曾カ)越ト云間道ヲ忍ヒ、牛山郷旧山野ノ内敵守ノ後ヨリ進軍ノ処、早ヤ本道方面相敗レ、敵兵ヲ追撃シ、終ニ熊本県ノ内イラケ邑ト云所迄追撃ニ及ヒ、同所守リト相成候事、

我隊ハ其後日不覚同県久木野村へ応援トシテ進軍、其碕ヨリ同所へ滞陣、兩日モ經テ敵襲来ノ処、一時ハ味方敗軍スレトモ直ニ追返シ、其時分捕ハ勿論生捕等有之候事、其後牛山郷辺ヨリ踊郷辺迄時々相戦候得共不利シテ味方敗軍候事、

襲山ノ内大久保村ニテ七月六日比敵ノ台場ヲ乗取り、其儘守衛ノ処、其翌朝我隊ノ守ヲ不知シテ敵彈藥其外諸品ヲ負越候ヲ遮り取り候事、

右同村ニテ味方敗軍、後財部其他口々相敗レ、敵ニ被取卷山中ヲク、リ窃ニ帰宿致シ、終ニ八月廿日鹿兒島警視出張所へ自首帰順仕候事、

戦地之始末右之通ニテ月日等ハ程過候故駢ト不相覚、戦
数迄取調仕候也、

十一年二月
鹿兒島県下平民
五代友廣

一四〇 山口輝光上申書

戦地景況

于時明治十年二月第三番大隊一番小隊二加入シ、西郷隆
盛等ニ從隨シテ、同十七日鹿兒島発程ス、同廿二日午前
九時頃熊本県下二着セシニ、壹番・二番・五番ノ大隊ハ
早ヤ城下ニ進入シ争戦酣ナリ、尽日攻撃スレトモ城固シ
テ陥ルコト能ハス、依テ長圍ノ策ヲナシ墨ヲ築テ守ル、
吾隊ハ城下筒口ヲ守ル、居ルコト数十日、三月廿日頃官
兵八代ノ駅ヨリ襲来セシ際、出張ノ令有リテ同廿二日ノ
夜熊本ヲ出発シ八代洲祭川ニ至テ陣ス、同廿四日午前十
時頃官兵攻撃ス、我ガ小川山手ノ軍敗北シテ壹丁計退キ
ケレトモ、忽チ恢復シテ七八丁計尾撃シ新田村ニ陣ス、
二日ヲ経テ官軍又大挙来リ攻ム、我軍利アラス、松橋ニ
退ク、時ニ永山矢一郎(弥一郎之)諸隊ヲ勒シ此地ヲ以テ愈死守スヘ
シト下知シ、兵励マシテ固ク守ラシム、同廿八日早天官

兵襲来、我軍必死ニナリテ戦ヒシカ、敵兵利アラズシテ
小川迄引キ退ク、此戦ニ予傷ヲ蒙リ、川尻病院ニ入テ療
養ス、四五日ヲ経テ天兵川尻近ク進入シ、故ニ木山ニ転
院ス、木山ヨリ四月下旬ニ鹿兒島ニ帰テ療養ス、廿余日
ヲ経テ官軍鹿兒島ニ襲来ル、墨ヲ築キ柵ヲ結ンテ城山ニ
抛守ス、此時ニ当テ我振武・行進ノ二大隊ヲシテ之ヲ攻
撃セシム、守リ固シテ陥ル能ハス、各隊城圍シテ守リヲ
付ク、於是予傷癒ヘ振武六番小隊ニ編入ス、小隊長毛利
權平ニテ該隊玉江橋辺ヲ相守ル数拾日、敵屢々武村・田
上邸(邸之)ノ墨ヲ攻メ来レトモ利アラス、其后チ六月廿六日比
官兵大挙シテ田上ノ墨ヲ攻ム、我軍敗北シテ敵兵勢ニ乘
シテ武岡ニ進入シ砲墨ニ逼ル、依テ我隊モ応援ス、今日
ノ戦ヒ正ニ激戦ナリ、日暮ノ頃ニ至テ官兵拔刀或ハ銃劍
ヲ揮ヒ墨ヲ起テ突入ス、我軍モ必死ニナリテ互ニ刀劍ヲ
交ヘ力戦スト雖モ保ツ能ハス、各隊道上坂ノ上ニ退キ、
夜ノ明ケルヲ待ツテ墨ヲ築テ道上街路ヲ守ル、今日午後
三時頃ニ振武本營ノ令アリ、吉野川上村転陣ス、官兵又
川上村ニ寄セ来ル、我軍防禦スル終日皆殊死シテ戦フ、
就中振武拾番中隊長武郷兵衛・我隊長毛利權平等ハ衆ニ
拔ンテ勇ヲ振ヒ、飛丸如雨ナルニ從容トシテ咫尺モ退ク

可ラスト兵ニ指揮シ、武氏ハ間モナク弾丸ニ当テ斃ル、毛利氏ハ愈奮激力戦スルニ、暮日ニ至テ彈藥竭キテ空ク同所ヲ引キ揚ケ蒲生ニ転陣ス、同所モ防戦利アラスシテ溝辺ニ退キ蒲生ヨリ間道ヲ守ル、七月五日頃ニ大口敗レ官兵横川ニ進來、因テ令アリテ溝辺ヲ引揚ケ、其夜加治木ニ一泊ス、翌日固分ニ至テ振武本営中島・貴島ヨリ高高熊方面ノ敵兵ヲ攻撃スヘキノ令アリテ、振武大隊ハ直ニ同所ヲ繰出シテ百引ニ進撃ス、我軍頗ル勝利ヲ得テ銃器・彈藥其餘雜品ヲ分捕ス、即夜同所ヲ打立テ恒吉ニ宿陣スル、二三日ニシテ奇兵六番・拾四番中隊并ニ加治木隊大崎進撃スルニ当テ赴キ援ハント、途中荒良佐ニ至テ敵ノ守リ有リテ相戦フ半日、我軍利アラス、同所ヲ引退キ道ヲ変シテ夜半ニ大崎着シ、明日奇兵并加治木隊ニ応援シテ勝利ヲ得タリ、夫ヨリ高原口ニ応援ス、再度互ニ勝敗アリ、七月廿二三日比行進隊ニ更リ通山ノ壘ヲ守ル、一日アリテ敵大挙シテ来リ攻ム、我軍防戦頗ムル努メタリト雖モ遂ニ大ニ敗レ、同日岩川・財部ノ諸口モ敗走シ都ノ城ニ走ル、時ニ我等五六人四面敵ニ取リ囲マレ、山間ヲ潜行シ漸ク清武ニ至テ味方ニ出会シ、同所モ防禦利ヲ失ヒ、佐土原・美々津・門川其外処々防戦利アラシ又脱之テ

遂ニ延岡ニ退キ防守スル、四五日ニシテ囲ヲ打破テ祝子川ニ突キ出、敵ノ彈藥等分捕シ、惣軍七八百人ヲ三ツニ分チ、前軍・中軍・後軍ト唱ヘ、三田井ニ至テ兵糧等雜品ヲ分捕ス、若干、鹿兒島ヲ差テ出ルニ、途中些少ノ戦ヒ數度、鹿兒島城下近ク吉野ニ至ル際、後軍ハ官兵ノ為メ道ヲ遮キラレ、兩軍ニ後ル、一日ニシテ鹿兒島ニ達シ夏陰口ノ壘ヲ守ル、官兵城ヲ囲ンテ砲撃スル數拾日、我軍大苦ミ、遂ニ九月廿四日城陥ル、軍門ニ降伏、

明治拾一年第三月十七日 甲橋鹿兒島県 山口輝光

(表紙)

十綴之内 印

一四一 湯田金兵衛上申書

記

明治十年二月十六日第四大隊三番小隊二編入サレ、鹿兒島出發、加治木・横川・大口・水俣・田之浦ノ各所ヲ經テ同廿一日熊本県小川駅ニ着陣ス、然ルニ昨夜十時頃川尻在陣ノ七番大隊へ台兵来テ発砲セシニ依リ味方直ニ駆散ラシ、伍長一名ヲ捕獲シ、且ツ官軍御船へ突出シタル報知アルヲ以テ我四番大隊ヲ二手二分チ、翌二十二日午前第六時ヨリ右半大隊ハ御船へ向ヒ、左半大隊ハ川尻へ向ヒ進発ス、午後三時頃我右半大隊ハ御船へ到リシニ、官軍未タ該地ニ見ヘサルヲ以テ遙ニ川尻ニ至リ左半大隊ニ合ス、於是各隊長議シテ曰ク、某隊ハ熊本海岸ヨリ進ミ小倉・長崎ノ両地ニ突出スルニ決シ、直ニ右半大隊ハ熊本ノ本營ニ至リ右ノ云々ヲ謀リシニ、本營之ヲ許諾スト雖トモ各大隊先鋒ヲ争ヒ、是カ為メ遂ニ該議ヲ果ス能

ハス、然ル処午前十一時頃ニ至リ植木口へ官軍襲来ノ報アルニ依リ直ニ植木ニ至リシニ、該地ニアル味方既ニ追散ラシタル跡ニシテ、乃チ我隊モ該地ニ守兵ス、同廿六日官軍又山鹿ニ出シ由報アルヲ以テ拾五小隊ヲ[〔]手二分チ、一手ハ菊地[〔]菊地[〕]街道ヨリ、一手ハ本道ヨリ進ミシニ、官軍又退テ戦ヒニ及ハス、空シク山鹿ニ休息ス、同廿九日午前第九時官軍大挙シテ来リ攻ム、本道最モ激戦、此日我隊ハ非番ナルヲ以テ直チニ山鹿ノ背後ナル吉田山[〔]ラカ[〕]ノ越へ長野原ニ出テ、烈シク横撃シタルニ依リ敵兵狼狽、散々ニ敗走シタリ、此日味方戦死スル者僅ニ六七名、敵首百五六拾ヲ斬リ、銃器・彈藥等多分ヲ得タリ、是ヨリ我隊ハ山鹿震岳ヲ守ル、三月三日桐野利秋自将南ノ関ヲ襲ハント拾一小隊ヲ二手二分チ、午前第八時ヨリ進発、我隊ハ乃チ本道ノ応援トシテ車反坂迄至リシニ、先鋒既ニ腹切坂ニ戦フテ以テ我隊長野村忍介馳セテ戦地景況ヲ窺ヒ、帰り報シテ曰ク、余カ左翼ノ方敵少キニ似タリ、依テ直ニ左翼ヲ突ント岩村ニ出テ平山ニアル敵ニ掛リシニ、敵險ニ抛リ善ク拒クヲ以テ容易ニ破ル能ハス、防戦時ヲ移シテ薄暮ニ至リ敵自カラ退クニヨリ此夜ハ爰ニ守兵ス、於是隊長野村曰ク、明朝ハ背後ニ廻リ不意ヲ撃タ

ハ必ス敗走セント、因テ各休足シ夜ノ明ルルヲ相俟シニ、
鷄鳴ニ至リ田原口ノ敗報至ルヲ以テ本營ヨリ引揚ノ令ア
リ、依テ山鹿ニ引揚タルニ田原ノ敗報ハ全ク報知ノ誤ナ
ルニヨリ我隊ハ又震山ニ守ル、同十九日右小隊ハ田原口
応援トシテ赴ク、余等左小隊ハ翌廿日鳥巢ニ引揚、余ハ
是ヨリ教導役命セラレ、常ニ植木・鳥巢ニ奔走シテ屢々
(奮勇)
戦ヒ、四月十二日鳥巢ノ戦ヒニ負傷、石坂出張病院へ送
ラレ木山ニ転シ、往々人吉ヲ経テ蒲生ニ帰郷シテ自宅ニ
療養セリ、六月中旬雷撃本營ニ至リ、辺見十郎太ノ指揮
ニ依テ正義三番中隊分隊長ニ編入セラレ、湯ノ尾ニテ暫
ク防戦、不幸ニシテ足痛ヲ患ヒ、襲山病院ニ入室、爾后
連戦敗ニ依テ都之城・宮崎・延岡ヲ経テ永井村(長井力)ニ於テ帰
順ス、故ニ已後ノ戦状ヲ不詳、

明治十一年六月

鹿兒島県

湯田金兵衛

一四二 隈元宰次上申書

戦地景況

明治十年二月第四大隊九番小队ニ編入シ、隊長伊東直二・
半隊長藤井鉄之介・分隊長有馬藤九郎トシテ、二月十六

日ヲ以テ大口街道ヲ発程ス、同二十二日熊本県下川尻駅
ニ到着、爰ニ於テ前駆ノ諸隊熊本台兵事アルノ報ヲ得、
開戦ニ及ヒ、我隊ニモ進ンテ城外ヲ囲ミ、正面ヨリ攻撃
スト雖トモ官軍善ク防戦シテ勝敗決セス、漸時城側ニ引
繼メ休兵ス、然ルニ官兵植木駅ニ繰込タルノ報アリ、該
日午后三時頃我隊一小隊外二村田三介隊ト合シ、向坂ニ
至リ官軍ト戦フ、我軍大勝利ニテ官軍植木駅ニ火ヲ放チ
所々ニ遁逃セリ、我軍大久保村へ引揚ケ、爰ニ宿陣スル
コト二日間、同廿五日当村ヲ繰出シ山鹿駅ニ至ル、城原
村ニ守兵ス、三月一日山鹿ノ諸軍南ノ関ニ向テ進撃ス、
我隊ハ岩村口ヨリ進ンテ平山村ニ抵レハ、官軍已ニ該地
ヲ扼シ発銃防禦ス、我軍猛戦一時ニ之ヲ撃破シ、勢ヒニ
乗シテ長駆シ板橋村ニ至リテ止ル、夜本道ノ砲声遙カニ
後ニ響キ、敵或ハ皆后ヲ梗塞センコトヲ恐レ、翌未明引
テ岩村ニ退ク、此時敵兵既ニ入り保テリ、別府・伊東及
ヒ飢肥ノ一小隊直ニ戦ヲ交ヘ辰ヨリ未ニ至ル、此時本道
ノ軍既ニ退テ聞キ、遂ニ山鹿ニ退軍セリ、三月十二日数
百ノ鎮台兵寄来リ、防戦スト雖トモ寡兵ヲ以テ多勢ニ症
シ難シ、一時引揚ケンツスル処ニ援兵馳セ来リ、一同攻
撃ス、官兵終ニ敗乱シテ逃走ス、午后二時頃ニ至リ尚近

衛兵進ミ来ル、復防戦スト雖トモ我軍敗レテ山鹿町口迄引揚ケ、其夜官軍モ九時頃引揚タリ、由ツテ再ヒ城原ヘ守兵ス、同十五日黎明官軍大勢押寄ル、此日戦コト午后二時ニ至ル、官軍終ニ敗レテ潰乱ス、同二十一日田原坂ノ味方敗レテ我隊モ引揚ク可キノ令アリ、鳥ノ巢ニ退キ一宿ス、翌日隈府ニ繰込ミ守兵ス、三月二十八日本營ヨリ予ヲ令シテ医官トナス、本日直ニ川尻病院ニ至リ療治方ニ従事ス、后子諸路ノ兵シキリニ守ヲ失ヒ敗退スル故ニ病院ヲ各地ニ転移ス、我軍日々危迫スルヲ以テ医官タルヲ忍ス、五月十六日医ヲ辞シテ豊後口ノ斥候隊ニ入ル、六月中旬頃豊後堺赤松峠ノ敵壘ヲ撃テ之ヲ破、薄暮ニ引テ籠ヲ守ル、七月初旬三河口ノ敗報アリ、直ニ我隊ニモ繰出シ三河内駅ニ着陣ス、二三日ヲ経テ山神越ノ敵壘ヲ進撃シテ大勝利ヲ得テ銃器・彈藥ヲ分取ス、又三四日ヲ経テ鳥巢ノ高峯ヲ守ル、或日敵兵来襲フ、予兵之ヲ撃テ走ラス、午后五時頃引揚可キノ令アリ、由テ熊ノ江迄引揚ケテ守兵ス、鹿兒島・大口各地ノ味方敗退シテ延岡ノ^(長井カ)永井村ニ潰集ス、即ち各所ノ軍ヲ合シ以テ延岡ヲ復ス可キノ令アリ、夜ニ乗シテ窃カニ引揚ケ、翌午前六時頃熊田ノ駅ニ至ル、同八時頃無鹿村ニ進ム、時ニ敵大軍ヲ拳

テ来ルニ逢テ、遂ニ砲丸飛鳴、山岳之カ為メニ動ス、機ニ乗シテ勇戦スト雖モ衆寡敵セス、引テ永井村ニ退ク、翌日豊後口ノ官軍大率シテ襲撃ス、味方殊ニ決戦シテ之ヲ走ラス、爰ニ於テ負傷ス、当村病院ニ在リテ軍門ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県下今和泉郷
隈元宰次

一四三 堀善三郎上申書

明治十年三月十日我等協同隊巨魁宮寄八郎ニ面会シ、先ツ大義名分ノアル所ヲ問フ、八郎答テ曰ク、今般少警部中原尚雄等大臣ノ内命ヲ奉シ、密ニ陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺センコトヲ謀ル、而シテ事発覚ニ及ヘリ、於是隆盛政府ニ尋問ノ為メ上京セントス、然処官軍妄リニ之ヲ討ス、嗟呼西郷隆盛ハ我邦國ノ柱石タリ、我陸軍ノ大将タリ、之ヲ護衛スルハ則チ我三千五百万同胞ノ義務ニ非スヤ、依テ僕輩之カ為メ隨行スト、於是我等亦大ニ同意シ該隊ノ輜重課ニ従事ス、此時ニ当リ姦民等各所ニ於テ人民ノ貨財ヲ強奪スルアルニ付保護兵ヲ設ケ以テ敵ニ其兇暴ヲ防キ、又人馬ノ繼立甚タ困難ナルニ付人民惣代ヲ設

ケテ大ニ利便ヲ計ラシム、其撰拳ノ如キハ則チ人民投票ヲ以テス、四月一日宇土口出張ノ我ニ番小隊戰敗レテ逃レ帰ル、時ニ本管主幹杉本良吉怒氣勃々、大ニ衆ヲ譴メテ曰ク、夫我協同隊ハ開戦ノ日ヨリ毎モ勇進猛往以テ全軍ニ頭ハル、然ルニ汝等此醜態ヲ極メタルハ実ニ本隊ノ榮辱ニ関ス、再ヒ赴キ此恥辱ヲ雪ク能ハスシ大ニ罰スル所アラント、於是衆皆憤伏命ヲ奉ス、依テ良吉酒魚ヲ衆ニ与ヘテ曰ク、諸君努力セヨ々々ト、衆又其恩威ニ感激シ頗ル奮テ進発セリ、爾後河尻口^{川尻カ}味方連戦、敗衄ニ付十四日遂ニ本管ヲ木山ニ転シ、輜重課ヲ濱町ニ移ス、該地ニ於テモ前ノ如ク保護兵等ヲ設ケリ、此時味方肥後地方ヲ捨テ人吉ニ割拠セントス、於是二十四日諸軍人毎ニ糧ヲ負フテ那須越ニ向フ、経ル所高山深谷、雲ニ迷ヒ、蘿ニ攀チ、雪ヲ踏ミ、棧ヲ渡リ千艱万苦苛フシテ、二十八日人吉ニ達ス、五月二十八日該地発程ニテ豊後地方募兵ノ為メ熊本隊參謀福田抱一等ト同行、六月七日佐伯ニ到リ、不日ニシテ一隊ヲ得タリ、新奇隊ト号ス、後日該隊ヲ抱一等ニ譲リ、我等ハ延岡出張鹿兒島本營ニ付屬ス、該營ノ惣裁ハ池上四郎ナリ、四郎人ト為リ明敏果斷ニシテ事皆立トコロニ弁ゼザルナシ、又能ク士ニ下リ民ヲ愛

ス、於是遠近望ヲ屬ス、該地ニハ五所ノ製作場ヲ設ケ、寺院ノ梵鐘・商農ノ銅鉛価ヲ倍シテ悉ク購求シ、彈藥ノ製造甚タ盛ンナリ、既ニシテ各地ノ味方激戰奮闘、數ハ官軍ヲ敗ルト雖モ遂ニ敵スル能ハス、依テ我等八月十七日長井村ニ於テ本隊一同官軍ニ降ル、

熊本県山本郡植木町
堀善三郎
明治十一年五月二十八日

一四四 松山助ノ進上申書

五月上旬又該区残士百四五十名ヲ募リ鹿兒島県下山崎本營ヘ到着セシニ、隊名勇義一番小隊ト称号セラレ、兩日ヲ經テ川内尙田町ヘ転陣ス、此地ニ守兵スルコト累日、同下旬出水郷迄押出セシニ、不日ニシテ兵ヲ加ルコトニ十六中隊ナリ、是レヲ以テ一大隊ニ編制ス、然レトモ是レ皆和銃、過半ハ無銃ナリ、此ノ左半大隊ヲ以テ出水郷ヨリ川内迄哨兵線ヲ取り壘ヲ蔽ニシ固守セシメ、右半大隊ヲ鹿兒島ニ遣ハシ官軍ノ籠城ヲ囲ミ守ルコト累日、六月十二三日頃出水方面味方敗軍ヲ以テ援兵ノ報アリ、乃チ鹿兒島ヲ発シ宮ノ城郷ニ着ス、我敗軍已ニ宮ノ城平川迄退陣ス、此地ニハ十小隊位ナリ、本道ニ兵少ナキニヨ

リ我隊応援ニ赴ク、同十四日阿久根ニ着ス、同十五日高尾野・野田ノ両郷我軍敗走ノ報至リ、十六日未明応援ヲ為ントスルニ又阿久根桑原ノ城敗走ノ報アリ、由テ道ヲ馳セ進行スルニ味方敗軍、諸所ニ散乱タリ、此時官軍頗ル利ヲ得テ野田ヘ退陣ス、我軍死傷十余名、和銃并ニ大砲二三門ヲ奪ハレタリ、同十七日再ヒ桑原ノ城ヲ拔キ壘ヲ蔽ニシ固守ス、此時我同軍七八小隊ナリ、同廿日官軍間道ヨリ我軍ノ後ロヲ襲ヒ来ル、故ニ発砲セズ引退ク、二十一日宮ノ城郷平川本営伊東四郎左衛門五小隊ヲ引率シ自ラ官軍ニ降ル、故ニ我兵寡少、官軍頗ル勢ヒヲ得、宮ノ城町迄追撃シタリト我本営ヘ急報アリ、是故ニ我本道ノ官軍益勢ヒヲ得、進撃ス、我隊四十余名ヲ勵シ高城市重坂ノ下ニ伏兵シ、防戦トモ官軍大兵ヲ以テ進撃スルニヨリ遂ニ防ク能ハス、此時官軍四五名ヲ殲ス、我兵負傷六名アリ、官軍川内川迄追撃スルヲ本営中山甚五兵士僅ニ兵一小隊ヲ以テ本道ノ大橋ヲ燒キ能ク防ク、我隊此夜平佐郷四山ノ下ニ陣ス、翌翌朝向田町ヘ進ントスルニ、最早散兵ヲ勒テ守リ嚴ナリ、我隊ハ同所宮里村ノ守兵少キニヨリ、応援ニ赴クヘキノ令ニヨリ進軍、此川ノ上ニ壘ヲ堅クシ防守ス、同廿三日官兵川尻ヲ涉ントス、我隊

一分隊ヲ引率シ外ニ水引三番小隊一分隊ト共ニ猫嶽ヲ取リ、此險ニ抛ラント進ミシニ、早ヤ官軍ノ為ニ取ラレ山頂ヨリ吶喊進撃ス、此時我諸隊各所ニ散乱タリ、隈城本道ヘハ中山・貴嶋自ラ兵ヲ引率シ、縦横衝突或ハ切入リ或ハ放銃或ハ敵ノ背後ニ廻リ、奮戦スルト雖トモ我軍遂ニ利アラスシテ引退ク、我隊ハ既ニ残兵十余名ヲ纏メ中山・貴嶋ノ隊ニ合セントスルニ、其隊モ又利アラスシテ引退クヨリ山中ニ潜伏セシニ、遂ニ官軍ノ取囲ム所トナリ、週日ヲ経テ出山シ第三旅団ノ軍門ニ降ル、

明治十一年七月

鹿兒島県下

松山助ノ進

一四五 泉隼太上申書

戸長宇都恒藏ノ誘ニヨリ五月十二日宮ノ城郷宮ノ城ヲ出立、隈之城ノ内向田ヘ至リ勇義ニ番小隊半隊長トナル、同所小学校ヘ番兵ス、其後東郷ノ内横坐越ヲ番兵スルコト四五日位、(出水カ)泉ノ内高尾ヘ官兵出軍ノ聞アルニヨリ六月十五日阿久根郷田代ヘ番兵ス、六月廿日同郷桑原ノ城ノ味方敗軍ノ風説ヨリ東郷田海村迄引揚、翌廿一日高城ヘ出張、同所モ官軍進撃ニヨリ竹林ヘ伏兵、防戦スト雖モ

(年月日脱)

二宮金之助

遂ニ不利、平佐郷へ引退、同郷皿山ノ麓川添へ壘ヲ築キ守衛ス、六月廿三日向田ノ味方敗ノ報知アルニヨリ樋脇ノ内楠本村へ退キ一泊、翌廿四日官軍四方ヨリ進撃、此時味方散乱、同日横川へ至リ、踊・都ノ城・宮崎ヲ経佐土原ニ至ル、病ニ罹リ入院、平癒後給養方ノ命ヲ受ケ周旋、七月九日延岡ノ内永井村ニテ降伏ス、

明治十一年三月
鹿兒島県
泉隼太

一四六 二宮金之助上申書

戦地景況ノ概略

明治十年三月下旬鹿兒島県大口郷ニ於テ九番大隊七番小队ニ編入セラレ、四月十日比大ニ熊本県八代ニ戦フ、官兵震懼支ルコト能ハズ、胸壁ヲ捨テ潰散ス、我兵勝ニ乗シテ勇進奮闘、敵兵数拾名ヲ斃シ火ヲ八代ニ縦ツ、薄暮ニ到テ我兵彈藥空乏、聊サカ苦戦トナル、余ハ本日ノ戦ニ於テ銃創ヲ受ケ、人吉病院ニ送ラル、其後身戦地ニ非サレバ戦ノ景況如何ヲ知ラス、九月下旬諸道ノ我軍大ニ敗衄スルニ及ビ、日州ニ於テ官兵ニ困マレ、終ニ兇器ヲ脱シテ軍門ニ降ル、

一四七 大村形右衛門上申書

戦地景況概略

明治十年四月廿一日頃甌島ヲ笈シ、同廿五日人吉へ到ル、是ニ於テ第十三番大隊二番小队兵士ニ編入セラレ、爰ニ守兵スルコト一週間、夫ヨリ我隊ヲ鹿兒島県下飯野村へ繰出シ、番兵スルコト一週間、五月九日福山へ出張、此ニ於テ隊号ノ編制アリ、我隊切隊二番小队ト改称ス、同二十八日午後四時頃官軍襲来リ戦フ、未タ成敗決セサルニ一時兵ヲ牧野原^(牧野原之)へ引揚ケ休兵ス、即夜十二時福山へ進撃スルニ、凶ラスモ官軍何方へ繰出タルカ、奔散ノ跡ニテ戦ハスシテ我守地トナシ、所々ニ壘ヲ築キ守兵スルト久シ、六月八日病氣相煩、本営ノ令ヲ受ケ同十一日帰宅、七月十日帰順ス、

明治十一年六月

鹿兒島県

大村形右衛門

一四八 神宮司純當上申書

戦記

去歲西郷隆盛等ノ国難ニ際シ日向地方戦争ノ節、旧五月廿八日佐土原郡代所ニ於テ郡長新納潜藏ヨリ申付ニテ、今般細島江差越シ、佐土原兵隊第五番ノ小隊長ニテ出張致候様致承知候間、一応断申立候得共押シテ出張スヘクトノ事ニ付、同六月三日ヨリ差越、同五日細島江着、人数八拾人一小隊ニテ固メ居候処、即日本営ヨリ達シニテ延岡轟之浦江固メ候様指令有之、依テ即時ヨリ同所江差越守備ヲ設ク、然ル処追々戦状モ相迫リ富高新町モ敗レ、再ヒ延岡本営ヨリ指令ニテカド河江差出スベク申来候ニ付半隊長甲斐彌太郎半隊ヲ引テカド河ニ至リ、自ラ其半隊ヲ以テ尾末ニ赴ク、当所ニ於テ戦争、丸ケ嶋江引揚ケ、此地ニ於テ官兵ニ包マレ、遂ニ第四旅団ノ軍門ニ降伏仕候、右戦地之踏景ニ之レアリ候、以上、

明治十一年七月

鹿兒島県日向佐土原
神宮司純當

一四九 志々目眞幸上申書

明治十年二月十五日陸軍大将西郷隆盛等政府江諮問ノ筋アリテ上京ニ付随行ヲ乞ヒ、第二大隊七番小隊押伍ニ編入セラレ、街道大口筋ヨリス、隊長武郷兵衛ナリ、同廿

一日熊本川尻駅ニ着ス、同日午後五時比ヨリ百貫石ノ海路ヲ守、三月四日大津へ転陣、同七日田原口伊集院某ノ隊ニ交代ス、同日午後三時比攻撃、官軍斃ル、者野路ニ満リ、味方モ戦死・手負甚多シ、此地ニ昼夜連戦、同廿日田原口敗軍、植木駅ニ兵ヲ引揚ケ、此地ヲ防守ス、五六日ヲ過スシテ眼病ヲ煩ヒ、給養方ニオヒテ療治ス、肥後地惣軍引揚ノ時於矢部小隊ヲ中隊ニ分チ振武拾番トナリ、鹿兒島へ進軍上伊敷村ニ陣ス、此所ニオヒテ帰隊、玉里ノ上砲台ヲ守ルコト数日、於爰テ分隊長トナル、六月廿五日鹿兒島敗軍、惣軍帖佐・蒲生ニ引揚、此時半隊長トナル、夫ヨリ我隊ハ末吉郷へ転陣、某日大崎・百引へ進軍、味方大勝利ヲ得タリ、七月某日高崎江攻撃、此時右ノ胸ヲ打貫レ、都ノ城病院へ入院、夫ヨリ高岡・佐土原諸所へ転院、終ニ延岡永江村於病院旧七月十日軍門ニ降伏ス、

七月

鹿兒島県
第拾三大区小一区拾三番地
志々目眞幸

一五〇 草野兼固上申書

記

第式砲隊給養ニ而客年二月十七日鹿兒島ヲ発シ、熊本県下春日邑ニ到着シ、此時我隊ハ花岡山ニ砲台ヲ築キ管所江攻撃シ、數日ニ及ンテ川尻ノ味方敗軍ニ付矢部ニ曳揚ケ、同所ニテ解隊ニ成リ、自分儀振武大小荷駄付属ニ編入シ、同所ヲ発シ人吉ニ到リ、夫ヨリ鹿兒島県下伊敷邑ニ赴キ、同所敗軍ヨリ大隅国帖佐郷ニ曳揚ル、同所ニ於テ病氣相煩ヒ、高岡病院ニ被送入院ス、此時追々延岡^(長井カ)江ニ転院スル、未夕平愈セス、爰ニ於テ官軍ニ被取囲、夫レナリ降伏仕候、戦地ノ場所・日月等悉ク不詳、取覚ノ儘大略申上候也、

明治十一年七月

鹿兒島県下

草野兼固

一五一 讚良貞信上申書

明治十年二月西郷氏ノ事ヲ西陲ニ挙クルヤ、第二砲隊ニ編入シ驥尾ニ付キ、同十七日鹿兒島県下ヲ発シ熊本県下八代駅ニ到ル、此時我カ先鋒ト同県台兵ト戦端ヲ開キシ急報ヲ得テ、直ニ我隊ヲ発シ熊本城ニ向ハシム、先ツ距離ヲ計リ谷尾崎村・日向崎ニ砲台ヲ築キ連日戦フ、十余

日桶屋町ニ守兵シ、長六橋涯ニ墨ヲ設ケ數日連戦ス、後チ赤尾口及ヒ出町本道ノ砲台ニ於テ守戦ス、或日八代口ノ味方敗レ、城外ノ守兵ヲ解キ木山ニ引揚ケ、同所ニ戦イノ日亦御船口ノ我軍敗レ、我隊モ共ニ引テ川原ニ退ク、翌日午時比不意ニ敵兵我カ宿陣ニ襲ヒ来リ、防戦シ暫時ニ敵兵ヲ追散シ、大ニ之レヲ破ツテ其夜矢部ニ曳揚ケ、此際各隊ヲ編制シ隊号ヲ改ム、則チ奇兵拾二番中隊ニ編入シ、三日ヲ経テ人吉ニ引揚ケ、後チ日州口ニ進軍ス、四月中旬富高新町ニ到リ延岡ニ転ス、二週間余ニシテ八戸村上若ニ進軍シ、再ヒ延岡ニ引揚ケ、或日豊後口ノ敵ニ向ヒ大挙シテ排撃セント軍議ヲ決シ、直チニ豊後口ニ向ヒ進発ス、該地ノ内武田ノ山中ニ戦フノ時キ、鹿兒島ニ在ル我軍敗走シテ延岡ノ永井村ニ引揚タリト急報ヲ得テ、豊後口ノ我カ諸隊ヲ引テ延岡ニ退ク、此時各地ノ味方来集シ、猶決死ノ軍議ヲナシ、延岡本道ノ敵兵ヲ破ラント向フノ日、我隊ヲ以テ先鋒トナシ、奮戦中銃丸ヲ負ヒ、退テ該地ノ病院ニ至リ、療養中軍門ニ降ル、

明治十一年七月

鹿兒島県

讚良貞信

一五二 大塚又次郎上申書

紀事

明治十年二月陸軍大將西鄉隆盛將有所訟、率兵東上取路於我巢、池邊吉十郎聚同志議曰、公等欲遂平生之志唯此時為然、吾欲戮力於大將有所為、願公等何所決、衆奮請從、於是各集其鄉備行具集、於島崎村者凡四十許人、部勒為一隊以岩間小十郎為隊長、可兒才八副之、廿四日夜斃抵岩立村、会池邊牙營、明日聞城兵來伐、要之出町道不見敵、而退午時我軍將赴高瀬、池邊任余以東道探偵、以廿六日上途、廿八日至篠倉間道路梗不通、乃返抵阪梨、会土民蜂起破毀豪族・史家、乃避之阿蘇遣人間視鶴崎景狀、以報薩營留二旬余還、出於大津見薩隊長鎌田雄一郎告以所見聞狀、三月十二日復命、是時池邊建牙營於春日村、以余任分隊長、乃率卒兵十三人往帰本隊于三嶽既而赴田原代十一番小隊守焉、与官軍夾田而壘銃戰數日、我兵死傷頗衆、廿日雨我兵不復斃銃大呼以応之、敵兵謂火藥濕銃不可裝、以選兵數百揮刀來擊、我兵預裝銃以待之、已近叢銃齊斃、斃數十人、敵兵沮却、既而敵兵左透出背放火而進、会七本兵失守我兵腹背受敵、乃間道還須屋、居二日、進陣三嶽、當是時我軍南北則自小川至吉次

嶺、東西則自海浜至植木、連亘築壘以距外援、内則引伊芹川灌熊本城、城陷有日我兵勇氣自倍、四月一日吉次敗、官軍乘勢來攻、我兵乘壘拒之、敵兵不敢薄、瞰其稍懈、揀死士八人、潛出其橫吶喊而進、壘兵亦突出、左右角之敵兵駭潰、遂擊却之、居二日、敵兵來築壘于前峰又擊却之、自是敵兵不復薄、又數日輒陣野出、会河尻敗全軍退陣木山、乃拔營赴之、池邊說桐野利秋曰、方今之計非速逐御船・飯田山之敵以搥之、則勢有所不可僕為前驅、請君賜後繼、利秋許諾、十七日黎明分為二軍、一軍自本道攻御船、一軍攻飯田山、我隊亦在其中、至則敵兵既引去、乃輒赴御船、我隊留二日、乃抵御船於是兩道軍合既拔御船、而築壘于前後岡阜搥之、我隊即夜進陣高野村、高野村在御船北里所、二十日官軍大拳三面來攻、御船山野皆兵戰良久、衆寡不敵遂大敗走、敵軍急薄諸河、我兵游而渡、敵兵自堤上狙斃、無復虛丸、追擊至郡見阪、我隊戰且退、躡飯田山与諸敗兵会、退保矢部、既而輒陣于男成村、以是役多亡良也、衆議部勒為五中隊、我隊与十二番小隊合為第一番中隊、以岩間小十郎為隊長、河井昌一左小隊長、衛藤八郎次副之、可兒才八右小隊長、余副之、往成萬谷、居二日、得拳軍入於人吉之報、即夜拔營赴之、

路歷奈須嶺、時霖雨連日淖泥沒脛、抵尾前村士卒疲困莫能起、因留一夜、以廿八日達于人吉薩營以五木口戍兵寡、單使赴援、於是拈鬪我隊得之、五月三日斃人吉、置輜重於頭地、乃分兵為二隊、河井昌一將左、衛藤八郎次副之、可兒才八將右、余副之、左赴某所_{地名}、右赴中村、薩守兵皆新募不慣戰、統皆和製、一予概不過十口、而左右深山岑蔚中間帶一川、依川構寨、而不虞山上、我隊至之、明日候者還報曰、敵自山上來宜急為之備、薩隊長惶惑不知所為、為說宜上山拒之、遲疑弗決我隊起上高阜拒戰、既而敵兵下射川側寨、薩兵狼狽舍守而走退守椿、我隊陣平清以備應援焉、居二三日、官軍來擊椿兵敗走、我隊及薩兵在平清者逆擊走之、遂進復椿守之、我隊仍在平清焉、尋薩隊長大野某·伊地知某等率兵來援兵勢頗振、然其兵新募無統、隊分守左右山、月日_{月日}、官軍悉銳來攻、我隊赴援戰自辰至申我師善拒、既而敵兵為我援兵狀繞出背、疾發銃圍而進、我兵顧潰走諸壘亦相踵陷、大野慙憤叱咤、取敗兵止焉、拳杯屬余曰、始吾与人吉人約莫敢寸步退矣、而今亡狀如此、豈有面目之見人吉人、且拒、於此則輜重悉為敵之獲矣、余答曰、固也宜相与尽力以拒焉、既而諸敗兵稍稍來聚、於是築壘拋之、以地形不便明日退抵頭

地、檢兵所死傷及降者過半、於是薩兵分為二、一守本道、一赴野景烏帽子_(仰高帽子也)、我隊及人吉隊赴大原山、人吉隊當正面我隊分守左右翼、廿八日黎明官軍連發大砲圍而進、合戰至夜、明日會敵游兵橫擊、我兵顧動前面敵乘之而進、我兵不能禦、戰且退、聞山田·神瀨諸道軍亦皆敗、乃退入人吉、六月一日山田諸道敗軍入人吉、官軍追躡甚急、縱火市街乘勢薄諸河我軍爭濟溺者亡數、遂焚橋夾河而戰、敵兵連發大砲火箭燒沿岸人家、我軍率不能守、退拋大畑、我隊成大塚、居旬余、会吉田陷沒、乃退抵大口、与我諸隊合距守高隈山_(高隈之)、十八日官軍乘曉霧來襲、擊却之官兵益備大煩、我壘破碎無復完處矣、二十日夜復乘風雨來襲、巔壘陷、敵兵拋之下射銃丸雨注、我兵不能守、舍而走、敵兵縱火民家而進、天明池邊吉十郎·山崎定平等聞敗馳至、收散兵徇令曰、今日之敗自我而取之非自我復之、則亡面目以對薩人諸君其努力督兵返之、當是時我軍連戰困憊、丸所余人不過五六箇、相戒勿妄發、大呼馳下、敵兵披靡却數百步已而、左翼敗敵出我橫、我軍丸竭、終敗走、死傷數十人、余亦被創、於是遂入病院焉、從軫終至永井_(長井力)村、至是我軍糧丸無所余、士氣沮喪勢不可復燃、衆議曰、拼死於亂軍孰与從容就縛、具陳其事由而就國典、於是各

面縛詣軍門而降、実八月十七日也、

明治十一年七月念七

熊本県

大塚又次郎

一五三 柴善次郎上申書

明治十年二月十七日四番大隊吉番小隊給養ニ編入シ、鹿兒島ヲ発ス、各所ノ宿泊ヲ経テ同廿一日肥後川尻ニ至ルニ既熊本開戦、該所於テ糧食運輸等ニ専従事ス、宿泊スル兩日ニシテ植木方面ヘ進軍、延テ山鹿ニ至リ、尚彈糧ノコトニ奔走ス、居ルコト兩三日、然ルニ該方面ハ熊本ヲ距ル七里、倘彈藥運送淹滞スルアツテハ最困苦タルヘシ、仍小荷駄心得ニテ熊本ヘ出張シ、彈藥輸送スヘキノ旨本営ヨリ令ヲ受、即日該所ヘ出張シ各小荷駄ニ計リ彈藥分配、山鹿方面ヘ輸送スル屢ナリ、滞泊スル殆四旬余、然ルニ川尻方面矢防、^(矢カ)敗走スルニ随ヒ椎葉山ヲ経人吉ヘ出、夫ヨリ鹿兒島ニ至リ、尚彈藥製作等ニ注意セヨトノ令ヲ受、谷山郷ヘ工所ヲ設製作スルノ央、六月廿六日官軍海陸ヨリ進入、守兵潰走ス、自身指宿郷ヘ走り根占郷ヘ渡海シ都ノ城ニ至リ、同ク彈糧製作等ニ奔走ス、居ルコト旬余ニシテ宮崎ニ至ル、不日ニ都ノ城敗レ、追々官

軍來進、高鍋・美々津ノ各所連々敗走、終延岡永井村ニ於テ八月十九日軍門ニ降ル、^(長井丸)

十年第七月

鹿兒島県

柴善次郎

一五四 木佐貫清八上申書

明治十年七月四日戸長ノ差函ニヨリ区内番兵ノ分隊長トナリ、盜賊・出火等警備ノ為張番仕候処、同月廿四日官軍進入ノ際直ニ帰順仕候間、戦地景況全承知不仕候事、

明治十一年七月

鹿兒島県

木佐貫清八

一五五 美代清容上申書

戦地景況概誌

明治十年二月十五日壹番大隊式番小隊給養方トナツト、^(チカ)鹿兒島ヲ発シ熊本県木留村ニ至ル、爾後月日不詳、雷撃隊大小荷駄付屬トナル、兩度ナカラ遙ニ戰場ヲ隔テ彈藥・兵糧運送スル而已ニテ、実地ノ景況全ク綴兼候、此段上申仕候也、

明治十一年七月

鹿兒島県

美代清容

一五六 園田秀里上申書

明治十年七月四日戸長ノ差函ニ依リ区内番兵ノ半隊長トナリ、盜賊・出火等ノ備警仕候処、同月廿四日官軍進入ノ際直ニ降伏仕候間、戦地ノ景況承知不仕候事、

明治十一年七月

鹿兒島県

園田秀里

一五七 永井喜之進上申書

戦地景況

明治十年二月四番大隊九番小隊ノ押伍トナリ、十六日大口街道ヲ発程ス、同廿二日熊本県下川尻駅ニ至ル、熊本台兵我先駆ニ発砲ス、我隊モ進撃テ城ヲ囲ム、城兵善ク防ク、勝敗決セス、然ルニ官兵植木駅ニ押シ奇ルノ報アリ、同日午后三時比我隊村田三助隊ト合セテ西坂ニ至リ、邀撃テ之ヲ走ラス、官軍火ヲ植木駅ニ縦ツテ走ル、我軍大久保村へ引揚、爰ニ宿陣スルコト二日、廿五日当所ヲ発シ山鹿ニ到ル、城原村ニ守兵ス、三月一日山鹿ノ諸軍南ノ関ニ向ハシム、我隊ハ岩村口ヨリ進ンテ平山村ニ抵ル、官軍已ニ該地ヲ扼シテ防禦ス、我軍猛戦シテ之ヲ破ル、長駆シテ板橋村ニ到リテ止マル、夜本道ノ砲声遙カ

ニ後ニ聞ユ、故ニ退テ岩村ニ至ル、敵兵既ニ入り保テリ、別府隊・伊東隊及ヒ飢肥ノ一小隊直チニ戦フ、辰ヨリ未ニ至ル、此時本道ノ軍既ニ山鹿ニ退ク、三月十二日数百ノ鎮台兵寄セ来リテ防戦スト雖トモ衆寡敵セス、一時引揚ケントスル処ニ味方ノ援兵馳来リ、齊シク攻撃ス、官兵終ニ敗レテ引退ク、午后二時比ニ至リ尚ホ近衛兵来ツテ復タ戦フ、我軍敗レテ山鹿町口迄引揚タリ、同十五日黎明官軍大挙シテ来リ攻ム、我軍邀撃テ利アラス、遂ニ潰乱ス、二十一日田原坂ノ味方敗レ、令ニ因テ鳥ノ巢ニ退ク、且日隈府へ陣ス、三月三十日飢肥隊・貴島清二隊官軍ト戦ヒ敗走シテ隈府町口ニ退ク、我隊援テ右翼トナリ、直チニ撃テ之ヲ走ラス、四月八日官兵復タ来リ攻ム、終日奮戦、支エステ鳥ノ巢ニ退ク、此時当所戦ヒ酣ナリシカ、水間新七郎隊ト合セ抜刀シテ切込ミ、中尉一名・兵卒ニ拾余名ヲ斃ス、十四日大津ノ味方ニ合セテ枯木ニ休兵ス、翌日官軍大津ニ来リ、我軍ノ各壘ニ逼ル、大ニ奮テ防戦ス、我隊左翼ヲ逸テ敵ノ背後ヲ撃ツ、官軍支ヘス潰走ル、追撃シテ銃器・彈藥余多分捕ス、此ニ守兵スルコト四五日、全軍矢部ニ引揚ヘキノ報ヲ得テ、廿二日比矢部ニ到ル、爰ニ於テ隊制アリ、我隊奇兵十二番中隊

ト改称ス、旧三月十七日延岡ニ至ル、市街ニ抛リ近接ノ
要地ヲ守ル、旧五月八日赤松峠ヲ守ル、西郷氏再ヒ鹿兒
島へ襲来ニ付之ニ従ヒ、三田井口ヨリ米良ヲ歴テ須木郷
ニ出、旧七月廿四日鹿兒島ニ至ル、城山ヲ根本トシテ
所々ニ戦ヒ、城山陥ルノ日旧八月十八日軍門ニ降ル、

明治十一年七月

鹿兒島県下第三大区八小区

永井喜之進

一五八 長崎道義上申書

戦地略記

明治十年二月第五大隊三番小隊ニ編入シ、西郷隆盛等ニ
隨行シ、同十七日鹿兒島県下ヲ発シ、出水米津ニ到リ海
ニ航シ、同廿一日熊本県下松橋ニ着ス、既ニ昨廿日ノ夜
熊本鎮台ヨリ兵ヲ発シ我軍ノ先鋒ニ襲ヒ来リ発砲セシヲ、
我軍直ニ応シ敵兵追散シ、伍長某ヲ生虜糾問スルニ、城
中ニ於テ戦鬪ノ備最モ敵ナリト、故ニ我軍ヲ進メ熊城ニ
近キ時機ヲ計ランコトヲ議ス、全軍之レニ決シ、其夜午
後第九時松橋ヲ発シ熊城ニ向ヒ進ム、同廿二日朝天安政
橋ヲ過ル時砲台ヨリ劇発ス、我五番大隊ヲ先鋒トシ、之
ヲ指揮シ城門ノ前面ニ進ム、兵勢城台蹂躪セント奮進、

先ヲ争ヒ近クト雖トモ素ヨリ敵然タル城壁守備至ラサル
ナキ故ニ破ル能ス、終ニ薄暮ニ至リ兵ヲ白川ニ揚ク此日我隊
ナシ死傷、敵ノ援兵植木駅ニ来ルヲ、我五番大隊二番小隊ヲ
急ニ馳セ不意ヲ衝キ破ラント進ミ向フ、戦鬪暫時ニシテ
敵軍ヲ破リ、連隊旗ヲ採リ及ヒ銃器・彈藥ヲ得ル無數、
敵許多ヲ斃ス、猶植木ノ陣ヲ破ラント進ミ向フニ、敵兵
既ニ高瀬ノ陣ヲ退ク、依テ南ノ關ノ兵ヲ襲ハント山鹿駅
ヲ過ルニ、高瀬ノ方位ニ当リ砲声劇発スルニ、速ニ路ヲ
転シテ該地ニ進向ノ時、木ノ葉ニ戦フ敵ヲ討ント、左半
隊ハ背後ヲ突キ、右半隊ハ横撃センコトヲ計リ直チニ兵
ヲ進ム、衆憤勵シテ進軍ス、敵狼狽シテ本営輜重ヲ捨テ
敗散スルヲ捨余丁追撃シ、銃器・彈藥ヲ採ル、伏戸路頭
ニ充チ流血沢畔ニ迸リ、味方兵勢大ニ培ス、益奮ヒ守兵
ヲ張ラントスルニ、植木ニ引揚クベシト本営ヨリ令ス、
同廿六日山鹿ニ進ミ、翌黎明敵兵襲来ル、我隊正面ニ備
へ烈戦數刻ニシテ敵軍ヲ破リ、縦横排撃殺傷無算、彈藥・
銃器等ヲ採リ尾撃ニ里余、斃敵百六拾余名此時味方ノ死傷僅
カニ拾六名ナリ
直ニ守兵ス、三月四日山鹿ノ総軍南關ヲ進撃ス、兵ヲ二
手ニ分チ本道及間道ヨリ進ミ、転々之ヲ撃破シ永野原ニ
戦フ、于時田原破ルニ依リ一二小隊応援ヲ来乞ノ報知誤

聞シテ、本道ノ総軍ヲ山鹿ニ引揚ケ間道岩村ニ戦フ、我軍大ニ利ヲ得ルト雖トモ一路進ム能ハザルガ故ニ復引テ山鹿ニ揚ク、我隊志々岐原ニ向ヒ墨ヲ築テ守兵ス、同六日敵我壘ニ来リ攻ム、防戦スルニ抜ク能ハズ、將ニ退キ走ラントスルノ機ニ乗シ、抜刀シテ敵中ニ入り四拾余名ヲ斃ス、敵大ニ潰ヘ何ソ路ヲ撰フニ暇アラズ、数丈ノ高岩ヲ臨テ走ル、我兵岩上ニ到テ眼下ノ敵ヲ狙撃シ乍拾拾余名ヲ斃ス、同十二日城原ノ味方苦戦スルノ報アリ、之ニ応援ス、抜刀奮戦撃テ之ヲ走ラス、此日隊長村田三介債、銃丸ヲ負テ死ス、同十五日敵兵急ニ我軍ノ城原ニ襲ヒ来リ、苦戦スト、故ニ我カ右小隊ヲ以テ之ヲ援フ、共ニ接戦シテ追走スルコト二十余丁、直ニ兵ヲ揚ケテ守備ス、同廿一日我植木ノ守リ敗レ山鹿ノ我軍応援ヲ出スノ時、兵員少クシテ此地ヲ守ル能ハス、全軍ヲ揚ケテ鳥ノ巢ニ退ク、我左小隊ハ植木ヲ守リ、右小隊ハ南田嶋ニ進シテ壘ヲ守ル、今夜植木台場ニ代リ守備ヲ嚴ニシ固守ス、爰ニ防戦スルコト廿余日ニ及ヘリ、我左小隊ハ南田嶋ニアリ、鳥ノ巢方面ハ山鹿退陣ノ後チ空ク十日間ヲ送り、或日敵兵南田嶋ニ襲来ル、我軍苦戦スルヲ一分隊ヲ分ツテ之ニ援隊トナシ、憤戦シテ敵ヲ破リ廿余丁尾撃ス、或日鳥ノ巢ノ我軍兵員少

ク故我隊ヲ分ツテ援隊トス、此際八代モ敵軍上陸スルニ依リ邊見十郎太・淵邊郡平等兵ヲ募リ来テ、爰ニ戦ヒ數勝敗ス、一朝川尻ノ我軍利アラスシテ熊本城圍ヲ解テ総軍ヲ木山・大津ニ引ク、四月十四日我右小隊ハ永峯ニ退キ、鳥ノ巢方面ハ大津ニ退ク、我左小隊ハ大津ニ在陣スル故ヘ該地本營ヨリ神速同所ノ左小隊ト合スヘキ報ヲ得テ、其夜時ヲ移サス大津ニ向テ発ス、我隊鶴崎街道ヲ守リ、敵軍隈府・鳥ノ巢・植木ノ軍ヲ合シ大挙シテ襲ヒ来ル、我軍守備嚴ニシテ抜ク能ハス、后チ我總軍矢部ニ引揚ク、夫ヨリ隆盛等策ヲ変シテ椎葉山ヲ越ヘ、人吉・江代間ニ衆ヲ纏メ軍ヲ分ツテ二手トナシ、奇兵ヲ以テ豊後地ヲ衝カシメ、外隊ハ大口或ハ鹿兒島ニ向ハシム、之ヨリ先キ矢部ニ於テ隊号ヲ変制ス、其法大略前ノ隊順ヲ以テ一二ヲ定ム、鳥ノ巢・隈府方面ヲ奇兵ト称ケ、植木・田原ヲ振武トシ、木留ヲ行進トシ、熊本・川尻等ヲ干城(鎮軍力)トシ、建宮ヲ正義トシ、我隊ハ奇兵十番中隊ト改称ス、我隊江代ヲ発シ、諸所ヲ経テ日州富高新町ニ至ル、即日細嶋ニ至ツテ守兵ス、或日延岡ニ向テ発ス、爰二十余日休兵ス、此時人吉本營ヨリ我中隊長神宮司助左衛門并ニ別府九郎ヲシテ鹿兒島ノ景況ヲ觀スルニ、人民戦ヒノ為

糧食乏シク飢餓旦夕ニ迫リ、実ニ現今ノ危窮鹿兒島ニ在リ、之ヲ救ハンスンバ不義也、速カニ豊地ノ全軍ヲ揚ケ大挙シテ鹿兒島ノ敵兵ヲ驅リ、根ヲ固フシ再挙シテ肥豊ニ出ント、或人曰、今此大軍ヲ如何ニシテ動かスコトヲ為シ、豊地ノ全軍ヲ揚ケ鹿兒島ノ敵ヲ驅ランヨリ寧口死カヲ尽シ兵ヲ進メテ馬関ニ迫ラハ、鹿兒島ノ敵ハ刃ヲ不用ニシテ自カラ退カント、神宮司・別府等鹿兒島ノ情実措クニ不忍ヲ以テ乞テ各其隊ヲ率ヒ鹿兒島ニ向フ、五日程ニシテ鹿兒島県下吉野村中ノ上別府ニ達ス、直ニ神宮司・別府等謀テ県下飢餓ノ窮民ヲ賑撫ス、翌日神宮司自カラ地形ヲ撰シテ、我隊福昌寺山ニ至テ壘ヲ築テ堅ク守兵ス、此地愛宕山ト相對シテ距離僅カ五六丁ニ過キス、敵ノ柵ハ眼下ニ在リ、互ニ狙撃ス、旧五月五日未明敵兵襲ヒ来ル、頻リニ我壘ニ迫リ、我隊能戦ツテ敵拾余兵ヲ斃ス、敵軍辟易シテ退ク、我兵死傷ナシ、爾后度々襲来スト雖トモ守備嚴ニシテ抜ク能ハス、六月廿三日敵兵重留ニ上陸、窃カニ忍ンテ吉野ニ出、秘軍前後防ク能ハスシテ退ク、翌日我兵大挙シテ進撃、雀ヶ宮・桂山等ヲ取返ス、翌日未明又敵兵谷山ニ上陸シ洞橋(洞橋力)ノ我軍ノ背後ヲ衝キ、我軍憤戦、抜刀縦横接戦、時ヲ移スト雖トモ遂ニ

衆寡不敵、悉ク之ニ死ス、生帰スルモノ僅ニ二三名、此トキ紫原ノ我軍モ不利、各隊絞兵ニシテ之ニ応援ス、我中隊武岡ニ応援、両軍交々一壘ノ南北蟻付シ烈戦殆ト田原・植木ノ上ニ出ツ、此日雨盆ヲ覆スカ如ク、我兵過半戦地ニ斃レリアラス、敵兵応援繼テ、我兵終彈藥ニ竭キ水上坂ニ退キ坂本村ニ帰陣ス、同廿五日出水ノ敵兵紫尾山ヲ越ヘ、郡山郷ヲ經テ川上街道ヨリ我軍ノ背後ニ出ツ、我軍前後ノ敵ヲ防ク能ハス、兵ヲ揚テ吉野ニ退ク、敵ノ通路ヲ絶ント疾ク馳テ進軍ス、兵糧食・彈藥等ヲ得タリ、爰ニ於テ出水・鹿兒島ノ敵兵ト合シ吉野ニ襲来ルヲ能ク防戦シテ、直ニ抜刀憤戦シテ敵ヲ催馬楽ニ馳コト里余、此時右翼小隊長林宗九郎重創ヲ受ケ、我隊卒神田幸之進數度ノ戦功アルヲ撰抜シテ中隊手トナリ、此日奮進、先鋒ニ驅ケ戦地ニ斃ル、爰ニ防戦兩日間、我軍ノ死傷最モ多シ、時ニ入来ノ敵兵我背後ヲ絶ントスルノ報アルニ依テ振武隊ハ蒲生ニ向ケ、行進及ヒ我奇兵ニ中隊ヲ加治木ニ退ケ上別府川ヲ境ヒシテ防守ス、須臾ニシテ敵兵海陸ヨリ大挙シ来リ、川隔テ戦フ、于時敵兵數根・福山ヨリ襲ハンコトヲ知り、速ニ兵ヲ引テ數根ノ海岸ニ守備ス、三日ヲ經テ来リ告クル者アリ、日、敵兵垂水ニ上

陸シ窺ニ都城ヲ襲ハントスルノ勢ヒアリト、其夜直ニ兵ヲ馳テ末吉ニ至ル、七月六日敵兵百引・市成ヲ間ニ襲フ、振武隊八百引ニ向ヒ、我奇兵市成向テ兩道ニ進撃ス、之レ則チ敵ノ勢ヒヲ裂カシテ計レリ、此日既ニ敵兵市成ノ要所ニ抛リ陣ス、我軍枚ヲ合シテ突起勇進シ、柵ニ近クト雖トモ敵ニシテ破ル能ワス、空シク引テ恒吉ニ退ク、百引ニ戰フ我軍敵ノ牙營ヲ乘リ取り、大砲二門及小銃・彈藥・器械ヲ採リ大ニ勝利ヲ得タリ、此時會計大尉某・同軍曹某二名ヲ生虜ル、七月中旬敵兵大崎ニ在陣スルヲ襲ント議ス、此夜暗黒咫尺ヲ分タサル故ニ土人ヲシテ教導^{導カ}トナシ、敵營ニ近クト雖トモ要害嚴肅ニシテ侵入スル能ワス、夜ニ入り今尾ニ引揚ク、翌朝天再ヒ向ツテ大崎營ヲ不意ニ衝ク、敵兵防戦ノ術ヲ失シ大ニ狼狽シテ散走ス、尾撃里余ニ至ル、此時敵營ニ在ル日誌ヲ採リ始終ヲ知ルノ便ヲ得タリ、其他要具數品ヲ捕ル、翌日我兵引テ末吉郷ニ泊ス、或日敵兵福山ニ襲フ、我隊ハ該地ノ本道ニ戰フ中チ、味方敗レテ通山ニ退キ、後チ財部ニ陣ス、七月下旬敵兵上庄内大峯ニ入ル、疾馳テ之ニ向フ、敵陣遙ニ高野ニ在リ、敵ニ壘ヲ築キ我カ兵近ツク能ハス、故ニ再ヒ兵ヲ末吉ニ引揚ク、三日ヲ経テ又岩川ニ襲フヲ速

カニ我隊ヲ斃シ、此時邊見十郎太雷撃隊ヲ率ヒ來リ、我奇兵ニ中隊及ヒ行進隊ト併セテ奮戦ス、爰ニ我半隊長白石八次郎銃創ヲ受ケ、都城病院ニ送ル、官軍山ヲ擁シテ進ム能ハス、又末吉ニ退陣ス、翌日未明敵兵我カ不意ヲ襲フ、戰中彈藥竭キ敗レテ都城ニ退ク、此地既ニ敵ノ有トナリ、四面至ルノ地ナク山間ヲ經テ^(三股カ)三保ニ逃ル、我隊僅カニ二十余名ニ過キス、山ノ口ニ迫リ來ルヲ、我隊及ヒ奇兵六番中隊ト共ニ飢肥境ニ退キ橋ヲ落シテ守兵ス、又板屋ニ退キ學貫ノ山野ニ抛ル、爰ニ於テ我中隊長神宮司助左衛門・別府九郎等自ラ地形ヲ撰ヒ柵ヲ敵ニシテ守兵ス、此日官軍襲來、則チ我隊柵前ノ茅野ニ潜伏シテ敵ノ不意ヲ撃ツニ、敵兵直チニ拔刀憤戦、敵ノ先鋒數名ヲ斃ス、我中隊長自劔ヲ振り隊下ヲ指揮シ、衆ヲ奨励シテ先鋒ニ進ミ、鯨声ヲ拳テ疾ク馳セテ之ヲ追フ、此時別府九郎奇兵六番銃創ヲ受ケ切齒扼腕、猶勇進スト雖トモ山之口ノ我軍敗レ學貫ニ退ケリト、故ニ我隊モ同シク引テ清武ニ退ク、即日兵ヲ配賦シテ時雨ノ地ヲ守ル、敵大挙シテ之ニ向ヒ、必死防戦スト雖トモ本道ノ我軍破レ、終ニ防クニ術ナク宮崎ニ退キ、赤江川隔ツテ陣スルコト數日、加治木隊ト壁壘ヲ連ネ哨線ヲ張り防守ス、或日我カ

倉岡ノ軍敗レ、敵兵我軍ノ背後ニ出テ、防ク能ハスシテ辛シテ海岸ヲ伝ヒ佐土原ニ逃ル、同所ニ戦フ利アラスシテ美々津川ヲ渡リ山林ノ要所ヲ撰テ固守ス、然レトモ我隊モ兵員日々ニ減シ衰微ニ近クヲ以テ我隊ハ山陰ニ転守ス、敵兵襲来ル、必死ニナリテ憤戦ス、爰ニ於テ我分隊長種子嶋彦之丞銃丸ヲ負フテ斃ル、数刻ニシテ本道ノ我軍敗レテ門川ニ退キ、之ニ於テ防戦両日間、終ニ敗レテ中嶋ニ退キ、八月十四日無鹿ニ敵兵襲フト聞テ速カニ進撃ス、爰ヲ墳墓ノ地ト定メ鯨声ヲ揚テ我兵抜刀、急ニ逐テ之ニ迫リ十余丁尾撃ス、伏屍十余名、此戦ヒ中銃創ヲ受ケ、永井村ノ病院ニ退ク、八月十八日軍門ニ降ル、

明治十一年七月

鹿児島県

長崎道義

一五九 鮫島敬助・東清助連署上申書

明治十年鹿児島県ノ一挙ニ於ケルヤ、中原尚雄等当路官吏ノ内命ヲ受ケ、有功無罪ノ陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺スルノ件ニ基クコト豈ニ弁ヲ俟ンヤ、我力加治木郷ノ如キモ志アル者其事ヲ聞クニ及テ且ツ驚キ且歎シテ曰、嗚呼姦兇ノ忠直ヲ害セントスル何ソ其甚シキヤ、抑彼西郷隆

盛ノ如キハ密ニ勤王ノ志ヲ懷キ王室ノ陵遲ヲ慨歎シ、国有ルヲ知テ身有ルヲ知ラス、積年国事ニ勞スルノ力ニ由テ以テ乾綱ヲ再ヒ張ルコトヲ得タリ、然ルヲ今日ニ至テ之ヲ殺害スルトハ何等ノ姦計ソヤ、国ニ律アリ法アルヲ以テ之ヲ廟堂ニ以聞シ、君側ノ權姦ヲ除キ、天恩海嶽ノ隕埃ニ報ユルハ其レ此時ニ在カ、且ツ西郷ト死生ヲ共ニスルノ約アル者ニ於テハ傍觀座視スルニ忍ヒス、共戮力シテ以テ其罪ヲ問ント欲ス、是時ニ当テ西郷自ラ懇フル所口アラント東上スルニ依テ我輩ノ素志ヲ別府晋助ニ陳フ、別府亦我輩ノ愚哀ヲ嘉納シ、同志ノ士七百余名ヲ一大隊ニ編制シ、国分・山田・帖佐・溝辺等ノ兵ヲ以テ又一大隊ヲ編制シ、合シテ連隊トナシ別府連隊長トナリ、越山休藏ヲ以テ大隊長トナシ、柚木彦四郎ヲ以テ大隊監軍トシ、余ハ第一大隊一番隊ノ小隊長ニ擢ラレ、東清助ヲ以テ同隊ノ分隊長トス、二月十日先鋒一番大隊ノ命ヲ受ケ、同月十五日加治木ヲ発シ、途ヲ大口街道ニ取テ二月廿日熊本県川尻駅ニ着ス、該夜台兵我二番大隊ノ宿陣ヲ襲ヒ譚リニ発砲ス、我兵応砲セス、直チニ台兵ノ伍長一名ヲ生捕シ別府晋介本營ニ於テ之ヲ鞫問スルニ、鎮台ノ情実ト其行路ヲ遮リ謾リニ発砲スル所以ヲ以テス、台

兵応シテ日ク、該夜長官我輩ニ命スルニ川尻巡邏ノ事ヲ以テス、図ラサリキ如此ノ事アラントハ、然ルニ城中聞ク所口、不日西郷隆盛等大軍ヲ引率シ東上スト、故ニ山縣陸軍卿ノ命スル処口、兵事ニ関スル者ハ必ス軍備ヲ整頓シテ以テ非常ニ備へ、事アルノ日ニ当テハ其義務ヲ尽サスンハ有可カラスト、是ヲ以テ八幡山ニ地雷ヲ埋メ、一大隊ヲ以テ我カ隊ニ備フト云、同廿一日別府晋介衆ニ告ルニ此言ヲ以テス、衆皆奮激シテ日ク、彼レ吾カ情実ヲ問ハス、謾リニ発銃スルニ及テハ其曲已ニ彼ニアリ、吾之ニ応スルニ戦ヒヲ以テセスンハ不可也、如カス断然兵端ヲ開クニ然レトモ別府容易ニ許諾セス、同志ノ相集ルヲ俟ツコト暫時ニシテ西郷小兵衛等精兵一大隊ヲ率テ我陣營ニ着ス、相繼テニ番大隊モ亦着ス、於是別府晋介等相議シテ攻城ニ決シ、直チニ一番大隊ヲ二分ニシ別府自ラ率先、五十隊ヲ率テ高橋ニ赴キ百貫石ノ間ヲ守ル、同廿二日詰朝牙城ニ方リ砲声頗ル激烈、雷ノ霹靂スルカ如ク、是ヲ以テ直ニ斥候ヲ出スニ、我斥候花岡山ニ登リ俯シテ牙城ヲ臨ミ瞰ルニ、我兵蟻付シテ城ヲ囲ミ戦ヒ甚タ熾ナリ、故ニ帰り告ルニ其状ヲ以テス、別府其報ヲ聞き衆ニ謂テ曰、我將ニ攻城ニ趣キ瞬息ノ間ニ牙城ヲ拔ン

ト欲ス、故ニ彼ト鋒ヲ交ルニ当テハ咫尺ト雖モ逡巡シテ進マサル者ハ悉ク軍法ニ照スト、言終テ本妙寺ノ側ニ到リ、終日城兵ト戦ヒ、星ヲ瞻テ止マス、此日我カ大隊ノ七番小隊長宇都宮良左衛門八幡山ノ先鋒トナツテ進ミ、城兵頻リニ発砲スルニヨリ急ニ攻抜クコト能ハサルヲ怒リ、擲身進ンテ城門ニ迫リ其后チヲ知モノナシ、蓋シ其役ニ死セルカ、該夜三更ニ至テ植木ヨリ援ヲ乞フ、我輩三小隊ヲ率キ馳テ之ニ赴ク途、偶々村田三介ニ逢ヒ植木ノ景況ヲ問フニ、三助日ク、植木ノ戦ニ於ケルヤ頗ル大捷ヲ得、彼駭潰シテ退、我之ヲ追テ斬首若干并連隊旗ヲ得タリ、故ニ公等行クコト勿レ、行テ益ナシト云フ、コ、ヲ以テ転シテ出町ヲ守ル、居ルコト一日ニシテ同廿五日鶴崎街道ヲ守ル、同廿六日大隊長越山休藏来リ、告ケテ日ク、山鹿ノ如キハ最モ要害ノ地ナルヲ以テ彼ニ赴クヘキ命アリト、直チニ我三小隊ヲ率テ之ニ赴ク、日晚シ路遠キカ故ニ植木駅ニ一泊ス、其夜高瀬ニ方リ敵兵雲集スト諜知アリ、同廿六日味爽植木ヲ発シ安楽寺村ニ至ル比斥候馳来リ、告ルニ、敵ノ伏兵概略千五六百計リ川堤ニ在リト云、故ニ隊伍ヲ整へ号令嚴肅、進テ安楽寺ニ到レハ一面ノ渺地ニシテ敵我兵ノ進入スルヲ知ルヤ、万

銃音シク発ス、我兵寡単ナリト雖トモ死力ヲ以テ之ト戦ヒ一勝一敗、左翼ヲ衝ケハ右翼ニ突出シ、右翼ヲ衝ケハ左翼ニ突出シ、戦酣ナルニ及テ彈藥空乏、遂ニ包撃ニ逢ヒ進退維谷マル、時ニ衆皆奮激シテ曰ク、戦ヒ是ニ至テ何トモスル能ハス、若シ敗績ニ及テ退トキハ各隊ニ対シテ何面目カアラン、我輩ノ希フ処口、接戦死ヲ以テ之ニ当リ斃レテ後已マンノミ、於是越山休藏説諭シテ曰ク、死難キニアラス、死テ益ナケレハ一時退テ策ヲ更ヘ以テ再ヒ之ニ当ラハ、若シクハ全勝ヲ得ルニ至ランカ、衆其言ニ従フテ惣軍鹿子木ニ退ク、該夜桐野利秋・篠原国幹・池上四郎等其苦戦ノ報ヲ聞キ、大軍ヲ率テ馳セ来ル、該夜軍議合撃ニ決シ、桐野利秋ハ山鹿ニ至リ、廿七日大兵ヲ率テ三面ヨリ高瀬夾撃ス、敵モ其大兵ナルヲ以テ終日激戦ストイヘトモ互ニ勝敗ナシ、夜ニ乘シテ我カ兵植木ニ退キ塞壘ヲ築テ之ニ抛ル、居ルコト二日ニシテ三月三日援兵ト為ツテ木ノ葉ニ至ル、木ノ葉ノ戦ヒモ亦利アラズ、退テ田原ノ險ニ抛ル、本日七番小隊ハ吉次越ニ趣キ各隊ト連絡ヲ通ス、已ニシテ敵精銳ヲ悉クシテ襲来、其勢甚々熾ニシテ我兵一層猛奮返戦、遂ニ撃テ之ヲ走ラス、時ニ大隊監軍柚木彦四郎ハ七番小隊長宇都宮某前日ノ戦

ニ斃レ未タ隊長ナキヲ以テ自ラ隊長トナリ、衆ヲ励マシテ隊ヲ指揮スル所口彈丸頭ヲ貫キテ即死ス、同隊分隊長杉田傳右衛門モ奮戦シテ之ニ死スト云フ、同四日黎明敵大挙シテ田原ヲ攻撃ス、全軍塞壘ニ抛リ能ク拒戦スルカ故ニ敵兵進入スルヲ得ス、愈攻レハ愈之ヲ拒キ、彼我ノ死傷勝テ言フ可カラス、同七日河野主一郎我隊ヲ率テ西山ニ抛ル、同八日田原本通ノ右翼敗績ニ垂ントス、此時我隊西山ヨリ横撃大ニ敵ヲ敗リ、走ルヲ逐ヒ逃ルヲ追ヒ斬首若干、敵兵沮靡、死傷ヲ顧ミスシテ木葉ニ走ル、後二日ヲ経テ川村甫助隊ト交代、我隊ハ熊本ニ至リ、本營ヨリ六番大隊ト改メ直ニ高麗門ヲ守ル、居ルコト四五日ニシテ敵八代ニ上陸スルノ報至ル、時ニ嶋崎邑ノ守兵堀與八郎一中隊ヲ率ヒテ八代ニ赴ク、我隊転シテ島崎邑ヲ守ル一日、城兵俄ニ突出、我塞壘ヲ襲ハントス、我隊逆戦、直ニ撃テ之ヲ退ク、四月七日安政橋ノ戦其危キヲ以テ同隊半隊長福永十郎一分隊ヲ率テ之ニ赴ク、同十四日川尻方面ノ軍大ニ敗衄スルニ及テ全軍木山ニ退キ、戦ノ顛末ヲ本營桐野利秋ニ訴フ、時ニ桐野我輩ニ謂テ曰、敵若シ武宮ヲ取ルニ及ンテハ最モ扼要ノ地ニシテ我ニ便ナラス、急ニ進ンテ武宮ヲ守レト、副ルニ劍隊三小隊ヲ以

テス、我隊其言ニ從テ武宮ヲ守ル、居ルコト二日ニシテ河野主一郎大隊ヲ率テ来ル、是時中島建彦(健彦カ)ハ長峯ニ拠ル、故ニ之レト連絡ヲ通シ各胸壁ニヨル、同廿七日敵軍大峯シ長峯及ヒ武宮ニ逼迫ス、我兵邀戰大ニ敵ヲ敗ル、敵隊伍散乱、器械ヲ捨テ先ヲ争テ走ル、本日ノ戰ニ於テ山口県土川寄陽藏奮戰シテ斃ル、始メ陽藏ノ我軍ニ投スル所以ヲ聞クニ、明治九年前原一誠ノ乱ニ加ハリ、事成ラサルニ及テ一誠ノ諭ユル処、事既ニ茲ニ至ルト雖トモ好機ナキニ非レハ存シテ吾志ヲ継ヨ、余其言ヲ遵守シ素志ヲ遂クル事アラハ死シテ瞑スルニ足ルト云、衆議其志ヲ喜ヒ、西郷ノ本營ニ訴ルニ陽藏ノ言ヲ以テス、西郷其言ヲ聞テ曰ク、是即チ勇士也、宜シク共ニ戮力セヨト、故ニ我隊ニ編入セリ、本日御船ノ敗報至ルニ及テ全軍再タヒ木山ニ退キ、終ニ矢部ニ至ル、於是隊ヲ編制シテ中隊ト改ム、加治木隊ノ如キハ数々戰テ死傷多カラス、殘兵僅ニカ二百五十名ニ過サルヲ以テ一中隊ニ編制シ隊号ヲ振武十一番ト云フ、該地ニ於テ軍議割拠ニ決シ拔軍人吉ニ退ク、是時敵軍鹿兒島ニ進入スルノ報アリ、中島建彦振武隊ヲ率テ之ニ赴カントス、時ニ中島我輩ニ諭シテ曰ク、加治木・蒲生ノ如キハ咽喉ノ地ニシテ、敵軍若シ之ヲ壅

塞スルトキハ鹿兒島ニ進入ノ兵敵ヲ背面ニ受ルヲ以テ固ク守ラスンハアル可カラス、我輩其言ニ從ヒ一中隊ヲ二分ニシ、左小隊ハ蒲生ニ發シ、余右小隊ヲ率テ加治木ニ發ス、夜以テ日ニ繼キ二日ノ夜半ニ至テ加治木ニ着シ、諸道ニ胸壁ヲ築キ居ルコト五日可リ、軍艦入港、頻リニ民舎ニ砲發ス、故ニ軍艦入港スル毎ニ土民大ニ驚キ、老ヲ扶ケ幼ヲ携ヘ憂ヲ山野ニ避ク、先是別府晋介八代ノ戰ヒニ負傷、塩浸温泉ニ在リテ其創未タ癒ヘスト雖トモ加治木ノ景況ヲ聞クヤ、直チニ馳来リ、謂テ曰ク、姦兵無罪ノ良民ヲ苦ムルコト如此ナレハ民手足ヲ措ク所ロナシ、古ヘノ所謂防人ノ如キ者未タ嘗テ人民ヲ苦シメ毒ヲ州群(州郡カ)ニ流スヲ聞カサル也、三善清行ノ封事ヲ見ルニ始メテ宿衛豪橫ノ憂ヲ陣ス、然ルニ當時ノ朝廷之ヲ制スル能ハス、其失体万古大ヒニ慨歎スル処也、今又朝廷ノ兵員ニ列スル者如此ノ暴動ヲ行フトキハ、千載ノ後ヨリ明治ノ今ヲ論シテ其レ之ヲ何トカ云ン、実ニ方今天下ノ事言フニ足ラスト雖トモ姦兇權ヲ弄シ、天皇陛下ノ耳聞ヲ眩惑シ巴ノ私ヲ以テ彼我ノ曲直ヲ問ハス、謾リニ無名ノ師ヲ起シ民ヲ塗炭ニ苦シムルコト如斯ナルニ及テハ之ヲ伐ツヘキノ理義アルヤ、固ヨリ也、コ、ヲ以テ我備生民ノ為ニ

勵積努力、二三ノ姦臣ヲ除キ百度ヲ釐革シ民ヲ水火ノ中
 ニ拯ヒ、皇統一系千古不拔ノ基礎ヲ建テ、以テ歴世ノ
 洪恩ニ報シコトヲ欲ス、然ルニ我軍器械整ハサルカ故ニ、
 今日勇奮空拳ヲ以テ彼ニ當テハ徒ニ兵士ヲ損スルノ耳、
 思フニ鹿兒島集成館ニ在ル処ノ十二斤砲ヲ新田ニ備ヘ、
 戎器ヲ整ヘテ然シテ後チ戰フトキハ一戰以テ舟師ヲ覆シ、
 千百ノ兵ヲシテ悉ク魚腹ヲ飽シメント、平民ヲ集メ其身
 體剛堅兵役ニ堪ユル者二十五名ヲ選シ、其砲ヲ運搬ノ為
 ニ集成館ニ遣ハス、館ハ敵陣ヲ距ルコト三町ニ過スシテ
 實ニ死地ナリトイヘトモ民之レヲ憚カラス、直チニ之ヲ
 加治水送ル、未タ之ヲ砲台ニ備ヘサルニ軍艦亦入港、民
 家ニ流星ヲ発スルコト數十発、火ヲ三所ニ放チ、終ニ鹿
 兒島灣口ニ至ル、五月中旬別府晋介彈藥製造所ヲ設ケニ
 十ドイン砲ヲ熔造セシム、或日軍艦二艘入港、大ニ発砲
 ス、我隊モ之ニ応砲ス、薄暮ニ至テ出港ス、既ニシテ鹿
 兒島方面敗績スルニ及ヒ、行進隊モ退テ加治水ニ至リ、
 我隊ト連絡ヲ通ス、時ニ村田新八加治水ニ來リ、別府晋
 介ヲシテ我隊ヲ率ヒテ末吉ニ赴カシム、二日ヲ経テ末吉
 ニ着ス、居ルコト三日ニシテ振武隊凡テ末吉ニ集ル、此
 時敵軍志布志ニ上陸スルノ報至ル、六月三日黎明進撃ニ

決シ、我隊及振武十番ヲ以テ先鋒トシ、別府ハ銃創未タ
 癒ヘサルカ故ニ籠ニ乘シ隊ヲ率ユ、外十余中隊ヲ以テ後
 軍ニ備ヘ、途松山ニ至ル比ニ敵軍既ニ志布志ヲ退クノ報
 ヲ聞ク、一泊シテ惣軍岩川ニ退クヘキノ令アリ、直チニ
 該地ヲ発シテ之ニ赴ムク、途偶々敵軍月野村ニ進入スル
 ノ報ヲ聞キ、進ンテ月野村ニ衝突ス、敵壁ニ抛リ大ニ発
 銃スルヲ以テ勝敗決セス、味方死傷鈔カラス、該夜三更
 退テ岩川ニ至リ、滯陣一日ニシテ八日ノ夜岩川ヲ発シ、
 九日味爽ヨリ百引ノ敵軍ヲ襲フ、我隊ハ奇兵六番中隊・
 十四番中隊ト市成ヲ攻撃ス、本日ノ戦モ互ニ勝敗ナク兩
 軍共ニ退ク、我隊ハ恒吉ニ転陣ス、此時ニ當テ我隊ノ戰
 兵銃創ノ癒タル者ハ悉ク帰隊シテ兵員二百余名ニ至リ、
 二中隊ト編制シ隊号ヲ奇兵一番ト改メ、柚木正次郎ヲ以
 テ中隊長ト為シ柚木ハ八月十七日延岡ノ戰ニ於テ戰死セリト聞ク、同十一日大崎郷ノ
 敵壘ヲ襲ヒ激戰數刻、時ニ二番中隊長水間勘助大ニ奮激、
 自ラ戰士ノ銃ヲ採リ頻リニ発射ス、戰酣ナルニ及ヒ飛丸
 ニ中テ斃ル、本日ノ戦モ又勝敗決セス、該夜蓬原村ニ退
 ク、翌十二日黎明ヨリ隊ヲ整ヘ進撃セント再ヒ大崎ニ発
 ス、途敵軍ニ逢ヒ大ニ奮戰敵ヲ破ル、敵兵駭潰、死傷ヲ
 捨テ先ヲ争テ串良ニ退ク、本日ノ戦ハ頗ル快戰ニシテ軍

曹一名ヲ生捕シ都ノ城本營ニ護送ス、翌十三日凱歌シテ末吉ニ至ル、同十五日行進隊ノ援兵トナツテ福山牧ノ原ニ戦フ、利アラスシテ通山ニ退ク、本日ノ戦ニ於テ清助ハ負傷、都ノ城病院ニ送ラル、薄暮ヨリ財部ニ転陣ス、同十七日未明該地ヲ発シ援兵トシテ荒襲ニ至リ、払曉ヨリ雷撃・干城・正義・奇兵等ノ隊ヲ以テ斉シク荒襲ヲ攻撃ス、辺見十郎太之ニ将タリ、本日ノ戦利アラス、退テ胸壁ヲ守ル、同十九日我隊庄内ニ引揚ケ、同廿日再ヒ末吉ニ至リ二日休兵ス、敵岩川郷ニ進入ス、故ニ追撃セント同廿二日夜辺見十郎太雷撃・正義・干城・奇兵等ノ隊ヲ率ヒ、同廿三日東明ヲ俟テ三面ヨリ之ヲ攻ム、敵頻リニ発砲、彈丸雨注ノ如ク、敢テ少シモ撓マス、猶奮進スル止マス、然レトモ平嘯ニシテ斃ル、者無算、急ニ抜ク可ラサルヲ度リ、堤ニ抛リ送ヒニ奮戦スル比ヒ味方彈藥ノ便ヲ失ヒ、且ツ敵腹背壘ヲ堅フシテ終日ニシテ抜ク能ハス、止ムヲ得ス深更ニ比ンテ末吉郷ヘ引拳哨兵ヲ出ス、同廿四日敵兵曉天ヨリ大拳シテ衝突ス、適々本日都ノ城街道ノ戦利アラス、敵背面ニ出タルヲ以テ之ヲ支ルコト能ハス、^(三敵方)三侯ニ退ク、同廿五日清武ニ退キ、同廿八日清武ヲ発シテ宮崎川ニ抛ル、居ルコト二日、諸道ノ戦敗績

スルカ故ニ日州廣瀬川ニ抛ル、二日ニシテ敵軍攻撃其勢ヒ甚タ激烈、味方彈藥竭盡、之ヲ支ルコト能ハス、隊伍散乱聚合ス可カラサルニ至ル、余本日ノ戦ヒニ於テ四面敵兵ニ囲マレ、山野ニ潜伏スルコト大抵五旬余ニシテ鹿兒島城山陥没、西郷以下自殺ノ報ヲ聞キ、慨然トシテ天ヲ仰キ歎シテ以為ク、事茲ニ至テハ謀ノ出所口ヲ知ラス、依テ素懷ヲ陳述シ典刑ヲ仰カント面縛軍門ニ降ル、
實ニ明治十年、

明治十一年七月

鹿兒島県

鯨島敬助

東清助

一六〇 中山盛高上申書

明治十年二月陸軍大将西郷隆盛將ニ懇ル所アラント欲シ、兵ヲ率イテ東上ス、自ラ以為ク、大将ハ固ニ忠良ノ臣ニシテ天下ノ柱石、今此人ニ從フ勳王ノ義ニ於テ誤ルコト勿カル可シト、乃チ職ヲ辞シ隨行ヲ乞フ、同十五日第二番大隊大小荷駄方トナリ、鹿兒島県ヲ発シ、大口街道ヲ經廿一日熊本県下川尻ニ着ス、同廿二日図ラサルモ台兵我カ先驅ニ事アリ、戦ヒ始テ開ク、是ニ於テ彈藥・軍糧

ヲ調ヘテ大隊へ運送ス、同廿五日大小荷駄ノ營ヲ春日村へ移シ、又二本木へ転シ滞陣スルコト数十日、此際各隊山鹿・田原・木留其他へ出陣スルニヨリ彼地へ出張シ、田崎村へ彈藥製造所ヲ建設ス、又山鹿へ大小荷駄ヲ分置シ帖佐彦八之二出張ス、時二鹿兒島へ官軍襲来、悉ク海岸砲台ヲ破却シ県令大山綱良出京シタルノ報アリ、澗郡平・樺山休兵衛至急帰県ス、既ニシテ貴島清一大隊ヲ引率シテ熊本ニ至ル、桐野利秋余ニ托スルニ貴島隊小荷駄ノ事ヲ以テス、時二官兵八代ニ上陸、通路ヲ梗塞シ大挙熊本ニ衝入セント日ニ迫ル、或日桐野利秋・池上四郎余ニ謂ツテ日ク、植木・田原ノ戰報区々ニテ確証ヲ得ス、子等至急斥候トシテ来ルヘシト、乃チ植木ニ到ルニ田原諸所ニ於テ戰益熾ナリ、然ルニ植木ノ要地救応ノ兵ナク又小荷駄方ノ設ナシ、即チ還報シテ日ク、即今田原昼夜連戰、我兵勇猛ナリト雖トモ一勝一敗、事甚タ急迫ナリ、速カニ山鹿・木留ノ如ク出張本營ヲ設クヘクカ、而シテ大小荷駄ヲ分置セスンハ縦令ヒ彈藥・給糧ノ輸送アルモ之ヲ各所ノ戰地ヘ分配ヲ如何ンセン、且報知ノ齟齬スルハ蓋シ本營ナキニ出ルナラント云フ、於是乎中島健彦・貴嶋清植木ニ赴キ出張本營ヲ設ケ、又我小荷駄ヲ分置ス、

既ニシテ我田原ノ軍一旦敗走、故ヲ以テ山鹿ノ軍鳥ノ巢方位ニ引揚ケ、桂四郎・帖佐彦八等同所ヨリ歸リ至ル、桐野憤然トシテ来テ日ク、山鹿ノ兵ヲ引揚タルハ天下ノ敗ナリ、遺憾ノ甚シキナラスヤ、已ニ山鹿へ再挙進撃ニ決セリト、則桂・帖佐モ彼地ノ様赴クヘキト也、時二大田八郎鹿兒島ヨリ彈藥護送スル中途、八代ノ官軍二支ヘラレ彈藥ハ民家ニ隱匿シ僅ニ逃レテ来ルト云、三月卅一日頃桐野・池上日、深見有常ニ命シ一輪ヲ齎シテ帰県セシム、然レトモ中途ノ危難ヲ恐ル、顧フニ、官兵再ヒ鹿兒島ニ襲来スルヤ必セリ、宜シク台場及ヒ大砲ヲ修覆シ、前ノ濱其他海岸ノ要所悉ク兵備ヲ嚴ニシテ固守スヘシ、若シ猶ホ軍艦碇泊セハ交戰ヲ要シテ之ヲ擊碎シ、又彈藥製造所ヲ各郷ニ移シ尚盛大ニスヘキノ旨ヲ淵邊等へ告ケ、且ツ別府・邊見猶ホ県ニ在ラハ急速八代口ノ敵ヲ踏破リ、通路ヲ開テ熊本へ来ルヘキヲ報セヨト、即日二本木ヲ発シ、甲佐・原町・五家村ノ險道ヲ經テ人吉ニ到ルニ、別府等兵ヲ率ヒ来ルニ会ヒ、告ルニ右ノ情ヲ以テシ、直チ二鹿兒島ニ馳セ淵邊・右松等ニ報ス、淵邊日、已ニ別府・辺見及ヒ田畑・右松等ト屢會議シ、各郷海岸ハ勿論県内舉ツテ募兵シ、巡查ト称シ悉ク番兵ヲ置キ、事已ニ備ル、

然レトモ人吉方面ノ危地ニ兵ヲ送り銃彈ヲ給スルハ当地
ヲ以テ根拠ト爲サ、ルヘカラス、若シ兵端ヲ此地ニ開カ
ハ銃彈等輸出スルノ地ナシ、戰ヲ開ク難キニ非ストイヘ
トモ好テ之ヲ求ル、未タ全勝ノ在ル処ヲ見ス、今之ヲ不
顧シテ強テ此地ニ戰フハ快戰決死ノ外豈他アランヤ、故
ニ先ツ専ラ預防ヲ敵ニシ臨機以テ事ニ從フ、是レ良策タ
ラン、乃チ此由ヲ熊本々々營ニ報ス、熊本々々營又報シテ曰、
岩村某新々ニ鹿兒島県令ニ被任、付屬ノ官吏ヲ從ヘ不日
大坂ヨリ來県スト聞ク、必ス油断スヘカラスト、深見ハ
在県、不日ニシテ兵隊都合ノ爲メ大口ヨリ人吉ニ赴ク、
洲邊ト同シク在県松本某ト相謀テ、日二人吉及ヒ熊本ヘ
彈藥ヲ運輸セリ、或日加世田片浦沖ヘ蒸氣船一艘來着ノ
報アリ、相議シテ曰、今斯ル戰地ニ船ヲ寄スルハ不審ナ
リ、官兵我カ虚実ヲ窺フカ、將タ外国船到來スルカト、
即チ斥候トシテ寺田某ヲ遣シタルニ、英船支那渡海ニ風
波ヲ凌キ已ニ出艦セリト報ス、或日邊見十郎太ヨリ洲邊
ヘ急速人吉へ來会スヘキノ旨ヲ報ス、洲邊夜ニ入テ出発
ス、三日ヲ経テ余熊本ニ向テ発ス、吉田郷ニ至ルニ兵ヲ
熊本ニ繰出スヘキノ報アリ、右松等各郷ノ守兵ヲス、余
亦飯野・吉田ノ間ニ在テ其兵ヲ纏メ熊本ニ發遣、四月廿

五日頃人吉ノ内須惠ニ到ルニ桂四郎ニ會フ、桂曰、子熊
本ニ抵ルコト勿レ、洲邊モ人吉へ出陣スヘキニ非ス、至
急帰県ヲ達ラレタリ、郷田正之丞人吉へ出張、余帰県ス
ヘキニ議決セリト、余是ニ於テ桂ニ從テ鹿兒島ニ帰着シ
タルニ、田畑常秋ハ割腹シテ死タルト、旨意詳ナラス、
是時ニ當リ官艦一艘前ノ濱ヘ碇泊シテ内地ノ兵備ヲ窺フ、
爰ニ於テ我砲台顯然建造セントスレトモ迎モ一朝一夕ノ
能ク及フ処ニアラス、殊ニ彈藥製造所ヲ悉ク人吉・吉田・
吉松等ノ各郷ヘ移シ戰地ノ用意ヲ急ニス、偶々池上四郎
ノ飛輪到來ス、其文略ニ曰、我軍全ク彈藥欠乏、故ヲ以
テ川尻ノ軍守ヲ失シ、終ニ熊本惣敗軍ニ及ヒ各隊矢部ヘ
退ク、其混雜推テ可知、西郷ヲ始メ即今人吉へ転營ス、
此大敗タルヤ天下ノ耳目ニ轟キ、豈ニ遺憾ノ甚シキナラ
スヤ、我兵ノ挫折・勝敗ノ機既ニ見ハル(ヘルカ)、實ニ痛憤激烈
ニ不堪、苦心言語ニ絶タリ、然レトモ尚桐野利秋・仁禮
景通等止リテ矢部ニ在リ、大拳熊本ニ衝入血戰セントス、
希クハ大敗變シテ亦大勝ヲ得ンコトヲ、僕等已ニ必死ヲ
究ムト雖トモ天下ノ一人ヲ如何ンセン、慨歎限りナシ、
今頼ム可キハ纔二人吉ノ要地ニ拠而已、願クハ良策ヲ廻
ラシテ彈藥数万ヲ送ラハ諸將士大ニ力ヲ得、勇氣百倍セ

ン、且ツ鹿兒島方面ノ事ニ至テハ何レモ之ヲ努力セヨト、
 桐野利秋亦一書ヲ投シテ曰、熊本我軍川尻敗レシヨリ終
 ニ大敗ヲ生シ憤然スト雖トモ力用ユル所ナク、兵隊悉ク
 矢部ニ引揚タリ、時ニ四方ノ兵勢一口ニ群集シ、人皆始
 メテ我兵ノ多勢ナルヲ知り、勇氣尚凛々毫モ屈スヘキニ
 非ス、遂ニ割拠ニ決セリ、又曰、不日敵軍鹿兒島ヲ襲ト
 ノ確情ヲ得タリ、敵ニ海岸ニ備ヘ咫尺モ失フヘカラスト、
 時ニ桂四郎等相議シテ曰、当地銃彈殆ント欠乏也ト雖ト
 モ巡邏兵ヲ以テ前ノ濱及ヒ諸所ヲ固守ヘシ、且遠近ノ守
 兵ヲ蒲生郷へ集メ割拠ノ用意ヲ為ス務備ル、或日別府晋
 介加治木郷へ着シ、明日県下へ入ルト報ス、其夜深更ニ
 及テ官艦數艘不意ニ前ノ濱ニ襲来ルヲ報ス、直チ二庁下
 ニ至レハ官軍已ニ島津久光門前ヨリ県庁門ヲ始メ諸所ヲ
 固メ、庁ニ入ルコト不能、一分署ニ至リ桂・右松等ヲ問
 ヘトモ在ル所ヲ知ラサレハ如何スヘキナシ、尋テ伊敷邑
 へ到ルニ馬場長左衛門等尋テ来ル、松本等等人ヲ遣テ曰、
 早く遁レスンハ既ニ危カラン、今ヤ巡查・警部モ廃セラ
 レ、桂等ハ人吉ニ向テ潛行セリト、於是乎策ノナラサル
 ヲ察シ、窃ニ長左衛門ト同ク蒲生郷へ入ラント、吉田郷
 ニ至ルニ官兵亦守レリ、軼シテ嶮ヲ冒シ間道ヲ經テ蒲生

郷へ入ルニ亦同シ、終ニ藺牟田・大村・黒木ヲ經テ横川
 ニ至ルニ振武ノ兵一大隊屯集セリ、本営中島建彦(健彦力)・貴島
 清・山野田一輔・餅原正之進及ヒ別府晋介ト相会フ、桂
 四郎亦来会ス、互ニ事ノ成ラサルヲ笑フ、既ニシテ中島・
 貴島等ハ鹿兒島へ進軍セント吉田郷ニ向テ発ス、別府・
 桂ハ横川二本営ヲ居ヘ、伊東某ハ栗野ヨリ我兵ヲ引テ福
 山へ出張セリ、余ハ各郷ノ守兵ヲ祁答院へ纏メ鹿兒島戰
 争ノ緩急ニヨリテ進退スヘシト、同五月一日頃馬場等ト
 同行シテ曾木ノ内金山ニ至ルニ同所ノ守兵一小隊出兵ス、
 夫ヨリ黒木・大村ヲ經テ山崎郷ニ至ルニ二五小隊トナル、
 時ニ官軍出水郷ヨリ紫尾山ヲ越テ鹿兒島ニ進入スト聞キ、
 一時大村郷へ転ス、然ルニ官兵出水郷ヨリ兵諸所ニ発シ
 民家ニ放火セントノ巷説紛々タリ、祁答院ヨリ西目街道
 其他遠近ノ人民是カ為メ頗ル動揺、老ヲ扶ケ幼ヲ携ヘテ
 相奔逃ス、爰ニ於テ振武ノ營ヨリ人ヲ遣シテ曰、城山未
 タ抜ク能ハス、然ルニ官兵出水郷へ大挙シテ本道且紫尾
 山ヲ越テ鹿兒島へ進入スト、此時ニ当ツテ官軍我軍ノ後
 ヲ襲撃セハ窮迫拠ヘキナク進退惟谷ラン、貴島モ其方面
 へ向フヘキト雖モ即今当地ヲ遯ス可カラス、西目方面及
 ヒ宮ノ城方面ハ勿論出水へ兵ヲ発シテ固守スヘシト、十

一日暮ニ及ンテ俄ニ五小隊ヲ繰出シ、山崎ヨリ船路隈ノ城向田ニ達シ本道ヲ固守ス、各郷ノ守兵平佐・水引ノ間ニ稍々參着ス、爰ニ於テ殆ント三十小隊ヲ勇義隊ト称ス、兵士元来不練ニシテ、且和銃或ハ無銃ナルヲ以テ未タ実地事ニ耐ルノ如何ヲ保スル能ハス、時ニ阿久根郷へ上陸ノ官兵船ヨリ去レリト、邊見大口方面ニアリ、水保へ向テ進撃ス、出水郷へ屯營ノ官兵尙固守スルニヨリ出水・高尾野・野田ノ守兵憤然トシテ興起セント、即チ大斥候ヲ出シ、武元村へ大拳シテ出水籠へ夜襲シ、又米ノ津・(名瀨浦)名子浦ハ嚴守シテ官兵水保へ引退ク者ヲ要撃セン、敵ニ限ノ城・水引・西方等ニ備へ、暮ニ及ンテ窃ニ三小隊向田ヲ繰出、高城郷ヲ經テ阿久根ニ至ルニ官兵悉ク水保へ引揚タリ、邊見出水ニアリ、至急來会スヘキヲ報ズ、統テ高尾野ニ至ルニ軍艦一艘入港ス、故ヲ以テ海岸ニ守兵シ斥候十余名ヲ率ヒ出水郷ニ至ルニ邊見ハ(并良迫カ)イラ迫ノ軍危急ナルノ報ヲ得、急ニ之ニ馳ス、辺見隊小荷駄伊東四郎左衛門大口方面本營ト称シテ出張ス、此際辺見斥候十五名ヲ出スニ、軍艦一艘來着ス、我兵竹宮惟一・三原直記等九小隊ヲ以テ米ノ津・名子浦・(下知識カ)下知職邑ヨリ境ノ谷・萩ノ段・矢筈ヶ嶽等ノ守兵ニ合シ尙嚴戒ス、三日ヲ經テ

亦軍艦阿久根郷へ來港、則同所へ赴キ海岸ニ台場ヲ築キ四小隊ヲ以テ守ル、我兵砲発スルニ軍艦ヨリ数砲ヲ発シ、暮ニ及ンテ退港ス、出水援兵トシテ四小隊ヲ出シ、五月廿二日頃向田へ歸ル、金山ノ兵彈藥且携白砲十八挺製シ尙盛大ニス、時ニ有川・深見・松下等來テ下瀉ヨリ西目方面ノ彈藥・金円ノ事務ヲ司リ、横川本營ヨリ人吉へ送ルノ旨ヲ告ク、或日辺見・海江田某ヲ以テ兵ヲ促スニヨリ兵隊五小隊ヲ出シ白砲二挺ヲ送ル、仁禮景通大口ニ在リ、人ヲシテ來リ報シテ云、西目方面ハ戦地ノ背後トナルヲ以テ兵隊悉ク大口方面へ繰出スヘシト、余之ニ答ヘテ日、熊本戦地ハ官兵八代へ衝入セシヨリ終ニ大敗ヲ生シタルニ非スヤ、今鹿兒島ヲ保ツニ於テハ此方面尤要地ナリ、時ニ軍艦又水引郷ヲ窺フニヨリ京泊・高江等ノ海岸へ台場ヲ築テ守ル、爰ニ於テ西目方面ヨリ祁答院ニ至ル迄二十里余固守ス、同廿八日頃貴島清窃ニ通シテ日、城山拔能ハス、徒ニ困テ時日ヲ過ル、鬱々トシテ快ヨカラス、故ニ大拳シテ一時ニ拔ン、乞フ急ニ兵ヲ引テ來ルヘシト、乃砲隊等合九小隊ヲ率シテ串木野郷へ一泊スルニ、同郷小隊長池田正義・押伍奥田直五郎來リ、石川某ナル者性甚強情、郷内拳ヲ出軍イタシタルヲ惡ミ、官軍

ノ誘道探偵トナリ、猥ニ威力ヲ張り土民之力為メ大二困難ス、禍ノ起ル此一人ニ之レ因リ、人皆之ヲ惡ムニヨリ未然ニ処分セシコトヲ乞フトイヘトモ卒爾ノ処分決シテス可カサルノ旨ヲ達シ、同所戸長ハ預ケ置市来郷湊ニ至ルニ同郷正副戸長ト見得、兩名来テ四五名記載セシ名簿ヲ出シ、此者等密ニ官軍ノ探偵トナリ、嚮導ヲ謀リ情実ヲ内通シタルハ確然タリ、且市村ノ民舎ニ立入り威力ヲ以テ酒肴ヲ促シ、或ハ官兵不日攻入放火セント流言シテ土民ヲ擾乱シ利欲ヲ貪ルコト屢アリ、故ニ振武本營ノ令ニヨリ今爰ニ捕縛シ来レリ、処置如何スヘキヤト云ニヨリ、伊集院郷へ預置キ振武ノ營ニ指揮ヲ受クベキヲ命シ、六月四日頃鹿兒島伊敷邑へ着ス、振武ノ營ニ至ルヤ、中（健彦カ）島建彦・貴島清・山野田一輔・餅原正ノ進・北郷萬兵衛・園田武一・市来矢之助・武強兵衛・森権兵衛皆会ス、中島曰、始城山攻撃烈戦ニ及ブト雖ト毛胸壁敵ニシテ抜ク能ハス、実ニ遺憾ナリ、貴島曰、熊本ノ如ク対峙交戦、日ヲ曠フスル、則兵士倦勞セン、故ニ余ハ冷水口ノ間ヨリ城山ニ向ツテ一時ニ攻落サン、中島ハ下方面ヨリ応撃セハ如何ン、諸子異議ナクンハ行進隊本營ニ會議シ、大挙シテ速ニ勝敗ヲ決セント、中島曰、輕率ニ之ヲ攻撃セ

ハ死傷必ス多カラン、必勝ノ策アラスンハ我為ス能ハス、唯固守シテ變ニ応スルノ策ヨリ他ナシト議遂ニ決シ、進撃乃チ止ム、我兵ニ小隊内瀬山ニ守兵ス、同六日中島・貴島・北郷・園田・山野田・餅原等會議シテ大砲交戦セシコトヲ決ス、小銃隊ハ固守スヘシト、貴島ハ武岡台場ニ向カハント、我ハ冷水口内瀬山ヨリ和田上村カ屋敷上ノ原野ニ出テ、地利ヲトシ各所ニ台場ヲ築キ大砲・白砲都合二十二挺ヲ備へ、中島ハ本營へ居レリ、同七八日頃早天ヨリ城山夏陰ノ壁壘ヲ始メ其他及市中へ終日向ケ砲発、此日彈丸巨多ヲ費セリ、我兵即死二名、暮ニ及ンテ帰營ス、同十日比亦砲撃ス、振武ノ營ニ会スルニ谷山郷へ更ニ營ヲ設ケ、大兵ヲ留メ下瀉敵地トナラハ禍必ス大ナラン、縱令ヒ孤立トナルトモ二城ニ拠ル可キノ兵ヲ集ムヘク、且ツ地利尤頼ムヘシト議己ニ決ス、是時ニ当リ人吉ノ我軍忽敗軍ニ及ヒ兵隊大畑へ引揚ケ、西郷ハ飯野ニ向テ転營セリ、洩辺等戦死ス等ノ報ヲ得、衆皆之ヲ歎惜ス、則応援トシテ二小隊吉田郷へ向ケ繰出ス、是ヨリ先出水郷矢苦ヶ嶽等ノ戦争勝敗未タ決セス、互ニ固守ス、同十一日頃出水郷へ官軍海陸ヨリ大挙来リ撃ツ、我海岸

ノ兵廣瀬川ヨリ麓へ引揚拒戦、水惣敗軍トナリ、我兵紫尾山へ引揚タルト聞キ、則時宮ノ城方面へ崎元少一、西目方面へ中原勇次郎・池田某等斥候トシテ出張ス、兵隊二小隊宮ノ城へ向ケ入来街道ヨリ発シ、振武へ白砲五挺留メ、夜ニ入テ七小隊ヲ引テ発ス、発スルニ臨ンテ貴島尋テ来ルヘキヲ決シ、直チニ向田へ至リ、宮ノ城方面紫尾山ノ間道泊野村・上平川村等凡十小隊ヲ以テ之ヲ守ル、又阿久根へ三小隊ヲ発ス、市来某振武斥候トシテ来会シ、向田ヲ発スルニ臨ンテ深見亦来テ弾薬・金円ノ事件ヲ謀ルトイヘトモ今我軍事危急也、弾金ノ事ヲ謀ルニ暇ナシト、則三小隊ヲ將ヒ高城ヲ經テ同十三日頃阿久根ニ至リ、野田ノ境ニ配兵シ又不意ニ官軍ノ斥候ヲ襲ヒ一撃之ヲ走ラス、同十七日頃桑原城へ三小隊ヲ以テ守ル、官軍来リ攻ム、即チ交戦雌雄決セス、我兵地理ノ守ルニ不利ナルニヨリ山下村ニ引揚ク、同十八日宮ノ城方面紫尾山諸所ヨリ出水郷へ大進撃ヲ期シ、阿久根ヨリ高尾野へ兵ヲ発スルニ及ンテ軍艦一艘来港ス、故ニ四小隊ヲ以海岸ヲ守ラシメ、三小隊夜中桑原城ヲ繰出セシニ、発途遅刻ニ及ンテ野田ニ至ル頃ヒ天已ニ明ク、同所市坊ニ入ラントスルニ忽然官軍ト相会ヒ、

直ニ交戦忽チ官兵二名ヲ斃シ戦頗ル励シ、時ニ官軍側面ニ出砲発スルニ、我兵乱レテ退ク、中原勇次郎等奮戦衆ヲ励スト雖トモ終ニ支フル能ハス、敗走シテ桑原城ニ引揚ク、我兵死傷十名ニ出ス、同十九日四小隊ヲ以テ桑原城ノ左右ヲ守リ、又脇元街道・東郷横坐越・田代村ノ間道ニ守兵ス、同廿日貴島清上伊敷村ヲ発シテ来ル、軍艦一艘襲来ス、我兵三小隊ヲ以テ悉ク台場ニ伏シ上陸ヲ待ツ、官兵小舸ヲ以テ来ル、我兵誤テ砲発ス、軍艦ヨリ亦発セリ、夜ニ入尚砲撃シテ去ラス、時ニ宮ノ城方面紫尾山ノ敗聞アリ、依テ斥候ヲ出ス、又桑原城ヨリ野田へ大斥候半隊ヲ出スニ、同所へ官兵来リ攻メ、我兵前後ヲ包マレ、防戦暫時ニシテ本道桑原ノ兵ハ田代村へ聚合、遂ニ東郷へ走ラントスルニヨリ相良・松下等ヲ遣シテ其兵ヲ止ム、本道斥候隊ハ不意官軍ト交戦シテ阿久根へ引揚、死傷四五名ナリ、已ニシテ官兵警視隊出水ヨリ野田へ兵ヲ繰出ス、翌朝官軍阿久根へ海陸ヨリ進撃スルノ情ヲ探知ス、貴島云、海陸ヨリ進撃スルハ必然ナリ、軍艦去ラス、我兵和銃或ハ無銃ニシテ此地保ツヘカラス、依テ振武ノ兵ニ中隊引率シテ来ルヘシ、然ラサレハ兵ヲ出スコト能ハスト、夜既ニ明ルニ大小砲烈シク聞へ、貴島ハ直

子二帰ルヘシ、我ハ何ニモ險ニヨラント相分ル、時ニ官軍海陸ヨリ進撃、我兵防戦台場ヲ保ツコト能ハス、引退キ町口ノ橋ヲ隔テ烈戦スト雖トモ殆ント危シ、故ニ三小隊ヲ引テ塩濱ヘ赴クニ、終ニ町口破ル、高木・塚本・仁禮等兵ヲ繰止メ本道鷹ノ口旧街道ヲ守ル、副田・植村等新街道ヘ配兵、防戦スルニ官兵新街道ナル路下ニ出横ヲ打、亦ハ旧街道ニ兵ヲ進メテ迫ル、新街道ナリ、我兵ニ小隊勵シク防戦ストイヘトモ事既ニ危ク山手ニ引揚タリ、故ニ余隊ハ左右ヨリ囲マレタルヲ仁禮・高木・塚本等切抜ケ同シク山手ニ散走ス、時ニ中原・有馬某等来テ官兵海辺ヨリ我後ロヲ襲撃ス、恐クハ復囲マレント云フ、即チ斥候隊十余名ヲ引テ小松山ヘ向フト雖トモ慮シ難ク、漸ク本道ヘ遁ル、官軍追撃ス、爰ニ至テ本道ノ我兵纔ニ二十余名、皆和銃ナレハ要地ハアレトモ守難ク、遂ニ高城郷ヘ走ル、散兵漸ク集ル、已ニシテ宮ノ城方面ヨリ出水ヘ進撃、途中ヨリ伊東四郎左衛門・竹宮惟一・三原直記等ヲ始メ出水ノ兵隊悉ク反心ヲ顯シテ、味方ニ砲発シテ官軍ヘ降レリ、是力為メ大ニ混乱、兵隊互ニ疑心ヲ生シニ心ナキ者ヲ以テ川ヲ越テ守レリ、至急応援ヲ待ツト崎元少一等ヨリ報知ス、余痛憤ニ不堪ト雖トモ遠隔ノ地

如何スル能ハス、本道危急ナルニヨリ西方一重坂ニ守兵ヲ置キ、又麦ノ浦其他諸所ノ山ヘ兵ヲ伏セテ之ヲ撃、爰ニ於テ阿久根敗軍及ヒ伊東等力反心ヲ振武ノ營ニ報シ、高城ノ町ニ至ルニ散兵尚聚合ス、一重坂モ固守スル能ハス、同所ヘ進軍スルニ二小隊ヲ以テ正面ニ備ヘ、官兵ヲ繰止メント頻ニ指揮シテ防戦スト雖トモ元来不練ノ兵進退自由ナラサルノミナラス、小荷駄ハ不続、彈丸砲ト合ハサルモノ多実ニ歎息ニ堪ヘス、頃日来屢潰ユルハ全ク兵士ノ怯懦ニ非ス、畢竟和銃ナルガ故爾終ニ亦破ル、官兵既ニ高城・水引ヘ進入スルニ馬ヲ飛ハシテ向田ヘ走ル、京泊・高江海岸ノ兵ヲ引揚ルニ暇ナシ、一小隊ヲ以テ川内川橋ノ正面ニ大砲三門ヲ備ヘ、川堤ニ^(壘力)積ミ以テ台場トナシ、橋ノ中央ニ薪ヲ積ミテ火ヲ放ツ、官軍急ニ水引町ヨリ砲撃シテ橋ヲ越ント進来ルヲ快ク砲発スルニ斃者アリ、悉ク引退テ川ヲ隔テ互ニ烈戦ス、我兵平佐皿山ノ浅瀬ヲ涉リ川涯ニ伏テ砲戦、此時我兵頗ル振フ、薄暮ニ至リテ隈ノ城宮里村ノ浅瀬ノ渡ヘ二小隊、皿山ノ渡ヘ一小隊繰出シ、川面悉ク固守シ、橋涯殊ニ砲撃熾ナリ、夜深更ニ至リテ我兵十一二小隊トナル、此時橋ノ火勢猛烈焰天ニ張ル、砲戦尚烈シ、廿二日官軍橋涯ナル正面ヘ

大小砲烈シク発シ、水引郷ヨリ殆ント一大隊余東郷ノ方ト八幡山ノ方ニ奇角^(橋角力)ノ勢ヲ為シテ来攻ム、於是二小隊ヲ宮里村浅瀬へ繰出シ、皿山ノ渡シモ配兵ス、宮里渡川ヲ隔テ砲戦殊ニ烈シ、此時川面砲声雷ノ如ク昼夜不絶、同廿三日官軍船ヲ奪、亦ハ筏ヲ浮へ宮里渡ノ浅瀬ヨリ大拳シテ烈シク進撃ス、我兵困苦台場ヲ保チ難シ、既ニ危急ナルカ故、一小隊ヲ応援ニ出ス、亦橋涯ナル二小隊急ニ引揚、猫ヶ嶽・安養寺岡へ繰出ス、此際橋ノ正面へ尚大小砲ヲ発スルコト雨ノ降カ如シ、我兵首ヲ出スコト能ハス、既ニ守ヲ失ハンスルヲ烈シク指揮シテ悉ク台場へ伏セ、此時我兵死傷八九名、爰ニ於テ官軍ノ守場へ大砲・白砲ヲ乱射シテ守ル、時ニ貴島清一中隊ヲ引率シテ来ル、平佐籠ノ營ニ至テ会ス、然ルニ官軍東郷士族某ヲ以テ陸軍惣督ヨリ下ル処ノ一書ヲ送ル、概意西郷隆盛カ逆心ニ党与スルハ全ク汝等カ素志ニ非スサルヲ之レ知ル、速ニ降伏セヨ云々ト、貴島掌ヲ打チ笑テ曰、兵ハ曲直ヲ知ルニアリ、今勤王ノ為メカヲ尽ス、燕雀ノ輩何ソ大鴻ノ志ヲ知ルニ足ラント杯ヲ拳テ飲ス、既ニシテ宮ノ城方面ヨリ人ヲ遣テ曰、我軍伊東等カ反心ニヨリ終ニ宮ノ城敗軍ニ及、残念如何トモスルナシ、即今入来ヲ守ルト、是ニ

答テ曰、勝敗時ノ運ナリ、何ソ首鼠兩端ナル伊東輩カ為ニ敗センヤ、今我軍亦危窮、是何ソ屈スルニ非スト、貴島亦之ニ告テ曰、軍ハ今カ華ナリ、毫モ屈スルコト勿レ、官兵一人モ鹿兒島へ洩スヘカラスト報ス、貴島ト隈ノ城学校ニ赴キタルニ、官軍大拳既ニ宮里渡進撃ス、我軍終ニ破レテ猫ヶ嶽等ヲ固守スルコト能ハス、貴島則平田・佐久間・大橋等ヲシテ籠へ兵ヲ備ヘシメ、我ハ川面ノ兵ヲ悉ク引揚、急ニ平佐ノ城ニ抛ラント向田川面へ向フ、時ニ官軍我守場ナル正面ニ烈ク砲撃ス、我兵モ之ニ応シテ不止、故ニ兵ヲ引揚ニ暇ナカリシニ、官兵忽然亦川下ヨリ出或ハ背後ノ岡上ニ出諸方ヨリ進撃スルニ、我兵潰乱四方へ走ル、憤然トシテ兵ヲ纏メント指揮スト雖トモ如何ニモシテ繰止ムルニ術ナシ、官兵急ニ向田町へ迫テ火ヲ縦ツ、遺憾ナカラモ間道急ヲ遁テ佛正橋ニ走ル、貴島ニ会シ、事急ヲ告ク、我兵少ク故ニ諸道へ配兵殆ント防戦ノ策ヲ失フ、然ルニ官兵ニノ段ヨリ進軍スルヲ窺ヒ、間モナク本道ニ兵ヲ進メテ来ル、直チニ貴島ト兵ヲ指揮シ、烈戦酣ナルニ及ンテ平田・佐久間・大橋・中原・松下等皆ナ抜刀奮激シ、互ニ衆ヲ励シ死力ヲ尽シテ戦フ、官軍敗レテ退ク、我兵追撃スルコトニ丁余ラントスル

二、官軍側面ナル丸防山ニ出砲発ス、又撃テ之ヲ退ケ益進撃スルニ、凶ランヤ官兵上床ノ段ヨリ学校ノ上ナル鎮守ノ山ニ出、我軍ノ後ヲ襲撃ス、此時三方皆敵トナル、貴島等奮然トシテ指揮スト雖トモ衆寡敵セス、暮二及ンテ我軍散乱、平佐・串木野ノ間ニ向フテ走り貴島ト相失ス、依テ中原・松下等六七名ト麓ナル官軍ノ内ニ紛レ遁レテ、薩摩山本道ニ出芹ケ野金山へ入ル、同廿四日散兵ヲ集メント中原等ヲ諸方へ出スト雖トモ隈ノ城・平佐ハ勿論山崎・樋脇等ノ各郷何レモ官軍充滿シ、我兵諸方へ潜伏シテ出ルコト能ハス、止ムコトヲ得ス廿五日二十余名ヲ引率シテ市来郷港ニ至ルニ偶々貴島ト相会ス、平田等本道へ台場ヲ築キテ守兵隊稍々聚合シ、暮二至テ隈ノ城・入来・伊集院二斥候ヲ出シ、同廿六日ト覚ユ、中原勇次郎帰り曰、鹿兒島方面ノ我方武岡台場破レテ諸所ニ於テ戦争アリ、依テ我郷伊集院へ振武ヨリ預ケ置タル市来ノ者共此形勢ヲ聞キ、愈反心ヲ顯シテ戸長如何スル能ハス、速ニ処分スヘキヤト、貴島則命シテ曰、人吉等ノ如ク禍ヒ蕭牆ニ発ラン、急速実否ヲ糺シ処分セヨト、中原二兵士ヲ付属シテ発進ス、時ニ入来郷我軍副田原等ヨリ麓ニ於テ屢防戦スト雖トモ全ク勝利ヲ失ヒ、崎元少一

等弾丸ニ当テ斃レ、我兵諸所へ散乱シテ逃ル、処ヲ知ラス、中島建彦(健彦)報シテ曰、紫原等ハ勿論武岡台場へ官軍大進撃スルコト烈シ、我軍亦猛戦ス、実ニ耳目ヲ驚セリ、田原・木留ト雖トモカ、ル烈戦ヲ聞カス、官兵ノ斃ル、モノ罌ヲナセリ、我兵亦同シ、終ニ我応援続カスシテ台場ヲ打抜レ、遺憾猶余リアリト達ス、衆皆歎シテ曰、今や要地ノ台場ヲ抜レテ如何ンスヘキ、此地ハ共ニ一步モ退クヘカラス、同廿八日頃野村某等ヲ鹿兒島へ急キ斥候ニ出スニ、我軍全ク不利ニシテ各地モ官軍ノ有トナリ、我本管ノ所在モ知レス、吉野方面ニ砲声キコユト、然ルニ官軍鹿兒島ヨリ伊集院郷へ繰込タル確報アリ、爰ニ於テ前後左右何クモ敵地ニシテ我兵孤立トナリ抛ルヘキ地ナシ、今爰ニ憤死スルモ益ナシ、又下瀉ニ赴キ大兵ヲ集メ孤立スト雖トモ銃弾ニ困脚スルハ決然タリ、当今迎モ孤立難叶、故ニ入来・樋脇・山崎等ノ官軍ノ中ヲ切抜ケナハ未タ味方ノ地モ広シ、兵亦多カラン、何レ我地ニ達スルニシクハアルヘカラスト決議シ、則斥候和泉隼太・副田某等ヲ出シ、俄ニ兵隊五小隊余引率シテ同所ヲ発シ、湯元ヨリ間道ヲ越ヘ暮二桑ノ木村へ到リ一泊スルニ、四小隊トナリ入来ノ間道ヲ經テ樋脇郷倉野村ニ至ルニ、四

方官軍ニシテ囊中ニ入タルカ如シ、前後出ルニ道ナシ、土民何レモ胆ヲ潰シ兵隊十方ニ暮レ貴島ト会スルニ、夜ニ入テ入来・副田原ノ守ヲ打破リ横川ヘ達セント決シ、兵隊ハ彈藥五六十発ヲ用意シ、其他ハ雜具ニ至ル迄悉ク川内川ヘ捨テ必死ヲ究ム、夜入ニ及ンテ四面ノ篝火殆ント星ノ如シ、時ニ官兵跡ヲ追フテ来ルヲ報ス、我隊ヲ檢スルニ及ンテ纔ニ兵隊三小隊ニ滿タス、俄ニ策ヲ變シ間道ヨリ山崎郷ヲ行ニ、官軍ノ番兵纔ニ二丁位隔テ通ル、大村郷ヲ經テ黒木ニテ夜明ル、官兵大村ヲ固ムル、曾木郷ニ入ルニ宮ノ城ヨリ密ニ人ヲ遣シテ日、残念ナル哉、川路利良ハ和泉国彦所ヘ本営ヲ居ヘ、同所ヲ転スルニ騎馬三名アリ、其一人川路ナリシガ、竹内某竹山ヘ潜伏シテ之ヲ狙撃セシニ、兼テ川路ヲ知ラサレハ先ナル者ニ放チテ馬ヨリ打落ス、本田某ナル者ハ縛セラレテ斬レタル旨ヲ報ス、又転シテ金山ニ到ルニ、辺見力兵海江田某一小隊ヲ以テ出張ス、止ル一夜、同三十一日頃振武ノ兵山田郷諸所ニ於テ防戦スト聞ク、貴島兵ヲ引テ之ニ赴キ、我ハ二十余名ト横川ノ營ニ赴キタルニ、辺見力軍モ不利ニシテ同所ノ營モ引揚ントスルニ会ヒ、又桂四郎・椎原與右衛門ヘ会ス、振武ノ營ヨリ北郷萬兵衛・園田武一等

来ル、平田・佐久間等ハ中途ヨリ一小隊ヲ以テ横川ニ来リ、辺見力兵ヘ応援、憤戦スト雖トモ横川遂ニ破ル、夫ヨリ踊ニ至リ、辺見ニ会シ莊内ヲ經テ都城ニ至ルニ、辺見高野ヨリ砲隊ヲ發遣スヘキヲ報ス、乃日砲隊仁礼等十七八名遣シ、中原ハ飯野ヘ出ス、馬場・有馬・副田・本城等始三股等ノ守兵ニ小隊ヲ引テ宮崎ヘ入ル、桐野利秋カ營ニ到、詳カニ西目方面祁答院等ノ敗戦ノ情ヲ述フ、桐野日、守場広シ、新兵且和銃ナルカ故、万事苦慮シタリシナラン、余之ヲ察ス、勝敗ハ兵家ノ習何ソ屈スルニ足ランヤ、我近日延岡ヘ赴キ纔ニ守兵ヲ置キ、奇兵隊悉ク引揚、大拳シテ鹿兒島一方面ヲ打破、恢復スルニ決セリ、其内万一都城ヲ保ツコト不能ハ事或ハ成ス能ハザラント、此旨ヲ都城各所ノ營ヘ報知シ、我又伊集院太郎ト彈藥製作所ヲ開キ、尽夜指揮シテ彈藥数万ヲ貯ヨト、我宮崎・佐土原ヘ数日滞留ス、然ルニ桐野宮崎ヲ發スルニ臨ンテ兵隊ニ小隊ヲ高岡ヘ繰出シテ延岡ヘ赴ク、五六日間ニシテ桐野帰リ、一・二中隊ハ絞兵出スヘシト、嗚呼延岡ノ事良策ナラスト憤然嘆息ス、我其意ヲ知ラス、其後高岡敗戦ニ中原彈丸ニ当テ斃ル、同所敗戦ヨリ続テ都城及ヒ宮崎亦敗ル、敗ル、ノ前日西郷佐土原・廣瀬ヘ転

營、翌日又高鍋ニ向テ転ス、宮崎敗戦ヨリ貴島・中島ハ佐土原旧城下ニ戦ヒ、辺見ハ廣瀬ニ戦フ、終ニ川ヲ隔テ防戦ス、夜ニ入テ兵ヲ引揚ルニ及ンテ彈藥所ヘ火発シ大洲渡ニ至ルニ、旧城下ニ当テ一面ニ火ノ手揚ル、同所モ敗戦ト覺ユ、船ヨリ川ヲ渉ルニ桐野・辺見・島津敬二郎等兵ヲ備ヘテ川堤ヲ守ル、已ニシテ高鍋亦破ル、耳川ヲ過ル頃ヒ阪田諸藩兵ヲ耳川ノ上峠ニ備ヘ、墳墓ノ地ト決シ守ル、時ニ津野(都農方)ヘ軍艦來港、散々砲発スルニヨリ往還ノ混雜不可言、彼ノ地ヲ經テ延岡本營ニ到リ、池上四郎・別府晋介ヘ会ス、池上大ニ喜日、当地一兵ノ守リナシ、特ニ憂フヘキモノハ銃傷・平病千余名ニ及ヘリ、又追々集ル、実ニ見ルニ忍ヒサルナリ、子今幸ニ爰ニ來ル、乞フ病院ノ事ヲ依頼セント、事情実ニ憫然ナリ、予辞スル能ハス、各所ノ病院ヲ聚合セント本院ヲ建テ、重・輕・平ノ三院ヲ設ケ療養スルニ殆ント二千余名ニ及ヘリ、又近在等ヘ配居セシメ同八月十三日頃門川其外我軍敗戦ノ報アリ、官軍既ニ延岡ニ迫ラント、池上曰、四方ノ敗戦如何スル能ハス、応援ニ出スニ一兵ナシ、四郎ハ当地ヲ墳墓ノ地トセン、子ハ病院ヲ助ケト、暮ニ及ンテ重傷ヲ川島其他諸所ヘ送、同十四日黎明ヨリ官軍延岡町ヘ迫

ル、市中雜遝言フヘカラス、則池上ヘ面会シテ別ヲ告ケント本營ニ走ル、途ニ四郎ト仁禮景通ニ会フ、四郎曰、死ハ易ク生ハ難シ、今一往先生ヘ面会シテ事ヲ究メント、相与ニ延岡町ヲ遁ル、池上ハ川島ヘ入ル、我ハ永井村ヘ到リ病院数ケ所ヲ建ツ、同十六日官軍四方ヲ圍ミ進撃ス、時ニ本營ヘ至急出ヘキノ令アリ、至レハ則チ西郷隆盛從容トシテ曰、凶ランヤ今死地ニ踏入レリ、今夜日ノ谷口ヨリ險岨ナル間道ヲ踰ヘ何地迄モ切り抜ヘシ、然レトモ此險難ノ地壯士ト雖トモ容易ニ越ヘカタシ、況ンヤ創痍ノ者ニ於テヤ、顧ニ難儀ニシテ同行イタシガタカラン、元來苦楽難易ハ共ニスヘキ素志ナレトモ今懸ル危急ノ時機ニ臨ミ、止ム事ヲ得ス相別ントス、万々不義ナリト考フヘケレトモ泰然トシテ此地ヘ止ルヘシ、病院ニ於テハ万国ノ公法モアルコトナレハ、苛酷ノコトハ決テアルヘカラス、快ク承諾イタス様告諭スヘキヲ命ス、桐野利秋日、病院ニハ標旗ヲ揚グヘシト、隆盛曰、然リ、速ニ之ヲ揚ケヨ、医師ハ之ヲ留メ置ヘシト、隆盛情義ノ厚キ答フル所ヲ知ラス、覺ヘス旧法然タリ、暮ニ及ンテ病院シ其旨ヲ伝ヘ又病院ト記載セシ旗ヲ標示ス、又本營ヘ至ルニ桐野日ノ谷口ヲ斥候シテ其夜深更ニ及ンテ歸リ策ナラ

スト云、同十七日官軍倍四方ヨリ迫テ大小砲烈シク発シ砲丸空中ニ破烈シ、川向ナル我病院亦死傷スルモノアルニ至ル、病院困脚究ル、夜半過キニ至リ砲声稍疎ナリ、

黎明ニ至テ有馬雄之介告クルニ、本営寂寞兵隊ヲ見スト、則チ之ヲ窺フニ本営ハ險岨ヲ越ヘ遙ニ切抜タリト覺ヘ砲声漸ク遠シ、西郷鉄彦等跡ヨリ来ル、皆慨然トシテ跡ヲ迫テ到ラント議スルニ川船ナク濟ルニ術ナシ、夜既ニ明ケ官軍兵ヲ本道ニ繰込ム、止事ヲ不得院ニ帰り言テ曰、事既ニ爰ニ究ル、從容トシテ動クヘカラスト、時ニ銃創ヲ負タル壯士輩本営ノ行衛ヲ思慕シ皆慷慨流涕ス、官軍既ニ我院ヘ繰込マントス、則久保田新次郎ト共ニ刀ヲ脱シ出テ迎フ、官兵兩名進來テ曰、悉ク官軍ノ地トナレリ、如何スヘキヤト、我之ニ答テ曰、当所ハ勿論旗ヲ建タルハ悉ク病院ニシテ銃傷ヲ負タル者ノミナリ、我専ラ是ヲ関ス、今如何スル能ハスト、爰ニ於テ降伏ス、病院悉ク降ル、時ニ八月十八日也、

熊本開戦以來既ニ一星霜、恍トシテ夢ノ如シ、豈ニ詳ニ之ヲ記スルコトヲ得ンヤ、曩ニ垂問ヲ辱フスルヲ以テ之ヲ黙々ニ付スルコトヲ得ス、聊カ見聞スル所ヲ記載シ以テ下聞ノ責ヲ塞ク、爾其紀事之謬誤・行文ノ錯

雜ノ如キハ伏テ宥恕ヲ乞フ、

明治十一年八月初二

鹿兒島県

中山盛高

一六一 肥後壯之助上申書

戦地景況之大略

西郷大将問罪ノ師ニ応シ其三番大隊十番小隊山之内半左衛門隊江編入セラレ、鹿兒島ヲ発ス、実ニ明治十年二月十六日ナリ、同廿二日熊本県下向ヘ町ヘ到着、該夜ハ地形不分明ナルカ故、明ヲ待テ長六橋ノ川上ニ營シ、攻戦累日、三月十三日頃小隊ヲ変制シテ中隊トナシ、中隊長阿多壯五郎・右小隊長成尾哲之丞・左小隊長深見休八ニシテ余右小隊ナリ、同二十日右小隊ハ島崎ヘ転守、同三十日島崎ヨリ川尻ヘ転シ川堤ヘ守兵ス、四月二日遊撃四番隊半隊長ヲ命セラレ、亦長六橋ニ至ツテ守兵ス、同八日午前六時頃ヨリ官兵城内ヨリ突出、安政橋左右ノ守兵福島隊ヲ襲撃シ、我隊ノ持場モ亦正面ヨリ攻撃ス、小隊長迫田重遠分隊ヲ引率シ、福島隊ノ危急ヲ赴援シ、憤戦指揮シテ敵兩人ヲ殲シ直チニ抜刀進戦、遂ニ丸ニ当リ斃レ、余衆軍ヲ退ケテ防戦ス、此時正面ノ戦モ劇シク、分隊長桑波田景藏モ憤戦シテ之ニ死ス、既ニシテ城兵窃ニ

川面ヲ下り台場ノ背後五六間ノ処ニ突出、楯ヲ擁シ頻リ
 二我兵ヲ狙撃ス、我半隊ハ即チ其場ニ散布シ、余ハ別ニ
 十四五名ヲ引キ川面ヘ廻リ仮ニ塁ヲ築テ防戦尤力ム、近
 ツク敵二三名ヲ斃シ、既ニ接戦セントスル所ニ伊集院権
 右衛門隊横合ヨリ応援ニ来リ、劇シク発砲、故ニ城兵少
 シク辟易逡巡、終ニ午后一時頃全ク引去レリ、此日隊中
 ノ死傷十五六名、余モ僅ニ腰間ニ傷クト雖トモ創ヲ齎シ
 テ督戦セリ、同九日小隊長トナル、同十四日川尻敗レニ
 付本営ヨリ引揚ノ令アルニ依リ木山迄引揚ク、同十五日
 午后三時頃健宮ヨリ三四町北ノ方本道ヘ守兵ス、同二十
 一日黎明官兵突喊来ツテ我軍ヲ襲フ、我軍苦戦、終ニ敗
 レ本営ノ令ヲ以テ午后八時頃木山迄引揚タリ、同二十二
 日木山本営ノ四方四五町ノ処ニ守兵ス、我遂ニハ矢部ニ
 引揚ヘキ令アルニ依テ矢部ニ至ル、同廿七日頃本営令シ
 テ人吉ニ引カシム、我隊ハ胡麻山ヲ越ヘ湯ノ前ヘ引揚滞
 陣ス、爰ニ於テ隊号ノ変制アリ、余更ニ正義六番ノ中隊
 長トナル、五月十日頃日向国高千穂ノ内坂元村ヘ繰込ミ
 固守ス、正義五番中隊・同七番中隊・奇兵十六番中隊・延岡隊・豊後ノ中津隊ハ男坂・廣木野ノ間ヘ固守ス、官兵鏡山
 井笠部越其他ノ要所ヘ守備ス、同十五日味爽我惣軍鏡
 山・男坂等ヨリ進撃、我隊ハ笠部越ヨリ進軍、窃ニ敵ノ
 背後ニ廻リ突起、直チニ敵柵五六箇所ヲ攻拔キ官兵散乱、
 我軍尾撃シテ兵仗・彈藥数千発ヲ収メ、馬見原町川口辺
 迄衝撃ス、官兵急ニ軍ヲ整ヘテ防戦ス、時ニ雨甚シク日
 モ既ニ入り、戦ヲ休メテ旧塁ニ守ル、此日官軍死傷甚々
 多シ、我軍モ亦死傷アリ、同四五日ヲ経テ男坂并廣木野
 両所ヘ官軍攻撃、男坂ノ守兵中津隊右翼ノ高岳ヨリ官軍
 烈シク襲来、銃丸雨ノ如シ、我右小隊ノ内半隊ヲ割ヒテ
 赴援シ、險ヲ越奮戦シ、官軍漸ク退キ旧塁ヲ復シテ守兵
 ス、同十八日頃三田井口敗軍ノ報アリ、本営ノ指揮ニ依
 テ七ツ山迄退軍ス、同廿日頃米良応援ノ令ヲ受テ茲ニ至
 ル、該地本営ヨリ銀鏡ノ守兵ヲ命セラレ、該地滞陣十余
 日、空シク延岡ニ退キ、茲ニ滞軍スル兩日、六月上旬高
 千穂ノ内大楠村ヘ我一中隊外ニ佐原式小隊・宮崎五番
 一小隊出張シ塁ヲ築ヒテ固守ス、同十四日我中隊ノ持口
 ヲ官軍襲撃ス、我兵力戦シテ之ヲ斥ク、同十八日官兵大
 軍復タヒ大雨ニ乗シテ払曉襲来リ、五ヶ瀬川前岸二三百
 歩ノ地ニ砲煩數門ヲ居ヘ、吶喊進撃最モ烈シク、其勢ヒ
 山岳モ崩ル、カ如シ、我塁殆ント破ル、ト雖トモ將士協
 力殊死奮闘、遂ニ一步ヲ退カス、半隊長石川金兵衛外四
 五名之ニ死ス、此時曩ニ山際二分守セシ一小隊モ亦叫呼

死戦、遂二屈セス、午後二時頃ニ至リ官兵辟易シテ退走セリ、前シテ敵屍狼藉タルヲ見、其遺棄スル処ノ銃器・彈藥ヲ獲ルコト無数ナリ、同廿日頃中村方面ノ延岡隊へ官軍襲撃、此隊ノ持口終ニ敗レテ我隊モ難守、荒平迄引揚固守ス、七月中旬頃中村方面ノ兵ト我方面ノ兵佐土原二小隊・宮崎五番一小隊・我一中隊・佐伯一小隊ヲ合シ、同時大砲ヲ合図トシ惣進軍ノ軍議決セリ、我方面ハ前日ヨリ斥候ヲ以テ地形ヲ探偵シ、既ニ発シテ敵背ニ突出、奮撃シテ天狗山ニアル官兵ヲ走ラセ、前シテ官壘ヲ奪フコト十四五ヶ所余、益々烈シク追撃シ敵ヲ殲コト無数、然ルニ中村方面ノ兵軍機ヲ失シテ不進、故ニ中村ニ備ヘシ敵回リテ我軍ヲ横射シ、加之敵援軍漸次ニ増シ奮戦最カムト雖トモ衆寡不敵、午后二時頃退テ旧壘ヲ守ル、後十余日ヲ経テ官兵大軍ヲ以テ本道佐伯隊ノ持口ヲ攻撃ス、此壘守ヲ失ヒ終ニ敗軍ス、此日連旬ノ大雨五ヶ瀬川洪水ニテ舟楫自由ナラス、散卒舟ヲ争ヒ船顛覆シ、我左右三官ノ内三名各隊合テ二拾名余溺死セリ、午后二時頃椎畑本営ヨリ二子嶺へ進軍ノ令アリ、五番小隊蟠龍三番隊并我中隊発營、夜ニ入二子嶺へ進ム、我隊ノ斥候先嶺ニ至ル、官兵二支ヘラレテ登ルコト能ハス、下テ清水観音堂

ノ下ニ壘ヲ築キ固守ス、兩日ヲ過キ官兵大軍來撃、防戦甚タ苦ム、官兵別隊回リテ我壘ノ後ニ出ツ、故ニ軍ヲ繰引ニシテ延岡城下迄退キタリ、同夜九時比本営ヨリノ令ヲ以テ二三中隊旧城跡へ出張守兵ス、翌味爽官軍襲撃、我隊未タ戦ハスシテ延岡城下ニ火ノ拳ルヲ望ミ、到底支ユ可カラサルヲ察シ、繰引ニシテ川上ヲ渡リ永井村ニ引揚ケテ終ニ重圍ヲ受ク、八月十七日九時頃官兵ヨリ攻撃ノ模様ヲ窺ヒ、我惣軍ヲ以テ迎戦スト雖トモ遂ニ破ルコト能ハス、各隊三四町退テ固守ス、同十八日未明必延岡ニ至ント街道ニ進撃スト雖トモ官兵ノ応援続々加ハリ容易ニ破リ難ク、亦退テ各地ノ要所ニ築壘防戦セリ、毎夜兩軍ノ篝火ハ恰星ノ如ク、既二十九日ニ至ラハ永井神社ノ方面ヲ守ル熊本隊大半降伏セリ、夜半ヨリ我惣軍糧ヲ負ヒ險ヲ越、詰朝可愛嶽ノ官壘ヲ襲撃シ、瞬時官壘ヲ乗取ルコト若干、官兵大ニ敗レテ散潰シ四方ノ山中ニ奔逃セリ、故ニ各壁ニ算ヲ乱セル銃器・彈藥ヲ収メテ我軍向フ所ヲ議決シ当夜露宿ス、同二十日祝子川へ進撃、官兵迎戦スト雖トモ遂ニ之ヲ敗リテ直ニ祝子川ニ乘入許多ノ分捕アリ、翌日三田井へ突出、奮戦須臾ニシ官軍敗散、亦許多ノ分捕アリ、爰ニ至テ我軍ヲ三分シ前・中・後ノ

三軍ヲ定ム、八月廿八日頃横川迄進軍ス、官軍壘守、我軍未明ニ進撃、一時劇戦ニシテ中々破ル可キ色頭レス、十時頃ニ及ンテ間道ヨリ敵背ヲ衝キ之ヲ走ラス、台場五六ヶ所ヲ乗取り四五町モ尾撃ス、官軍要地ニ楯ヲ取り拒戦甚タ勤ム、終ニ夜ニ入り間道ヲ求メテ九月一日山田ヨリ吉野ニ至ル、茲ニ於テ官軍我中・後軍ノ間ヲ中断シテ遮リ戦フコト甚タ烈シ、午後四時頃亦漸ク間道ヲ經テ城山ノ中軍ニ合ス、該夜直ニ又本營ノ令ニ依テ吉野ニ出張防禦ス、同二日午前十一時頃官兵数万我壘ヲ襲撃ス、苦戦不支、終ニ敗退シテ惣軍ト共ニ城山ニ籠守ス、同四日桐野・池上・高城ノ三士ヨリ募兵ノ為メ婦郷スヘキノ旨ヲ達セラレ、不日ニシテ百五六十名外ニ土工夫五十名ヲ募ル、会マ城山ヨリ大斥候三名廻郷ス、右ニ示談シ同七日粗々隊ヲ編制シテ押伍三名ヲ撰ミ先ニ繰出サシメ、余ハ猶留リテ之カ三官トナル可キ者ヲ募ル、然ルニ先発ノ隊ハ谷山郷野頭迄繰込敵ヲ窺ヘハ、谷山麓市中ニハ巡查兵・番兵嚴重ナリ、我先発ノ人数ハ悉ク無銃ナルカ故、如何トモスルコト能ハス、空シク火ノ川原迄引揚一泊シ、尚亦道ヲ索テ城山ニ達セントスルニ、豈計哉川辺郷ハ多数ノ巡查繰込、道塞リテ進ミ得サルノ報ヲ聞、速ニ馬ニ

鞭チ火ノ川原ヲサシテ駈出、行事十町計ニシテ遙ニ多数ノ官兵ヲ見ル、故ニ益々馬ニ鞭チ、里余神殿村ニ至レハ先発ノ兵既ニ火ノ川原ニ解隊シテ踪跡スヘカラス、躊躇低回進退維レ谷リ、終ニ宮村ニ潜伏スルコト両日、到底免ル可カラサルヲハカリ、且斯ノ如ク力尽衆散シタル上ハ恢復ノ如何トモナシ難キヲ知り断然決意シ、終ニ軍門ニ自首シテ謹テ罪ヲ俟テリ、

明治十一年七月

鹿兒島県川辺郷

肥後壯之助

一六二 高柳一二上申書

客年二月十六日西郷隆盛等政府へ尋問ノ次第アツテ上京ノ際、旧兵隊数多随行ス、余壹番大隊七番小隊へ加入シ、鹿兒島ヲ発程、西目街道ヲ經出先ニテ三番大隊五番小隊へ転シ、同廿三日正午比肥後川尻駅ニ達シ暫時休息スル処、先鋒早戦ヲ開キ熊本城ヲ圍撃スルノ急報アル、因テ隊長直ニ衆ニ其意ヲ示シ、爰ヲ出發シテ道ヲ急ク、既ニ近ツケハ鬪戦ノ音山岳ニ響キ涉リ恰モ雷ノ如シ、兵士ハ是ニ益憤発シ銳氣十倍、飛力如クニ戦地ニ突入シ、則花岡山ニ陣シ攻撃スル良久シ、已ニシテ日暮ニナリ巢下ノ

細工町ニ退軍ス、翌廿四日黎明ニ出テ蘭山ノ口守壘ノ別隊
応援トシテ彼ホトリヲ確守シ夜入、翌日当隊外二小隊ヲ
以テ蘭山ノ三小隊ニ交代シ、城中ト距離漸ク壹丁位ヲ隔、
昼夜発銃シテ固守スル旬有餘日ニ及ヘリ、其内流丸ニ当
ツテ死傷三名アリ、然処当壘ハ余隊ニ譲リ植木ヘ進発ス
ヘキノ命アツテ、三月中旬比夜中此処ヲ引テ十四五丁位
モアル地名不知農家ニ至ツテ兵ヲ休フ、翌未明ニ発シテ
植木ニ暫時隊ヲ止ムルニ、木留方位ニ当リ砲銃ノ音嚴敷
ヲ聞キ、直チニ彼地ヲ差テ進軍スルニ敵兵不居、其夜ハ
爰ニ止軍シ、翌早天ニ吉次峠ニ進撃スル、当隊外二小隊
ヲ以テス、大谷ヲ挟テ発射スル数刻ニ及ヒ、地形山谷ヲ
帯ヒ甚不便ナルニ、終ニ敵壘ニ逼ルコトヲ不得、日既ニ
西山ニ傾キ空ク軍ヲ那智山ニ転シ、三小隊ヲ以テ前隊ニ
交代シ、数ヶ所ノ壘ヲ固守シテ拒之、敵台凡ソ三四丁位
ヲ隔ツ、然ルニ同十八日比各隊壯健ノ兵ヲ三拾名撰抜シ
テ、未明潜ニ敵壘ニ切入呐喊スルヲ聞テ、本隊直チ二道
ヲ飛シテ進撃スルニ、敵意外ナル哉、大ニ騒キ散乱スル
処ヲ数名ヲ斃ス、我兵モ自ら死傷アリ、宵明テ見ルニ敵
又少シク後ヘニ急遽ニ壘ヲ築キ発銃スル雨ノ如シ、我兵
益憤激シテ一ヲ以テ百ニ当ルノ勢ヲナシ、奮戦死闘火花

ヲ散シテ相戦フニ、敵兵ヲ斃ス数不知、我兵モ死傷最モ
少ナカラス、暫時モ兵ヲ憩フノ暇ナク、終日ノ戦已ニシ
テ夜入、彈藥不統ニ止ムヲ不得旧壘ニ帰り、居ルコト四
五日ニシテ少シク軍ヲ引テ七曲ト云所ノ下ニ壘ヲ築キテ
守処ヲ敵襲来シ、前面ノ樹間ヨリ発射シテ数刻ノ戦也、
予爰ニテ銃創ヲ蒙リ、則山山峯ムロノ仮病院ニ送致サレ、治
療シテ尚川尻ノ本病院ニ至ル、後チ木山ニ転シ療治スル
処、急ニハ不癒ニツキ帰巢シテ養生スヘキノ旨、医ノ伝
ヘニ因テ四月初比同所ヲ出発シ、白州街道ヲ經過シテ四
月中旬比鹿兒島ニ帰り療治スル処、数日ヲ経テ創少シク
癒、八月十八日終ニ帰順ス、

鹿兒島県

明治十一年寅六月

高柳一二

一六三 石川駿・守永守連署上申書

明治十年二月六日夜半宮崎支庁詰中属長倉昶来リ、門ヲ
叩キ石川駿ヲ呼テ曰、今般鹿兒島表ニ於テ旧警視庁ヘ奉
職ノ中警部中原尚雄等帰省ニ託シ、西郷隆盛ヲ暗殺云々
ノ儀発覚シタルニ因愈義孝ニ決シ、西郷等上京、旧兵隊
隨行ノ趣大山県令ヨリ内報ノ紙面到来セリ、因リテ之ヲ

飢肥ニ通知セヨト、即チ宮崎ヲ発シ、翌七日午後飢肥大
 区事務所ニ達シ、伊東直記・佐土原藤吾・深水嘉平等ニ
 右紙面写ヲ以テ其趣意ヲ告ク、皆云フ、西郷氏ハ天下股
 肱ノ臣ニシテ叡慮ニ出ルニ非ス、顧フニ姦佞邪臣ノ所為
 ナラン、然レハ飢肥小ト雖トモ袖手傍觀スヘキノ秋ニア
 ラス、速カニ隨行ヲ乞ヒ中途ノ不慮ヲ警メ鞏下ヲ護ント、
 乃チ和田勇・鬼束綱義等ヲ覽ニ遣リ、又各村戸長及ヒ土
 族ハ至急出頭スヘキ旨事務所ヨリ達シタレハ、学校教員
 ヨリ生徒ニ至ルマテ之レニ応スル者尠カラス、恰モ江河
 フ決スルノ勢アリ、七日旧城下及ヒ各村ノ土族帶刀銃器
 フ携ヘ絡繹トシテ大区事務所ニ来集シ、十二時ニ至ル頃
 ヒ着到スル者凡ニ二千余人ニ及ヘリ、直ニ強壯ノ士二百余
 名ヲ撰ミ隊伍ヲ製シ、之ヲ飢肥一番隊トス、九日伊東直
 記ヲ總指揮官トシ、飯二佐土原藤吾ヲ隊長トシ、深水嘉
 平ヲ給養長トシ、其他什長・伍長・給養等ヲ定ム、守永
 守ハ書記ヲ以テ従事ス、午前第十一時発程、酒谷村ニ宿
 陣シテ薩ノ報知ヲ待ツ、十七日未明鬼束綱義鹿兒島ヨリ
 歸リ、該地ノ兵ハ路ヲ西目・大口ノ両街道ニ取り、十五
 日ヨリ十七日迄三日間ニ発行シ肥後へ繰出シタリ、我飢
 肥隊ハ宮崎ヲ經テ高千穂ノ險ヲ越ヘ熊本ニテ相会スヘキ

旨桐野氏ノ指揮タルヲ報ス、之レニ依リ守永ハ伊東直記
 ニ從ヒ阿萬南八郎・深水嘉平等ト同ク兵隊ニ先テ発シ清
 武ニ至ル、該地ハ高橋元安等兵ヲ募リ、我カ兵ノ至ルヲ
 待タルニヨリ共ニ前途ノ方略ヲ議シ合併ノ用意ヲナス、
 翌十八日一番隊ハ河嶺新五郎・米良一穂等新撰二番隊ト
 同ク来着ス、是ニ於テ更ニ隊伍ヲ編制シ分テ三隊トナシ、
 一番小隊ハ佐土原藤吾之カ小隊長トナリ、阿萬南八郎半
 隊長・山之城軌分隊長・石川ハ兵隊長・金田徵監軍タリ、
 二番小隊ハ高橋元安之カ小隊長トナリ、阿万恕三郎半隊
 長、津江為徳分隊長、阿万忠規・長倉英士監軍タリ、三
 番小隊ハ米良一穂之カ小隊長トナリ、郡司稔半隊長・伊
 東祐啓分隊長・荒武勇記監軍タリ、小頭・給養等ヲ撰定
 シ旗号其他總テ飢肥ヲ以テ名称ス、于時鹿兒島土族伊東
 祐兼・川上彦一・児玉實得・野崎保・前田重本・小濱氏
 興等^{後伊東ハ本營ノ事ヲ執リ}我隊ニ加ハル、十九日発程シ、廿
 一日延岡ニ至ル、高岡土族柚木崎太郎来リ、我隊ニ編入
 ヲ乞フ、之ヲ二番小隊監軍トス、廿三日高千穂ノ險ヲ越
 ヘ三田井村ニ宿陣ノ都合タリシカ、熊本城開戦ノ報アリ
 テ兵士等戦期ニ後レザルコソ至要ナリト奮發シ、止ムヘ
 カラサルノ勢ヲ見テ馬見原迄踏越ス可キヲ決シ、彈藥百

発ツ、ヲ負七午後第六時三田井ヲ発ス、間モナク大雨降
来リ、暗黒咫尺ヲ弁セス、此間道程五里、且険峻ヲ極ム、
加之残雪猶消セス、其苦言ヘカラス、幸イニ村民途上ニ
出テ迎ヘ、男ハ争テ夫役ニ服シ、女ハ薪ヲ焚キ茶ヲ捧ケ
及ヒ握リ飯・実柑等ヲ供スルノ懇切ナルニ頼リ、聊カ其
勞ヲ慰スルヲ得、漸ク鶏鳴ニ至リテ馬見原ニ達ス、廿五
日夜半保田窪村^{熊本ヨリ半}ニ着シ、廿六日西郷本營ノ命ヲ
受ケ川尻ニ守衛ス、三月二日早天山鹿ニ進軍、三小隊ヲ
分テ四番小隊ヲ編制シ、川上彦一ヲ以テ小隊長トシ、野
崎保ヲ半隊長・金田徹ヲ分隊長トシ、前田重本・長倉英
士之カ監軍タリ、該地ハ薩軍數戰ヒヲ交ヘ毎ニ勝利ヲ得
タリト云フ、三日本道并ニ間道ヨリ南関ヲ衝クノ令ヲ受
ケ、我カ一番・四番二小隊ハ間道ヨリ進ム、此トキ本道
ニハ長野原ニテ戰ヒヲ交ヘ炮声激烈、山岳為メニ崩レン
トス、翌四日間道ニ進ミタル我ニ小隊ハ先鋒トナリ進軍
ス、将ニ岩村ヲ過ントスルニ敵兵ノ来ルニ会シ、直チニ
劇戰ニ及ヒ半隊長野崎保・小頭平部俊彦戰死、其他負傷
六名アリ、六日二番・三番小隊鍋田原ヘ進軍ス、敵兵車
返坂ニ来リテ戰フ、我兵邀撃之ヲ却ク、直ニ薩兵ト同シ
ク持場ヲ分チ、我ニ小隊ハ本道并其左右ニ壘ヲ築キ守防

ノ備ヲナス、此日我一番小隊ハ転シテ姫井村ヲ守ル^{田原坂}
^{ヨリ山}
^{鹿二出}、十二日黎明官兵鍋田ヲ襲フ、我三番小隊持場左翼
^{ル間道}
ノ尾鼻ナル墓所ヲ攀チ、突然壘ノ前ニ出テ激ク発砲ス、
我兵不意ヲ打立ラレ壘ヲ棄テ、退キ、兵ヲ本道ニ纏メ直
チニ返戦ス、郡司稔・伊東祐啓・日高昌等真先二切入リ、
一時ニ逐落シテ旧壘ヲ復ス、此トキ日高ハ躑躅花一枝ヲ
掲ケ第一番ニ大声ヲ発シテ切入リシカ、薩兵ノ近壘ニア
ル者之ヲ望見テ其勇ヲ贊賞スト云フ、十時頃官兵烈シク
攻来リ、再ヒ我カ壘ヲ乗取ル、我兵一撃之ヲ復ス、午後
官兵又墓所ニ迫リ遂ニ我壘ヲ奪フ、是ニ於テ乎伊東祐啓
復奮戰、刀折レテ猶進ミ、其折刀ヲ以テ兵士ヲ励シ、遂
ニ敵ヲ追散シテ旧壘ヲ失ハス、此際米良一穂・小濱氏興
各壘ニ奔走、奨励尤力ム、守永ハ河崎新五郎ト同ク山鹿
ヨリ馳付、本道ヨリ右翼ノ台場ニアリテ終日劇戰ス、二
番小隊持場モ官兵尾伝ヒニ右翼ヨリ襲ヒ来リ、早天ヨリ
劇戰ス、阿万惣三郎直ニ抜刀挺身切テ入ル、敵銃槍ヲ閃
カシ逆戰、遂ニ胸額ヲ突カレ逸巡シテ倒ル、復起テ其敵
ヲ斬ル、故ヲ以テ困ヲ脱スルヲ得タリ、又至要ノ地小高
キ松林ノ壘ヲ乗破ラレ、敵ノ有トナルコト殆半日、我
兵以為ラク、此壘敵ニアルトキハ守防甚タ苦戦タラン、

早く之ヲ取り返ス可シト、昏暮柚木崎太郎等七八名潜カニ其後口ニ廻リ闕ヲ作テ発砲ス、味方ノ各塁闕ヲ合テ之ニ応シ攻カ、ル勢ヲナシケレハ、敵ハ戎器ヲ捨テ散乱シ復我カ有トナル、夜十時頃迄互ニ発砲ス、本日ノ戦ヒ我隊郡司稔・石川昌吉負傷、外ニ死傷十余名、翌朝台場先キ墓所原辺敵黄筋印シノ斃屍廿七八名、中ニ金柄サーペルヲ佩ヒタルモアリ、尾栓銃若干・彈藥三千発余ヲ拾フ、十五日黎明官兵又鍋田ヲ来襲シ激シク墓所ノ罫ニ逼ル、死力ヲ極メ防戦シ、遂ニ敵ヲシテ一步ヲ侵サシメス、又ニ番小隊持場松林ノ台場ニハ大小銃ヲ交ヘ攢銃音シク発シ勢尤烈シ、時ニ右翼他隊ノ持場守ヲ失シ、我隊之カ為メ敵ニ中腹ヲ打レ、隊長高橋元安・監軍阿万忠規・小頭和田重美戦死、其他死傷十余名ニ及フ、敵ノ斃屍黄筋ヲ帶タル者二十余名アリ、十九日我四番小隊ハ姫井ヨリ山鹿ニ揚ケ、翌廿日八代へ応援トシテ山鹿ヲ出発シ植木駅ニ至ルトキ、田原・木ノ葉味方ノ軍利アラス、守ヲ失シテ植木ニ引揚ケ酣戦スルニ会ス、時ニ陰霧朦朧咫尺ヲ弁セス、直ニ敵ノ乱射ヲ受ケ戦闘刻ヲ移ス、日暮二本木ニ至ル、一番小隊モ亦植木ニ応援シテ防戦ス、時ニ山鹿ノ軍意ヲ拒守ニ決シ居タリシカ、植木ノ苦戦ニ応援シ已ム

ヲ得サルノ勢ニ依リ、廿二日ニ至リ遂ニ全軍退去ノ令ヲ伝フ、発スルニ臨ミ官兵来リテ鍋田原ヲ攻ム、味方事ノ急遽ニ出ルヲ以テ三名或ハ五名離散シテ退クモノアリ、我隊ハ官兵ノ追尾ヲ虞リ兵ヲ鍋田橋ニ纏メテ点検シ、整列シテ山鹿ニ引揚ケ田嶋村ニ退軍ス、翌朝鳥ノ巢村ニ転シ植木ノ軍ト練脈ヲ繋キ哨兵ヲ張ル、我カ第二・第三小隊ハ石川村ヲ守ル、二三日ヲ過キ第三小隊ハ植木ニ転ス、該所ハ兩軍壘ヲ対シ昼夜ヲ分タス連戦数日、砲声雷ノ如ク数十里ノ外ニ轟ク、佐土原藤吾第一小隊ヲ率シ亦至ル直ニ廣尾へ出張シ防守ヲナス、又転シ隈府ニ至リ袈裟尾原ヲ守ル、該地ハ地広フシテ兵少ク、壘間空疎百歩或ハ二百歩ヲ隔テ、築キ、守兵僅カニ三名或ハ四名ヲ散布シ、素ヨリ拒守ノ難キヲ以テ兵ヲ増サンコトヲ本營ニ乞ト雖トモ余兵ナシトテ来援ナシ、藤吾等相言曰ク、敵兵大萃セハ味方敗センコト論ヲ待タス、然トモ難キヲ避クルハ丈夫ニ非ラス、寧ロ之ノ地ヲ死所ト定メ深ク決戦セントテ敵ノ来ルニ備ヘタリシカ、卅日未明官兵襲来リ、激シク戦フ、我兵奮勵防戦スト雖トモ官兵益加リ、遂ニ四面ヲ圍マレ我兵孤立トナリ頗ル苦戦、隊長佐土原藤吾・半隊長阿万南八郎・小頭沼津小弥太兵士ヲ励マシ身ヲ挺シ

テ勇戦シ、遂ニ砲丸ニ中リテ斃ル、其他死傷二十余名ニ及ヘリ、之ニ依テ石川ヲ隊長トシ、守永之カ半隊長トナリ、翌日ヨリ梨ノ木坂ヲ守ル、当所ハ限府ヲ距ル半里余ニシテ鳥ノ巢ト彈道線樞要ノ地タリ、六日頃敵梨ノ木坂ヲ距ル僅カ二丁許、背後ノ民家ニ放火シ正面ヨリ来リ攻ム、本道ハ石川之レニ当ル、守永ハ兎玉ト同ク半隊ヲ率シ畦間ノ隧道ヲ匍匐シ、急ニ敵ノ横ニ出テ僅カ二三四発ヲ放スヤ否ヤ、敵乍チ散乱シテ福ノ本ノ様ニ退ク、我算兵ナルヲ以テ追尾ヲ制シ持場ニ揚ク、此トキニ当リ鳥ノ巢頗ル劇戦味方利アラス、又限府モ敵ヲ三面ノ高原ニ受ケ住吉街道ノミ鳥ノ巢ニ通ス、梨ノ木坂モ限府ノ本道ヲ絶ン、赤星街道ノ一条通スルノミニシテ殆ト孤立ノ勢タリ、翌日官兵限府ヲ襲ヒ激戦終日、我方梨ノ木坂モ官兵一中隊ナルヘシ、正面ニ出沒シ、遂ニ攻来リテ銃戦スルコト二時間許ニシテ退ク、夜ニ入四面ノ敵篝火ノ如ク終夜雷帽ヲ挿ンテ待カケタリ、翌未明又引揚ノ令ヲ伝フ、暴雨ヲ衝テ竹迫ニ退軍ス、止ル二日、又鳥ノ巢へ繰出ス、我一小队ハ本田早苗隊ト同ク大津駅ニ退軍ス、我兵ハ竹迫街道ヲ守ル、当所ハ曠原渺茫トシテ東西ニ連ルコト凡ソ一里余、加之ニ重峠ヲ兼三里ノ間僅カニ四小队ヲ以テ

之ヲ守ル、十三日・十四日両日原ノ中央菊地街道中津隊ノ持場ニ敵ノ斥候寄セ来リ、暫時ノ銃戦アリ、時ニ川尻及ヒ熊本ノ敗聞至ル、夜半鳥ノ巢ノ兵大津ニ退軍ス、我ニ番小队モ来会ス、三番小队ハ植木ヨリ、四番小队ハ百貫港ヨリ木山ニ引揚ク、十五日黎明ヨリ守永ハ半隊ヲ率シ斥候トシテ菊地街道ナル味方ノ壘ニ至ルトキ、敵来襲シ開戦ニ及フ、守永ハ敵ノ中腹ヲ衝ント左翼ニ回リ撃立テシカ、敵ハ已ニ曠原ニ充滿シ大津ヲ襲フノ勢アルヨリ線引ニ発炮シ、我方持場竹迫街道ヲ志シ、揚来テ持場ト相応援スベキノ地ヲトシ畑ノ高土手ニ抛リ拒戦ス、此トキ満原總テ戦ヒ酣ナリ、大小ノ砲声恰モ雷ノ如ク、地為メニ震動シ、敵兵沸クカ如ク侵入シ大津町家ニ接シ積茅ニ放火ス、守永モ三面敵ヲ受ケ飛丸雨注、僅カニ二十名ヲ散布シ殆ト苦戦ニ及ントス、石川持場ヨリ馳来リテ曰ク、今暫時ヲカメヨ、薩兵応援ニ来ルニ因リ平川嘉津馬ヲ嚮導トシ地藏坂ヨリ横撃セント、之レニ氣ヲ得、又兵ヲ勵シ半丁余ヲ進出テタルニ、敵間一ノ麦畦ヲ夾ミ六七間ニ過サレハ烈シク斬入ル可キヲ呼リシカ、敵四十名許リ起立シ色メキ見ユルノ際、地藏坂ノ味方飛出テ力ヲ協セテ乱射シタレハ忽チ散乱シ退ク、我兵敵シク追尾シタ

(菊地)

ルニ、敵ハ如何思タリケン、満原総懸リニ寄セタル大兵次第二遼巡、遂ニ総潰ヘトナリ、凡半里余杉水流村ノ入口迄追撃シ午時大津ニ揚ク、猶林間ニ潜ミタル残余ノ敵兵凡半小隊許、復タ我カ持場ニ寄セタレトモ一撃之ヲ退ク、我隊ハ生虜一人、敵兵棄ル処ノ斃屍二十余、銃器・彈藥・炊具・精米等ヲ得タリ、我兵ヲ点檢スルニ二手ヲ合シテ僅カ一小隊ニ過ス、今日ノ戰勝実ニ意外ナリトテ相祝セリ、同廿日午前第四時大津ヲ発シ凡半里許出張シ、日出ヨリ櫻馬場ヲ夾ミ銃戰ス、夜ニ入猶止マズ、十時頃遽カニ矢部ヘ引揚ノ令ニ因リ川原十文字峠ノ險ヲ越シ、翌廿一日午後三時矢部駅ニ着ス、此地ハ木山・竹宮其他各地ノ全軍亦来リテ集合ス、時ニ小倉処平新撰兵百余名ヲ率ヒ来会ス、四月十日ヲ以テ餓肥ヲ発シ、十八、即チ分テ二小队トシ、伊東祐啓・米良重明ヲ小隊長トシ、河崙新五郎・伊東直記統ル処ノ旧隊ヲ合シテ三中隊トシ、米良一穂・石川・守永之カ中隊長タリ、廿二日頃全軍ヲ分テ振武・干城・奇兵・正義・行進ノ五隊トス、小倉ハ奇兵長野村忍介ト共ニ事ヲ為スヲ盟ヒ兵ヲ合ス、我三中隊ハ即チ奇兵十八番石川隊・十九番米良一穂隊・廿番守永隊ナリ、是ヨリ先キ小倉ハ東京ニ在リ、鹿兒島ノ警ヲ聞キ馳テ鹿

兒島ニ至リ、県令大山ニ説テ曰、今大挙シテ熊城ヲ囲ミ在再數旬ヲ費ス、是計ノ得ル者ニ非ス若カス、日州ノ兵ヲ募リ一路直チニ豊後ヲ衝カンニ、官軍腹背敵ヲ受ケハ必ス退テ長崎ニ抛ラン、乃チ小倉以南ヲ下ス、顧フニ旬日ヲ出テサラン、而シテ九州ノ人心ヲ定メハ遂ニ中国ヲ席卷セント、大山大ニ之ニ同シ、貴嶋清等ト同ク一千余ノ兵ヲ托スルヲ約シ、人ヲシテ西郷ニ之ヲ報ス、時ニ彈藥漸ク乏フシテ深ク該地ニ入り、後備ノ軍ナキヲ憂ヘ之ヲ聽サス、桐野ニ命シテ此旨ヲ報シ、且來援ヲ乞フ、桐野乃チ和田勇・大岩根又藏等ニ托シ餓肥ニ歸ス、時ニ小倉病ニ罹リ、亦タ之ヲ峻拒シ、特ニ上京シテ獻議スル処アラントス、西郷又聽サス、時ニ山鹿・隈府ノ戰愈激シク我軍甚タ急ナルノ報アルニ会ス、小倉曰、今朋友半已ニ戰没ス、義傍觀スベカラスト、乃チ決意シテ来リ会スト云フ、廿三日頃日・薩・隅割抛ノ議ニ決シ江代退軍ノ命ヲ伝フ、時ニ我三中隊ハ瀬峰峠沙渡坂ニ在リシカ、直ニ矢部ニ引揚ク、是ヨリ椎葉ノ山路ナルヲ以テ兵士二三日間ノ糧ヲ負セ、廿四日午前第二時矢部ヲ発シ那須越名一越椎葉ヲ攀ツ、八里ノ間人烟ヲ絶チ、重嶺攢峰極テ峻嶮未タ尺余ノ雪ヲ残シ淤泥脛ヲ埋メ、且一条ノ溪流ナク全軍頻

リニ喝ヲ困ム、又草鞋踏尽シテ徒眺スル者許多、夜ニ入漸ク尾前村ニ^{日向}着ス、当所ハ一帶ノ激流ヲ夾ミ或ハ山ノ中腹ニ茅屋ヲ結ヒ僅カ十軒ニ充タス、容ル、ニ数万ノ兵ヲ以テス、故ニ馬牛屋或ハ糞小屋又ハ樹下ヲ撰パス夜ヲ明シタリ、間ニハ粮乏シク困却ニ及フモアリ、二日ヲ經廿六日江代ニ着ク、茲ニ本營ヲ据ヘ桐野之ニ居ル、我隊ハ江代ヲ距ル二里、湯ノ前村ニ宿陣ス、矢部ヲ発セシ以來始メテ家屋ニ入ルヲ得タリ、此トキ江代ヨリ岩野・湯ノ前凡二里間ノ民家一トシテ兵ノ入ラサルハナシ、是ヨリ先キ我隊彈藥及ヒ負傷ノ患者・医員等馬見原ニアリシカ、胡麻山ノ險ヲ越ヘ二日ヲ經テ亦來会ス、我飢肥隊該地滞陣中ハ彈藥ヲ製シ二万余ヲ得、然ルニ日・薩・隅三州ニ割拠シ之ヲ根拠トシ、奇兵ハ渡川越ヨリ日州ニ入り豊後ヘ進軍ニ決ス、小倉ハ桐野ニ至リ各軍大率豊後進入ノ前議ヲ主張シケレトモ桐野從ハス、日向地方守衛ノ委托ヲ受ケ即チ発ス、來ル十日富高二テ会スヘキヲ同隊ニ約シテ守永モ亦同行ス、実ニ五月二日ナリ、飯野・小林・梶山ヲ經テ四日未明飢肥ニ達ス、即チ外ノ浦・油津兩港ノ守兵等ヲ議シ、八日出発、十日富高二着ス、奇兵全軍已ニ來着シ野村・河嶽・伊東等ニ会合ス、即日豊後進入

ノ軍配アリ、先鋒四中隊・応援四中隊兩日ニ発シ、四中隊ヲ細嶋新町ニ、二中隊ヲ美々津ニ分遣シ、本營ヲ延岡ニ転シ、五中隊之ニ屬ス、守永隊及ヒ米良一穗隊ハ即チ美々津ノ守衛ナリ、佐藤三二・重久雄七・伊東直記・小倉勉平等宮崎地方守衛ノ着手トシテ発向ス、石川隊一中隊之ニ屬ス、十九日頃米良一穗隊ハ細嶋ヘ転陣ス、廿三日頃高鍋・石井・習吉隊美々津ニ着ス、即チ守備ヲ讓リテ守永隊ハ細嶋ニ転ス、同港ハ米良一穗・本田早苗隊ト合シテ三中隊ナリ、廿六日石川隊宮崎ヨリ至ル、米良一穗ハ延岡ニ転ス、廿七日午後官ノ軍船細嶋港口ヘ來リ、大砲数十發ヲ打掛ク、石川隊ハ細嶋崎ヘ、本田隊ハ南岬ヘ馳出テ小銃ヲ以テ之ニ応ス、僅カ二時間余ニシテ出港ス、此戦ニハ民家三軒・漁船三艘ヲ損傷シ一人ノ死傷ナシ、卅一日官船又細嶋ニ來リ、漂フコト凡三時間、発砲スル數十、守永隊ハ南岬ヘ、本田隊ハ細嶋崎ヘ出テ之ヲ拒ク、六月三日頃石川隊一中隊豊後口ヘ進軍ス、時ニ竹田ノ味方戦ヒ利アラス、小野市ニ引揚ケ、当地ニ三中隊ヲ止メテ竹田口ヲ抑ヘシメ、進テ臼杵ヲ衝キ一時二官兵ヲ乗落シ、戎器・彈藥ヲ得ル山ノ如シト云フ、石川ハ右小隊ヲ三国峠ニ、左小隊ヲ^(旗返峠力)幡返峠ニ出シ之ヲ守ル、臼杵

ノ味方復利アラス、全軍茲ニ集合ス、十四日午前第十時頃ヨリ官兵山野ヲ分タス沸クカ如ク一面ニ群レ来リ、幡返峠ヲ乱射ス、我兵防戦尤カム、晡ニ及フモ我壘ヲ侵サシメス、夜ニ入テ敵退去ス、此戦タルヤ攢峰曠原守ルニ寡兵ヲ以テシ殆ト苦戦ニ及ントス、然ト雖トモ守防ノ難キハ来攻モ亦難シ、險ニ抛リテ守ヲ失ハサルヲ得ル、石川及ヒ半隊長和田勇終日奔走各壘ヲ勵シ、遂ニ負傷シテ延岡病院ニ退ク、翌日早天ヨリ官兵又三国・幡返峠ヲ来襲シ終日激戦ス、十六日官兵又三国峠ヲ攻メ大砲ヲ交ヘテ我壘ニ乱射ス、我兵拒戦朝ヨリ晡ニ及フ、夜ニ入り敵壘蕭然トシテ一ノ砲声ナシ、而シテ我壘四面寂漠山禽叫ヒ絶ユ、駿隊之ヲ怪ミ砲ヲ発シテ之ヲ探ラントスルニ彈葉ニ乏シ、即チ之ヲ本營ニ乞フ、本營亦乏クシテ与ヘス、時ニ鬼束綱義返リ報シテ曰、余敵壘ヲ窺フニ守兵甚タ少ク、偶マ守ル者ハ或ハ快談ニ耽リ或ハ平臥ヲ貪リ安然備ヲ為サス、即時暗ニ乗シテ之ヲ襲ハ、如何ン、小隊長山之城軌肯ンセスシテ曰、激戦終日兵士甚タ疲ル、且砲尤ナシ、余未タ勝等ノ在処ヲ知ラスト、遂ニ果サス、夜已二十二時ニ垂ントスルニ、哨兵敵ノ来襲ヲ認メ発砲シテ急ヲ報スルヤ、三面ノ叢間官兵忽チ起リ肉薄シテ我壘ヲ

逼ル、我カ哨兵四面ヲ困マレ、瞬時ニ斃ル、者十余名、逃ル、者僅カニ四名、各壘亦カラヲ極メテ拒戦ス、然レトモ事不意ニ出テ又彈葉尽ク、遂ニ守ヲ失シテ上津小野ニ走ル、当時日州ハ官兵椎葉・渡川山中へ追々侵入ノ景況アル趣、該地区戸長ヨリ報知ス、依テ金田徴ヲ大斥候トシテ山陰・鬼神野辺ヲ巡行セシム、然ルニ高鍋・佐土原・宮崎・福岡・三俣・真幸・庄内等ノ募兵陸續トシテ(三股方)日々新町ニ着スル者凡一千余人、守永ハ佐藤三二・本田早苗ト同ク事ヲ執リ、新兵ヲ椎葉山中海浜等へ配布防守セシム、此兵過半無銃、偶携フル者ハ和銃ナリト云、飢肥ヨリモ六十余名来着シタルニ依リ分テ石川・米良隊ニ編入ス、時ニ宮崎ニテハ紙幣ヲ製シテ発向シ、延岡・高岡・高鍋・佐土原ニテハ彈藥ヲ製シ、大砲ヲ鑄、小銃ヲ修繕シ、或ハ木砲ヲ製シ、大ニ鉛・錫・銅・鉄ヲ購求シ、遂ニ梵鐘・仏具人民日常ノ器物ニ及フ、細嶋ニハ佐土原・高鍋ノ兵大砲ヲ引キ来リ、各南北両岬在来ノ台場ヲ修繕シ之ニ備フ、六月十七日細嶋ヨリ延岡ニ転陣ス、廿一日延岡ニ在ル七中隊三官以上本營ニ会ス、野村曰、明日ヨリ豊後進軍ニ決ス、互ニ死力ヲ尽シ一時ニ乗取り、鹿兒島其他各方面ノ味方窘縮ノ氣ヲ振興シ之カ標準タランコ

ト、是予カ諸君ニ希望スル所ナリト、皆之ヲ聞キ益奮激
シ牛ヲ屠リ酒ヲ酌シテ相盟フ、此時重岡ノ味方彈藥已ニ
尽キ兵糧亦乏ク、遂ニ隈田（熊田方）迄引揚タルノ報アリ、廿二日
延岡発程隈田へ宿陣ス、廿三日本営ニ会シ、明早天陸地
越・宗太郎越・赤松峠・切り込谷・水ヶ谷ノ五口ヨリ一
時ニ重岡ヲ衝カント各路程ノ遠近ニ随ヒ発途ヲ約シ、狷
師ニ命シテ嚮導タラシム、我廿番守永隊ハ中津一小隊・
十二番伊東隊ト共ニ切り込谷ノ先鋒トナリ、十六番小濱
隊・廿一番堀隊後軍タリ、重久雄七・小倉処平之ヲ督ス、
午後六時熊田ヲ出軍シ山路ニ入ル、重嶺絶澗僅カ一線ノ
樵徑ヲ通ス、密雨沛然暗黒咫尺ヲ弁セス、兵士互ニ胴乱
ノ紐ヲ握リ合ヒ路ヲ探リテ之ヲ攀ツ、廿四日時限ヲ違へ
ス陣ヶ塚へ曠原ニ出テシニ、林ヲ距ルコト僅カ二十間余、
小高キ岡ニ敵ノ哨兵壘ヲ張り、続テ七八ノ台場ヲ設ル、
恰モ連珠ノ如シ、我隊直ニ発炮戦闘ス、此トキ本道モ砲
声烈シク相戦フ、我隊ハ小隊長金田徴・半隊長大田原弘
直ニ抜刀、兵ヲ励マシ進ミタレハ中津隊モ不劣抜刀、先
キヲ争テ壘ヲ抜ク、已ニ九時ニ垂ントスルトキ六壘ヲ乗
落シ重岡已ニ目下ニ在リ、我隊ハ残ル一壘ヲ乗取ント纔
カ六七間ニ遍リ死力ヲ尽シテ採立ケル内、官兵早くモ高

嶺ニ上リ更ニ烈シク乱射シ、飛丸ハ降雨ト迸リ来リタレ
ハ之ヲ抜クトモ飛丸避クヘキナク、姑ク時ヲ見合セ水ヶ
谷ノ戦ヒ如何ト待チタレトモ砲声一発響カス、敵兵山ノ
尾伝ヒニ来リ、我カ横ヲ襲フノ勢ヒアルニ因リ守永隊右
小隊金田徴ヲ遣リ之ヲ抑へ、守永ハ左小隊米良重明ト直
先ニ進ミ相軋ル、野村氏本道ヨリ各所ヲ警メ来リテ指揮
ヲ加ヘシカ、忽チ右腕ニ飛丸ヲ受ケタリ、午後二時過キ
未タ諸口ノ砲声熾ナリト雖トモ險路彈藥ノ続カサルニ依
リ引揚ノ令ヲ伝フ、守永隊ハ鎧谷ニ引揚ケ点檢スルニ小
頭荒武哲戦死、其他死傷廿三名アリ、翌日本営ヲ葛葉ニ
転シ各隊ヲ分賦シ守防ノ備ヲナス、守永隊ハ戸龜山ヲ守
ル、当方面ハ五中隊ヲシテ守ラシメ、余ハ野村氏率シテ
陸地口ニ赴ク、廿七日頃官兵来リテ鎧谷ノ頂嶺ニ壘ヲ築
ク、此地險絶澗谷断岸千尋容易ニ進ムヲ得ス、屹然トシ
テ相对峙シ、一日敵兵尾ヲ伝ヒ堀隊ノ持場ヲ襲テ銃戦、
暫時互ニ進ムヲ得ス、止ル六七日ニシテ退ク、我十八番
ハ不動越ニ、十九番米良隊ハ陸地ニ在リテ連戦数日ニ及
ヘリ、七月十日佐藤三二・小倉処平奇兵隊總軍監タリ、
此トキ官兵三河内口ニ侵入ス、該地ハ土兵及ヒ宮崎兵之
ヲ守リシカ、味方守ヲ失シテ急ヲ告クル因リ十三日守永

隊ノ左小隊米良重明・小濱隊ノ半小隊ヲ之ニ応援セシム、米良隊ノ左小隊伊東祐啓一小隊ヲ率ヒ已ニ陸地口ヨリ来リ援ルノ処、宮崎隊已ニ走ル、祐啓モ彈藥已ニ尽キ後ヲ絶タル、ノ恐アリテ歌糸村ニ走ルニ会ス、重明乃チ之ニ馳セ、直ニ左右ノ岡ニ兵ヲ上ケ追尾ノ敵ヲ乱射シタレハ、敵ハ進ムヲ得ス、民家ニ火ヲ縱チテ退キタリ、十四日守永モ亦三河内ニ赴ク、陸地口ヨリハ山田泉之介十八番一分隊、谷口元米良隊ノ半小隊ヲ率シ至ル、竹添節延岡ヨリ一中隊ヲ率シテ至ル、当所ノ地形タル四面險山重疊トシテ一帶ノ溪流西南ニ流レ、進テ險ニ抛レハ一中隊ヲ以テ守ルヘク、退クトキハ千兵モ支ヘ難クシ、其要速カニ敵ヲ蹂躪シテ之ヲ退クルニ在リト、乃チ進撃ニ議決シ、竹添隊ノ一中隊ト重明一小隊ヲ先鋒トシ、竹添・守永之ヲ率ヒ、十八番一分隊三番佐藤隊・半小隊伊東祐啓・谷口元等一百余名ヲ後軍トシ、山田泉之介之ヲ率シ、宮崎及ヒ中津隊ハ左翼ノ敵ヲ抑ヘシメ、十五日午後第八時歌糸村ヲ発シ、暴雨ヲ犯シ險路ヲ越ヘ、暗夜ニ樵路ヲタトリ行クコト凡ニ里余、其翌黎明茅野ニ出シニ陰霧瞑朦突然官兵ノ壘前ニ至ル、直ニ竹添・米良ハ左ノ林間ヲ回り横ヲ衝キ、守永ハ米良隊ノ一分隊ヲ以テ大田原弘・郡司

和平太等ト正面ヨリ進ム、官兵此物音ヲ怪ミタルヤ、三名壘前ニ出テ相距ル三四間ニシテ頻リニ窺フ、我兵奔シク発シ、忽チ少尉一人・兵士二人ヲ斃ス、之ヲ本日ノ開戦トシ、刻ヲ移サスニ壘ヲ拔キ第三壘ニ懸リシカ、敵ノ乱射雨ノ如ク、且地險ニシテ急ニ乘取リ難ク我兵猶予ス、郡司和平太・大田原弘等走奔奨励スル内負傷ス、已ニ敵間七八間ニ逼リ、守永モ亦銃丸迸リ来リ、左ノ肩先ヲ貫ク、続テ復面部ヲ射ラレテ退ク、此トキ後軍相逢シ、終ニ壘兵ヲ逐落シ波戸洲海辺ニ逼リ、戎器・彈藥若干ヲ分取シテ古江峠ニ引揚タリ、時ニ午後一時也、我隊死傷八名、守永ハ是ヨリ延岡病院ニアリ、石川ハ銃創已ニ快復シ、八月五日頃ヨリ野村ニ随ヒ門川ニ出テ奔走シテ復タ延岡ニ至リ、直ニ熊田ニ赴ク、此トキ官兵已ニ延岡ヲ落シ、愈追尾シテ相逼ルニ依リ十四日右小隊ヲ率シ小梓峠ニ馳セ防戦ス、翌十五日是非茲ヲ破リ延岡ヲ取ント議決シ、西郷隆盛全軍ヲ指揮シ、和田越ノ味方ト相連リ瀋面ニ進ミ、激戦刻ヲ移ト雖トモ午後ニ至リ味方又敗シテ長井村ニ退ク、小倉処平・米良隊ノ小隊長谷口元・小頭長倉衛・金田隊ノ分隊長伊東祐純重傷ヲ負フ、十六日石川隊ハ延岡口ノ本道ヲ守ル、昨日ヨリ連戦、砲声山岳ニ轟

ク、午時官兵沸クカ如ク来襲シ奮勵拒戦ス、小隊長大岩

根又三迸丸ヲ受ク、十七日夜遽カニ山々頂ニ引揚ノ令ヲ

伝フ、因テ山ノ尾筋ヲ伝ヒ可愛岳ノ険ヲ越シ、翌未明ヨ

リ終日激戦、夜ニ入り不虞ヲ窺ヒ潜ミ出テ祝子川ニ至ル

トキ、全軍ヲ三分シテ前・中・後ヲ定ム、石川ハ後軍ヨ

リ進ム、是ヨリ重嶺ヲ攀チ又深谷ヲ下リ三田井駅ニ達シ、

椎葉・米良山等之絶険ヲ越ヘ飯野ニ出テ、続テ廿八日横

川ニ至レハ官兵險ニ抛リ我軍ノ来ルヲ待ツテ逆戦、朝ヨ

リ哺ニ及フ、石川又銃弾ニ中リ肩ヲ貫ク、夜ニ入り又潜

行シテ溝辺ニ出テ、蒲生・吉田等ヲ経テ九月一日吉野口

ヨリ鹿兒島ヲ衝キ、愈死力ヲ極メ戦鬪シ、遂ニ蹂躪シテ

城山ニ抛ル、此トキ当リ同志ノ兵馳セ集ルモノ多シ、官

兵四面ヲ掩シ^(扼カ)昼夜砲戦止ムトキナク、恰モ千雷ノ轟クカ

如ク、廿三日午後六時ニ至リ敵ノ発砲益烈シク、翌午前

第一時頃ヨリ敵總寄セニ来襲シ、遂ニ明ニ至リ味方ノ諸

将相斃レ、石川ハ岩崎^{城山}ノ病院ニアリテ縛ニ就ク、

(年月日脱)

鹿兒島県下日向国飯肥平民

石川駿

守永守

一六四 後藤八郎太上申書

客歳西郷氏ノ事ヲ西隅ニ萃ルヤ、県内ヲ募兵ス、之レニ

依テ大隊長貴島清・小隊長能勢十九郎ノ隊ニ編入シ、明

治十年旧一月十四日鹿兒島県下ヲ発シ、豊後路ヨリ押出

サント日州宮崎ニ着ス、然ル処熊本々管ヨリ神速当地ニ

来会スヘキノ急報達シ、即日同所ヲ発シテ同廿七日熊本

県下ニ着陣ス、則チ田原口ニ出張スヘキノ令アリテ彼地

ニ赴キ、各隊ト共ニ所々ノ要地ヲ固守ス、二月一日官兵

ヲ追払ハント未明ニ大挙シテ進撃ス、敵モ胸壁ニ依テ防

戦スルコト甚タ嚴重ナリ、味方奮激シテ終日苦戦スト雖

終ニ破ルコト能ハスシテ旧壘ニ引揚ク、是ヨリ日夜連戦

シテ砲声空ニ轟キテ互ニ雌雄ヲ争フト雖勝敗更ニ決セス、

同廿日比官軍大挙シテ襲ヒ来リ、味方之レニ応シテ防戦

シテ数々官兵ヲ追ヒ退クト雖彈藥悉ク打尽シ、終ニ不利

シテ散々ニ成テ植木ニ引退キ、此地ニ胸壁ヲ構ヘテ嚴守

ス、三月五日比ニ至リテ川尻方面ノ味方戦ヒ利アラサル

ニ依リ惣口ノ守兵悉ク木山ニ引揚クヘキノ報有テ、不得

止シテ朝八時比ヨリ各隊ト共ニ木山ニ退キ、翌未明矢部

ニ引揚ケ、此地ニ於テ各大隊ノ隊号ヲ編制シテ我隊ヲ振

武ト改名ス、夫ヨリ夏越ヲ経テ人吉ニ入ル、此時官軍鹿

兒島ニ進入スルノ報達ス、之レニ依テ各大隊ノ内ヨリ鹿
 兒島ニ向テ繰出セリ、我隊モ同ク進発ス、四月二十日比
 鹿兒島ニ到着シ本營ヲ上伊敷村ニ置キ、本營ハ中島健彦、
 貴島清ナリ此
 時官軍ハ城之山ノ四方ニ重柵ヲ立、前之濱ニハ軍艦數艘
 ヲ繫キ、其軍備甚タ嚴重ナリ、我隊ハ新昌院(新照院カ)口ヨリ攻撃
 スルニ、官兵ハ唯柵内ノ砲壘ヨリ頻ニ発砲ス、味方激戦
 スト雖終ニ抜クコト能ハスシテ、我隊ハ草牟田ニ引揚ケ、
 此地ニ胸壁ヲ築キテ対陣セリ、各隊ハ武岡・唐港・泊橋(唐港カ)・(湊橋カ)
 辺ヲ守ル、此時我半隊長林新次郎手負ヒ、予代テ半隊長
 トナル、五月十六日官軍大挙シテ進撃ス、味方砲壘ニ依
 テ奮戦スト雖終ニ破レテ各隊ト共ニ吉野帯迫ニ退キ此地
 ニ陣シ、翌十七日未明大挙シテ官軍ヲ突キ、官兵砲壘ニ
 依リ防禦スルコト頗フル敵ナリ、味方奮激シテ大ニ戦フ、
 此時予銃創ヲ受ケテ引退キ、即日高鍋病院ニ送ラル、
 其後千帰順ス、

明治十一年七月三日

永吉郷

後藤八郎太

一六五 有川二平太上申書

先般西郷隆盛等政府へ尋問ノ為メ上京ノ際ニ当リ、数千

人随行ヲ乞フ、之ヲ許ス、予ハ二番砲隊ニ編入セラル、
 田代五郎之レカ小隊長タリ、明治十年二月十七日鹿兒島
 ヲ発シ、東目街道ヨリ諸駅ヲ經過シ同二十一日八代ニ着
 シ、初メテ聞ク、台兵ノ我先驅ニ兵端ヲ開クト、直チニ
 進テ川尻ニ至ル、大小砲声恰モ雷ノ轟クカ如シ、於是猶
 道ヲ早メテ熊本城下ニ到リ、直チニ城面ノ花岡山ニ砲台
 ヲ築キ攻撃スルコト連日、同三月上旬頃予四斤砲壘ヲ
 預カリ、城下長六橋ノ側ヲノ壘ニ転シ之ヲ守ル、同四月
 八日黎明城兵安政橋へ突出シ勢ヒ甚タ猖獗、遂ニ八代ノ
 軍ニ連絡スト云、此日予カ守壘ニモ城兵一小隊余襲来ス
 ト雖トモ直ニ乱射シテ之ヲ退ク、同十四日川尻ノ敗報イ
 タル、即チ分隊長柴山某カ令ヲ受ケ、砂取ヲ経テ木山へ
 退陣ス、同十九日桐野氏令シテ日、御船甚タ危急、ヨツ
 テ砲數門ヲ据ヘシト、即チ柴山某・讀良某・市来某等ノ
 數名ト地形ヲ巡視シテ隊ニ先チテ御船ニ至ル、夜半御船
 ニ達シ天明クルヲ待ツ、翌未明左山手ニ砲声スルヲ聞キ、
 直チニ趣キ防禦術ヲ尽スト雖トモ衆寡不敵、味方散乱ス
 ルニヨリ柴山等ト木山ノ本隊へ帰ラントスルニ、帰路既
 ニ官軍ノ有トナル、故ニ飯田山ノ難所ヲコヘ辛フシテ木
 山ノ本隊へ帰ル、時ニ本營矢部退軍ヲ命ス、翌廿一日河

原村ニ休憩スルノ処、官兵一中隊余我力不意ヲ襲フ、衆奮戦シテ之ヲ退ケ、然ル后矢部ニ退ク、即時我隊ハ二番砲隊解カレテ諸隊へ編入ス、於是大津方面ノ隊ヲ奇兵隊ト名称ス、予ハ奇兵十番中隊左小隊長トナル、同廿三日馬見原ニ一泊、翌廿四日椎葉山ノ難所ヲコヘ三日ニシテ江代ニ着ス、全軍尽ク此土ニ会ス、居ル四五日、時ニ奇兵隊ハ豊後進軍ニ議決シ、道ヲ転シ富高新町へ進入シ、四中隊ヲ以テ先鋒トシ、延岡ヲ經過シ五月十一日重岡ニ突入ス、警視巡查我兵ノ不意ニ出ルヲ知ラス、狼狽シテ器械・糧米等ヲ捨テ、逃走ス、斬首二三アリ、又先鋒隊四中隊ノ内健康ナル者ヲ撰拔シ一中隊トナシ、豊後竹田ヲ襲フ、官軍未タ我軍ノ来ルヲ諜知セサルヤ、軍備全カラス、警視巡查而已ニシテ戦フヘキ勢ヒナク忽チ逃走ス、軍資金・糧米等ヲ分捕ス、本隊ハ宇田^{宇田枝}多枝ヲ經五月十四日竹田ニ着陣ス、同廿日熊本街道ヨリ官軍大峯来リ攻ムルノ報アリ、即チ非番ノ四中隊ヲ以テ進撃ス、官兵スコシク退キ恵良原ノ嶮ニ抛リ防戦ス、予カ隊ハ左翼ノ山手ヨリ進撃、終日激戦スト雖トモ勝敗決セス、日暮レ兵ヲ收メテ旧壘ニ退ク、后官兵屢来リ侵ス、毎度撃テ之ヲ退ク、一日又大峯来リ攻ム、我軍激戦尤モカム、然レトモ彈藥

竭耗シ、哨兵一名ニ五六発ヲ貯ヘ本營頗ル困却ス、依テ遂ニ兵ヲ市外ニ退ク、然ト雖トモ兵士ノ奮勢毫毛沮退セサルナリ、同廿四日官兵十三番ノ守壘ヲ襲ヒ殆ント守ヲ失セントス、我隊赴キ援ケテ之ヲ退ク、同廿九日古城ノ守ヲ失シ全軍ノ敗トナリ、勢ヒ復タ止ムヘカラス、我隊味方ノ引揚ルヲ不知シテ期ニ後ル、官軍尾撃スル甚タ急ナリ、我隊且戦ヒ且退ヒテ全軍ニ達ス、全軍小野市及ヒ上津小野ニ退ク、同三十日ニ中隊十番十一番佐伯ニ赴キ港口ニ備フ、其夜官艦來港、翌朝市外ニ発砲スル數十、我隊之ニ応セス、敵ノ上陸ヲ待ツ、午后二時頃ニ至テ官艦出帆ス、居兩三日、切畑ニ退テ守ル、六月十六日頃三国峠ノ敗報至ルニヨリ我隊モ赤木村ニ退ヒテ我左小隊ヲ二ツ二分チ、一ハ本道、一ハ右翼山手ニ備フ、同十八日頃官兵大雨ニ乗シ来リ逼ル、我兵奮戦寡ヲ以テ衆ニ當リ、朝ヨリ夜ニイタリ防戦尤モカメ敵ヲ斃ス無數、我隊戦死三人・手負七人アリ、夜半雨益烈シク諸道ノ橋落チテ彈道絶ス、ヨツテ為ス能ハス、午后十一時惣軍退テ陸地峠ヲ守ル、同廿一日重岡ノ軍々糧給セス、鎧ニ退ク、我隊モ矢ケ内ニ退テ守ル、同廿四日惣軍重岡ニ進撃ノ議決シ、鏡・水ヶ谷・陸地ノ諸口期ヲ約ス、我隊午后十時矢ケ内

ヲ発シ柚ケ内ニ至ル、官兵一小隊茲ニ拒守シ戦フコト三時間ハカリ、官兵繰引ニ退キ陸地峠ニ拠ル、此地極メテ峻嶮、官兵塁數十ヲ築イテ守ル、我隊奮戦其半腹ニ逼ル、時ニ日既ニ暮ル、翌日八番中隊潜ニ右翼ノ峻ヲ逸リ、九番一小隊并ニ予カ左小隊ハ本道ヨリ一時ニ峠ニ逼ル、戦ヒ尤激シ、官兵敗走、我隊尾撃、赤木村ニ至リ糧米・彈藥等若干ヲ分捕ル、然レトモ赤木ハ峻ノ拠ルヘキナキヲ以テ退テ陸地峠ヲ守ル、同廿六日野村某軍ヲ招クニヨリ、陸地ノ壘ハ十二番中隊ヘ渡シ八戸ニ至ル、同廿七日梓峠ヲ襲ハント夜ニ乘シ山間ノ樵路ヨリ進行ス、此地ヤ日豊境界第一ノ峻ニシテ、本道猶容易ニ人馬ヲ通セス、況ンヤ鬱々タル大木ノ間ニ岩ヲ攀チ谷ヲ躰ヘ其艱苦言フヘカラス、已ニ其巔ニ達セントスルニ天明ク、思フニ官兵此峻ニヨル夜襲ニ非サレハ必ス不利ナラン、明曉ヲ待テ其不意ヲ襲ハント兵ヲ駐メテ潜伏ス、翌未明進撃、直チニ峠ヲ乗取り、勢ヒニ乘シ直下ナル水ケ谷ノ敵壘ニ逼ル、官兵又支ユル能ハス、自ラ本營ニ放火シ走ルコト十丁余、峻ニ拠テ防戦ス、我隊右翼ノ山間ヲ逸リ敵壘ノ横ニ出テ齊シク発射ス、官兵復タ敗レテ走ル十餘丁、黒土峠ノ峻ニ防守ス、此壘重岡ニ接近シ実ニ要所タリ、官兵力ヲ

尽シテ拒戦シ抜ク能ハス、壘ヲ築イテ守ル官壘ト隔タルコト三丁位、某日日不覺黒土峠ノ壘ヲ落サントニ中隊之二逼リ、直チニ前壘ヲ乗取り、尚進ンテ一壘ヲ落サント之ニ近キ激戦スレトモ抜ケス、夜ニ乘シ旧壘ニ歸ル、七月廿日頃官兵夜ニ乘シ窺ニ兵ヲ我壘前ニ伏セ、以テ不意ヲ襲ハントス、我兵之ヲ察セス、未明大砲ノ敵壘ニ響クヤ、伏兵忽チ起リ我壘ヲ攻ル、甚タ激シ、時ニ予カ隊十餘名抜刀シテ齊シク進ム、官兵敗レ走ル、右翼一番隊ノ持場苦戦シテ一壘ヲ失ス、我隊赴キ援ケ励シク攻撃ス、官兵大イニ狼狽、死傷ヲ捨テ走ル、此戦ヒ尤愉快、銃數十・彈藥數千ヲ奪フ、又敵ノ死骸三十餘ヲ見ル、予カ隊戦死二名・手負四名アリ、后一兩日ヲ経テ予事務掛ニ転ス、爾后戦状ヲ不詳、八月十五日頃(無難カ)六鹿ニ至ル、野村某・重久某・米良某等ニ会シ決死敵ニ当ラントス、時ニ野村予ヲシテ(長井カ)永井村ニ歸リ西郷氏ニ言ハシムルノコトアリ、予固辞スレトモ不聞、ヨツテ永井村ニ歸ル、此時ニ当リ官兵日ニ加ハリ數万ノ大軍隘地ニ圍塞シ、山トナク陵トナク皆兵ナラサルハナシ、同十七日鹿兒島進軍ニ議決シ、四方ノ諸隊守ヲ撤シ絡繹トシテ引揚ケ永井村ニ集ル、其雜沓思フヘキナリ、先鋒已ニ発シ、予後軍ニ加ハリ進行

スル、道ヲ左ニ失シ行ク三里許、敵ノ壘前ニ出ツ、此時
已ニ天明ケ敵瞰射ス、予等二十余名斉シク進戦、殆ント
敵壘ニ乗ラントスルニ官兵益加ハリ敵スル能ハス、退テ
山間ニ潜伏スルコト三昼夜、遂ニ軍門ニ至リテ降ヲ乞フ、
実ニ八月廿一日ナリ、

明治十一年寅七月

鹿兒島県

有川二平太

一六六 朴尚達上申書

明治十年第四月十一日区长并ニ有川勘介等ノ募ニ応シ九
十二名ト共ニ出発シ、諸縣郡吉田街道ヲ經テ人吉ニ到、
該所江代ヨリ間道尾前ヲ越ヘ熊本県下矢部ニ着ス、此日
同廿日ナリ、爰ニ於テ隊号奇兵ニ番小隊ニ編入セラレ、
草身半隊長ヲ命セラル、時ニ我全軍該所ニ退陣ノ際ニ当
テ不戦シテ馬見原ニ赴キ、胡麻山ヲ越テ又人吉ノ内岩野
邑ニ止リ、宿陣スルコト十日余リ、我隊日州口エ繰出ベ
クノ令ヲ得、此地ヲ発足、湯山邑ヨリ大河内ノ山路ヲ踏
ム、四五日ニシテ美々津ニ赴キ滞陣スルコト二日間、是
ヨリ延岡ニ到リ、土々呂并ヒニ尾末ト云フ海岸ニケ所ヘ
兵ヲ分カチ守護スル四十日ニ近シ、爰ニ於テ隊号奇兵廿

壹番中隊ト改称セラル、此間豊後方面ノ戦我軍日々大
リ得ルヲ伝フ、我隊跡ニ佐土原隊ト交代シ豊後口ヘ赴ク
ベクノ令ヲ受ケ、旧五月十二日発足、坂元邑ニ到リニ豊
後ノ方面已ニ敗戦シ、官軍重岡ニ襲来シ赤松峠諸所エ兵
ヲ張ルノ報ヲ伝フ、我方出張本營熊田邑ニ有リテ重岡ヘ
進撃ノ評議決ス、依テ六月廿二日坂元邑ヲ発シ、半途ニ
シテ日已ニ没シ終夜眠ラス路程六里余ヲ経ルノ間、鑑邑
ヨリ北ニ向ヒ陣ケ塚ト唱フル峻険タル高山天曇リテ四方
ヲ分タス、稍ク樵路ヲ求メ赤松峠ニ近ントスルニ已ニ夜
モ黎明ニ至リ、我方面先鋒中津隊及ヒ奇兵十二番・同十
六番・飢肥隊・我隊等凡ソ五中隊余、兵卒勞レタリト雖
足ヲ休メス、山中ヨリ鯨波ヲ拳テ突入ス、官兵防ク能ハ
ス、手負・死骸ヲ捨テ要所ヘ退ク、故ニ勿チ敵壘八九ヲ
取ル、我方死傷モ又無キニ非ズ、午後三時頃迄挑ミ戦フ
コト止マス、適我軍此ノ日大勝利ヲ得タリト雖終ニ彈藥竭
キ守ル能ハス、況ヤ進ムヲヤ、兵ヲ葛葉ニ退ケゼニブヘ
ト云フ山ノ峠ニ壘ヲ築キ守ヲ爰ニ置ク、草身素リ病ニ罹
リ、倍慢症患フコト甚シ、依テ職ヲ辞シ延岡病院ヘ往テ
療養ヲ加フルコト三十日余、未タ順快ナラスト雖我全軍
諸所敗戦、理アラザルニ依リ患者頗ル本隊ヘ帰ヘス、于

時我隊葛葉ニ在陣、代俚朴景示アルヲ以テ給養方ニ寄ル、是ヨリ先キ戦屢アリテ我中隊長堀国治等戦死スト雖其地ニ居サルヲ以テ細詳景氣ヲ知ラス、已ニ我軍南面敗潰シ、官軍延岡中ニ充滿シ無鹿辺へ襲来ニ迫リ、我軍各隊熊田邑ニ集会スベク旨令ヲ聞キ、速ニ夜ニ乘シテ爰ニ集ル、此日旧七月六日ナリ、本夜該所ヨリ長井邑ニ赴キ、爰ニ於テ同十日官軍近衛兵ニ降ル、

(年月日脱)

鹿兒島県下伊集院郷苗代川

朴尚達

一六七 嶺崎良助上申書

戦地景況概略

明治十年三月下旬頃辺見十郎太ノ募リニ応シ四月十五日我郷ヲ発シ、同十八日人吉到着ス、於是鵬翼三番中隊分隊長ニ命セラレ、八代口ニ馳向フ可キ令アルヲ以テ即日発程、同十九日途中ニ於テ辺見・淵辺ノ両士へ行合、八代ノ守リ既ニ敗レタルニ付今ヨリ神ノ瀬ニ守兵スヘキノ令アルニ因テ、直ニ該地ニ至リ本道ヲ防守ス、同廿二日破竹三番中隊ト交代、我隊ハ一ノ瀬ニ転守ス、五月中旬頃隣墨才木村ノ味方敗レ、敵兵尋テ我持場ニ襲来、勢ヒ

湧カ如シ、味方頗ル苦戦シ、戦フコト凡ソ五時間ニシテ敵少シク退クヲ以テ勢ヒニ乘シ、尾撃シテ敵数名ヲ斃シ、遂ニ材木村^(才木カ)ノ旧壘ヲ復シ、夫ヨリ我方隊ハ本壘ニ退守ス、同十九日黎明敵又襲来、防戦中大野口ノ敗報至ルニ依リ、我左小隊ハ鎌瀬ニ退守シ、右小隊ハ植柵^(柵)村ヲ守ル、同廿一日神ノ瀬ノ味方敗レタルニヨリ我隊ノ守ヲ舞床村^(舞床谷カ)ニ転ス、同廿五日黎明敵又来リ、大砲・小銃ヲ以テ烈シク襲撃スルト雖トモ味方死力ヲ尽シテ拒戦スルニヨリ勝敗遂ニ決セス、薄暮ニ至リ敵兵引退ク、翌日又右小隊ノ台場ニ攻来リ、不意ヲ襲ハレ味方支ユル能ハス、敗走スルヲ以テ余応援トシテ三十余名ヲ率ヒ、直ニ敵中ニ斬込ミ縦横ニ駆廻リ敵数名ヲ斃シ、尚逃ルヲ追ヒテ遂ニ右小隊ノ旧壘ヲ復シ、銃器・弾薬等ヲ得タリ、此夜左翼山手ノ味方敗レタルヲ以テ不得止我隊ハ退テ鶴越ヲ守ル、六月一日人吉ノ敗報至ルニヨリ大木場ニ引揚ク、翌二日夜大野口本營ノ令ヲ以テ大河内村ニ転ス、同十一日敵又右小隊ノ持場へ襲来シ、味方頗ル急ナルヲ以テ余半隊ヲ率ヒ応援シ、防戦甚タカムト雖トモ大木場ノ味方敗走ノ報アリ、因テ真幸吉田ニ引揚ケ爰ニ一泊シ、翌十二日吡叻四中隊ニテ吉田越ヲ守ラント該地ニ至リ、未タ一壘モ築カサル

二敵早や襲来ス、因テ各楯ヲ要セス、勇ヲ奮テ激戦ス、午後五時頃ニ至リ彈藥全ク尽クルヲ以テ喇叭ヲ合図トシテ四中隊同時ニ鯨声ヲ作テ斬込タレハ敵兵一時モ不支、右往左往ニ散乱ス、因テ追撃スルコト半里余ニシテ日暮ルヲ以テ退ク、此戦敵數拾名ヲ斃シ、彈藥・銃器等多分ニ得タリ、然ルニ味方彈藥乏シキ故ニ敵若シ重テ襲来セハ必定難儀ナラント、乃チ本營ニ告ケ、此夜吉田町へ引退キ川ヲ前ニシテ築壘守防ス、於是防戦スルコト凡三十日余、後栗野口ノ守敗レタルヲ以テ飯野郷ノ内白鳥村ニ退守ス、是ヨリ後三日ヲ経テ敵攻来ル、我隊善ク拒クト雖トモ右翼ノ守敗ルルニヨリ退カントスレトモ、敵既ニ埒路ヲ断切リタルヲ以テ霧島山ヲ攀チ、辛フシテ逃レ小林ニ至リシニ、此地モ敵既ニ進入シ諸所ニ放火スルニヨリ又高原町ニ至リテ休足シ、翌早朝小林街道ニ出テ台場ヲ築キ守兵ス、後四日ヲ経テ敵襲来セシニ、我右翼ノ山手敗レタルヲ以テ退テ莊内ノ内野々美谷ニ至リ敵ヲ俟ツニ、久シク来ラサルヲ以テ七月十七日黎明ヨリ五中隊ヲ四手ニ分ケ、二中隊ハ本道ヨリ、二中隊ハ本道ノ左右ヨリ、我中隊ハ霞ノ権現ニアル敵ヲ攻撃スルニ決シ、同時ニ進発、即チ曉霧ニ乗シ疾ク進ンテ敵ノ壘下ニ迫リ、鯨

波ヲ拳一時二砲発、直ニ敵壘ヲ乘取り、敵數名ヲ斃シ、追撃シテ銃器・彈藥・外套其他夥多ノ分取ス、此日本道ノ味方モ頗ル勝利ヲ得、凡ソ一里半余ヲ追撃シ、彈藥・銃器ヲ得ルト雖トモ敵高原ノ壘ニ抛リ固ク拒クヲ以テ味方遂ニ彈藥ヲ打切り、且ツ敵援来ルニヨリ空シク野々美谷ニ引揚ク、此日本道ノ味方死傷百余名アリ、敵ノ死傷モ亦多シト云フ、同十九日早朝ヨリ又進撃ノ令アリ、乃チ我隊又霞ノ権現ニ掛リシニ、敵兵前敗ニ懲リシヤ、四方ニ柵ヲ結ヒ大砲數門ヲ備へ、頗ル守備嚴整ナルヲ以テ容易ク敗ル能ハス、戦フコト凡ソ三時間ニシテ漸ク追撃シタレトモ敵尚山ノ麓ニ在テ防戦ス、本道ノ味方モ進ンテ數堡ヲ抜クト雖トモ是亦敵善ク拒クヲ以テ時ヲ移シ又彈藥ニ尽キ、止ムヲ得ス引揚ケ旧壘ヲ守ル、余ハ是ヨリ腹痛ヲ醸シ、保養ノ為メ給養方ノ宿營ニ至リシ際、同廿四日末吉・都ノ城・財部等諸方ノ敗報至ルヲ以テ山ノ口郷麓ニ至、翌廿五日敵不意ニ襲来、我軍敗走、余等僅ニ逃レテ山中ヲ忍ヒ、四日ヲ経テ都ノ城ニ至リシニ味方何地ニアルヲ知ラス、遂ニ本隊へ達スル能ハス、無拠同三十日帰郷潜伏ス、故ニ爾後ノ戦状ヲ詳ニセス、

(年月日脱)

三小区蒲生郷上久徳村
嶺崎良助

一六八 大野義行上申書

戦地景況概略

客年二月十五日西郷隆盛等政府江尋問ノ趣有之、上京ニ付隨行ニ加リ、三番大隊三番小隊々長高城七之丞隊ニ編入シ、鹿兒島県下ヲ発程シ、西目街道ニ通行シ熊本県川尻駅ニ着キ、同廿一日ヨリ熊本城ニ押寄せ攻撃ス、余ハ出町口ニ滞陣シ、十日間ヲ経テ植木ニ繰リ出シ、屢戦争致シ、一週間ヲ経テ各隊ヨリ精撰シテ二小隊ヲ編制シ狙撃隊ト号シ、忝番小隊長河野四郎左衛門ナリ、余分隊長トナル、三四日過キテ河野ハ二番小隊ヲ引率シテ松橋ノ本営ニ転入シシ後子鹿兒島ノ城山ニ於テ戦死ス、余此ノ時狙撃隊ノ半隊長トナル、其以後川尻口ノ味方敗レテ悉ク木山江引揚、矢部・馬見原辺ヨリ胡麻山ノ嶮ヲ越テ人吉ニ転退シ、爰ニテ各隊ヲ中隊ニ変革シテ余狙撃一番中隊左小隊長トナル一番中隊長小倉壯九郎、後子、鹿兒島ノ城山ニ於テ戦死ス、時二本営ヲ守護ス、後子三十日程ヲ経テ宮崎ニ転入ス、此ノ時野尻方面ノ味方危キ報知アリ、依テ余小隊ヲ引率シ応援ニ赴

キ激戦屢憤勇ス、未タ勝敗ノ分レサリシニ可惜彈藥乏シキ故二十分ニ志ヲ得ズ、高岡ニ引揚ケ、爰ニモ暫シ支ヘトモ終ニ佐土原ノ千歳川ニ引揚、爰ニ防戦スル処山手ノ方敗レ美々津ニ引揚、川堤ニ伏セ稍防禦ノ央ニ山陰ノ味方敗レ、爰ヲモ又引揚次第延岡ニ繰リ引シ、追々長井邑ニ引退キ、爰ニ三四日防戦スル内糧米欠耗、此地永ク保守ス可カラサルヲ知り、同十七日午後十二時頃ヨリ兵ヲ潜メ人々枚ヲ含ミ、山ヲ越エ険ヲ攀チ顛倒匍匐シテ、黎明漸ク可愛ノ嶽ノ敵壘ニ達シ、邊見・河野ノ両士諸隊ヲ指揮シ先登シテ突然之二迫ル、官軍狼狽、兵仗・死骸ヲ棄テ山中ニ潰乱シ、我兵進軍、昼夜兼行シテ同十九日祝子川ノ敵ヲ破リ駆テ祝子川ニ抵リ、合廿一日岩戸越ヲ経テ三田井へ突出、敵二名ヲ斬テ金穀・輜重ヲ収メ各隊ニ分配ス、爰ニ於テ全軍ヲ分テ三手トナシ前・中・後ノ三軍ヲ定ム、余中軍ニ加リ同廿四日神門・鬼神野等ノ官軍撃破リ、同廿五日大風雨ヲ不厭銀鏡ヲ越(村所カ)へ村庄ニ至リ、(上槻木カ)上附木ヲ経テ二十七日諸縣ノ郡須木ニ到リ、鹿兒島ノ景況ヲ搜索ス、同二十八日前軍小林郷ニ進ム、巡查五六名ヲ生捕、直チニ進シテ同卅日後軍ヲ以テ前驅トナシ官兵ト横川ニ戦フ、勝敗不決、途ヲ転シテ踊郷ニ到ル、官軍

又茲ニ拒戦ス、其夜暗黒ヲ待テ間道ヨリ山田ニ進軍、同

卅一日蒲生ニ到ル、前軍又少戦シテ巡查四名・旅団兵一名ヲ生獲ス、伏屍亦多シ、我中軍蒲生ニ至リ後軍ヲ待チ兵ヲ息フ、須臾九月一日邊見等前軍ヲ帥ヒ吉田ヲ過キ吉野ニ到ルヤ、官兵川上村ヨリ吉田・吉野ノ中間ヲ絶ツテ我軍ヲ襲フ、于時貴島清等兵ヲ励マシ憤闘シテ之ヲ抑ヘテ防戦ス、前軍既ニ城山ヲ乘取り、我中軍実方ヲ守ル、二日終ニ敗レテ全軍拳テ鹿兒島城山ニ楯籠ル、同三日貴島清策ヲ建テ米蔵ノ官兵ヲ夜襲センコトヲ謀ル、該夜十二時頃ヨリ兵ヲ二手二分チ、枚ヲ含ミ一手ハ肝付邸ノ小経ヲ忍ヒ、一手ハ梟庁ノ小溝ヲ潜ミ不意ニ之ヲ襲撃シ、二柵ヲ抜ヒテ一時官軍動揺スト雖トモ官兵塁ニ抛テ頻ニ小銃ヲ雨注シ、我兵多ク斃ル、故ニ取ルコト能ハスシテ退ク、此戦ヒニ貴島清衆ニ先チ敵五名ヲ斃シ憤闘シテ之ニ死ス、時ニ後チ四日比三軍ヲ合シ小隊ト成シ、余十番ノ半隊長トナリ籠城ス、廿余日ヲ過キ同廿四日官軍大拳シテ城山ニ迫ル、我兵少フシテ支ユル能ハス、遂ニ落城ス、余軍門ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県

大野義行

一六九 稲元氏總上申書

明治十年二月西郷隆盛上京云云以来六月中旬比県内福山郷江設クル処ノ本営ヨリ伊東昌吉ナル者派出シテ、我区都城二分営ヲ建テ、火難或ハ盜賊其他区内非常ヲ戒メンカ为メ隊ヲ組ム、此際ニ於ルヤ既ニ壯士輩悉ク出軍跡ニシテ、老若ノ別ナク拾五以上六拾歳迄ノ人員ヲ募ル、之レヲ編制シテ六小隊ト爲シ執レモ無銃タリ、此時半隊長ニ編入サレ、区内往還筋江拾名或ハ五六名ヲ分配シ、交ル々番兵スルコト殆ント三十余日ニ及ヘリ、然ルニ七月廿四日曉天ヨリ西南ニ方リテ烈シク炮声ス、無程莊内・末吉・財部三ヶ郷方面ノ味方全軍敗レテ悉ク山ノ口・三股郷ヲ指シテ引退ク、官軍之レヲ追フテ都城ニ到ル、此ニ於テ区长川西幸三令シテ六小隊ヲ解ケリ、乃チ川村參軍江相付自首帰順ス、同月三十一日第四旅団輜重部ヨリ二十長命セラレ、其后征討軍団輜重部ヨリ電線架ケ張り人足引列高岡迄出張スヘキノ命ヲ受、二十日程相勤候処、日当ヲモ下賜フ、其后都城出張警視署江呼出サレ、尚婦順書差出ス可キノ命アリ、再ヒ進達ニ及ヒ候処、鹿兒島裁判所エ護送セラレ、於長崎懲役二年ニ処セラル、

鹿兒島県下日向國諸縣郡都城

明治十一年三月

稲元氏總

(年月日脱)

鹿兒島縣第百四大区二小区
大崎郷
小野嘉雄

一七〇 小野嘉雄上申書

戰地形状始末記

昨明治十歲県下騒乱ノ際、大口郷工警衛ノタメ出張可致旨戸長ノ達ヲ受、旧二月廿五日宿元出発、同廿九日右大口郷ニ着、本營ニ出頭イタス処、又熊本県下ニ出兵致候様更ニ被申付、同三月三日木山本營ニ到着、是ニ於テ振武十番中隊ニ編入セラレ、当所長峯辺諸所番兵イタシ、同七日矢部ノ様引揚相成、是ニ両日滞陣、夫ヨリ鹿兒島ノ様退軍ノ砌、途中江代辺ヨリ脚痛相煩、漸ク横川郷迄差越候処、遂ニ歩行不相叶除隊、右横川ヨリ人馬相雇帰郷ス、然処六月上旬比区内海岸守兵ニ亦被相募、不得止出張、海岸諸所番兵ス、然ルニ我隊分テ鹿屋郷工半隊出張シ、迹ニ隊長一名ニテハ指揮不相届ニ付半隊帰迄ノ間、仮二分隊長ノ場ニ可備旨、六月卅一日(マヤ)小隊長ヨリ令ヲ受、転シテ区内街道ニ守兵ス、然ルニ七月一日既ニ官軍ノ進撃アリト云トモ可抵抗兵備ナキヲ以テ直ニ解隊シ、一旦諸所ニ潜伏イタシ居、五日ヲ経テ戸長ニ相付右官軍ニ帰順仕候事、

一七一 荒牧重三郎上申書

于時明治十年二月上旬鹿兒島動揺ノ巷説紛紜、既ニ熊本県下ニ於テ開戦ニ及ヒ、日毎ニ攻戦劇シク薩兵勝ちニ乘シ近日爰ニ至ラントスルノ風説喧々、我県下ニ於テモ廣島及ヒ小倉鎮台并ニ東京巡查兵等朝暮ニ引モ切ラス続々トシテ熊本ニ応援スル夥多數、此際ニ当リ男子タルモノハ暫クモ傍觀座視スル時ニ非ラス、去リ乍ラ薩ノ此拳ニ於ケルヤ未タ孰レカ直孰レカ曲ナルヲ知ラス、人ノ出処ニ於テハ一世ノ大事、(漫力)慢リニ之ヲ処ス可ラサルモノナレハ、一旦薩軍ノ在ル所ニ至リ、其兵ノ起ル名義正シク、弥義拳ノ至当ナルカラ察シ、然ル後其進退ヲ決セント窃カニ郷里ヲ出発シ、三月九日山鹿ニ至リ、新町街道ヨリ行クニ薩ノ哨兵ニ相会、其顛末ヲ告ケシニ山鹿ノ本營ニ護送サレ、則チ該地出張ノ隊長堀新次郎・村田三介・野村忍介・平野正介・別府九郎・伊東直二等ノ將校ニ面会シ、直ニ自己ノ志ヲ述へ、且今般拳兵ノ名義・進退出処ノ如何ヲ尋問スルニ、隊長等曰ク、子未タ此事ノ何タル

ヲ知ラサルヤ、此事件ニ於テハ既ニ出途ノ已前鹿兒島県令大山綱良ヨリ專使ヲ以テ各府県へ偏ク報知シタリ、其言タルヤ今度同県士族中警部中原尚雄以下数名大警司川路利良ノ内託ヲ受ケ、父兄ノ病患ニ託シ潜ニ郷里ニ帰り、陸軍大将西郷隆盛・同少将桐野利秋・同少将篠原国幹等ヲ暗殺スルノ事発露シ、忽チニ逮捕、嚴敷糺断ヲ遂ケシニ一々白状シ、剩へ同県士族旧宮崎県大属野村綱ニ於テハ大久保内務卿利通ノ内命ヲ奉シ、西郷ヲ刺殺セントスルノ趣キ自訴ニ及ヒタル口書ヲ齎ラシ既ニ発セリ、実ニ戊辰已降有功無罪ノ西郷等ヲ何等ノ罪アレハ、政府ニ在テ執事ノ大久保等如斯ノ姦謀ヲ縱テ無罪ヲ構陷シ国權ヲ侵サントスル、故ニ西郷・桐野・篠原等政府へ尋問ノ事ヲ発セリ、然ルニ奸党如斯各所ニ潜伏スレハ途中如何ナル難モ不計故、旧兵隊ノモノ隨行シ途中ヲ保護シ、其志ヲ遂ケシメントスルニ、豈計シヤ既ニ鹿兒島ヲ発シテ熊本県下川尻駅ニ至ルニ、熊本鎮台我ヲ抗拒シ不意ニ発砲、我兵未タ之ニ抗セス、徒手薄テ彼レヲ追崩シ、伍長某ヲ生獲セリ、爰ニ於テヤ士氣弥奮烈シテ抑ユ可カラス、然ルニ熊本城ニハ五日已前ヨリ城下ニ行火シ頗ル籠城之意ヲ視セリ、故ニ不得止開戦ノ期ニ及ヘリ、然リト雖トモ

之レ全ク余等西郷ヲ保護シテ志ヲ遂シメントスルノ事ニ起レハ、更ニ他ニ援ヲ求メス、君ノ来意如何ント云ヘリ、然ルニ余謂ラク、実ニ隊長等ノ云フ所ノ如ハ、有功無罪ノ西郷等ヲ暗殺スルノ事件ニ於テ三将政府へ尋問ノ途中ヲ警衛スルニ、無妄ニ台兵ヨリ発砲スルニ於テハ今日ノ直全ク薩軍ニ有シテ、政府之ヲ討スルノ云ハレ無シ、之則チ二三ノ奸吏聰明ヲ擁閉シ、彼中間ニアツテ奸謀ヲ行ヒ、蒼生ヲシテ塗炭ニ陥ラシム、嗚呼慨歎ニ堪ヘス、断然爰ニ意ヲ決シ則チ請テ曰ク、余ノ爰ニ来ルハ偏ニ憂國ノ赤心ニシテ、今日如斯ノ兵乱ニ臨ミ、豈傍觀座視スルノ時ニ非ス、然ト雖トモ未孰レカ直孰レカ曲ナルヲ知ラサレハ企テ爰ニ来テ面アタリ其曲直ヲ論シ、然後方向ヲ定メント思ヘリ、然ルニ諸君ノ言ノ如キハ名義屹然、國家ヲ憂ヒ蒼生ノ為メ三将ヲ保護シテ其志ヲ遂ケシメントスルハ実ニ盛ナリト云ツ可シ、然ル上ハ余モ之ヨリ志ヲ供ニシ粉骨碎身シテ汗馬ノ勞ヲ尽サン、伏テ願クハ軍ニ從テ事ヲ俱ニセンコトヲ乞フニ、隊長等對曰、余等今日事ヲ幸ルヤ人民ヲ鼓動シ他力ヲ假ツテ事ヲ為スニ非ス、實ニ有志ノ徒ヲ不約ニ集リ不議ニ会シテ既ニ今日ニ至レリ、如何ソ他ニ援ヲ求メンヤ、子等必ス之ヲ熟考セヨト、

固ク辞シテ不許、然リト雖トモ余モ亦空シク止ム可キニ非ラサレハ、強テ之ヲ乞ヒ、終ニ隊長等之ヲ許諾シ、之ヨリ山鹿出張本営ニ付属シ探偵ノ事ヲ命セラル、三月十日該地出發、潜ニ忍ンテ南ノ関近傍ノ地ニ至リ、敵状且地形・人勢等ヲ搜索シ、十二日帰テ之ヲ本営ニ報ス、此際我軍毎戦勝利、又一日ヲ経テ十四日本営ノ命ヲ受、山鹿ヲ斃シテ筑後久留米ノ我郷ニ帰テ人気且勢ノ如何ヲ搜索スルニ、秋月・佐賀等ノ有志輩此時ニ至テ弥薩軍ヲ希望シ、爰ニ進入スル待ツ一日三秋ノ如クニ見ヘタリ、然ルニ官兵日毎ニ加兵ス、今爰ニ於テ薩兵進ンテ小倉・長崎ニ突入スルトキニ至テハ、天下又計ルニ足ラサルノ勢ヒアリ、故ニ又忍テ山鹿ニ帰り報ス、不日ニシテ再度本営ノ令ヲ以テ福岡ヨリ秋月・佐賀辺ニ徘徊ス、此際ハ官軍守備嚴重ニシテ旅人ノ往来ヲ調べ、容易ニ通行シ難キニ依リ急ニ服ヲ変シ人夫ニ紛レ入り、彼ノ地ノ景状ヲ搜索シ、三月下旬山鹿ニ帰り、報セントスルニ、既ニ山鹿ノ薩軍田原方面ノ敗ル、ニ依リ、応援セントノ報知ノ誤リニ依リ兵員少ク一旦山鹿ヲ引揚、鳥巢ニ防戦スルヲ聞キ、彼処ニ帰り報ス、此際味方東ハ隈府ヨリ西南木ノ葉・木留ニ連リ、戦塵常ニ不止、砲声轟々トシテ山嶽為ニ崩

ントシ、大海モ為ニ覆ラントス、四月某日又本営ノ令ヲ以テ福岡ニ到ル、此際ハ福岡動揺ノ事件ヲ聞キ、探偵ノ為メ来リシニ、豈計ンヤ既ニ越智彦四郎等事ヲ損シ鎮定セシ後ニシテ久留米ニ来ツテ事細少ニ探知シ、帰ツテ鳥巢本営ニ報ス、爾後隈府ニ出張、該地ノ地形タルヤ東北ハ山ヲ負ヒ川ヲ帯ヒ、山上原野渺漠、一ツ以テ抛ル可キノ險ナク、西南ハ杳々タル田地、新町山鹿ニ続キ小勢ヲ以テ難守ノ地ト雖トモ是レ一ツノ要衝ニシテ措ク可カラス、故ニ中隊長伊東直二・飢肥隊長佐土原藤吾・五番大隊ニ番小隊長伊地知彌平等協議シ励精防戦頗ル勤ム、一夕又余ニ命シテ南ノ関近傍ノ地ヲ探偵セシム、然ルニ新町ニ有ル官軍近傍ノ地方ニ令シテ過分ノ筍皮ヲ買ヒ上人夫ヲ集メ、既ニ軍ヲ報セントスルノ勢ヒ顕然タリ、故ニ馳テ隈府ニ帰り、今夜ヨリ明曉ニ至ツテ敵必ス襲来セン、之カ備ヘ無クンハアル可カラスト云フニ、隊長等問テ日、何ニ依テ敵ノ必ス襲フヲ知ルト、余対日、敵已ニ近傍ニ募ツテ筍皮ヲ纏メ且人夫ヲ集ム、之レ必ス進軍ノ束装ナラント云フニ、隊長等首肯シテ信セス、然ルニ該夜黎明我山手ノ飢肥隊長佐土原藤吾ノ守場ニ官軍銃ヲ委シテ襲来、勢ヒ甚タ烈シク固ヨリ山手ハ地形広活守備嚴ナラス、

仮リニ飢肥一小隊并ニ貴島清率ヒ来レル永井半之丞隊ト更番シテ之ヲ守ル、飢肥隊ニハ不意ヲ襲ハレ急ニ防戦スト雖トモ援隊続カス、粉骨勉勵死ヲ一ニシテ守戦シ、小隊長佐土原藤吾・半隊長阿萬南八郎等数拾名之二死ス、遂ニ衆寡不敵、守リヲ失シ退キ、川ヲ阻シテ反戦、漸ク爰ニ抑戦セリ、于時伊東隊一小隊川上ヨリ前岸ヲ下リ官軍ノ横合ニ懸ル、官軍専ラ東向シテ之ヲ防ク、故ニ飢肥隊又川ヲ越シテ奮戦、官軍終ニ敗レテ引退ク、此時官軍新町街道ニ守ル伊地知彌平隊ノ守場ニ迫ル、戦ヒ半酣ニ及ンテ伊東直ニ隊一小隊・伊地知彌平隊一小隊ヲ分チ赤星街道ヨリ廻ツテ敵ノ横合ニ懸リ、余モ之ニ加ハリ進軍シ、一時斉シク小銃ヲ雨射シ、喊ヲ合シテ衝擊スルニ官軍暫時之ヲ支ヘ、遂ニ大敗、死尸・兵仗ヲ遺棄シテ新町ヲ差シテ走ル、我軍ノ隊長伊地知彌平戦死、清水休之丞之二更ル、此際山手ノ官兵モ敗レテ全ク引去レリ、嗚呼余カ探偵ノ見込ヲ信シ設伏守備シテ之ヲ待タハ、薩軍斯迄苦戦ニ及ハスシテ勝利ヲ得ルニ余ノ遺憾云フ可カラス、此日飢肥隊・永井隊ノ死傷甚多ク、然レトモ本道ノ戦ヒハ官軍死傷尤多シ、爾後山手ハ軍ヲ退ケ川ヲ阻シテ築塁守防セリ、翌日余ハ清水休之丞ト与ニ鳥巢ニ至ル、五日

ヲ経テ限府ニ帰り、又敵地ニ忍入敵情ヲ搜ルニ、官軍日頃熊本籠城ノ糧食ニ乏シク危急旦夕ニ迫ルヲ憂ヒ、速ニ一方ヲ突破シ急ニ之ニ救援セスンハ、不日落城シテ臍ヲ嚙ムトモ及バスト頻ニ兵ヲ勵マシテ進軍ヲ促カス、四月三四日頃官軍兵ヲ増シ、我限府ノ三面ヲ圍繞シ頻ニ攻撃、我軍銳意防戦、數回之ヲ撃チ退ク、此際ニ至リ伊東直ニ粉骨勉勵シテ固守ノ術ニ於テ大ニ力有ルニ預ル、官兵日ニ増加シ且援路既ニ絶ヘ、僅ニ赤星街道ノ一路而已通シ、糧菜ノ輪路抗塞、卒ニ支ユ可カラサルヲ計リ、四月九日払曉壘ヲ棄テ窃ニ赤星街道ヨリ退キ竹迫ニ至ル、余ハ夫ヨリ鳥巢ニ之キ屢々奔走ス、或日官軍襲ヒ討ツ、我軍殆ント敗レントス、余謂ラク、先ニ山鹿ヲ退キ限府ヲ引揚、又爰ニ敗ルレハ人氣阻ンテ熊本ノ困ミモ又危カラント、急遽ニ刀ヲ提ケ直ニ戰場ニ馳向ハントスルニ、野村忍助袖ヲ抑ヘ余ニ謂テ曰、子ノ云フ所利ナキニアラス、然レトモ今日未タ其危キニ至ラス、何ソ勿卒ニ身ヲ捨ルコトヲ為ント、故ニ止ツテ猶周旋奔走シテ、薄暮官軍大敗シテ退ク、同十四日川尻ノ薩軍敗レテ熊本城困ミ解ルニ会シ、植木・田原・鳥巢ノ軍拳而大津・木山ニ退軍、余ハ鳥巢方面ノ軍ニ属シ斥候トナリ大津ニ至ル、翌日官軍大

津二襲来、直二迫テ我本營ノ近傍ニ来ル、于時野村忍助衆ヲ纏メ伊東・平野等ノ隊ヲシテ敵背ニ廻ラシ横撃セシメ、然シテ三面ヨリ夾撃、敵大ニ敗走、逃ルヲ追ヒ官軍ノ本部ヲ乗取、兵仗・彈藥并ニ鞍馬壺疋其他分捕無数、午後一時頃兵ヲ取テ大津ニ帰ル、翌日又官軍竹迫街道ヨリ大挙シテ来リ撃ツ、我軍防戦甚タ勤ム、然リト雖トモ官軍銳ヲ悉シテ烈シク来リ侵スニ依テ我軍頗ル苦戦ス、故ニ余ハ直ニ本營ニ至リ応援ヲ促スニ、既ニ別府九郎一隊ノ兵ヲ率ヒテ敵ノ横合ニ懸ル、劇戦シテ敵数町ヲ退ク、余ハ嶺寄隊ヲ同道シ戰場ニ至ルニ、敵既ニ退シ跡ニシテ空シク兵ヲ取メテ帰ル、同二十日頃西郷等策ヲ変シ薩ノ総軍肥後地ヲ引揚ルニ会シ、余モ俱ニ矢部ニ至リ、爰ニ於テ全軍ノ隊号変制アリ、夫ヨリ糧ヲ負ヒ胡麻山ヲ越へ、椎葉ノ險ヲ経テ球摩(球摩力)ノ人吉・江代ノ間ニ衆ヲ纏メ、全軍ヲ三手ニ分チ、一手ハ鹿兒島ノ官兵ヲ衝カシム、一手ハ八代口ニ向ハシメ、一手ハ豊後地ニ進軍ス可ヘキノ議ニ決シ、奇兵全兵ヲ以テ豊後ニ充ツ、余ハ奇兵ニ付属シ、吉利勇介ト共ニ又探偵掛リヲ命セラレ、常ニ本營ニアリ、夫ヨリ余ハ竹田士族神宮某ヲ同行シ先鋒隊ヨリ二日先チテ発シ、五月中旬日州富高新町二出、該地ノ景状ヲ搜索

スルニ、前日官ノ孟春艦細島港ニ到来シ、一小隊計ノ兵上陸シ富高辺ヲ巡行シテ既ニ出帆シタリト聞ク、爾後延岡ニ至リ、野村忍介等ノ命ニ依テ該地ノ士族ヲ募リ各道ニ配布シテ、以テ間諜ヲ密察シ、要所ニ哨兵ヲ出シ、諸方ノ往来ヲ檢シ、五月十二日竹田進軍ニ決シ、竹田士族豊岡太郎ヲ嚮導トシ石塚長左衛門・鎌田雄一等先鋒四中队ヲ率ヒテ発シ、余ハ之ニ属シテ発ス、延岡ヨリ重岡ニ達スルニ該地ハ地方ノ巡查二三十名アリ、我軍一撃之ヲ走ラセ爰ニ一泊、佐伯ノ巡查一名ヲ斃シ又一名ヲ捕縛セリ、翌日石塚長左衛門毎隊四十名ヲ精撰シ、百六十名ヲ合シ一隊トナシ、之ヲ率ヒテ竹田ニ進入、該地ハ裁判官吏及ヒ巡查等僅數十名アルノミ、官兵未タ備ヘス、依テ爰ニ軍ヲ止メテ後軍ノ繼ヲ待ツテ飯ニ熊本・大分ノ両道ニ守兵ス、翌日既ニ後軍到着、於是各隊長等相議シテ日、願フニ大分県下未空虛ナラン、機ハ失フ可カラスト、一中隊毎ニ壯士二十名総員百六十名ヲ撰拔シ、鎌田雄一郎・嶺寄半左衛門之ヲ率ヒ、十六日午前一時ヲ以テ発ス、行クコト十三里許ニ至リ、大分県下既ニ備アルヲ聞キ、転シテ鶴崎進撃ニ決シ、鎌田兵士十五名ヲ分テ之ニ馳ス、時ニ鶴崎ニハ警視隊ノ着艦ニ際シ兵士上陸、其不意ヲ襲

撃ス、官兵兵器ヲ取ルニ暇アラス、狼狽逃走、我兵縦横
奔馳、彼処ニ追詰、是処ニ切伏七數十名ヲ斃ス、巡查隊
長散兵ヲ招集シ銃劍ヲ攢列シ方陣ニ備フ、此際鎌田重傷
ヲ負フ、本隊未タ達セス故ヲ以テ退軍ス、途ニ本隊ニ相
会シ、遂ニ犬飼ニ退ク、十七日竹田ニ帰ル、二十日官兵
熊本街道惠良原ニ来ル、清水休之丞・嶺寄半左衛門・石
塚長左衛等兵八小隊ヲ三手ニ分チ、一ハ本道、其二ハ左
右間道ヨリ進軍、僅ニ戦フト雖トモ地形交戦ノ地ニアラ
サルヲ以テ兵ヲ取メテ竹田ニ退ク、此際竹田土族堀田政
一同志ヲ募リ四小隊ヲ率ヒテ我ニ応ス、之ヲ報国隊ト号
ス、五月二十二日惠良原ノ官兵凡ソ三中隊可リ竹田ニ逼
ル、是ヨリ連日交戦、古城・崩岩・八幡山等尤抗戦烈シ
ク殆ント田原・植木ノ如シ、同二十二日官兵凡三百可リ
亦大分街道ヨリ来リ攻ム、大迫新二郎之ヲ法師カ宝字山ニ拒キ
利アラステ退ク、二十三日古城ノ米良隊苦戦、八幡山
ノ嶺寄隊ハ守リヲ失シテ穴門ノ口ヲ守ル、翌日官兵嶮岨
ヲ越ヘ不意ニ崩岩ヲ襲ヒ清水隊ノ壘ニ逼ル、我兵殆ント
守リヲ失ハントス、清水隊ノ半隊長石塚仲太夫・分隊長
木場休之丞等憤戦シテ之二死ス、其他死傷猶三十余人、
遂ニ支ユル能ハス、一丁余退テ拒守ス、特ニ官軍石塚・

木場等ノ屍三四ヲ壘上ニ曝シ我軍ヲ麾テ頻ニ詭言ス、我
兵憤怒禁スル能ハス、峯寄隊等ト二十五日未明ニ旧壘ヲ
復スルヲ約シ、午後十一時喇叭ヲ相囂トシ各隊俱ニ進軍
ヲ期シ、終夜決飲スルヲ聞キ、余ハ夜半清水隊ノ守場ニ
至ルニ決飲半酣ナリ、俱ニ杯ヲ酌ミ今ヤ遲シト相待ツニ、
既二十二時ニ及フト雖トモ喇叭ノ響クヲ聞カス、清水隊
モ殆ント戦期ヲ失センコトヲ憤リ、議論紛紜、故ニ余ハ
本營ニ馳セテ戦期ヲ促スコト數回、漸ク午前四時ニ至ツ
テ山下ニ喇叭ノ響ヲ聞ヤ、忽チ余ハ本道ヨリ進ム、清水
隊ノ小隊長村田経倫・半隊長名越等左ノ溪澗ヲ忍ヒ岩ヲ
攀チ敵柵ノ背ニ出テ、本道ノ開戦ヲ待ツト雖トモ既二天
明ケ、終ニ得ル所ナク空シク退キ、更ニ本道ト合シテ敵
壘ニ攻ル、然レトモ官兵壘前ニ逆茂木ヲ引守リ、甚タ敵
ナルニ依テ遂ニ志ヲ得ル能ハステ退ク、此際ニ於ケル
ヤ本營之ヲ主宰スルノ人無ク、動モスレハ軍議紛紜、謀
略齟齬シテ毎戰其期ヲ失ス、故ニ余ハ竹田ヲ発シ、佐伯
ノ山口等ノ軍ヲ過キリ竹田ノ急ヲ報シ、二十七日延岡ニ
到リ、告ケテ曰、竹田ノ軍利アラザルニ非ス、然レトモ
之ヲ統一スルノ人無ク軍議一定セス、每戰其期ヲ誤ル、
故ニ竹田ノ軍ヲ主宰スルノ人ヲ撰ヒ、出張ヲ促カスニ伊

東直ニヲシテ出張セシム、二十九日余ハ伊東ト同行、既ニ小野市ニ到ルニ竹田ノ軍利アラス、兵士散乱帰り来ルヲ見、伊東憤激之ヲ制止ス、然レトモ敵猶五里ノ後ニアルヲ聞キ、又馳セテ旗返峠ノ麓ニ至ル、此時一二ノ隊長小野市ニ向テ退キ来ル、故ヲ以テ相共ニ退ク、此時伊東發議シテ曰、此土軍糧乏シク一タモ支ユル能ハス、衆議シテ進退ヲ決セント、各隊長ノ到ルヲ待ツ、翌三十日ニ至リ隊長悉ク来着、伊東曰、一タビ此地ヲ失ハ、復タ得ルノ難キノミナラス、延岡亦守ヲ失フニ至ラン、豈ニ大事ナラスヤ、今直ニ軍ヲ進メ此敗辱ヲ雪ガン、若シ敵ヨリ三重市ニ先鞭セラレ三国・旗返シノ二嶮ヲ失ハ、臍ヲ噛ムトモ及フコトナシ、故ニ速ニ彼地ヲ占メ、然ル後方略ヲ決セント、衆議之ニ同ス、此時三重市ニハ我兵一中隊及ヒ報国隊留リ守ル、伊東即チ余ニ命シテ三重市ニ遣シ固守ス可キヲ達ス、爰ニ於テ又官軍我背後ヲ断タンコトヲ恐レ、嶺寄隊外一中隊ヲ佐伯ニ發遣シテ港津ニ備フ、又米良・市来・清水ノ三中隊ヲ此地ニ留メ三国・旗返ノ要害ヲ守ラシメ竹田口ノ官軍ヲ扼ス、午後一時余兵ヲ整へ進ンテ三重市ニ抵ルニ、該地ハ官兵ノ斥候出沒シ且ツ大分街道ニ官ノ駐營スルヲ聞キ、進撃セント結束シテ期

ヲ待ツ、翌黎明官軍間道ヨリ来リ、不意ニ報国隊ノ持場ヲ突抜シテ直ニ坊市ニ迫ル、我兵雜沓將ニ破レントス、石塚一中隊ヲ率ヒテ防戦シ一撃之ヲ走ラセ追躡二里許、此際竹田街道ノ官兵亦来リ攻ム、山口・水間二中隊ヲ以テ之ニ当リ追撃二里許、遂ニ本營ヲ斫リ火ヲ放テ退ク、於是伊東諸隊長ヲ集会ス、或人曰、未タ敵情ヲ得ス、暫ク三国峠ノ麓ニ退キ敵ノ動靜ヲ伺カハン、又或ハ直ニ竹田ヲ恢復セント衆議紛然タリ、伊東・石井声ヲ齊フシテ曰、此地素ヨリ兵ヲ駐ムルノ地ニアラス、然レトモ退カハ敵必ス之ニ乗セン、竹田ハ我兵大敗ノ余ニシテ民心危疑、恐クハ利ナカラン、寧ロ白杵ニ向ヒ其虚ヲ衝キ進ンテ大分ヲ攻略セハ如何ント、衆皆之ニ従フ、即チ竹田ニ向フト声言シ、分チテ三軍トナシ、小荷駄ヲ中軍ニ置キ伊東隊長等ニ言ツテ曰、此挙ヤ懸軍深入、所謂死地ナル者白杵ヲ取ルニアラザレハ復タ生路ナシ、願フニ敵兵必ス狭撃セン、前軍敵ヲ受ルモ後軍応セス、後軍戦ヲ交ルモ前軍之ヲ顧ミス、電馳風撃ス可シト、余モ此軍ニ属シ白杵ニ向フ、既ニ發シ白杵ヲ距ル二里ナル可シ、官兵壘ヲ設ケテ守ル、是ニ於テ前軍三中隊及ヒ報国隊又分テ三トナシ、一ハ本道ヨリ向ヒ、其二ハ左右ノ山手ヨリ進撃

シ戦闘忽ち劇シク、既ニシテ官兵退避ノ色アルヲ見ルヤ、
我兵勢ニ乗シ備へ自カラ鶴翼ヲ為シ、正面止リ戦へハ両
翼進ミ撃チ、両翼伸ヒサレハ正面突進シ、遂ニ白杵城ヲ
圧ス、官兵窮蹙出ル所ヲ知ラス、狼狽周章、我兵益進戦、
或ハ之ヲ斬リ或ハ之ヲ海中ニ擠ス、官兵溺レ死スルモノ
勝テ数フ可カラス、我兵直ニ城ニ抛リ各所ニ守備ス、此
日敵ヲ斬ル殆ント二百余、捕虜十余人、降ヲ乞フ者百人
ニ充ツ、其他中隊旗及ヒ彈藥・鉛硝・雷火管等ハ暗ニ乘
シ延岡ニ回漕ス、又人ヲ佐伯ニ馳セ嶺寄等ニ報シテ曰、
官兵通路ヲ梗塞スト聞ク、直ニ撃破ス可シト、嶺寄至レ
ハ則チ官兵已ニ山手ニ向ツテ退キタリ、是時ニ当リ我軍
復々振フ、四五日ヲ経テ我軍不利ニシテ兵ヲ佐伯ノ切畑
ニ掲ク、遂ニ三国・旗返ノ我軍敗レテ重岡ニ戦フニ依リ
俱ニ合シテ防戦、又爰ニ利アラス、兵ヲ鑑村ニ退ク、六
月二十三日我軍赤松峠ヲ襲撃ス、余ハ陸地ヨリ進ム、切
込谷本道等ハ大勝ヲ得ルト雖トモ彈藥ニ尽キ僅ニ一柵ヲ
残シテ退軍ス、故ニ又退テ旧壘ヲ守ル、七月三日野村忍
介十中隊ノ兵ヲ率ヒテ山谷ニ潛ミ、二晝夜ニシテ梓峠ヲ
襲撃シ大勝ヲ得、水ヶ谷ヲ取り黒土峠ニ進ミ壘守ス、復
タ或日野村余ニ令シテ曰ク、三河内江ハ官兵守リ薄ク或

ハ隙ニ乘ス可キアラン、急ニ彼処ニ趣キ敵情ヲ探偵シ来
レト、即時ニ程ヲ発シ到レハ則チ官軍三河内ノ歌糸村ニ
襲来、飢肥ノ米良一穂隊變ニ応シ左翼ヨリ横撃シ、官軍
敗走伏尸野ニ充ツ、須臾ニシテ又官軍向ヲ転シテ本道ノ
山手ヨリ来リ攻ム、此地ハ農兵或ハ宮崎隊之ヲ守リ、其
携フル所ハ獵銃等ニテ遂ニ相抗スル能ハス、忽チ敗走ス、
米良隊ハ背後ヲ絶タレ海手ニ向テ退ク、此時余ハ矢ケ内
ニ到リ行々敗卒ヲ集メテ三十余人ヲ得、乃チ馳セテ下塚
ニ至リ山上ノ嶮ヲ扼シテ防戦ス、漸次矢ケ内ノ援隊モ亦
来リ援フ、実ニ八月一日ナリ、野村忍介・小倉處平之ヲ
聞、翌二日直ニ矢ケ内ニ趣キ山口・川久保等ニ謀リ曰、
歌糸之熊田ニ於ケルヤ數線ノ間道ヲ通ス、恐クハ官兵之
ニ乗セン、速ニ歌糸ヲ復スルニ非サレハ、熊田ハ我有ニ
非サルナリ、直ニ矢ケ内及ヒ葛葉ノ守兵ヲ絞リテ本道ヨ
リ進ミ、増田・米良・竹添等ハ繞テ敵背ニ出テ之ヲ狭撃
セハ如何ント、山口等之ニ同ス、乃人ヲ増田等ニ遣シ此
由ヲ報ス、翌朝三日野村・熊田ニ歸リ、水ヶ谷ノ兵ニ令
シテ増田等ニ応援セシム、小倉ハ下塚ニ来ルニ依リ余ハ
吉村ト共ニ山頂ニ登リ之ヲ臨ムニ、官兵溪ヲ隔テ、嶮ニ
拠レリ、小倉等以為ラク夜襲ニ非サレハ不可ナリト、即

千兵ヲ分テ二トナシ、余ハ正面ヨリ、小倉ハ山谷ヲ繞リ敵ノ右翼ヲ衝カント、即夜十二時ヲ以テ発ス、余是時進ンテ敵ヲ距ル三町計ノ所ニ至リ、兵士十六名ヲ撰ヒ各刀ヲ抜カシメ自カラ之ヲ率ヒ庭前ス、已ニ敵壘ニ達セントスルニ官兵大二狼狽、二壘ヲ棄テ、走、第三壘ニ及ンテ官兵始メテ発砲防戦ス、我兵勢ニ乗シ直ニ切入リ又之ヲ抜ク、時ニ本隊モ亦至ル、乃チ二手ニ分レ左右ニ向テ攻撃シ各二壘ヲ屠ル、斬首若干・捕虜三人、時ニ天明ク、又進ンテ一ノ殘壘ヲ攻ム、此時余ハ後軍ト合シテ一快戦センコトヲ欲シ、岡ニ上リテ後軍ヲ麾クニ忽チ銃丸迸リ来テ両脚ニ傷ク、故ニ志ヲ達スルヲ得ス、夫ヨリ延岡病院へ送ラレ療養ス、然ルニ鹿兒島方面ノ戦ヒ不利ニシテ連敗、麾ヒテ延岡ニ来リ、該地敗レテ永井村^(長井カ)ニ退ク、時ニ豊後方面ノ軍モ揚ケテ爰ニ合シ、僅ニ彈丸黒子ノ地ニシテ糧藥他ニ求ムルノ道ナク、兵氣日ニ阻シテ、遂ニ八月十八日熊田口敗シテ病院患者ハ勿論過半爰ニ帰順ス、余モ其内ニアリ、西郷等ハ未タ永井村ニ固守シテ戦ヒ、尚ホ盛ナリト雖トモ爾後戦状ヲ不詳、

九月

筑後国福岡県

荒牧重三郎

一七二 古河勝次郎上申書

今般政府奸吏内命ヲ受、中原尚雄等陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺セント謀リシ顛末発覚シ、鹿兒島県令大山綱良管下へ公布シ、西郷・桐野・篠原政府へ尋問トシテ上京ニ際シ義兵ニ加リ随行ス、明治十年二月十八日第五番大隊六番小隊長蒲生彦四郎隊ニ編入セラレ、鹿兒島県下西目街道ヨリ出发、出水米ノ津ヨリ乗船、肥後国松葉瀬へ着船ス、直ニ兵候トシテ廿名余川尻ニ到ル、鎮台兵五六十名相見へ、第一大隊并ニ第七大隊ノ内一小隊ヲ以テ相戦ヒ、官軍兵候伍長一名生捕、城内ノ景況ヲ譴責スルニ、鬪戦止ヲ得サルニ決シタル由ヲ白状ス、二月廿二日夜十二時松葉瀬ヲ発起シ熊本城へ攻撃ス、長六橋ヨリ加藤社マテ進撃致シ候処、敵直ニ城内へ引入候、同月廿七日ノ夜台場ヲ忍ヒ出ル者アリ、直ニ捕縛イタシ相糺候処、青山大属ト白状ス、金千五百円ヲ所持ス、又東京巡查一名ヲ縛シ青山ト共ニ本營へ差送ル、三月三日右同所ニテ暫時相戦候処、敵城へ引退キ候、同所ニ於テ度々苦戦、其山鹿ヨリ応援申来候ニ付早速繰出シニ相成候処、中途出町ニテ味方大勝利ニ付応援ニ不及旨報知有之、后安政橋ヲ守リ又熊本大進撃ナリ、城内大二動揺ス、コノ時味方手負・

戦死数人アリ、同十五日我守り場ヲ一番遊撃隊交代シ、我隊ハ段山口へ応援ニ出張ス、同夜直ニ官兵ニ打掛リ、官兵モ大ニ驚駭シ、二日ニ夜戦争ニ及フ半ニ官軍馬上士官負傷アリ、巡查追々応援トシテ来襲ス、此際味方ハ麦・大豆入ノ俵ヲ以テ八幡山山口下へ壘ヲ固守ス、此時東京巡查一名我隊ニ降り、直チニ桐野少将ノ本営へ差送ル、同管ニ於テ糺問スル処、城中糧尽キ将ニ餓死セントスル、秋ニ立至ル旨ヲ語ル、三月廿五日鎮台・巡查数百人押来リ、追散サレ土持迄引揚ケ、台場ヲ築キ固守ス、我隊死傷二三名、官兵死傷数不知、四月一日松葉瀨工官軍名古屋鎮台・巡查襲来リシ旨同所ヨリ報知有之二付、直ニ我隊繰出シ打掛リ破竹ノ勢ニシテ官兵ヲ打破リ小川迄進撃ス、名古屋鎮台兵卒兩名ヲ生捕シ桐野本営へ差出ス、コノ时将校并兵卒死傷数十人アリ、其夜松葉瀨ヲ引揚ケ山手ニ守ル、同月三日午前官軍襲来、我隊応援スルコト三晝夜、互ニ勝敗ナシ、当此時小隊長蒲生彦四郎手負イタシ、隊下ノ者同氏ヲ病院へ送ラント欲ス、不肯我僅少刀創ヲ受ケ入院シテハ如何セント大刀ヲ拔テ敵陣へ切入、尋テ隊下ノ者切込ム、此時官軍軍曹一人ヲ突斃シ夫ヨリ数千上官軍押来リ、大激戦、蒲生氏再ヒ手負イタシ、漸

ク引揚ケ病院ニ入ル、此戦不利ニシテ隊下モ宇土迄引揚ケ八丁橋ニ固守ス、同月十一日夜午後一時斥候ヲイダシ探索スル処、官軍二千五百名程屯集ノ報知ス、同二時同所繰出ス、接戦トナリ奮発シテ我レ官兵二名ヲ切斃ス、其証トシテ刀一本・銃器一挺ヲ分捕ス、此時隊中ニテ官兵ヲ打取ルコト二十余名、然レトモ夜明ルコトニ至テ不利、遺憾ナカラ八丁橋へ引揚ケ、コノトキ押伍申付ラレ、八丁橋ヲ焼落シ川尻へ引揚固守ス、同十三日川尻ニ於テ一日大戦争、互ニ勝敗ナシ、同十五日応援申来リ、二町（重箱カ）密甘へ繰出シ候処已ニ敗レ、退兵ノ際ニ会ヒ、復タ兵ヲ合シテ返シ戦ヒ敵ヲ逐フ三四町、翌昼迄鬪戦ノ処遂ニ敗ラレ、川尻へ引揚ケ疊ヲ以テ壘トナシ、二時程防戦ストイヘトモ衆寡不敵、竹ノ宮へ引退キ候へ共官軍追撃シ来リ、於是応援シ方ニ勝利アリ、各隊ニテ砲二門其外種々分捕アリ、同十六日味方兵余ルヲ以テ木山へ引揚ケ、四月十七日黎明木山ヲ発シ、我隊熊本隊ニ合シテ飯田山ニ進撃ス、官軍ノアラサルヲ以テ軼シテ御船ヲ進撃ス、同日巡查五六百名熊本協同隊へ攻来リ、我隊切込シ相戦フ、コノ時吾レ東京巡查某ニ出合相戦フ、「シャーヘル」ヲ以テワレノ左ノ耳ヲ突ク、然レトモ益々精力ヲ出シ横ナク

リニ脇腹ヲ切り付ケ遂ニ殺ス、其証トシテ「シャーヘ
 ル」ヲ分捕ス、此時大勝利、官軍死骸ヲ捨テ走ル、生捕
 数人アリ、我レ黄昏ニ銃創ヲ蒙リ帰陣ス、其夜高張ヲ越
 テ矢部村病院ニ入り療養ス、又三田井口ヲ経テ延岡病院
 ニ転シ、治療中富高新町・細島へ官ノ軍艦入港ノ説ヲ聞
 ク、人心動揺スルニ依テ米良山ヲ経テ高岡病院へ転ス、
 又都ノ城病院へ転シ四十日ヲ経テ帰隊ス、依之宮崎本營
 へ届出シ豊後口熊田本營ニ至ル、同所ニ於テ奇兵十六番
 隊小隊長ヲ命セラレ、六月廿五日赤松峠ニ進撃ス、戦ヒ
 尤モ熾ンナリ、我兵銳氣殊ニ十倍、勇往憤進大小銃雨ノ
 如シ、我兵面モ不振、死屍ヲ踏越々々瞬時ニシテ敵ノ十
 五壘ヲ拔キ、既ニ重岡ニ抵ラントスルニ、味方彈藥ニ竭
 キ憤激扼腕スト雖如何トモスル能ハス、切齒シテ鐘村ニ
 退キ守兵ス、七月廿九日再ヒ赤松峠ヲ攻ム、敵鋒甚銳ニ
 シテ我兵大ニ敗レ復タ退テ鐘村ノ旧壘ヲ守ル、既ニシテ
 敵兵来リ攻ム、防戦數回、八月一日芳野寛太部分隊ヲ率
 ヒ三川内梅木村ニ進ミ向フ、中津隊ト共ニ壘ヲ築キ守兵
 ス、某日官軍該地北面ノ高山ヨリ大拳シテ来攻ム、宮崎
 及ヒ延岡ノ諸隊農兵ナリ敗ラル、ニ因テ我壘左ノ高岳ヨリ敵
 眼下ニ狙撃シ、彈丸霰ノ如シト雖モ中津隊ト共ニ精ヲ励

マシ死守スル四時間余、終ニ彈藥竭キ僅ニ退ク、同二日
 夜大高月ヲ襲撃ス、砲三発ヲ相凶トシ咄咄直ニ馳テ敵壘
 ヲ乘取り斬獲若干、兵仗・彈藥許多ヲ得タリ、同七日敵
 兵大ニ至ル、我敗熊ノ江(熊野江カ)ニ退ク、一週間ヲ経テ我分隊熊
 田ニ引揚ケ本隊ト会ス、同十三日我隊延岡口無鹿ニ戦フ、
 衆ヲ励マシ奮闘、直ニ敵軍ヲ衝破シ十町許追撃ス、時ニ
 山手ノ味方既ニ敗シ我頂上ニ敵来リ、万銃音シク発シ飛
 丸雨ノ如ク降ル、余等猶憤戦スト雖トモ遂ニ敵ノ為ニ狙
 撃セラレ重創ヲ負フ、半隊長下村新七郎モ戦死、力不及
 シテ永井村ニ退ク、同十五日我隊永井村ノ南端ナル高岳
(長井カ)
 ヲ守ル、敵又来攻ム、防戦時ヲ移スト雖トモ遂ニ支ユル
 能ハスシテ退ク、同十七日午后十時頃ヨリ永井村ヲ発シ
 敵ノ柵前ヲ忍ヒ、十八日黎明可愛ノ嶽ノ敵壘ヲ襲撃シ、
 直ニ突破シ敵兵大ニ走ル、時ニ余等山中二路ヲ迷ヒ行ク
 所ヲ失ヒ敵中ニ取囲マレ、同二十日石岩村ニ至、素懷ヲ
 吐露シ情状ヲ陳述シテ官ノ軍門ニ降ル、

明治十一年五月

鹿兒島県

古河勝次郎